Ḍākinīvajrapañjara の文献学的研究

大正大学大学院仏教学研究科仏教学専攻 研究生
学籍番号　　1507508

横山　裕明

＜目次＞

＜略号一覧＞ III

＜凡例＞ V

＜校訂方針＞ VII

第１章 序論 1

１−１．研究背景 1

１−２．VP および VP 註釈書の基本資料 1

１−３．研究史 4

１−４．研究目的と研究方法 6

第２章 VP の概要 13

２−１．はじめに 13

２−２．VP の題名について 13

２−２−１．校合テクストと Ph の標題部分の比較 13

２−２−２．校合テクストと Ph の奥書の比較 14

２−３．VP の章構成と梗概 15

２−４．五仏の異名 21

２−５．VP を特徴付ける内容 24

２−５−１．後期密教系灌頂 24

２−５−２．五相 27

２−５−３．十忿怒尊 29

２−６．まとめ 31

第３章 VP CH. I の文献学的研究 35

３−１．はじめに 35

３−２．序文について 35

３−３．VP の５つのマンダラについて 52

３−４．ヨーガの理論 72

３−５．まとめ 79

第４章 VP 所説の HV 像から見る HV の原初的形態 85

４−１．はじめに 85

４−２．VP に説かれる HV の位置 86

４−２−１．VP に説かれるタントラ階梯の分類法 86

４−２−２．VP のタントラ分類法における HV の位置付け 90

４−３．HV 五十万頌の内訳について 91

４−４．HV 三十儀軌の各儀軌名について 96

４−５．まとめ 105

第５章 結論 111

＜参考文献一覧＞ 117

・一次文献 117

・二次文献 120

＜付録＞ （本文の後に掲載し，ページ番号は上部に記載して１から振り直している.）

付録 A「標題部分」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

付録 B「奥書部分」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

付録 C「各章の章題」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

付録 D「五仏の異名」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

付録 E「後期密教系灌頂偈」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

付録 F「灌頂次第」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

付録 G「五相」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

付録 H「十忿怒尊」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

付録 I「ナイラートミヤー十五尊マンダラ」・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

付録 J「タントラ階梯分類法」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

付録 K「ヨーガタントラとヨーギニータントラの分類」・・・・・・・・・・・ 17

付録 L「６つのヨーギニータントラ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

付録 M「HV の転換」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

付録 N「HV 五十万頌の内訳」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

付録 O「HV 三十儀軌の各儀軌名」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

付録 P「VP Ch. I」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

付録 Q「VPṬ Skt 校訂テクスト(VP Ch. I 対応箇所)」・・・・・・・・・・・・ 64

付録 R「『Mahāmati 註』Skt 校訂テクスト(VP Ch. I-1 から I-9 対応箇所)」・・ 74

＜補足資料＞ 「HV・VP・DK の相関図」

＜略号一覧＞

ed.: edition.
em.: emendation.
no. : numero.
om.: omitted.

A: Author.
KL: Kaisar Library.
MS(S): manuscript(s).
NAK: National Archives of Kathmandu.
NGMPP: Nepal-German Manuscript Preservation Project.
Skt: Sanskrit.
TBRC: Tibetan Buddhist Resource Center (http://www.tbrc.org).
Tib: Tibetan translation.
Tr : Translator.
(L): string hole (Left).
(R): string hole (Right).

・Tib 大蔵経および使用目録（各文献の no. は，使用目録に準じる.）

１．版本 (Editions)

D: Derge Edition of the Tibetan Buddhist Canons.
東北帝国大学法文学部編.『西蔵大蔵経総目録』(初版:1934), 名著出版, 東京, 1970.

P: Peking Edition of the Tibetan Buddhist Canons.
大谷大学監修・西蔵大蔵経研究会編輯.『影印 北京版 西蔵大蔵経総目録・索引』, (初版: 1961), 臨川書店，東京・京都, 1985.

C: Cone Edition of the Tibetan Buddhist Canons.
壬生台舜編. *A comparative list of the Tibetan Tripitaka of Narthang edition (bstan 'gyur division) with the Sde-dge edition*, Sanskrit saminar of Taisho University, Tokyo, 1967.

N: Narthan Edition of the Tibetan Buddhist Canons.
東洋大学図書館整理課編.『ナルタン版チベット大蔵経甘殊爾目録』東洋大学図書館，東京, 1984.

H: lHasa Edition of the Tibetan Buddhist Canons.
高崎直道編. 『東京大学所蔵ラサ版チベット大蔵経目録』東京大学文学部印度哲学印度文学研究室，東京, 1965.

T: sTog Palace Edition of the Tibetan Buddhist Canons. (国際仏教学大学院大学所蔵)
Skorupski, Tadeusz. *A catalogue of the sTog Palace Kanjur*, International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, 1985.

２．写本 (Manuscripts)

K: Kawaguchi's (=Toyo Bunko / Tokyo) Manuscript. (東洋文庫所蔵)

斎藤光純. 「写本チベット大蔵経調査備志」『大正大学研究紀要』63, pp. 345-406, 大正大学出版部, 東京, 1977.

Sh: Shel dkar (=London) Manuscript. (国際仏教学大学院大学所蔵 Microfiche of IASWR)

Pagel, Ulrich. *Location list to the texts in the microfiche edition of the Śel dkar (London) manuscript bKa' 'gyur (Or. 6724) / compiled from the microfiche ed. in conjunction with the original Tibetan manuscript*, The British Library, London, 1996.

Ph: Phug brag Manuscript. (国際仏教学大学院大学所蔵 Microfiche of IASWR)

Eimer, Helmut. *Location list for the texts in the microfiche of the Phug brag Kanjur: compiled from the microfiche edition and Jampa Samten's descriptive catalogue*. International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, 1993.

＜凡例＞

1) 典籍の名称は，初出時においても原則として通称を用いる．また２回目以降は初出時に示す略号を用いる．本論文で用いる典籍の通称と略号は，＜参考文献一覧＞の一次文献の項目において，使用した校訂テクストあるいは写本，版本の no. と共に示す．

e.g.) [通称 (本論初出時)] *Ḍākinīvajrapañjara* → [略号 (二回目以降)] VP.

2) 一次文献および二次文献に関する略号は，本論文末尾の＜参考文献一覧＞で示すため，＜略号一覧＞には示さない．

3) *Hevajratantra* 広本・略本の区別について．本論文では広本と略本の区別を明確につけるために，三十儀軌乃至三十二儀軌あるとされる真偽不明の広本を *Hevajratantra* (略号 HV) とし，現在通常用いられている二儀軌のみの略本を *Dvikalpa* (略号 DK) として呼び分ける．

4) 本論文で取り扱う VP の４つの註釈書には，それぞれ VPṬ, 『Indrabhūti 註』,『Kṛṣṇa 註』,『Mahāmati 註』という略号を用いる．このような変則的な略号を用いる理由として，全く異なる註釈書名が同一写本内に複数存在するケースがあるため名称を統一できないこと，さらには４つの註釈書すべてに VP の後にアルファベットを１文字加える略号を用いると混乱を招きやすいこと等が挙げられる．そこで著者不明の VPṬ を除き，その他の註釈書には註釈者名を含む上記の略号を使用する．

5) 本論文で「偈」という場合，特別に記載の無い限り Anuṣṭubh-Śloka を指す．

6) 試訳において，文意の理解のために必要に応じて [ ] で語句を補填する．

e.g.) 東[の蓮弁]において...

7) 試訳において，語句理解の便を図るために必要に応じて ( ) で校訂者の解釈を加える．

e.g.) 彼(=ヘールカ)は…

＜校訂方針＞

1) 以下に該当する場合，校勘欄に表示することなく校訂する．

a) r の後が二重子音化している単語の標準化(standardization).

e.g.) dharmma → dharma.

b) 二重子音が単子音化している単語の標準化(standardization).

e.g.) satva → sattva

c) ṅ, ñ, ṇ, n, m, ṃ 間あるいは b, v 間，r, l 間，ś, ṣ, s 間での置換.

e.g.) samvara → saṃvara.　raukika → laukika.

*但し，変換前の形が別単語として存在する場合には校勘欄に表示する．

d) avagraha の補填.

e.g.) so pi → so 'pi.

e) キャンセル記号が付いている文字の削除.

f) カンマ(,), ピリオド(.), daṇḍa(/), shad(|)の補填と削除.

g) Tib 各版で表記方法が異なっている同一単語の表記の統一.

e.g.) pa dma, pa d+ma, pad ma → pa d+ma.

h) 略字の還元.

e.g.) tha da → thams cad.　e.g.) nam kha → nam mkha'.

*前者の例は K, Sh に見られる．頻出語中の最初と最後の文字だけを示す略字.
後者の例は N, K, Sh に見られる．連続する文字の片側だけを示す略字.

2) 引用文と註釈文の間に用いる iti について (=ityādi や ity arthaḥ といった iti を含む熟語を除く). 写本において，iti の直後の daṇḍa あるいは half-daṇḍa の有無，直後の語との連声の有無は統一されていない．そこで校訂テクストでは，上記に当てはまる iti の直後にはカンマ(,)を付け，カンマの前後の語は連声をしないことで統一する．連声を起こしている場合は校勘欄に示し，校訂する．

e.g.) amogham ity amogha... → amogham iti, amogha...

3) 校訂者の理解に基づき，テクストを内容ごとに段落分けする．さらに，必要に応じて段落ごとに，説かれている内容の付与や番号の割り振りをおこなう．

4) 判読できない文字は１字につき ＋ を１つ示す.

5) どのように読むべきか解決できず，問題のある箇所は † で括る．試訳は暫定的なものを示す.

6) maṅgala-symbol がある箇所には，(maṅgala) と記す.

7) Hiatus-bridger と考えられる m は - - で括る.

e.g.) iti-m-anāsravadhātutayā.

8) 写本あるいは版本の葉が変わる箇所は下付に葉番号示す．さらに，Skt 写本は葉の行数と紐穴の場所まで下付に示す. 写本に向かって左側の紐穴は(L), 右側の紐穴は(R)とする．

9) 脚註で本文を挙げる際に，本文の一部を省略する場合は ° を付ける．

10) 各註釈書の Skt 校訂テクストにおいて，VP の引用と考えられる記述は太字で示す．

11) 各テクストのページ下の校勘欄には，脚註・A ノート・B ノートの３種を使用する．

a) 脚註は，本文の脚註番号と対応しており，校勘欄の最も上段に置く．
最初に採用する読みを示し，レンママークの後に異読や校訂前の形，校訂する上での根拠となるタントラの Tib を示す．
e.g.) sattve] em.; sa MS; sems can Tib.

b) A ノートは，Skt 校訂テクストでのみ使用する．各番号は該当する記述の行数と対応しており，他の文献に類似する記述がある場合，その文献の校訂テクストあるいは写本における所在とその記述を示す．校勘欄では脚註の次に置く．なお, VP 本文に他の文献に類似する記述や平行文がある場合は, 本論文第３章で取り上げる．
e.g.) Cf. [DK I. x. 42cd] śūnyatākaruṇābhinnaṃ bodhicittam iti smṛtaṃ.

c) B ノートは，VPṬ の Skt 校訂テクストでのみ使用する．各番号は太字で示した VP からの引用と考えられる記述の行数と対応しており，該当すると考えられる VP のデルゲ版(D)および北京版(P)における場所と Tib を示す．なお，D と P が２語以上異なる読みを示す場合は D, P を分けて示し，１語のみ異なる読みを示す場合は P の異なる読みを（　）内に示す．ただし，VP の Tib と註釈書の Skt を完全に対応させることは，言語形態の相違や蔵訳者の使用した写本の違いなど様々な問題から不可能である．したがって，あくまでも対応箇所を確認する上での利便性から付加したものであり，一部の単語や格変化の相違などには深入りしない．また，対応する箇所が不明な場合は「対応箇所不明」とするにとどめる．校勘欄では A ノートの次に置く．
e.g.) D30a4 P262a6 nam mkha' (P mkha'i)

12) VP の校合テクストは，基本的には D を底本とした上で，適切と考えられる読みを採る．なお，Skt の音写については D に限らず，想定できる Skt により近い読みを示す版を優先的に採用する．

13) VPṬ と『Mahāmati 註』から回収できる Skt，および異訳であるプタク写本(Ph)の校訂テクストは，参考資料として VP 校合テクストの下方に提示する．

14) 『Mahāmati 註』の校訂テクストは，写本の保存状態が比較的良い VP Ch. I-1 から I-9 対応箇所までを掲載する．なお，VP からの引用と考えられる Skt については，この範囲に限らず回収を試みる．

＜第１章＞

序論

第１章 序論

１－１．研究背景

本論文の研究範囲であるインド後期密教[1]は，近年になって飛躍的に研究が進展してきた分野である．インド後期密教の聖典は，それまでの経 (スートラ) と区別してタントラと呼ばれる．タントラは，伝播した地域が限定されており，他の仏教文献に比べると漢訳されたものが著しく少ない．さらに，特異な内容を含むことから忌避されることが多く，古来からの伝統的な研究蓄積も非常に少ない．また，非器の者を排除する目的で密意語 (saṃdhyābhāṣā) という通常とは異なる特殊な言語を用いて，意図的に難解に書かれているため，文字を追っただけで正しい内容を理解することは不可能である．したがって，インド後期密教研究は，近現代の学者たちによる膨大な写本の入手やテクスト校訂・比較研究等の学問的蓄積を経て，ようやく近年になって飛躍的な進展を遂げたのである．なお，現在も研究者たちの手により学問的蓄積が進められているが，タントラは膨大な量があるため未だ研究の不十分なものも多く残されている．

さて，インド後期密教の代表的なタントラの１つとして，一般的にヘーヴァジュラタントラと呼ばれている *Dvikalpa* (略号 DK) がある．DK は，広い地域で流行して数多くの註釈書が作成され，チベット仏教四大宗派に数えられるサキャ派では所依聖典として崇められている[2]．また，タントラ文献にしては珍しく漢訳[3]が残されており，Skt 原典・Tib 訳・漢訳が揃っている．そのため，DK は世界中で研究されており，ヘーヴァジュラタントラと呼ばれてはいるが，実際は広本の *Hevajratantra* (略号 HV)から最初の二儀軌のみを抽出した略本であることが知られている[4]．しかし，この HV は現在のところ存在を証明する明確な証拠が確認できていない[5]．そこで，HV を解明する上で最も重要な鍵となるのが本論文で中心的に扱う *Ḍākinīvajrapañjara* (略号 VP) である．

VP は，HV を一儀軌に要略した略タントラ (saṃkṣiptatantra)[6] とされており，HV 全体像に関する詳細な記述を含んでいる．また，先述のサキャ派では，所依聖典である DK の解釈に VP を用いており，所依聖典の釈タントラ (vyākhyātantra)[7] として VP を非常に重要視している[8]．さらに，VP はヨーガ理論の説明やタントラ分類といったインド密教の概論的な側面も有しており，後代の典籍に多く引用されている[9]．このように，VP は HV との密接な関係が言及されているだけに留まらず，独立したタントラとしても非常に重要な位置を占める文献である．したがって，VP の研究は，インド後期密教を解明する上で高い文献学的価値があるといえる．本論文では，これまで十分に解明されていなかった VP の全体像を明らかにすることを目的とする．註釈書や周辺典籍を交えながら VP を読み解くことにより，インド後期密教研究の発展に寄与したい．

１－２．VP および VP 註釈書の基本資料

まず，VP を研究する上で必要となる VP および VP 註釈書の基本資料について整理したい．VP の Skt 写本は，Rāhula Sāṅkṛtyāyana 氏がチベットで数本発見したとされるが，現在では散逸しており所在不明となっている[10]．また，漢訳の存在は確認されておらず，研究

は Tib に頼らざるを得ない．なお，VP の Tib はデルゲ版(D)や北京版(P)に見られる Gayadhara と Shā kya ye shes[11]の共訳が一般的に知られているが，それとは別に翻訳者不明[12]のプタク写本(Ph)が存在する．現存する Tib 版本・写本の多くは，おおまかに東のツェルパ系と，西のテンパンマ系およびシェルカル系に分類されるが，Ph は東西どちらにも属さない独自の読みを有していることが知られている[13]．最近では，Ph を用いた研究が広い分野で盛んになりつつあり，文献ごとで Ph の読みに対する様々な見解が示されている[14]．しかし，Ph の VP は，既に Ph の目録である Samten[1992]の中で，他版と翻訳者が異なる異訳であるとの指摘がなされている[15]．したがって，VP の基本資料としては，D や P に見られる Gayadhara と Shā kya ye shes の共訳と，その異訳にあたる翻訳者不明の Ph という２種類の Tib がある．なお，本論文第２章では VP の題名や章構造に触れ，両翻訳を比較することで相違の程度を検証する．

・VP の基本資料

Tib no.	翻訳者	備考
D no. 419 (30a4-65b7), P no. 11 (262a6-301b4)	Gayadhara と Shā kya ye shes の共訳	Ph 以外の 写本・版本に収録
↑ 異訳 ↓		
Ph no. 458 (56b1-121a6)	記載なし	Ph のみに収録

次に, VP の註釈書の基本資料を整理する. VP には, Indrabhūti の *Pañjikā* (略号『Indrabhūti 註』), Kṛṣṇa の *Mukhabandha* (略号『Kṛṣṇa 註』), Mahāmati の *Tattvaviśadā* あるいは *Tattvapauṣṭika* とも呼ばれる註釈書[16] (略号『Mahāmati 註』), 著者不明の *Ṭippati*[17] (略号 VPṬ)という計４つの註釈書が知られている.

・VP 註釈書の基本資料

註釈書名	註釈者	本論文での略号	Skt 写本	Tib no.
Pañjikā	Indrabhūti	『Indrabhūti 註』	現存せず	D no. 1194 (43b5-49a6) P no. 2324 (50a8-57a2)
Mukhabandha	Kṛṣṇa	『Kṛṣṇa 註』	現存せず	D no. 1195 (49a6-54a6) P no. 2325 (57a2-62b8)
Tattvaviśadā または *Tattvapauṣṭika*	Mahāmati	『Mahāmati 註』	一部が現存	D no. 1196 (54a7-94b1) P no. 2326 (63a1-106b4)
Ṭippati	不明	VPṬ	完本が現存	Tib 大蔵経未収録

これら４つの註釈書はいずれも難語釈形式であり，VP の重要語句を抜き出して説明を

加えている．Indrabhūti と Kṛṣṇa という名前は，VP の翻訳者の１人である Shā kya ye she (='Brog mi lo tsa ba)のヘーヴァジュラ相承系譜の中に確認できる[18]．また，『Indrabhūti 註』と『Kṛṣṇa 註』は内容が酷似しており，同じ相承を受けている可能性が高い[19]．したがって，Indrabhūti と Kṛṣṇa は，Shā kya ye shes のヘーヴァジュラ相承系譜に出てくる人物と同定できる可能性がある．一方，Mahāmati という名前は，VP と同じようにヘールカや女尊が登場するタントラ色の濃い典籍 *Rahasyānandatilaka* (略号 RĀT)の著者として確認できる．ただし，『Mahāmati 註』と同定できるような共通の特徴はまだ確認できていない[20]．

さて，VP の４つの註釈書の中で Skt 写本を確認できるのは『Mahāmati 註』と VPṬ の２つである．まず，『Mahāmati 註』の Skt 写本は，以下のように部分的に現存している．

『Mahāmati 註』の Skt 写本[21]

① 1 葉(=1b), KL 134 = NGMPP C14/11 に混入.

② 6 葉(=2a-7b), NAK 5/20 = NGMPP A47/17 に混入.

③ 1 葉(=写本末尾の１葉), NAK 5/23 = NGMPP A47/18 に混入.

これら①から③の Skt 写本は全て 57×6cm, 各葉５行ずつで書かれ, 同じ位置に糸穴の空いたパームリーフであり，同一写本が離散したものと考えられる．なお，8a から末尾の１葉前までの Skt 写本の所在については現在不明であるが，チベット訳の分量から考えて全体の３分の２程度に相当する葉が抜け落ちていると考えられている[22]. また, 現存する写本も保存状態が悪く，汚れや部分的欠損のために判読できない文字が多く含まれている．

ところで，『Mahāmati註』には２つの題名が確認できる．１つの題名は*Tattvaviśadā* (Tib: *de kho na nyid gsal ba*)であり，全15章からなる『Mahāmati註』Skt写本の第１章・第２章・第３章・第１５章の章題および奥書と，Tibの第１章・第２章の章題に見られる．もう１つの題名は*Tattvapauṣṭika* (Tib: *de kho na nyid rgyas pa*)であり，Tibの標題(Skt音写およびTib訳)と第３章から第１５章および奥書に見られる．このように，現存するSkt写本の題名は*Tattvaviśadā*で統一されているが，Tibは２つの題名が混在している．

さらに，『Mahāmati註』のSkt写本とTibには内容的な乖離が見られる[23]．このSkt写本とTibの内容的な乖離は，Skt写本とTibが同じ章題を持つ第１章・第２章部分でも顕著であり，章題の相違が内容的な乖離に直接結びつくわけではない．

以上ように『Mahāmati註』にはいくつかの問題がある．これらの問題が起きた原因は定かではないが，『Mahāmati註』には題名からして異なる２種類の異本が存在しており，『Mahāmati註』のTibはその両方を参照して翻訳されたものである可能性が指摘できる．

次に，VPṬのSkt写本には以下の完本が確認できる．

VPṬ の写本

８葉(=1b-8b), KL 230 = NGMPP C26/3[24].

上記は 56.5×5.5cm, 各葉７行ずつで書かれたパームリーフであり，奥書によれば３５０頌の分量である．VP の Skt 註釈書の中で唯一の完本であり，Skt 原典を確認できない VP を研究する上で極めて有用な典籍といえる．ただし，その一方で Tib は現在までに確認さ

れていない．また，奥書があるにも関わらず註釈者名は記されていないため，他典籍との先後関係を探ることは極めて困難である．

以上が現在確認できる VP の基本資料である．次節では先行研究を整理し，VP を解明する上でどのような研究が前提として必要となるかを検討したい．

１－３．研究史

まず，VP の先駆的な研究成果としてあげられるのが島田[1983b]である．同著は島田茂樹氏の専門である DK 研究の一端として，DK と関係が深い VP を取り上げて比較・対照させたものである．まずマンダラの視点に立ち，VP の五部マンダラは *Sarvabuddhasamāyogaḍākinījālasaṃvara*（略号 SS）の六族マンダラから Vajrasattva を除いた構成に等しいが[25]，VP の八女尊マンダラは SS よりも DK に名称・方位共に合致することから，VP が SS よりも DK に近い存在であると推定している．続いて，DK の灌頂儀礼は瓶灌頂・秘密灌頂・般若智灌頂・第四灌頂という後期密教系四種灌頂を説くのに対し，VP および VP の註釈書である『Indrabhūti 註』・『Kṛṣṇa 註』・『Mahāmati 註』には第四灌頂の記述が見られない点を指摘する．さらに，VP は DK 以降の母タントラに必然的に見られる四輪三脈といったタントラ的身体論に関する用語を説いていない点からも VP の成立年代は DK よりも遡る，との見解を述べている．島田氏は結論として VP を SS から DK へと発展する中間的発展段階に位置づけている．

続いて，島田[1984c]は同[1983b]で説明したマンダラの構成をさらに詳細に述べている．まず，SS で四方四維という円形で中尊を囲繞していた八女尊が，VP では四門四隅に配置され，これが DK に説かれるヘーヴァジュラマンダラの原形になったことを図表を用いて説明する．これは島田[1983b]の結論で述べた SS, VP, DK という成立順序を裏付けるものといえる．さらに，VP に説かれるナイラートミヤーマンダラが DK 所説のヨーギニーチャクラと同名称・同方向であることを指摘し，*Sarvatathāgatatattvasaṃgraha* (略号 STTS)所説の金剛界三十七尊マンダラに相当するものの全女尊化を継承していると述べている．また, VP にはナイラートミヤー十三尊マンダラと十五尊マンダラの二種類が説かれている．これについて島田氏は，VP Ch. IV 所説の十三尊マンダラが VP Ch. VIII 所説の金剛ターラーマンダラを経たことでケーチャリーとブーチャリーという上下の二尊が加わり，VP Ch. XII の十五尊マンダラが成立したと推察している．

さらに，島田[1986]では，VP と DK の比較から両タントラの根源である HV について言及している．そもそも DK が HV の最初の二儀軌であるならば，HV と DK の成立は同時期であり, HV の略タントラである VP の成立は DK よりも後になることが大前提となる．また，VP に DK の思想体系が論及されていることは必然である．しかし，VP には DK に見られる第四灌頂[26]や，四輪三脈[27]を始めとするタントラ的身体論[28]といったヨーギニータントラ[29]以降の新思想体系が説かれておらず，明らかに DK よりも VP の方が成立が早いと考えられる．しかも，マンダラには VP から DK への影響が見られるとしている．したがって，島田氏は HV を作成するための草案を整理したものが VP であり，HV は VP を起源とする架空のタントラであると結論付けている．また，VP 成立の後に HV の草案の一

部に基づいて第四灌頂や五相といった VP 以降に興隆した新思想体系を取り入れて作られたものが DK であるとしている．

その後，島田[1994]では，DK と VP を含めた HV 系タントラのマンダラに登場する尊格について，文献に基づいて形相や持物などを図像化した上で詳細な解説を加えている．さらに，VP の北京版(P)に基づいた HV 三十儀軌の各儀軌名の邦訳を提示し，HV 三十儀軌の最初の二儀軌の名称が DK に踏襲された流れを図式化している[30]．なお，この HV 三十儀軌の各儀軌名については後に Shendge[2004]が同じく VP の北京版(P)から Skt 還元を試みている[31]．

さて，ここまで，VP を中心とした研究は，ほぼ島田氏によって手がけられてきた．しかし，最近になって田中公明氏によって島田氏の研究蓄積を根底から覆す見解が述べられている．田中[2010] p. 351-352 によれば，VP Ch. IV には究竟次第のヨーガに到達した徴候とされる五相が明確に説かれており，さらに Ch. XV には第四灌頂を含む後期密教系四灌頂を取り入れた十灌頂説が説かれているとしている．また，SS 六族マンダラのヘールカ族から DK 九尊マンダラが成立した後に，再び五部のマンダラに拡張したものが VP の五部マンダラであるとし，VP の成立よりも DK の成立の方が時代が遡ると推定している．

・ŚPからのマンダラの展開過程[32]

ŚPの各部 **金剛薩埵部・仏部・金剛部・宝部・蓮華部(=法部)**[33]
↓ (**羯磨部**に相当するパラマーシュヴァが追加)[34]
SS六族 **金剛薩埵・毘盧遮那・ヘールカ・金剛日・蓮華舞自在・パラマーシュヴァ** （眷属はŚP＋ヴァンシャーなどの音楽系四女尊）
↓ ・ここから**VP五族**と**DK九尊**の成立の先後について島田氏と田中氏の見解が分かれる
VP五族 **シャーシュヴァタ・ヘールカ(=DK九尊)・金剛日・蓮華舞自在・パラマーシュヴァ** （眷属はŚP＋SSの音楽系四女尊＋ローチャナーなどのGS系四女尊＋α）

島田氏の見解	田中氏の見解
(SSの金剛薩埵が法身となり一族抜ける) **VP五族** ↓ （VP五族のヘールカ族が独立） **DK九尊**	（SSのヘールカ族が独立） **DK九尊** ↓ （再び五族に拡張） **VP五族**
・VPはDKと異なり第四灌頂が説かれない	・VPはDKと同じく第四灌頂が説かれる

これらの研究成果を踏まえて，先行研究で見解が異なっている第四灌頂の有無に焦点を当てたものが拙稿[2014b]である．VP 本文を精査した結果，VP 本文に第四灌頂の語は確認できず，VP の灌頂次第は後期密教三種灌頂を含む九種灌頂であった．したがって，島田[1983b]の示す通り VP には第四灌頂が説かれておらず，田中[2010]には何らかの誤解があったと考えられる．また，島田氏および田中氏が使用していない註釈書 VPṬ の中には第四灌頂の語が確認できることが分かった．しかし，VPṬ は註釈によって半ば強引に第四灌頂を付加しており，それは VP 本文に第四灌頂が説かれていないことをより浮き彫りにするものであると結論付けた．続いて，拙稿[2015b]では，VPṬ に説かれる五相とタントラ的身体論の記述に注目した．田中[2010]が示した通り，VP には究竟次第のヨーガに到達した徴候である五相が説かれているが，VPṬ では五相の説明として VP の五相とは全く異なる相を示している．また，VPṬ にはタントラ的身体論の記述が説かれていることも分かった．これらの VPṬ の記述を精査した結果，VPṬ が示す五相とタントラ的身体論の記述は，DK の記述と非常によく似ていることが分かった．そのため，VPṬ は，拙稿[2014b]で示した第四灌頂も含めて，一部で VP と DK の会通を試みている可能性が高いとの結論に至った．なお，これらの拙稿の研究成果については本論文の前提条件になる．したがって，本論文第２章において，要点部分のみ改めて触れる．

以上が現在までに行われてきた VP を中心とする先行研究である．VP を中心とした研究は極めて少なく，しかも一部の儀礼やマンダラに偏っていることが分かった．なお，拙稿[2014b]で，VP 本文に第四灌頂がないことは明らかになったが，マンダラの展開については島田氏および田中氏の両説とも一応の筋道が通っている．したがって，VP と DK の先後関係は，先行研究で決着がついていない問題といえる．

１－４．研究目的と研究方法

研究史を通じて分かるように，VP を中心とした先行研究は極めて少ないのが現状である．また，VP と他タントラとの先後関係を正確に論じるためには，先行研究に見られるようなマンダラの比較だけではなく，本文の内容を解明することが不可欠となる．しかし，VP および註釈書の校訂テクストと現代語訳は未だ刊行されていない．そこで，VP および註釈書の校訂テクストと試訳を作成し，註釈書や関連典籍を用いた文献学的手法によって VP の内容を解明したい．

まずは本論文での VP の Tib 校訂テクストの作成方法を述べる．本論文では，VP の Tib 校訂テクストとして，Gayadhara と Shā kya ye shes の共訳を収録している諸版・諸写本を校合させた校訂テクストおよび翻訳者不明である Ph 校訂テクストの二種類を作成する．なお，便宜上，Gayadhara と Shā kya ye shes の共訳を収録
している諸版・諸写本を校合させた校訂テクストは，これ以降，校合テクストと呼ぶこととする．

校合テクストは，デルゲ版(D)を底本とし，北京版(P)・チョーネ版(C)・ナルタン版(N)[35]・ラサ版(H)・トクパレス版(T)[36]の六種類の版本と，河口写本(K)・シェルカル写本(Sh)の二種類の写本という計八種類の Tib 諸版・諸写本を用いる．これらは現在入手できる諸版・諸

写本の中から東西の各系統を参照して選択したものである[37]. 多くの版本・写本を校合することによって様々な異読を確認し，系統ごとの読みの相違を明らかにしたい.

Ph の写本は, 誤写と考えられる意味不明の単語や文の逸脱・誤入が散見される. そこで, 前後の文脈や校合テクストから本来の形を推定して Ph の校訂テクストを作成する．この Ph の校訂テクストと先の校合テクストを比較使用することによって，VP 本文の内容を多角的に検討することが可能となる．なお，両翻訳の比較から，その文章が本来有していた意味や元になった Skt の文章構造を推測することができる場合は，付随する補記あるいは訳註といった解説部分において示す.

次に，本論文で使用する VP 註釈書の選別とその使用方法を述べる．本論文では，VP の註釈書として Skt 写本が完本で現存する VPṬ を主に使用し，さらに Skt 写本が部分的に現存する『Mahāmati 註』も確認できる範囲[38]で使用する．両註釈書からは VP 本文の Skt を回収することが可能であり，原語を想定しながら読む進める必要がある Tib 註釈書とは内容理解の正確さにおいても一線を画すからである．なお，Skt 写本が確認できない『Indrabhūti 註』・『Kṛṣṇa 註』については Skt 註釈書の補助的な使用に留める.

ちなみに，以上の校訂テクストを本文で挙げる際には，判別し易いように四角で囲んで示し（例：校合テクスト，Ph，VPṬ，『Mahāmati 註』），それぞれの補記や訳註を述べる際には【】を用いて示す（例：【補記】，【訳註】）．また，テクスト校訂前の形や異読については付録で詳細に示しており，各付録はアルファベットで対応させている(例：＜付録 A 参照＞).

最後に，本論文の構成について述べたい．本論文の第２章では VP の概論を述べる．VP は，先行研究で一部の儀礼やマンダラに偏って取り上げられてきた．したがって，まずは未だ明らかとなっていない VP 全体を取り上げることに文献学的な価値がある，具体的には，題名や各章の構造を校合テクストと Ph を比較させながら概説することで，VP がどのような内容を有するタントラであるのか把握したい．また，VP 全体像が明らかとなることは，校合テクストと Ph がどの程度の相違を有する異訳であるかの検証にも結びつく．両テクストに章構成の相違や増広がないことを確認したい．また，その他にも現在までに分かっている VP を特徴付ける内容や，VP の読解に役立つ記述などをいくつか取り上げて概説する.

本論文の第３章では VP Ch. I を詳細に検証する．この Ch. I を取り上げた理由は２つある．まず１つ目は，Ch. I が VP 全体の導入部にあたり，VP の基盤となっているからである．Ch. I には VP の核となる五部族マンダラやヨーガ理論が説かれており，VP の思想体系を解明する糸口として最適な内容を含んでいる．２つ目は，VP の諸註釈書が VP 全章を通じて Ch. I に最も詳しい説明を加えているからである. おおよそ難語釈形式の註釈書は, 内容が進むにつれて説明が希薄になる傾向がある．VPṬ も Ch. I の語句に対する註釈頻度が全体を通じて最も高いために，註釈書の恩恵を受けやすい．さらに VP Ch. I は，VP 本文の Skt 復元を期待できる箇所が他の章に比べて最も多い比率で存在する．具体的な Skt 復元の方法としては，VPṬ と『Mahāmati 註』から VP 本文の Skt を回収し，平行文などを参照させながら可能な限り偈として再構築を試みたい.

本論文の第４章では，VP の根源となった HV について探究したい．VP は，HV 五十万頌の内訳や HV 全三十儀軌の各儀軌名が説かれ，具体的な HV 像に触れることができる極

めて貴重な資料である．そこで，VP に説かれた HV の記述をまとめることにより，HV がいかなる存在であったのかを考察したい．

本論文の第５章では，本論文での研究成果をまとめて結論を述べる．また，引き続き解明が必要な点を整理し，今後の研究方針を選定する．

以上が本論文の構成である．これらの研究手法によって，これまで明らかにされてこなかった VP の全体像を捉えることができると考えている．さらには，HV や DK といった VP と結びつきが強いと考えられているタントラとの実際の関係性も見えてくるであろう．

---

[1] インド密教は初期密教・中期密教・後期密教の３つに区分され，後期密教は GS 以降のタントラ化した密教のことを指す(松長[2005] p. 3)．なお，野口[1999] p. 60 および松長[2005] p. 6-7 には，後期密教を中期以前の密教と対比させた場合に見られる特徴が挙げられている．

[2] サキャ派は DK を所依聖典としており，宗派全体で DK の主尊であるヘーヴァジュラ尊をイダム(yi dam)としている．イダムとは，チベット密教における最高の信仰対象を指し，いわば守り本尊のことである．立川・正木[1997] p. 31.

[3] 法護訳『仏説大悲智金剛大経王儀軌経』(略号『大悲智金剛』)，大正蔵 no. 892．なお，この漢訳では HV が全部で三十一儀軌から構成されていることを示している．

[4] この DK は一般的にヘーヴァジュラタントラとの名称で知られているが，実際は，三十儀軌乃至三十二儀軌あるとされる広本 *Hevajra* の最初の二儀軌だけの略本である．本論文では，広本と略本の区別を明確につけるために広本の方を *Hevajra*(略号 HV)と呼び，略本の方を *Dvikalpa*(略号 DK)と呼び分けている．

[5] 例えば，Vajragarbha 著 *Hevajrapiṇḍārthaṭīkā* (略号 HPṬ) には，DK に確認できない記述をヘーヴァジュラタントラからの引用とする箇所が散見される．しかし，それが HV の記述であるのかは，真偽の確認ができないため不明である．Snellgrove[1959a] p. 16.

[6] 略タントラ(saṃkṣiptatantra)とは，根本となるタントラの要略した内容を有するタントラのことである．VP は HV の全体像に関する記述を有しているため略タントラに該当する．ただし，HV を一儀軌に要略したものというのは後代の解釈である．島田[1993] p. 356.

[7] 釈タントラ(vyākhyātantra)とは，根本となるタントラの思想や儀軌などに関する補足的内容を有するタントラのことである．一般的な註釈書と異なり，単独でタントラとしての権威を有している．松長[2005] p. 43.

[8] 田中[2010] p. 346. *ll*. 12-15.

[9] VP を引用する典籍は膨大であるため，ここで逐一を取り上げることは困難である．Skt 校訂本が出版されている典籍の中だけでも Nāropa 著 *Sekoddeśaṭīkā* (略号 SUṬ)，Advayavajra 著 *Pañcatathāgatamudrāvivarana* (略号 PMV), Kāṅha(=Kṛṣṇa)著 *Yogaratnamālā* (略号 YRM), Vajrapāṇi 著 *Laghutantratīkā* (略号 LTṬ), Lūyīpāda 著 *Cakrasaṃvarābhisamaya* (略号 CSA)，Anupamarakṣita 著 *Ṣaḍaṅgayoga* (略号 ṢAY), Abhyākaragupta 著 *Vajrāvalī* (略号 VĀ)などに VP からの引用が確認できる．本論文でも一部の引用文を取り上げ，VP が後代の学僧に与えた影響を考察するが，全貌については今後の研究で順次明らかにしていきたい．

[10] 田中[2010] p. 346. *ll*. 27-31.

[11] Shā kya ye shes のフルネームは，'Brog mi lo tsha ba shā kya ye she (ドクミ翻訳僧シャーキャイエーシェー) として知られている．本論文でも扱う文献によって一部省略された 'Brog mi や Shā kya ye she と呼ばれるが，どちらも同一人物を指している．なお，Shā kya ye shes は，11 世紀頃に活躍した人物とされ，数多くのタントラを翻訳した人物として知られている．Snellgrove[1987] p. 506.

[12] VP の Ph には奥書に翻訳者名が書かれていない．なお，前後の写本は DK と SPU であり，翻訳者は他版と同じく Gayadhara と Shā kya ye shes の共訳になっている．

[13] 渡辺[2009] p. 329. なお，西をテンパンマ系のみとせず，シェルカル系を加えた二系統とするのは渡辺章悟氏独自の見解である．本論文はこの渡辺氏の見解に従い，東に一系統と西に二系統で合計三つの系統があると考える．

[14] 例えば，VP と近い関係にあるといわれ，『理趣経』(=*Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā* (略号 AdhŚ)) の広本にあたる *Śrīparamādya* (略号 ŚP) の Ph の一部は，徳重[2014]によって註釈書 *Śrīparamādyaṭīkā*(略号 ŚPṬ)が訳出される際に参照された ŚP の写本か，ŚPṬ 自体を参照して編纂されたものであると推定されている．

[15] Samten[1992] p. xiv-13.

[16] このMahāmatiの註釈書の題名は*Tattvaviśaḍā*と*Tattvapauṣṭika*の２つが混在しており，いくつかの問題を抱えている．詳細については後述する．

[17] この註釈書を写本の読み通りに ṭippati とするか，ṭippaṇī に校訂するかは研究者の間でも統一がとれていない．本発表では ṭippati という写本の読みを尊重して使用する．なお，ṭippati という単語を使用している典籍は他に少なくとも数例あることが倉西憲一氏によって指摘されている．Kuranishi [2012] p. 1274 註 7.

[18] 『プトゥン聴聞録』34b2 によれば，'Brog mi のヘーヴァジュラ相承系譜は以下の通りである．

Vajradhara→Valasyavajra→Anaṅgavajra→mTho skyes rdo rje (Padmavajra)→
Indrabhūti→lCam lakṣmī (Lakṣmīṅkarā)→**Nag po spyod pa (Kṛṣṇācārya)**→
Bram ze dpal 'dzin (Śrīdhara)→**Gayadhara**→**'Brog mi (=Shā kya ye shes)**

以上で太字で示したように，'Brog mi の相承系譜の中には VP の註釈書の著者である Indrabhūti と Kṛṣṇa, および VP の共訳者である Gayadhara と Shā kya ye shes という４名の名前が確認できる．羽田野[1987] p. 60-61.

[19] この可能性については拙稿[2015a]で検証している．

[20] 例えば，GS 聖者流の人物たちは，権威付けのために偉大な学僧の名前を踏襲していた可能性がある．このように，タントラ文献は著者名のみから同一人物の典籍と判断することが困難であり，内容的特徴の一致が必要となる．

[21] 奥山直司氏は，塚本・松長・磯田[1989] p. 298 で，Skt 写本③を『Mahāmati 註』の Tib と同定している．その後に田中[1998]が，所作タントラに属する *Trisamayarājatantra*(略号 TR)の註釈書に混入していた②の調査によって奥山氏による同定を裏付けた．

[22] 田中[1998] p. (148). なお，章単位で考えると VP Ch. IV の途中から Ch. XV の途中までに当たる部分の註釈が抜け落ちている．

[23] 『Mahāmati 註』の Skt 写本と Tib には，語句や文法上の相違に留まらず，文章そのものの順序を入れ替えている箇所が至る所で見られる．

[24] なお，この Skt 写本のアポグラフである紙写本(NAK 5/110 = NGMPP A142/16) が存在している．現在は入手不可能であるが，以下の NGMCP によって冒頭と末尾部分の記述のローマナイズを確認することが可能であり，内容の合致を確認済みである．
(NGMCP http://catalogue.ngmcp.uni-hamburg.de/wiki/A_142-16_Ḍākinīvajrapañjaraṭippaṇī)

[25] 後に島田氏は六族から五族への発展について，Vajrasattva に法身(=Hevajra)としてマン

ダラ全体かつ中尊の位置を与えたとの説明を加えている．島田[1984c] p. 73.

[26] 第四灌頂とは，後期密教系灌頂の最後に説かれる灌頂のことである．瓶灌頂(あるいは阿闍梨灌頂)・秘密灌頂・般若智灌頂に続く第四番に説かれるから第四灌頂と呼ばれる．

[27] タントラ的身体論における重要な器官である４つのチャクラ (nirmāṇacakra-・dharmacakra-・saṃbhogacakra-・mahāsukhacakra-) と３つのナーディー (lalanā-・rasanā-・avadhūtī-) は，まとめて「四輪三脈」と呼ばれている．津田[1973] pp. 293.

[28] タントラ的身体論とは，操作することによって解脱を可能にする体内の特殊な器官を述べたものである．杉木[2007] pp. 255-294.

[29] ヨーギニータントラとは，タントラ階梯のヨーガニルッタラタントラのことであり，それまでのタントラと異なる女尊中心のマンダラや新思想体系が説かれている．詳細については本論文４−２で説明している．

[30] 島田[1994] p. 356.

[31] Shendge[2004] p. 355.

[32] この中の ŚP から SS へと展開する流れは，田中[1984]の研究成果に基づいている．

[33] 蓮華部に位置する部は，名称が一定しておらず，法部と呼ばれることもある．ŚP では蓮華部と呼ばれていたが，VP Ch. I-18 では法部と読み取れる．

[34] パラマーシュヴァ族は羯磨部に相当するといわれているが，ヘールカ族のマンダラに２尊を付け加えただけの構成になっている．これは ŚP では羯磨部が未発達であった事実を反映するものとされている．田中[2006] p. 26.

[35] 渡辺[2009] p. 336. 註４によれば，N に次の資料を用いる場合には注意が必要である．Lokesh Chandra: *Śatapiṭaka Series Indo-Asian Literature*, International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan, New Delhi, 1998.この資料は独自のナンバリングをしており，写本に書かれた葉番号と異なる数字が振られている．なお，本論文は同資料を使用しているが，上記のナンバリングに加えて１つ問題がある．VP は同資料 vol. 580, no. 393, 710 から始まると目次に記されているが，実際には１つ手前の 709 の１行目から始まっているため注意が必要である．

[36] この T は葉番号 180 と 181 の間の一葉に番号の不備がある．この一葉は前後の葉と内容がつながっており，番号の不備は書写した後で葉番号を振る際に起きた過誤と考えられる．したがって T は葉番号と実際の葉数が一致せず，注意が必要である．

[37] 渡辺[2009] p. 330 の系統図に基づけば，おおまかに D, P, C はツェルパ系(東)，N, H, Sh はシェルカル系(西)，T, K はテンパンマ系(西)に属する．ただし，D はテンパンマ系のロゾン写本からも直接影響を受けており，さらに H は D の影響下で作成されたと考えられているため注意が必要である．

[38] 本論文では，『Mahāmati 註』の校訂テクストを VP Ch. I-1 から I-9 対応箇所までに留めて掲載する．先にも述べた通り，『Mahāmati 註』の Skt 写本は部分的に現存しているだけであり，残された写本も保存状態の悪さから内容を確認できない箇所が多くある．また，『Mahāmati 註』は Tib も存在するが，Skt 写本とは内容が乖離している．そのため，本論文において『Mahāmati 註の』Tib は Skt 写本の確認できない部分や問題箇所で補助的に使用するに留める．

＜第２章＞

VP の概要

第２章 VP の概要

２−１．はじめに

本章では，VP の全体像を明らかにしていきたい．前章で示した通り，VP を中心とした先行研究は極めて少ないのが現状である．また，VP の先行研究はマンダラや灌頂といった VP の一部分のみに焦点を当てているため，VP 全体にどのような内容が説かれているのかは現在までにほとんど明らかとされていない．そこで，VP の題名や章の構造といった概要部分に触れていくことで VP の全体像を浮き彫りにする．

さて，本論文の第１章でも述べたように，VP の Ph は他版から見て異訳にあたることが指摘されている[1]．ところが，他版と Ph にどの程度の相違があるかについては言及がされていない．そもそも他版と Ph では，内容以前に題名の一部が異なっている．題名に相違がある２種類の写本・版本を異本として扱うには内容的な合致の確認が必要不可欠である．そこで，校合テクストと Ph の両翻訳から VP 全体を見ていくことにより，両翻訳の内容的な相違の程度を確認することも本章の目的である．

２−２．VP の題名について

２−２−１．校合テクストと Ph の標題部分の比較

VP は，一般的に *Ḍākinīvajrapañjara* (Tib: *mkha’ ’gro ma rdo rje gur*)という名称で知られている．実際に，他の典籍が VP を引用する時には *Ḍākinīvajrapañjare* (Tib: *mkha’ ’gro ma rdo rje gur* las) あるいは *Pañjare* (Tib: *gur* las)と書き示している．しかし，これらはいずれも略称であり，聖典に付けられている正式な題名ではない．それでは，VP 自身が示す正式な題名はいかなるものであったのか．まずは標題部分に示された題名を確認したい．

・校合テクストと Ph の標題部分〔付録 A 参照〕

校合	Skt 標題	*Āryaḍākinīvajrapañjaramahātantrarājakalpanāma.*
	Tib 標題	*’phags pa mkha’ ’gro ma rdo rje gur zhes bya ba’i rgyud kyi rgyal po chen po’i brtag pa//*
	帰命対象	**kye rdo rje** la phyag 'tshal lo// 試訳「ヘーヴァジュラに帰命し奉る」
Ph	Skt 標題	*Āryaḍākinīvajrapañjara**saṃgrahamaṇḍala**mahātantrarājakalpanāma.*[2]
	Tib 標題	*’phags pa mkha’ ’gro ma rdo rje gur zhes bya ba’i rgyud kyi rgyal po chen po **dkyil ’khor ba**’i rtog pa//*
	帰命対象	**bcom ldan 'das rdo rje mkha' 'gro ma** la phyag 'tshal lo// 試訳「世尊・金剛ダーキニーに帰命し奉る」

上記の通り，Ph の Skt 標題には，校合テクストにない saṃgrahamaṇḍala-という語が含まれている．この saṃgrahamaṇḍala-という語は，「摂受マンダラ」すなわち「他のマンダラを

摂受して１つにまとめたマンダラ」といった意味が考えられ，５つのマンダラからなる VP の五部マンダラと結びつくものといえる．なお，Ph の Tib 標題では saṃgrahamaṇḍala- の中の saṃgraha-に対応する語が抜けており，maṇḍala-に対応する訳語 dkyil 'khor ba だけになっている．これは翻訳者あるいは書写者の誤謬と考えられ，Ph が使用した Skt 写本の標題には saṃgrahamaṇḍala-という語が含まれていた可能性が高い．このように，校合テクストと Ph では標題の一部が異なっている．

さらに，校合テクストと Ph では，標題に続く帰命対象も異なっている．校合テクストでは帰命対象をヘーヴァジュラとしているが，一方の Ph では金剛ダーキニーとしている．校合テクストと Ph で標題も帰命対象も異なるということは，両翻訳が同じ Skt 写本から再翻訳されたものではなく，全く別の Skt 写本を元にしたものであることが標題部分から推定される．

２−２−２．校合テクストと Ph の奥書の比較

本節では，校合テクストと Ph の奥書を比較検証する．前節の標題部分の比較において，校合テクストと Ph は題名の一部が相違していることを確認した．そこで，次に奥書部分を確認することによって，両翻訳の示す VP の題名をより正確に把握したい．なお，奥書では，標題と異なり Skt 音写が確認できない．しかし，両翻訳の標題と奥書の相違を明確に示すために，Tib から Skt 還元を試みたものを「想定できる Skt」として（）で補足した．

・校合テクストと Ph の奥書〔付録 B 参照〕

校合	題名部分	*’phags pa mkha’ ’gro ma* ***dra ba****’i rdo rje gur rgyud kyi rgyal po’i brtag pa* rdzogs so/ / （想定できる Skt 題名: *Āryaḍākinī**jāla**vajrapañjaramahātantrarājakalpa*）
	翻訳者名部分	rgya gar gyi mkhan po ga ya dha ra dang lo ts+tsha ba dge slong shā kya ye shes kyis bsgyur ba'o/ / // 「インドの師 Gayadhara と翻訳僧 Shā kya ye shes による翻訳である」
Ph	題名部分	*mkha’ ’gro ma rdo rje gur zhes bya ba rgyud kyi rgyal po chen po’i rtag pa* rdzogs so/ / // （想定できる Skt 題名: *Ḍākinīvajrapañjaramahātantrarājakalpanāma*）
	翻訳者名部分	記載なし．

上記の通り， まず校合テクストの奥書に付された題名には，mkha' 'gro ma の直後に dra ba という語が含まれていることを確認できる．この mkha' 'gro ma dra ba は ḍākinījāla-の訳語であり，SS と DK の題名にも含まれている．このような題名に ḍākinījāla-を含む文献は Ḍākinījāla 文献群[3]と呼ばれることもあり，同一グループに作成された一連の文献群であると考えられている．本論文第１章でも示している通り，VP は SS および DK と類似したマ

ンダラを有しており，Ḍākinījāla 文献群と非常に密接な関係にある．そのため，VP の題名に ḍākinījāla-という語が含まれており，SS および DK と同じグループに帰属していた可能性は十分にあり得る．ただし，VP の題名に mkha' 'gro ma dra ba という語が確認できるのはこの１箇所のみである．また，Gayadhara と Shā kya ye shes は，DK の翻訳者でもあるため Ḍākinījāla 文献群を熟知していたであろう．そのため，翻訳者が mkha' 'gro ma という語につられて誤って dra ba と続けて書いてしまった可能性も十分に有り得る．

次に，Ph の奥書の題名には，標題と異なり saṃgrahamaṇḍala-という語が含まれていないことが分かる[4]．そのため，Ph の標題にある saṃgrahamaṇḍala-という語は，編纂者や翻訳者による後代の付加であり，文献が本来有していた題名には含まれていなかった可能性がある．また，本論文第１章で既に指摘した通り，Ph の奥書には翻訳者名が書かれていない．Ph の写本は，翻訳者名を記すのに十分な１行半[5]を残して終わっており，完本であることには疑いがない．そのため翻訳者がそもそも名前を記さなかったか，あるいは書写者の過誤により翻訳者名部分が抜け落ちた可能性が高いと考えられる．なお，Ph で VP の前にくる DK と後に続く SPU は，他版と同じく Gayadhara と Shā kya ye shes の翻訳になっている．おそらく，Ph の VP は，本来存在していた Gayadhara と Shā kya ye shes の翻訳が散逸したなどの理由から再翻訳が必要となり[6]，新たに VP の Skt 写本を入手して翻訳されたものと考えられる．

以上のように，VP の題名にはいくつかの種類が確認できる．しかし，校合テクストの標題および Ph の奥書に示されている *Ḍākinīvajrapañjaramahātantrarājakalpanāma* 以外の語が共通している題名というのは確認できない．前述の saṃgrahamaṇḍala-あるいは ḍākinījāla-という語を含む題名は，共に一例だけの不確かなものである．したがって，校合テクストと Ph に見られる題名の相違は部分的な異読であり，文献そのものが変化したことで新たに付けられた題名とまでは言えない．そこで，次節からは VP の実際の内容を見ていくことで両翻訳の相違を確認していきたい．

２－３．VP の章構成と梗概

本節では，VP の章構成と梗概がどのようなものであるのかを検証したい．VP には，全章はおろか１つの章を一貫して取り上げた研究すらも見当たらない．したがって，VP の章構成および各章の内容は，未だ明らかとなっていない．そもそも VP を含めた多くのタントラ文献は，内容が雑多に詰め込まれており[7]，同一の章内であっても纏まった内容が説かれているとは限らない．そのため，VP 全体を把握することは極めて困難な作業といえる．

しかし，VP を解明するためには一部の儀礼だけではなく，VP 全体を取り上げる必要がある．幸いなことに，VP の各章末には最終章である Ch. XV を除いて章題が付されており，各章の主題が確認できる．そこで，章題を頼りに各章の主要な内容を取り上げて，VP 全体の梗概を示したい．また，校合テクストと Ph を比較していくことで，両翻訳に章構成の相違や，大幅な増広が認められないことも同時に確認する．なお，備考欄には，各章が収録されている諸版・諸写本の範囲を示してある，

・VP Ch. I〔付録 C 参照〕

章題	校合	thams cad kyi rnam pa mchog tu zhi ba sems can 'jug pa'i le'u あらゆる中の最勝なものに寂静なる衆生を入れる章
	Ph	rnam pa thams cad kyi mchog tu rgya che ba'i sems can 'jug pa'i le'u あらゆる区分の中の最勝なものに多くの衆生を入れる章である.
梗概		マンダラやヨーガの理論が説かれ，VP 全体の導入部分に相当する．章題の中の「最勝なもの」とは VP およびマンダラを指すと考えられ，まさに衆生を VP へと誘う導入的役割を果たす章であることが読み取れる.
備考		D30a4-31b2, P262a6-263b7, C284b5-286b1, N352a2-354a6, H379a2-381a4, T149a2-151a1, K291a5-292b6, Sh268b2-270a4, Ph56b2-58b6.

・VP Ch. II〔付録 C 参照〕

章題	校合	glu sna tshogs dang rol mo'i sgra dang gar dang 'dul bar 'jug pa dang char dbab pa dang mi g-yo ba'i bdag nyid che ba'i le'u 種々なる歌と楽器の音色と踊りと導きに入ることと雨を降らすことと堅固なる大威力の章
	Ph	glu sna tshogs dang rol mo'i sgra gar dang 'jigs pa chen por 'jug pa dang char dbab pa dang mi g-yo ba'i bdag nyid chen po ston pa'i le'u 種々なる歌と楽器の音色と踊りと非常に恐ろしい者に入ることと雨を降らすことと，堅固なる大威力を説示する章.
梗概		各尊格への歌舞・供物といった供養法や，恐ろしい姿をしたブータダーマラ・夜叉女などの成就法とその威力が説かれる．さらに，ナーガたちに雨を降らせる降雨法も示される.
備考		D31b2-33b6, P263b7-266b3, C286b1-289b1, N354a7-358b1, H381a4-384b6, T151a2-154b1, K292b7-295b5, Sh270a4-273a2, Ph58b6-62b6.

・VP Ch. III〔付録 C 参照〕

章題	校合	de bzhin gshegs pa thams cad kyi mtshan gyi le'u 一切如来の名称の章
	Ph	de bzhin gshegs pa thams cad kyi mtshan mchog tu stan pa'i le'u 一切如来の最勝なる名称を説示する章
梗概		ダーキニーヴァジュラパンジャラが金剛名という三摩地に入り，名灌頂によって様々な尊格に金剛名を与える．また，五部マンダラの主尊たちが持つ様々な異名も説かれる.
備考		D33b6-35a5, P266b3-268a5, C289b1-291a6, N358b1-360b6, H384b6-387a1, T154b1-156b2, K295b5-297a8, Sh273a2-274b6, Ph62b7-65a5.

・VP Ch. IV〔付録 C 参照〕

章題	校合	khro bo chen po 'khor lo'i snying po'i sngags la 'jug pa rdo rje zhes bya ba'i ting nge 'dzin gyi le'u 大忿怒輪の核心のマントラに入れる金剛と称する三摩地の章
	Ph	khro bo chen po'i 'khor lo'i snying po sngags kyi 'jug pa zhes bya ba bstan pa'i le'u 大忿怒輪の核心のマントラの入口と称する説示の章.
梗概		尸林や森の奥などの悉地獲得に最適な場所の提示，ナイラートミヤー十三尊マンダラ[8]，五相といったタントリストに必須の内容が説かれる．また，フーン字からなる忿怒尊のマントラが示される．
備考		D35a5-41b3, P268a5-275a5, C291a6-299a1, N360b6-371b1, H387a1-396a5, T156b2-165b3, K297b1-304b8, Sh274b6-282a6, Ph65a5-76a3.

・VP Ch. V〔付録 C 参照〕

章題	校合	nad thams cad rab tu zhi ba dbugs dbyung ba rdo rje zhes bya ba'i le'u あらゆる病の治癒を成し遂げる金剛と称する章
	Ph	nad rnams thams cad dbugs phyung zhing rab tu bzlog par byed pa rdo rje zhes bya ba'i le'u あらゆる病を治癒し，除去する金剛と称する章
梗概		マンダラ造立法が示され，作成されたマンダラの中には様々な動物たちが入れられる．続いて様々な病名が羅列され，マンダラの観想によってあらゆる病気が霧散することを説いている．
備考		D41b3-43a2, P275a5-276b6, C299a1-300b5, N371b1-373b7, H396a5-398a7, T165b3-167b5, K304b8-306b3, Sh282a6-283b8, Ph76a3-78b3.

・VP Ch. VI〔付録 C 参照〕

章題	校合	rdo rje sems dpa'i snying po snang ba'i le'u 金剛薩埵の心が出現する章
	Ph	rdo rje sems dpa'i snying pos rab tu gsal bar byed pa'i le'u 金剛薩埵の心によって明らかとなる章.
梗概		あらゆるものは心から生じたものであり，観想が万能であることを説いている．そのため，仏たちを観想することによって菩提の獲得も可能となることが示されている．
備考		D43a2-44a7, P276b6-278a7, C300b5-302b1, N373b7-376a6, H398a7-400b3, T167b5-169b6, K306b3-308a5, Sh283b8-285b2, Ph78b3-81a5.

・VP Ch. VII〔付録 C 参照〕

章題	校合	sngags thams cad rnam par dag pa bdud rtsi lnga mchog tu byung ba rdo rje zhes bya ba'i ting nge 'dzin te le'u あらゆるマントラを清浄にする最勝なる五甘露が生じる金剛と称する三摩地の章
	Ph	sngags thams cad dang rnam par dag pa rnams dang bdud rtsi lnga'i phan yon dang bcas pa rdo rje zhes bya ba'i le'u あらゆるマントラと清浄なものたちと五甘露の利益を伴う金剛と称する章.
梗概		様々な尊格とそのマントラが示され，その後に後期密教系灌頂へと移る．ここで生じた甘露を味わえば一切仏と等しくなり，種々なる利益を獲得することが説かれる．
備考		D44a7-45b6, P278a7-279b5, C302b1-304a3, N376a6-378b2, H400b3-402b3, T169b7-171b6, K308a5-309b6, Sh285b2-287a3, Ph81a5-83a4.

・VP Ch. VIII〔付録 C 参照〕

章題	校合	bzhengs pa dang las sna tshogs kyi sbyor ba dang sbyin sreg gi le'u 生起と種々なる事業の観想と護摩の章
	Ph	bzhengs pa dang las sna tshogs kyi sbyor ba dang sbyin bsreg gi cho ga stan pa'i le'u 生起と種々なる事業の観想と護摩儀軌を説示する章.
梗概		複数種のターラーで構成されるマンダラ[9]を始め，その他にも多くの女尊たちが生起する．さらに，護摩やマンダラ造立に必要な事物が示され，それぞれの儀則も詳細に説かれる．
備考		D45b6-51a5, P279b5-285b6, C304a3-310b1, N378b2-387b1, H402b3-410b4, T171b6-179b7, K309b6-316a2, Sh287a3-293a6, Ph83a4-93b6.

・VP Ch. IX〔付録 C 参照〕

章題	校合	las sna tshogs bsgrub pa'i le'u 種々なる事業を成就する章
	Ph	las sna tshogs pa rab tu bsgrub par ston pa'i le'u 種々なる事業の成就を説示する章
梗概		五仏を始めとする尊格たちの持物やマントラが示される．これらの尊格を正しく観想することによって，それぞれの悉地を与えられることが説かれている．
備考		D51a5-53a2, P285b6-287b8, C310b1-312b5, N387b1-390b5, H410b5-413b2, T180a1-181b5, K316a2-318a5, Sh293a6-295b1, Ph93b7-97a6.

・VP Ch. X〔付録 C 参照〕

章題	校合	rdo rje skye mched rnam par dag pa'i le'u 金剛処を清浄にする章
	Ph	rdo rje skye mched rnam par dag pa'i le'u 金剛処を清浄にする章.
梗概		修行するのに最適な場所と，そこでなすべき内容を説明している．また，ヨーガによって仏の智慧を獲得することが説かれている．
備考		D53a3-53a7, P287b8-288a6, C312b5-313a3, N390b5-391a6, H413b2-414a1, T181b5-182a4, K318a5-318b3, Sh295b1-295b7, Ph97a6-97b7.

・VP Ch. XI〔付録 C 参照〕

章題	校合	las thams cad pa'i le'u 一切事業の章
	Ph	las thams cad pa'i le'u 一切事業の章
梗概		まずはいくつかの成就目的が示される．さらに，その目的に至るための心の在り方や呪術的な行為を短く説明している．
備考		D53a7-53b3, P288a6-288b1, C313a3-313a7, N391a6-391b5, H414a1-414a6, T182a5-182b2, K318b4-318b8, Sh295b7-296a4, Ph98a1-98a6.

・VP Ch. XII〔付録 C 参照〕

章題	校合	rnal 'byor ma 'byung ba zhes bya ba'i le'u ヨーギニーの出生と称する章
	Ph	rnal 'byor ma'i phung po bzhengs pa'i le'u ste ヨーギニーの集団を生起する章.
梗概		ヴァジュラダーカの觀想と衆生利益などの誓願が説かれる．その後，ヨーギニーで構成されたナイラートミヤー十五尊マンダラが説かれる．
備考		D53b3-54b2, P288b1-289b1, C313a7-314b2, N391b5-393a7, H414a6-415b5, T182b2-184a1, K318b8-320a3, Sh296a4-297a6, Ph98a6-100a2.

・VP Ch. XIII〔付録 C 参照〕

章題	校合	rdo rje sdom pa zhes bya ba'i le'u 金剛サンヴァラと称する章
	Ph	rdo rje sdom pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin te le'u 金剛サンヴァラと称する三摩地の章.
梗概		タントラの階梯や性質による分類が示される．また，当時の代表的な聖典と考えられる名称が列挙される．さらに，空性と悲が不可分であることを常に心に観想すべきであることが示されている．
備考		D54b2-55a7, P289b1-290a7, C314b2-315b2, N393a7-394b6, H415b5-417a2, T184a1-185a5, K320a3-321a3, Sh297a6-298a7, Ph100a3-101b4.

・VP Ch. XIV〔付録 C 参照〕

章題	校合	dngos po sna tshogs rnam par phye ba'i le'u 種々なるものを区別する章
	Ph	dngos po sna tshogs rnam par brtag pa'i le'u 種々なるものを区別する章.
梗概		五香や五肉などを使用する後期密教的な儀礼が説かれる．また，各儀礼によって成就する尊格とその尊容が示される．
備考		D55a7-62a7, P290a7-297b6, C315b2-324a4, N394b6-406a6, H417a2-427b7, T185a5-195b7, K321a3-330a3, Sh298a7-307a3, Ph101b5-114b5.

・VP Ch. XV

章題	校合	（章題なし）
	Ph	（章題なし）
梗概		後期密教系灌頂を含めた全灌頂の次第が説かれる．また，禁戒として阿闍梨の絶対性や完全部外秘であることが示される．
備考		D62a7-65b6, P297b6-301b3, C324a4-328b2, N406a6-412b3, H427b7-433a7, T195b7-201a3, K330a3-334b4, Sh307a3-311b2, Ph114b5-121a5.

以上が VP の章構成と梗概である．校合テクストと Ph は，共に Ch. I から Ch. XV までの全１５章で構成されており，章題から読み取れる各章の主題も合致している．また，両翻訳の内容には，大幅な増広といった格差も認められない[10]．今後，細かな部分での比較検証が必要ではあるが，校合テクストと Ph それぞれの元になった Skt 写本は，全体で見るとほぼ同じ形であったといえる．

ところで，VP 全体を概観した結果，VP の五族それぞれの主尊である五仏は，VP 全体を通して様々な異名で呼び現されていることが分かった．そこで，次節では VP に説かれる五仏の異名について取り上げたい．

２－４．五仏の異名

VP の五仏は，主にヘールカ・シャーシュヴァタ・金剛日・蓮華舞自在・パラマーシュヴァという名称で知られている[11]．しかし，次章の VP Ch. I でも示すように，五仏は一連の文章の中でも頻繁に異なる名称で説かれている．おそらく，非器の者を退ける密意語として，あえて異名を多用することで難解にしていると考えられる．そのため，そもそも尊格名として捉えること自体が困難な異名も多く見受けられる．これらの異名は，VP の理解を阻む大きな障壁であり，五仏との対応を見極めながら VP を読み進めなければ真意が理解されないようになっている．

さて，VP には，五仏の異名を捉える上で有用な記述が存在する．この記述は VP の中で説かれるすべての異名を示したものではないが，五仏の様々な異名を列挙している．おそらく，VP は密意語として異名を多用しながらも，他方では異名にも用いた各仏の持つ威力や性質を明示することで五仏を誇示する必要があったのであろう．

そこで，ここでは仏ごとに項目を設けて校合テクストと Ph を比較検証していく．なお，混乱を避けるために，今後は本節の最初に述べた五仏の名称（ヘールカ・シャーシュヴァタ・金剛日・蓮華舞自在・パラマーシュヴァ）を五仏の基本的な名称と定め，VP 本文に出てくる異名がどの仏に対応するものであるのかを補足する．

・＜ヘールカの異名＞〔付録 D 参照〕

校合テクスト

kye yi rdo rje rdo rje sems dpa' dang/ / rnam snang chen po dang ni rang byung dang/ /
rdo rje a rli skem pa'i khro bo dang/ / de bzhin du yang rdo rje'i khro bo nyid/ /
rdo rje bdud rtsi bdud rtsi thabs sbyor dang/ / he ru ka dang snying rje'i stobs nyid do/ /

試訳

ヘーヴァジュラは金剛薩埵と，大毘盧遮那，自然生，
金剛アーラリ[12]，微細忿怒．同様にまた金剛忿怒，
金剛甘露，甘露軍荼利．ヘールカ，悲力である．

Ph

rdo rje sems dpa' dges rdo rje/ / rang 'byung rnam snang chen po ste/ /
rdo rje la a li thugs rje khro/ / de bzhin rdo rje khro bo nyid/ /
rdo rje bdud rtsi bdud rtsi 'khyil/ / he ru ka ni snying rje stobs/ /

試訳

金剛薩埵は，ヘーヴァジュラと自然生，大毘盧遮那であり，
金剛アーラリ，微細忿怒，同様にまた金剛忿怒，
金剛甘露，甘露軍荼利，ヘールカ，悲力である．

・＜シャーシュヴァタの異名＞〔付録 D 参照〕

校合テクスト

rtag pa dang ni gti mug rdo rje dang/ / rnam par snang mdzad dang ni thams cad skyob/ /
sgyu 'phrul dang ni de nas oṃ mdzad dang/ / sku yi rdo rjer rab tu grags pa dang/ /
sa snying dang ni gti mug chen po dang/ / gshin rje gshed dang tho ba'i dbang phyug dang/ /
de bzhin gshegs pa shā kya thub pa dang/ / sangs rgyas zhes byar rab tu grags pa 'o//

試訳

シャーシュヴァタは，愚癡金剛と．毘盧遮那と毘首生，
マーヤー，それからオーン字，身金剛として有名であり，
地蔵と大愚癡．ヤマーリ．槌自在，
釈迦牟尼如来，仏陀として有名である．

Ph

rtag pa rdo rje gti mug ste/ / sna tshogs gyur pa rnam snang mdzad/ /
oṃ yig sgyu 'phrul dra ba yang/ / rdo rje skur ni rab tu grags/ /
sa yi snying po gti mug che/ / tho ba'i dbang phyug gshin rje gshed/ /
de bzhin gshegs pa śā kya thub/ / sangs rgyas zhes byar mtshan du grags/ /

試訳

シャーシュヴァタは愚癡金剛であり，毘首生，毘盧遮那，
オーン字，マーヤージャーラ，身金剛として有名である．
地蔵，大愚癡，槌自在，ヤマーリ，
釈迦牟尼如来，仏陀というものを特徴に知られている．

・＜金剛日の異名＞〔付録 D 参照〕

校合テクスト

rdo rje nyi ma de nas rin chen bdag/ de bzhin du yang rin chen rgyal po nyid/ /
rin chen rgyal po nyid de bzhin du yang/ / rdo rje gzi brjid dang ni rgyal po che/ /
rdo rje bdud zil gnon dang snang byed do/ /

試訳

金剛日，それから宝主，同様にまた宝王，
金剛光輝，大王，金剛克魔，光である．

Ph

rdo rje nyi ma rin chen gtso/ / de bzhin rin chen rgyal po nyid/ /
rdo rje gzi brjid rgyal po nyid/ / rdo rje nyi ma snang byed de/ /

試訳

金剛日は宝主，同様に宝王，
金剛光輝，大王，金剛光である．

・＜蓮華舞自在の異名＞〔付録 D 参照〕

校合テクスト

rta mgrin dang ni 'jig rten bdag po dang/ / rdo rje chos dang spyan ras gzigs dang ni//
pa d+ma gar dbang dang ni 'dod chags dang/ / 'jig rten mgon por rab tu grags pa'o/ /

試訳

ハヤグリーヴァは世間主．金剛法，観自在，
蓮華舞自在，貧欲．世間守護として有名である．

Ph

rta mgrin 'jig rten gtso bo dang/ / spyan ras gzigs dang rdo rje chos/ /
pa d+ma gar dbang 'dod chags dang/ / 'jig rten mgon po rab tu grags/ /

試訳

ハヤグリーヴァは世間主と，観自在，金剛法，
蓮華舞自在，貧欲，世間守護として有名である．

・＜パラマーシュヴァの異名＞〔付録 D 参照〕

校合テクスト

dam pa'i rta dang rta yi rgyal po dang/ / bdun gyi rgyal po de nas lcags rgyal dang/ /
dam tshig rdo rje dang ni rta mchog dang/ / de bzhin du yang las kyi rdo rje nyid/ /
don yod dang ni don yod grub pa dang/ / rdo rje mgyogs 'gror rab tu grags pa'o//

試訳

最勝馬と馬王．七王．それから鉄王と
三昧耶金剛，パラマーシュヴァ，同様に羯磨金剛．
不空，不空成就．金剛馬として有名である．

Ph

rta mchog dang ni rta rgyal dang/ / rta bdun rgyal dang rta rgyal dpal/ /
rdo rje dam tshig rta mchog dang/ / de bzhin las nyid rdo rje dang/ /
don yod dang ni don yod grub/ / rdo rje myur 'gro rab tu grags//

試訳

パラマーシュヴァと馬王，七王，吉祥馬王，
最勝金剛三昧耶馬，同様に羯磨金剛，
不空，不空成就，金剛馬として有名である．

以上のように，VP の五仏は様々な異名を持っていることが分かる．これらの異名は，各仏で数が統一されておらず，性質的な対応関係も未整理な状態で羅列されているに過ぎない．したがって，ここでは異名を一覧にするにとどめる．なお，次章で扱う VP Ch. I-10 から I-29 では，この一覧を活用することによって五仏と異名の対応関係がより明らかになる．

・五仏の異名　*( )内は Ph が示す異名

ヘールカ	シャーシュヴァタ	金剛日	蓮華舞自在	パラマーシュヴァ
ヘーヴァジュラ	愚癡金剛	宝主	世間主	馬王
金剛薩埵	毘盧遮那	宝王	金剛法[13]	七王
大毘盧遮那	毘首生	金剛光輝	観自在	鉄王(吉祥馬王)
自然生	マーヤー (マーヤージャーラ)	大王	ハヤグリーヴァ	三昧耶金剛
金剛アーラリ	オーン字	金剛克魔 (金剛光)	貧欲	最勝馬
微細忿怒	身金剛	光 (金剛光)	世間守護	羯磨金剛
金剛忿怒	地蔵			不空
金剛甘露	大愚癡			不空成就
甘露軍荼利	ヤマーリ			金剛馬
悲力	槌自在			
	釈迦牟尼仏			
	仏			

２－５．VP を特徴付ける内容

２－５－１．後期密教系灌頂

既に拙稿[2014b][2015b]の中でも明らかにした通り，VP はヨーギニータントラでありながら，DK を始めとするヨーギニータントラ[14]の新思想体系とは異なる特徴が散見される．そこで，本項では VP を特徴付けるいくつかの内容を見ていきたい．

ちなみに，新思想体系を扱うに先立ち，本論文での GS(略号 GS)の扱いを述べたい．GS の中でも Ch. XVIII は，GS の続タントラ(*Guhyasamāja Uttaratantra*, 略号 GSU)という GS とは異なる題名が書かれている．Tib 大蔵経では，この GSU だけが GS と別に翻訳され，GS の註釈書 PU でも GSU に対する註釈がないことが分かっている[15]．そのため，現在では GSU は GS と異なる典籍が後代に Ch. XVIII として GS に付加されたものと広く考えられている．したがって，本論文でも GSU は GS と異なるタントラと考え，GSU に第四灌頂といった新思想体系が含まれることは GS の思想体系と別の問題として扱う．

さて，VP には新思想体系に必須とされる第四灌頂もタントラ的身体論も説かれていないことが既に分かっている[16]．しかし，VP の特徴を示す上で後期密教系灌頂は必須であり，後期密教系灌頂を語るにはどうしても第四灌頂について触れる必要がある．そこで，本節では拙稿[2014b]との不要な重複と煩雑を避けるために必要最低限な範囲で第四灌頂に触れつつ，VP の後期密教系灌頂を取り上げる[17]．

そもそも，第四灌頂とは，インド後期密教になって付与されたインド後期密教系灌頂の１つであり，１番目の瓶灌頂 kalaśābhiṣeka-または阿闍梨灌頂 ācāryābhiṣeka-・２番目の秘

密灌頂 guhyābhiṣeka-・３番目の般若智灌頂 prajñājñānābhiṣeka-と続いた直後の第四番目に説かれる灌頂であるから第四灌頂 caturthābhiṣeka-といわれる．このように第四灌頂は，灌頂次第の最後尾に説かれ，最も遅れて成立した灌頂であると考えられている．当然，流派の違いから第四灌頂の有無が異なる場合を想定することをできるが[18]，同系統のタントラにおける第四灌頂の有無は先後関係に直結する要因になり得ると考えられる. したがって，同じヘーヴァジュラ系タントラである VP と DK および *Saṃpuṭodbhavatantra* (略号 SPU) における第四灌頂の有無は先後関係を語る上での重要な要素といえるのである. ちなみに，この第四灌頂の有無は，タントラ本文から見極めることが極めて困難である．主な原因として，第四灌頂が極秘かつ言葉による灌頂であるため，詳細な内容がほとんど文書化されなかったことが挙げられる[19]．しかし，VP における第四灌頂の有無については，灌頂次第によって確認することができる. 特に VP と SPU は類似した偈によって後期密教系灌頂の次第を述べているため，容易に比較が可能である．そこで，先に DK と SPU の第四灌頂を含む後期密教系四灌頂に関する偈を挙げ，その後に VP の灌頂を示す.

・DK II. iii. 10.
　ācāryaguhyaprajñā ca **caturthaṃ** tat punas tathā/
　ānandāḥ kramaśo jñeyāś catuḥsecanasaṃkhyayā//
試訳
　阿闍梨[灌頂]・秘密[灌頂]・般若[智灌頂]がある.
　第四[灌頂]であるそれもまた同様である.
　歓喜は四灌頂の数によって順番に知られる

・SPU [Ch. II] p. 234.
　prathamaṃ **kalaśābhiṣekam** dvitīyaṃ **guhyābhiṣekataḥ**/
　prajñājñānaṃ tṛtīyaṃ tu **caturthaṃ** tat tathā punaḥ//
試訳
　１番目に**瓶灌頂**がある．２番目に**秘密灌頂**がある.
　般若智[灌頂]が３番目にある．**第四[灌頂]**であるそれもまた同様である.

以上のように，DKとSPUには第四灌頂を含む後期密教系灌頂が説かれている．それでは，次にVPの後期密教系灌頂の次第を確認したい．なお，VPの後期密教系灌頂の次第は *Laghutantraṭīkā* (略号LTṬ) で引用されているためにSktが回収できる．ここでは先にLTṬから回収したVPのSktを挙げた後にVP本文を挙げる.

・LTṬのVP引用箇所 p. 129 *l*. 1-2.
　prathamaṃ **kalaśābhiṣekaṃ** dvitīyaṃ **guhyam** iṣyate/
　prajñājñānaṃ tṛtīyaṃ tu yathā tanuḥ[20] tathāgataḥ//

試訳

１番目に**瓶灌頂**がある．２番目に**秘密[灌頂]**が望まれる．

般若智[灌頂]が３番目にある．あたかも身体は如来と同様になる．

・VPの後期密教系灌頂偈〔付録E参照〕

校合テクスト

bum pa'i dbang ni dang po ste/ / gnyis pa la ni **gsang ba'i dbang**/ /

gsum pa **shes rab ye shes** te/ / ji ltar lus ni de bzhin gshegs//

試訳

瓶灌頂が最初にあり，２番目に**秘密灌頂**がある．

３番目に**般若智灌頂**があり，あたかも身体は如来と同様になる．

Ph

dang po **bum pa'i dbang skur** ste/ / **gsang ba'i dbang** las gnyis pa'o/ /

gsum pa **shes rab ye shes** ste/ / ji ltar de bzhin gshegs pa men//

試訳

最初に**瓶灌頂**があり，**秘密灌頂**から２番目となる．

３番目に**般若智[灌頂]**があり，あたかも如来のように飾られる．

また，VP には後期密教系灌頂を含めた全灌頂次第も説かれている．そこで，VP に第四灌頂が説かれていないことをより明確にするために全灌頂次第を以下に示す．

・VP の灌頂次第〔付録 F 参照〕

校合テクスト

chu yi dbang ni dang po ste/ / cod pan dbang la gnyis pa'o/ /

rdo rje dbang gis gsum pa ste/ / rang gi bdag po bzhi pa nyid//

ming gi dbang bskur lnga pa ste/ / drug pa rdzogs pa'i sangs rgyas nyid/ /

bdun pa bum pa'i dbang gis te/ / gsang ba'i dbang gis brgyad pa'o//

shes rab dbang las dgu pa ste/ / de nyid rdo rje'i sbyor ba yis/ /

kun gyi de nyid brtul zhugs brjod/ / ston pa rang gis lung bstan te//

de 'dir dbang gi cho ga'o//

試訳

水灌頂が１番目であり，宝冠灌頂において２番目がある．

金剛[杵]灌頂によって３番目があり，尊主灌頂が４番目である．

名灌頂が５番目であり，６番目に仏[智灌頂]がある．

７番目は瓶灌頂によってあり，秘密灌頂によって８番目がある．

般若[智灌頂]により９番目があり，真実と金剛の結合によって

すべての真実を禁戒であると説け．説示者は自ら授記する．

これこそが灌頂儀軌である．

Ph

dang por chu yi dbang bskur te/ / gnyis pa dbu brgyan dbang bskur la/ /
gsum pa rdo rje'i dbang bskur la/ / rang gi bdag por bzhi ba ste//
lnga par ming gi dbang bskur ro/ / drug par rdzogs pa'i sangs rgyas nyid/ /
bdun par bum pa'i dbang bskur ro/ / brgyad par gsang ba'i dbang bskur te//
dgu par shes rab ye shes dbang bskur ro/ / de nyid rdo rje'i rab sbyor bas/ /
rdo rje brtul shugs kun sbyin bya/ / ston pa nyid ni lung ston te//
de dag ni dbang bskur ba'i cho ga bo//

試訳

最初に水灌頂があり，２番目に宝冠灌頂があり，
３番目に金剛[杵]灌頂があり，尊主灌頂に４番目があり，
５番目に名灌頂がある．６番目に仏[智灌頂]がある．
７番目に瓶灌頂がある．８番目に秘密灌頂があり，
９番目に般若智灌頂がある．真実と金剛の結合によって
金剛禁戒をすべての者に与えるべし．説示者は授記する．
これらが灌頂儀軌である．

以上のように，校合テクストと Ph の各灌頂の次第と名称に内容の差はない．校合と Ph は共に九種灌頂であり，第四灌頂を含んでいないことが分かる．なお，この箇所は LTṬ および VĀ に引用されており, LTṬ では灌頂の名称が一部異なった十種灌頂になっている[21]．ただし，灌頂の数が相違しているのは後期密教系灌頂以外の箇所であり，第四灌頂は含まれていない．

したがって，VP はヨーギニータントラに必須とされる第四灌頂を含まない３つの後期密教系灌頂を有していたことが分かる．この他にも VPṬ が註釈文によって半ば強引に第四灌頂を加えていること[22]からも VP 本文に第四灌頂がないことは明らかであり，VP の思想体系が新思想体系とは異なっていたことが分かる．最後に，各タントラの後期密教系灌頂次第の相違を表にして示すことで VP の後期密教系灌頂を浮き彫りにする．

後期密教系灌頂次第	DK	SPU	VP
１番目	阿闍梨灌頂[23]	瓶灌頂	瓶灌頂
２番目	秘密灌頂	秘密灌頂	秘密灌頂
３番目	般若智灌頂	般若智灌頂	般若智灌頂
４番目	第四灌頂	第四灌頂	なし

２－５－２．五相

本項では, VP と DK の五相の相違を示すことによって, VP の五相を浮き彫りにしたい．VP と DK の五相を取り上げるという点では拙稿[2015b]と重複するが, ここでは五相が VP

と DK で相違していることを示し，本論文の前提とすることが目的である．ここで取り上げる五相とは，特にインド後期密教タントラに見られる悉地を獲得する際の兆候を指すものとされ[24]，タントラごとに様々な相が説かれている[25]．それでは，VP と DK にどのような五相が説かれているかを実際に確認したい．

・VP の五相〔付録G参照〕

校合テクスト

dang po **sprin gyi rnam pa** ste/ /gnyis pa **du ba 'dra ba** yin/ /
gsum pa **me khyer rnam pa** yin/ /bzhi pa **mar me nye 'bar ba**/ /
lnga pa **rtag tu snang ba** ste/ /sprin med nam mkha' 'dra ba nyid/ /
de ni thams cad mkhyen pa'i rgyu/ /dngos grub nye bar 'gyur ba yin//

試訳

１番目は**雲の相**があり．２番目は**煙のようなもの**がある．
３番目は**蛍火の相**があり．４番目は**灯明のような輝き**がある．
５番目は雲のない虚空のような**常光明**がある．
それは一切智の因であり．悉地に近づくことになるであろう．

Ph

dang po **sprin gyi rnam pa** ste/ / gnyis pa **du ba lta bu**'o/ /
gsum pa **srin bu me khyer** dngos/ / bzhi pa **mar me gsal 'bar ba**'o/ /
lnga pa **rtag tu snang ba** ni/ / sprin med nam mkha' lta bu'o/ /
thams cad mkhyen pa'i rgyud de lta bu/ / dngos grub des 'jug nge ba yin//

試訳

１番目は**雲の相**があり，２番目は**煙のようなも**のがある．
３番目は**蛍火の相**がある．４番目は**灯明のような輝き**がある．
５番目は雲のない虚空のような**常光明**がある．
そのような一切智の特徴があり，悉地はそれによって近づくことになるであろう．

・DK I. viii. 6-10

candrasūryadvayor melād gauryādyas te prakīrtitāḥ / /
ādarśajñānavāṃś candraḥ samatāvān saptāśvikaḥ //
bījaiś cihnaiḥ svadevasya pratyavekṣaṇam ucyate / /
sarvair ekam anusṭhānaṃ niṣpattiḥ śuddhidharmatā //
ākārān bhāvayet pañcavidhānaiḥ kathitair budhaḥ //

試訳

月と太陽という２つの会合によって，かの者たちはガウリーなどと称される．
大円鏡智を有するものが**月**であり．
平等性[智]を有するものが七馬に関するもの(=**太陽**)である．
本尊の種字と幟幟によって妙観察[智]が語られる．
すべてが１になることが成所作[智]であり．完成が清浄法界[智]である．
賢者は[以上のように]説かれた五つの手順によって[五]相を観想すべし．

以上が VP と DK に説かれる五相である．VP と DK の五相は全く異なっているため，これだけでは同じ範疇で扱って良いものかすら分からない．しかし，VPṬ では五相について以下のように記述している．

VPṬ MS3b6
pañcākāram iti, **candrasūryā**dibhāvanāṃ.
試訳
五相とは，**月と太陽**等の修習である．

このように，VPṬ は VP の註釈書であるにも関わらず，明らかに DK あるいは DK の系統の五相を指している．このことから，先の VP と DK の五相は，悉地を獲得する際の徴候という同じ範疇にあるといえる．VP と DK は，HV を起源とする同じ系統のタントラとされている関わらず全く異なる五相を有しており，五相については VP と DK がそれぞれ相互依存の関係にはないことが分かる．

２－５－３．十忿怒尊

十忿怒尊とは，GS[26]や *Māyājālatantra* (略号 MJ)[27] などに見られるマンダラの各方角を守護する忿怒尊で形成された集団のことである．この十忿怒尊は，ヨーゴーッタラタントラ以前には説かれていないことが分かっている[28]．また，マンダラの女尊化が進んだヨーギニータントラでは確認ができない忿怒尊集団である．本論文第４章で詳しく述べる通り，ヨーギニータントラのマンダラはすべて女尊あるいは主尊以外すべて女尊で占められるため，男尊の集団である十忿怒尊も不要となるのである．唯一，*Niṣpannayogāvalī* (略号 NYĀ)[29] でヨーギニータントラである SPU 所説とされるマンダラの観想に十忿怒尊が確認できるが，SPU 本文および SPU の実際のマンダラには十忿怒尊は説かれていないことが分かっている[30]．

ところが，ヨーギニータントラであるはずの VP には十忿怒尊が説かれている．そこで，VP の記述を精査し，ヨーゴーッタラタントラに説かれる十忿怒尊と同定できるかを比較検証したい．VP の十忿怒尊に関する記述は以下の通りである．

・VP の十忿怒尊〔付録 H 参照〕
校合テクスト
hūṃ ni bcu yi sbyor ba yis/ / khro bo bcu ni rim pas dgod/ /
gshin rje mthar byed shes rab mthar/ / pa d+ma mthar byed bgegs mthar byed/ /
ṭa k+ki khro bo dbyug pa sngon/ / mi g-yo ba dang stobs chen dang/ /
gtsug tor gdugs ni dkar po dang/ / rdo rje zhabs 'og gnas pa ni/ /
試訳
フーンという十のヨーガによって十忿怒尊が順に安立する．

①ヤマーンタカ．②プラジュニャーンタカ．③パドマーンタカ．④ヴィグナーンタカ．
⑤タッキ忿怒．⑥ニーラダンダ．⑦アチャラと⑧マハーバラと．
⑨シタータパトローシュニーシャ（白傘蓋仏頂）[31]と，
⑩ヴァジュラパーターラが住する．

Ph

yi ge hūṃ gi sbyor mchog gis/ / khro bo bcu rnams rims bzhin dgod/ /
gshin rje mthar byed dang ni shes rab mthar byed dang/ /
pad ma 'byin byed bgegs mthar 'byin pa dang/ /
'dod pa'i khro dang de bzhin dbyig pa dang/ / mi g-yo ba dang stobs po che yang ste/ /
dkar po gdugs pa skyob pa'i gtsug tor dang/ / rdo rje sa 'og na ni gnas pa rnams/ /

試訳

フーン字の最勝ヨーガによって十忿怒尊たちが順序通りに安立する．
①ヤマーンタカと②プラジュニャーンタカと，③パドマーンタカ，
④ヴィグナーンタカと，⑤タッキ忿怒，
同様に⑥[ニーラ]ダンダと，⑦アチャラと⑧マハーバラがあり，
⑨シタータパトローシュニーシャ（白傘蓋仏頂）と，
⑩ヴァジュラパーターラたちが住する．

以上のように，校合テクストと Ph に内容の差はない．VP には明確に十忿怒尊が説かれているが，残念ながらここでは尊容や方角は示されていない．当然，尊格の説かれる順序と方角とは必ずしも一致するものではないが[32]，ある程度の目安となることは疑いない．そこで，VP の十忿怒尊を説示順に東から並べ，GS 三十二尊マンダラおよび MJ マンダラの十忿怒尊の方角と比較すると以下の表のようになる．なお，先に述べた NYĀ 所説の SPU マンダラの十忿怒尊は GS とほぼ同じであるため，GS と異なる名称だけを( )で示した．

方角	GS の十忿怒尊	MJ の十忿怒尊	VP の十忿怒尊
東	ヤマーンタカ (SPU ではヤマーリ)	ヤマーンタカ	ヤマーンタカ
南	プラジュニャーンタカ	プラジュニャーンタカ	プラジュニャーンタカ
西	パドマーンタカ	パドマーンタカ	パドマーンタカ
北	ヴィグナーンタカ (SPU ではヴィグナーリ)	ヴィグナーンタカ	ヴィグナーンタカ
東南	タッキラージャ	タッキラージャ	タッキ忿怒
南西	ニーラダンダ	ニーラダンダ	ニーラダンダ
西北	マハーバラ	マハーバラ	アチャラ
北東	アチャラ	アチャラ	マハーバラ
上	ウシュニーシャチャクラヴァルティン	スンバ[33]	シタータパトローシュニーシャ（白傘蓋仏頂）
下	スンバ	ヴァジュラパーターラ	ヴァジュラパーターラ

上記の表では，尊格の名称や配置に若干の相違を確認できるが，全体的に見るとおおよそ VP が方角の順序通りに忿怒尊を説いており，ヨーゴーッタラタントラ所説の十忿怒尊に同定することができる．

このように，VP はヨーギニータントラでありながら例外的に十忿怒尊が説かれているのである．十忿怒尊を説くヨーギニータントラは，他に例を見出せず，VP の成立を探る上で非常に重要な鍵となる特徴といえる．

２－６．まとめ

以上のように，本章では VP の全体像として，VP の題名および各章の章題と梗概・五仏の異名・VP の特徴的な内容という形で取り上げた．当然，VP には，この他にも明らかにしなければならない要素が多く残されている．また，本章で取り上げた内容も浅く広くという形になってしまったが，VP の解明を進める上でそれぞれの内容をさらに精査する必要がある．しかし，それらは今後の研究課題とし，まずは全体の基本的な事柄を押さえ，VP がいかなる文献であるかを整理した．

まず，VP の題名および各章の章題と梗概では，校合テクストと Ph は全体的に見てほぼ同じ形の Skt 写本からの異訳であることが判明した．したがって，次章以降も校合テクストと Ph を比較させることによって，VP の内容を多角的に検討することが可能となった．引き続き，それぞれの翻訳の特徴を確認していきたい．

次に，五仏の異名では，VP 全体で用いられる五仏の異名の一部を確認することができた．これらの異名は，VP 全体に通じるものであり，VP の真意を理解する足がかりとなるものである．なお，次章で扱う VP Ch. I-10 から I-29 では，本章の成果に基づいて五仏と異名の対応関係がより明らかとなる．

そして，VP の特徴的な内容では，VP が DK と全く異なる要素を含んでいることが分かった．これがどのような意味を持つかを推論することは現時点では避けるが，本論文の結論部分では HV との関係に絡めて言及する．

---

[1] Samten[1992] p. xiv および p. 167.

[2] 実際の写本には誤字が多く含まれており，正確に Skt を還元することは困難である．この Skt は，Samten[1992] p. 167 にある題名の Skt 還元を参考にしながら作成したものである．

[3] Ḍākinījāla 文献群とは，題名に ḍākinījāla-という語を含むタントラを指しており，それらは１つの文献群を形成していたと考えられている．なお，VP と深い関係にある SS と DK は両タントラ共 Ḍākinījāla 文献群に該当する．

[4] なお，Ph の奥書部分の題名は，他の題名に比べて Ārya(Tib: 'phags pa)という語も含まれていない．しかし，Ārya は，文献が聖典であることを示す語であり，どの文献でも省略されることが頻繁にあるのでここでは問題として扱わない．

[5] 残りの部分には練習書きのような文字が点々と書かれている．また，Ph においても校合テクストと同じく VP の前にくる文献は DK であり，後に続く文献は SPU である．DK と SPU は，共に校合テクストと同じ Gayadhara と Shā kya ye shes による翻訳となっている．そのため，一連の翻訳事業の最後の文献に翻訳者名を記したというわけでもなく，Ph は他版と翻訳者が異なるのは明らかである．

[6] あるいは他の可能性として，既に存在していた VP の古訳を挿入した可能性も少なからず考えられる．しかし，VP だけ古訳を挿入するのは不自然であり，可能性は低い．おそらく，VP の Ph は，散逸や内容改善の理由で後代に改めて翻訳されて付加されたものであろう．

[7] VP との関係が深いとされる DK も内容が雑多に説かれており，未整理なまま強引に１つのタントラとして仕立て上げられた可能性が指摘されている．森[2006] p. 59.

[8] ナイラートミヤー十三尊マンダラは，VP Ch. XII に説かれる十五尊マンダラと比べると上方のケーチャリーと下方のブーチャリーが説かれていない．

[9] 島田氏は，この金剛ターラーマンダラの影響でナイラートミヤー十三尊マンダラにケーチャリーとブーチャリーが加わり，ナイラートミヤー十五尊マンダラが成立したとの見解を示している．島田[1984c] p. 76.

[10] ただし，禁戒など一部の内容には Ph の方が句数の少ない箇所が見られる．この相違が書写時の過誤による脱落なのかどうかは今後改めて詳細に検証する必要がある．

[11] 島田[1994] pp. 358-360.

[12] 校合テクストでは rdo rje a rli，Ph では rdo rje la a li となっている．どの尊格を指す語であるのかは確定できないが，本論文では，*Vajrāralitantra* (略号 VĀT) の主尊・金剛アーラリ (Skt: vajrārali, Tib: rdo rje ā ra li) の誤った音写であると判断した．なお，これに類似したアララ (金剛笑) という九味(navarasa)に対応すると考えられる尊格名も確認されている．田中[2006] p. 32.

[13] この金剛法という名は，STTS の中にも蓮華部の尊格として見いだせる．STTS § 199 のいわゆる「百八名讃」における西方讃・蓮華部は，この金剛法 vajradharma-から始まる．

[14] タントラ階梯ではヨーガニルッタラタントラに位置し，それまでのタントラと異なる女尊中心のマンダラや新思想体系が説かれている．詳細については本論文４－２で概説している．

[15] 種村[2010] p. 223.

[16] 島田[1983b]．ただし，島田氏は VP 本文にも註釈書にも第四灌頂が説かれないとしているが，拙稿[2014b]で示した通り，島田氏の扱っていない VPṬ では第四灌頂が説かれている．

[17] なお，後期密教系灌頂の起源は，仏教ではなくヒンドゥータントラに求められるとされている．Sanderson[1994] p. 92.

[18] 例えば，DK よりも後代に成立したと考えられている KY には第四灌頂が確認できない．これは，第四灌頂の有無がタントラ成立年代の先後よりもヨーゴーッタラタントラ・ヨーギニータントラの違いによって分かれることを示す一例といえる．

[19] 津田[2008] p. 203.によれば，第四灌頂とは現行の DK 教学で成立したものであり，言葉を用いた密教による密教の論理の自己否定とされる．

[20] tanuḥ]] em.; tanu MsB; tan na. Cicuzza[2001] p. 129. *l.* 2.

[21] LTṬ と VĀ の該当箇所については，拙著[2014] p. 191 で表にして両文献の相違点を明示している．なお，校合テクストも Ph も，灌頂の数や名称は LTṬ より VĀ に近いことが分かる．

[22] 拙稿[2014b] p. 193-194.

[23] 阿闍梨灌頂は，瓶灌頂との区別が曖昧であり，瓶灌頂の別名として用いられていた形

跡も確認されている．桜井[1996] p. 150. 註１．
[24] 田中公明 2010『インドにおける曼荼羅の成立と発展』春秋社. p. 352.
[25] なお，VP の五相は，GSU の五相に近いといえる．Sferra[2000] p. 24.
[26] 実際の忿怒尊の数については GS の中でも Ch. I では四忿怒尊，Ch. XIV では九忿怒尊であったりと一致が見られない．大西[1994] p. 43-46.
[27] MJ 本文では八忿怒尊としてまとまって登場しており，後に上下の二忿怒尊も説かれている．しかし，それらを合わせて十忿怒尊とすることには問題があるとされている．大西[1994] p. 46-48.
[28] 森[1991] p. 298.
[29] Lee[2004] p. 12-13.
[30] 森[1991] p. 305-306.
[31] この尊格が十忿怒尊に加わる用例は他に見い出せない．確かにウシュニーシャの一尊であるため上方を守護する役割は当て嵌まるが，そもそも菩薩形の男尊であり，忿怒尊ですらない．今後，どのような経緯で忿怒尊として取り込まれたのか歴史的経緯を検証したい．なお，白傘蓋仏母という同じ名前を持つ女尊も存在する．田中[2009] p. 168-171.
[32] 『十忿怒儀軌』は，MJ の Tib に基づいて無秩序に並べられた忿怒尊の真言から機械的に構築させたものであるために，一部に混同が起きていることが指摘されている．木村[1988] pp. 138-139.
[33] スンバとヴァジュラパーターラは本来同一の地底に関わる尊格であるため，GS に比べるとスンバの上下が入れ替わっていることが指摘されている．木村[1988] pp. 139-140.

＜第３章＞

VP Ch. I の文献学的研究

第３章 VP Ch. I の文献学的研究

３－１．はじめに

本章では，VP の導入部分に相当し，VP Ch. II 以降の実践的な内容を読み進めていく上で最も重要な指針となる Ch. I を解明したい．本論文第１章でも述べた通り，VP の Skt 写本は現在確認できない．また，VP は漢訳も確認されていないため，VP の全体像を理解するには Tib に頼らざるを得ない．しかし，この VP Ch. I は，Skt 写本が現存する VP の註釈書および他文献における引用文や平行文からの Skt 回収が他の章に比べて最も高い割合で可能となっている．Tib は，Skt が示す内容の忠実な再現を試みた翻訳であるとはいえ，Tib に現代語訳を施せば翻訳の再翻訳となり，言語形態の違いからも内容に隔たりが出てくることは避けられない．さらに，VP は大部分が偈の形式をとっており，Tib は限られた音節数の中に Skt が示す内容を詰め込まざるを得ない．そのため，回収した VP の Skt と比較すると，Tib には言葉足らずな箇所が散見される．したがって，VP 本文の Skt 回収・復元は，VP の内容を正確に理解する上で必要不可欠な作業であり，さらに他文献との影響関係を解明する上でも文献学的価値がある．

なお，VP Ch. I には，章題を除いた文に I-1 から I-38 までの番号を振り分けた．これは VP が偈を中心に構成しながらも散文が混在しているため，筆者が独自に振り分けた便宜上の文番号である．本章ではこの数字を読解の単位として取り上げて考察を加えていく．

また，この Ch. I は，内容ごとに大別すると以下の表のような構成になっている．

文番号	内容	本論文の節番号
VP Ch. I-1 から I-9	序文	３－２．
VP Ch. I-10 から I-29	５つのマンダラ	３－３．
VP Ch. I-30-から I-38	ヨーガの理論	３－４．

以上のように，VP Ch. I は，「序文」・「５つのマンダラ」・「ヨーガの理論」という３つの内容に大別することが可能である．それぞれの内容ごとに割り当てた節の中でさらに詳細な内容を明らかにしていきたい．なお，註釈書から VP 本文の Skt が回収できる箇所は，対応部分を明確にするために太字で示した．

３－２．序文について

本節では，VPの序文に相当するVP Ch. I-1からI-9を精査する．各文番号ごとの内容を取り上げる前に，まずは序文全体の文章構造について簡単に触れたい．このVP序文で回収できるSktは，I-1からI-8の前半部分までLocativeの形[1]をした単語が連続している．それらのLocativeの形をした単語は，すべてI-9のsadā sthitaḥにかかる文章構造を持っている．したがって，このVPの序文は９つの偈から構成されているが，実際には序文全体を一文として捉えないと意味が通じない点に注意が必要である．本論文では，VPの序文も文番

号ごとに区切って取り上げるが，それは校合テクストとPhの内容比較および註釈書の参照を容易にするためである．ただし，主語と動詞がまたがるI-8とI-9は分割が困難であるため，２つまとめて取り上げる．それでは，以下でVP序文に説かれた内容を実際に見ていきたい．

＜**VP I-1**＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

nam mkha' bems bcas dang ba dang / / **go skabs med** dang 'byed pa dang / /
sna tshogs rdo rje'i gzhi gnas khang / / **sems can khams** dang **yid 'ong** dang//

試訳

虚空と，**動かないもの**と，**透明なもの**と，**隙間がないもの**と，開くものと，
多様なものと，**金剛[でできた]土台**と，**建物**と，**衆生界**と，**適意**と，

Ph

mkha' dang **bems po gsal ba** dang / / **gsal ba med** dang rab dbye dang / /
sna tshogs rdo rje'i gzhi gnas dang / / **sems can khams** dang **yid rol** dang//

試訳

虚空と，**動かないもの**と，**透明なもの**と，**隙間がないもの**と，開くものと，
多様なものと，**金剛[でできた]土台**と，**建物**と，**衆生界**と，**適意**と，

Skt復元試作

ākāśeṣu jaḍe svacche 'navakāśe prakāśini /
viśve vajrālaye layane sattvadhātau manorame //

試訳

虚空・動かないもの・透明なもの・隙間がないもの・輝かしいもの，
多様なもの・金剛[でできた]土台，建物・衆生界・適意，

【補記】

VPṬと『Mahāmati註』の校訂テクストからは，全く同じ形[2]のSktが回収できる．これら両註釈書から回収できるSktは，b句のprakāśiniを除いて校合テクストおよびPhと合致している．校合テクストおよびPhの元となったSkt写本では，prakāśiniの部分にvikāsin-やpravikāsin- 等の「開くもの」といった意味の語が入っていたか，あるいはVPṬ校訂前のprakāsin-という語が，「開くもの」という意味で理解されていた可能性が考えられる．

なお，回収したSktを順序通りに並べるとc句が１音節多くなり，音節過多による韻律不調を起こしてしまう．この韻律不調は，語順を入れ替える等の方法によっても解決できず，Skt原典も音節過多であった可能性がある．ただし，ハイパー・メトリカル[3]あるいは，c句のlayaneのlayaが２音節合わせて長音として読まれていた[4]と考えれば，一応の問題解決にはなる．

さて，このVPの出だしには，仏教聖典としての形式を整えるための六成就が説かれない[5]．これについて『Mahāmati註』は，VPの広本HVに対する敬意が理由であるとしている[6]．また，『タントラ部概論』には，このような六成就が説かれない出だしがヨーギニータントラの特徴であるとの解釈が示されている[7]．このように，VPの出だしを略タント

ラあるいはヨーギニータントラの特徴として捉える見解も存在する．

VPṬ I-1 対応箇所〔付録 Q 参照〕

虚空云々とは．**虚空**とは，法源のことである．**動かないもの**[8]とは，地[輪]である．**透明なもの**とは，水[輪]である．**隙間がないもの**[9]とは，風[輪]である．**輝かしいもの**[10]とは，火[輪]である．**多様なもの**とは，法源に包含された雑色蓮華である．**金剛[でできた]土台**とは，雑色蓮華の上にある羯磨杵である．**建物**とは，四[大]輪の上に現れたbhrūṃ[字]輪から出生した毘盧遮那[11]との交会により生じた甘露の滴で潤った四大から変成した楼閣である．**衆生界**とは，まさにそれ(=楼閣)こそが衆生界なのである．[なぜならば]ダーカとダーキニーたちの拠り所であるが故に．同様に五宝からなるが故に**適意**なのである．
つまりこのように語ったのである．法源の中に包含された楼閣の中に住する，という後に(=I-9の「住する sthitaḥ」と構文的に)結びつくのである．

【訳註】

a,b句の各語に地・水・風・火を当て嵌めているが，水だけが形容詞の形vāruṇa-である．なお，後述の『Mahāmati註』も形容詞の形vāruṇa-で出てくるが，先にpṛthvīmaṇḍala-という語が説かれている．したがって，各語の後にmaṇḍala-が省略されていると考えられるので形容詞vāruṇa-の形でも問題ない．そこで，VPṬも地・水・風・火の後ろにmaṇḍala-が省略されているために形容詞vāruṇa-になっていると考えた．また，前後に示される法源・雑色蓮華・羯磨杵・楼閣といった内容はマンダラの外郭部そのものである．この文脈からもVPṬが四大輪を指していることは明確である．以上の理由から，vāruṇa-は名詞varuṇa-へ校訂せずに形容詞のまま残し，試訳で地・水・火・風の後に[輪]の字を補った．

『Mahāmati 註』I-1 対応箇所〔付録 R 参照〕

虚空云々とは．**虚空**とは，虚空を本質とする蓮華[12]である．四明妃であり法源たる大印である三角形は，下方に向かって狭く，上方に向かって広い[形]であり，白色であり，雑色蓮華と金剛杵(=羯磨杵)の内側にある．**動かないもの**とは，地輪であり，四角形であり，三鈷杵を幟幟として[四]隅に持ち，黄色であり，laṃ[字]から生じたものである．**透明なもの**とは，水[輪]であり，白色であり，瓶を幟幟として持ち，円形であり，vaṃ[字]から生じたものである．**隙間がないもの**とは，遍満している状態で隙間がないので風輪であり，灰色であり，幢を幟幟として持ち，弓のような[形]であり，yaṃ[字]から生じたものである．**輝かしいもの**とは，無上の智慧の輝きを本質とするから火輪であり，三角形であり，赤色であり，raṃ[字]から生じたものであり，炎を幟幟として持つものである．**多様なもの**とは，四輪の下方にある雑色蓮華である．**金剛[でできた]土台**とは，全ての金剛の中で最上なものとして規定されていることあるから羯磨杵である．**建物**とは，bhrūṃ 字輪から生まれたものであり，毘盧遮那の毛穴から流水した甘露の滴が流れる四大から変成した楼閣である．**衆生界**とは，遍満している仏・菩薩たちによって満たされていることからまさにそのよう[に言われるの]である．**適意**とは，まさにそれ(=衆生界)が素晴らしい無比なる宝によって作られたものだからである．あるいはまた，それ(=衆生界)は専ら美しい等のような対象物によって遍満されたものであるから**適意**である．つまりこのように語ったのである．法源の

中にある雑色蓮華と金剛杵(=羯磨杵)の上にある楼閣である．あるいは五[大の]楼閣を内に持つものである．

（以下，I-1 の再説）

あるいはまた，あるタントラの教理によって[当該部分が]ナイラートミヤーのマンダラであると述べられている．**虚空**は一切諸仏の法である．それら(=諸仏の法)を攝受した性質であるが故にナイラートミヤーである．**動かないもの**とは，地界を自性とするプッカシーである．**透明なもの**とは，水界を自性とするシャバリーである．**隙間がないもの**とは，風界を自性とするドーンビーである．**輝かしいもの**とは，火界を自性とするチャンダーリーである．**多様なもの**とは，全てのものであり，身体の享受したものを貯蔵する阿頼耶識である．それ(=阿頼耶識)の転依した姿を持つものであり，大円鏡智を自性とするヴァジュラーである．**金剛[でできた]土台**とは，諸々の金剛[でできた]土台であり，受[蘊]と一切諸仏の平等性智である．それ（＝平等性智）を自性として持つものであり，[マンダラ構造の]内側のガウリーである．**建物**とは，一切の妄分別であり，所取等の姿が付着している(=語義解釈的には layane は līyante√lī からきている)．その対治であり，妙観察[智]を自性とするものがヴァーリダーキニーである．**衆生界**とは，種々なる衆生界が教化対象であるから成所作[智]を自性とするものがヴァジュラダーキニーである．**適意**とは，如来の智マンダラが一切の心(**mano**)を喜ばせる(**rama**te) [すなわち]引きつける[という語義解釈であり，すなわち]信と色処を本質として持つものが美しき(**manoramā**)[マンダラ構造の外側の]ガウリーである．

【訳註】

以上のように，『Mahāmati 註』も VPṬ と同じように，VP の語句をマンダラの外郭部として解釈している．VPṬ に比べると『Mahāmati 註』の方が詳細に記述しており，細かい相違点はあるが全体的な内容の差はない．ここまで同じ内容を有しているのであれば，おそらくはどちらか一方の註釈書がもう一方を踏襲したことが考えられる．新思想体系の 1 つである第四灌頂が『Mahāmati 註』には確認できず，VPṬ では明確に説かれている事実を考えると，VPṬ が『Mahāmati 註』を踏襲した可能性が高いといえる[13]．なお，I-1 を再説してナイラートミヤー十五尊マンダラが説かれるが，この註釈は次の I-2 まで続いている．したがって，I-2 の訳註でまとめて触れることにする．

＜VP Ch. I-2＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

sems can snod dang **'jig rten** dang/ / **sa** dang **sa 'og bar snang** dang/ /

yid dang **lus** dang **ngag** dang ni/ / **gcig** dang **gnyis** dang **mkha' bde** dang//

試訳

衆生世間と**器**[世間]と，**地上**と**地下**と**それ以外**と，

心と**身**と**語**と，**一**と**二**と**虚空**[すなわち]**歓喜**と，

Ph

'jig rten sems can dang **snod** dang/ / **sa 'og sa steng sa bla** dang/ /

bar snang yid dang **lus** dang **ngag**/ / **gcig** dang **gnyis** dang **mkha' bde** dang//

試訳

衆生世間と**器**[世間]と，**地下**と**地上**と**天**と，

それ以外と，**心**と**身**と**語**と，**一**と**二**と**虚空**[すなわち]**歓喜**と，

Skt復元試作

sattve ca bhājane loke bhūr bhuvaḥ svar antare /

manasi vigrahe vāci ekasminn dve ca khe ratau //

試訳

衆生世間・器[世間]，地下・地上・天・それ以外，

心・身・語，一・二，虚空[すなわち]歓喜，

【補記】

Skt 復元試作は, b 句６音節目の短音と c 句７音節目あるいは８音節目に入るべき一音が不足しているため韻律不調である．なお，Skt 復元の b 句にある svar は,『Mahāmati 註』から回収できる Skt であり, VPṬ には確認できない語である. また, 校合テクストには svar に対応する訳語が含まれていない．しかし，Ph の b 句には svar に対応する sa bla という語が確認できる．さらに，STTS には oṃ bhūr bhuvaḥ svar huṃ phaṭ[14]という真言が説かれており，『Mahāmati 註』から回収できる Skt と同じ bhūr bhuvaḥ svar が一並びになっている[15]．したがって，Skt 復元には svar の語を含めて示したが，svar を含まない写本が存在していた可能性はある．

VPṬ I-2 対応箇所〔付録 Q 参照〕

[主尊・ヴァジュラパンジャラは]大楽を自性とするものとして遍満しているので，衆生[界]にも非衆生[界](=器世間)にも住すると[説示するために]**衆生**云々と述べた．

衆生とは，動くものたちである．**器**とは，不動なものたちである．**世間**とは，まさにそれら[先に出てきた衆生と器]両方の[言葉を]限定する[言葉]である．

[その内の] **衆生**を説示するために述べた．**地下**云々と．[衆生は]順序通りに天と人間界と地下世界に存在するものである．**それ以外**[16]とは，この[天と人間界と地下世界]における器[世間]とは別の場所[に存在するもの]である．**心**云々とは．まさに彼ら(=衆生たち)の心と身体と言葉である．**一**とは，まさに彼ら(=衆生たち)の清浄な本質であり，大楽を自性とするものであり，能取の側である．**二**とは，般若と方便を自体とするものであり，空性と慈悲が不可分な菩提心である．**虚空[すなわち]歓喜**とは，空性を自性とするものであり，所取の側である．

【訳註】

I-2 対応箇所の冒頭では，この I-2 もまた I-1 と同様に，I-9 の「住する sthitaḥ」にかけて読むべきであることが示されている．すなわち，主尊・ヴァジュラパンジャラは大楽を自性とするものとして遍満しており，衆生世間・器世間の両方に住しているとされている．

衆生[世間]・器世間について．この I-2 において，世間(loka-)という単語は１つのみであるが，衆生(sattva-)と器(bhājana-)の両方の言葉を限定するもの(viśeṣaṇa-)とされている．したがって，loka は双方の語にかけて衆生世間 sattvaloka-・器世間 bhājanaloka-と読むべきである．なお，I-2 から I-3 の**地下(・地上・天)，それ以外，心(**・語・身)，**一・二，虚空[す**

なわち]歓喜，**六・五・十二・四・十九**は，衆生世間を説示するために説かれた語であり，I-3 の**諸世間・三界を余すことがないもの**は，器世間を説示するために説かれた語であるとされている．

地下云々について．この地下云々とは，天・人間界・地下世界そのものを指す語ではなく，そこに存在するもののことと考えられる．なお，順序通り(yathākramam)と述べているが，天から順に説かれており，**地下云々**の順序通りの説明になってはいない．

それ以外について．地下云々の場所とは別の場所に存在するものである．衆生世間の説示であるため場所そのものではなく,その場所に存在するものを指していると考えられる．**心云々**について．eṣām は，文脈から天・人間界・地下世界に存在するもののことである．すなわち，人間界に限らない広い意味での衆生のことであり，その衆生たちの心・身体・言葉を指していると考えられる．**一**について．衆生たちの持つ清浄な本質，大楽を自性とするものを例示して衆生世間における能取の側 grāhakākāra-すなわち認識主観を指している．**虚空[すなわち]歓喜**について．衆生世間における所取の側 grāhyāṃśa-すなわち客観的対象を指している．なお，ここに出てくる grāhya-, grāhaka-, ākāra-は唯識文献で頻繁に用いられる用語であり，VPṬ の著者が唯識思想に傾倒した人物であったことが推測できる．

『Mahāmati 註』I-2 対応箇所〔付録 R 参照〕

衆生とは，それ(=智マンダラ)の入り口であるから，精進を自性として声処を本質として持つチャウリーである．**器**とは，輝き(**bhā**)を生じさせる(**jana**yati)と結びつく[語義解釈であり，すなわち]憶念を自性とすることによって香[処]が自性であり，器[17]とはヴェーターリーのことである．**世間**とは，[語義解釈的には]壊される(√luj)[からきている]．すなわち，多くの目的を持つが故に，世間とは喜ばせるものである．禅定と味[処を自性とするもの]がガスマリーである．**地上世界**とは．この場合，**地上**がパーターラヴァーシニーであり，スパルシャーである．さらに教示によって**世界**とは，まさにナイラートミヤーである．法処において，**天**とはケーチャリーである．**空界**とは，側面にも下にも上にもない，という意味である．タントラの理論によるナイラートミヤーマンダラである．

【訳註】

前の偈から続いて，『Mahāmati 註』にはナイラートミヤー十五尊マンダラが説かれる．なお，ここで説かれる各尊の本質は，DK I. ix. 8-16 で説かれる各尊の本質にほぼ当てはまるものである．そこで，以下に VP 本文のナイラートミヤー十五尊マンダラに関する記述と，DK の記述を確認したい．

・VP のナイラートミヤー十五尊マンダラ〔付録 I 参照〕

校合テクスト

rdo rje dkar mo chu bdag ma/ / rdo rje mkha' 'gro bdag med ma/ /
zhe sdang rdo rje'i gnas mnan cing/ / dkyil 'khor snying por bsgom par bya/ /
dkar mo chom rkun ro langs ma/ / gha sma rī ni sgo srungs ma/ /
pu k+ka sī dang ri khrod ma/ / gdol pa g-yung mo mtshams su dgod/ /
steng du mkha' spyod ma zhes bshad/ / 'og tu de bzhin sa spyod ma/ /
dbus su bdag med mkha' 'gro ma//

試訳

ヴァジュラー，ガウリー，ヴァーリー，金剛ダーキニー，ナイラートミヤーがいる．
瞋恚金剛の住処を制圧し，[彼女たちを]マンダラの中心に観想すべし．
ガウリー，チャウリー，ヴェーターリー，ガスマリーは門番女である．
プッカシーとシャバリー，チャンダーリー，ドーンビーは隅に安立する．
上にケ–チャリーと説かれ，下に同様にブーチャリーがいる．
中心にナイラートミヤーダーキニーがいる．

Ph

rdo rje gau ri chu ma dang/ / rdo rje mkha' 'gro ma bdag med/ /
zhe sdang rdo rje zhabs mnan pa/ / dkyil 'khor snying po bsgom par bya/ /
gau rī tso ri be ta li/ / gha sma rī rnams sgo skyong ma'o/ /
pu ka si dang sha ba rī/ / gtum mo ḍom bhi ma rnams mtshams su'o/ /
steng du mkha' la spyod ma zhes/ / de bzhin 'og tu sa spyod ma/ /
dbus su bdag med mkha' 'gro ma//

試訳

ヴァジュラー，ガウリー，ヴァーリー，金剛ダーキニー,ナイラートミヤーがいる．
瞋恚金剛を足で踏みつけ，[彼女たちを]マンダラの中心に観想すべし．
ガウリ–，チャウリー，ヴェーターリー，ガスマリーは門番女である．
プッカシーとシャバリー，チャンダーリー，ドーンビーは隅にいる．
上にケーチャリーがおり，同様に下にブーチャリーがいる．
中心にナイラートミヤーダーキニーがいる．

・DK I. viii. 13-15

indre vajrā yame gaurī vāruṇyāṃ vāriyoginī /
kauverī vajraḍākīnī madhye nairātmyayoginī //
bāhyapuṭe punar /
gaurī caurī veltālī ca ghasmarī pukkasī tathā /
śavarī caṇḍālī caiva aṣṭamī ḍombinī matā //
adhovaty ūrdhvavaty eva khecarī bhūcarī smṛtā /
bhavanirvāṇasvabhāvena sthitāv etau dvidevate //

試訳

東にヴァジュラ–．南にガウリ–．西にヴァーリヨーギニー．
北に金剛ダーキニー．中央にナイラートミヤーヨーギニーがいる．
外陣にまた，ガウリ–．チャウリー．ヴェータリー．ガスマリー．プッカシー．
シャバリー．チャンダーリー．ドーンビーという八女尊がいる．
上方にケ–チャリ–．下方にブーチャリーが伝えられている．
輪廻と涅槃の自性によってこれら二尊が置かれる．

以上の記述をまとめると，次の表のようになる．

・『Mahāmati 註』が示すナイラートミヤー十五尊マンダラの尊格名とその本質

対応箇所	註釈する語	『Mahāmati 註』による解釈		DK(I. ix. 8-16)における左記の尊格の本質[18]. *( )は本質に対応する GS の五仏[19]
		尊格名 *( )内は上記で示した VP における尊格名	本質（DK と対応する箇所は相互に太字で示した）	
VP Ch. I-1	ākāśa-	ナイラートミヤー	一切諸仏の法の攝受	識蘊 (阿閦)
	jada-	プッカシー	**地界**	**地界**
	svaccha-	シャバリー	**水界**	**水界**
	anavakāśa-	ドーンビー	**風界**	**風界**
	prakāśin-	チャンダーリー	**火界**	**火界**
	viśva-	ヴァジュラー	大円鏡智	色蘊 (毘盧遮那)
	vajrālaya-	[内側の]ガウリー	平等性智，**受蘊**	**受蘊** (宝幢)
	layana-	ヴァーリダーキニー[20] (ヴァーリー)	妙観察智	想蘊 (阿弥陀)
	sattvadhātu-	ヴァジュラダーキニー	成所作智	行蘊 (不空成就)
	manorama-	[外側の]ガウリー	信[力]，**色**処	**色**境
VP Ch. I-2	sattva-	チャウリー	精進[力]，**声**処	**声**境
	bhājana-	ヴェーターリー	憶念,[力] **香**処	**香**境
	loka-	ガスマリー	禅定[力]，**味**処	**味**境
	bhū-	パーターラヴァーシニー (ブーチャリー)	**触**処	**触**境，輪廻
	bhuva-	ナイラートミヤー	—	—
	sva-	ケ–チャリー	**法**処	**法**境，涅槃

まず，『Mahāmati 註』と，VP および DK とではプッカシー以下の四女尊とヴァジュラ–以下の四女尊の出てくる順序が逆である．すなわち，VP および DK では先にヴァジュラー以下の四女尊が説かれ，その後にプッカシー以下の四女尊が説かれるのである．VP および DK ではヴァジュラー以下の四女尊は主尊と隣接する四仏の位置におり，DK においてヴァジュラー以下の四女尊が主尊ナイラートミヤーに続いて説かれるのは当然のことといえる．この『Mahāmati 註』の示そうとしているマンダラでは各尊の方位が説かれていないため，プッカシー以下の四女尊とヴァジュラ–以下の四女尊とで位置が交代している可能性も完全には否定できない．しかし『Mahāmati 註』は，ヴァジュラー以下の四女尊に四仏と対応する四智を当て嵌めている．また，内側のガウリ–が本質とする受蘊は DK と共通となっている．したがって，プッカシー以下の四女尊がヴァジュラ–以下の四女尊よりも先に示される理由はマンダラの形に沿ったものではないと考えられる．

なお，『Mahāmati 註』は，VP Ch. I-1 に対応する註釈で，マンダラ外郭部の基本となる

地・水・風・火を jada-から prakāśin-までの I-1 最初の四語に当て嵌めている．したがって，I-1 最初の四語と DK で示されたプッカシー以下の四女尊の本質である地界・水界・風界・火界[21]とを対応させたために，プッカシー以下の四女尊がヴァジュラ–以下の四女尊よりも先に示されたと推測される．

次に，DK におけるブーチャリーは，『Mahāmati 註』ではパーターラヴァーシニーへと入れ替わっている．このパーターラヴァーシニーは，既に STTS の中に見受けられる尊格であり[22]，ケーチャリー・ブーチャリーと共に三尊合わせてマンダラの上方・地面・下方，あるいは身・語・心によく当て嵌められて説かれている．なお，上方と下方の二尊を示す場合は， VP や DK のナイラートミヤー十五尊マンダラようにパーターラヴァーシニーを抜かしたケ–チャリーとブーチャリーが当て嵌めらることが多く，ブーチャリーを抜かしたケーチャリーとパーターラヴァーシニーの二尊で説かれることは例は他に見い出せない．おそらく『Mahāmati 註』は，DK に説かれる尊格とその本質にさらに独自の解釈を付け加えたナイラートミヤー十五尊マンダラを示したと考えられる．

なお，『Mahāmati 註』は，この直後から I-7 までの VP 本文の語句には五部マンダラの尊格たちを当て嵌めている．ただし，かなり強引な解釈であると考えられ，VP 本文の語句との対応を見出すことは困難である．したがって，VP に対応する文番号で扱うよりも，次節の「５つのマンダラ」に対比させて扱った方が VP 本文の理解に役立つと考えられる．したがって，五部マンダラの尊格たちが説かれるこの直後から I-7 までの『Mahāmati 註』の註釈内容については次節において扱うこととする．

＜VP Ch. I-3＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

drug dang **lnga** dang **drug gnyis** dang/ / **skye 'gro rnams** ni **bzhi po** dang/ /
gcig gis nyi shur ma tshang dang/ / **khams gsum ma lus pa** dang ni//

試訳

六と五と十二と，諸世間と四と，
十九と，三界を余すことがないものと

Ph

drug dang **lnga** dang **drug gnyis** dang/ / **'gro ba rnams** ni **bzhi po** dang/ /
nyi shur gcig gis ma tshang dang/ / **khams gsum pa ni ma lus** dang//

試訳

六と五と十二と，諸世間と四と，
十九と，三界を余すことがないものと

Skt復元試作

ṣaṭsu pañcasu dviṣaṭkeṣu caturṣu,
ekonaviṃśatsv api jagatsu traidhātuka-m-āśeṣeṣu.

試訳

六・五・十二・四，
十九・諸世間・三界を余すことがないもの，

【補記】

Skt復元は，多数の韻律不調を起こしており，韻律まで再現することほぼ不可能である．したがって，VPṬから回収できるSktを並べるだけにとどめた．また，Phの偈ではc句が抜け落ちていたが，Ph 57a2にc句部分が混在していたため復元させた．

VPṬ I-3対応箇所〔付録Q参照〕

六とは，色等の六処である．**五**とは，五蘊である．**十二**とは，十二処である．**四**とは，四大である．**十九**とは，次のように適応される．人に関連した十八界[23]という意味である．次に器[世間]の詳説が**諸世間**である．さらにそれ(=器世間)の細説が**三界を余すことがないもの**である．

【訳註】

六・五・十二・四・十九について．これらの語は，前の偈から引き続いて衆生世間を説示するために説かれた語であり，それぞれ六処・五蘊・十二処・四大・十八界のことを指している．すなわち，主尊・ヴァジュラパンジャラの作用は，衆生の持つ感覚器官・対象世界・認識作用・衆生の物質的および精神的な構成要素と構成元素にまで及んでいることを示した箇所といえる．ところで，VPṬでは，なぜ**十九**によって数の異なる十八界を指すのかという理由に触れていない．また，後述する『Mahāmati註』では，十八界にpudgala-を足したものが十九ekonaviṃśati-と解釈している．この十八界にpudgala-を足して十九になるという解釈は，現時点で他に用例を見い出せない．したがって，『Mahāmati註』独自の解釈と考えられる．この**十九**という数字は，法数としてよく知られた数とは言えず[24]，この偈に挙げられている他の数字とは明らかに異質である．あるいは，**十九**という数字からはJñānapāda流で用いられるGSの文殊金剛十九尊マンダラが想起されるが，関連性は見い出し難い．現在のところVPが**十九**という数字を用いた本来の意図は不明であり，VPṬと『Mahāmati註』の解釈は強引と言わざるを得ない．

諸世間，三界を余すことがないものについて．器世間について説かれた二語である．**諸世間**が詳説nirdeśa-であり，**三界を余すことがないもの**が細説pratinirdeśa-である．すなわち，主尊・ヴァジュラパンジャラは，欲界・色界・無色界に余すこと無く遍満しているのである．なお，nirdeśa-とpratinirdeśa-について，Shendge[2004] p. 337 は，uddeśa-, pratyuddeśa-, mahoddeśa-, nirdeśa-, pratinirdeśa-, mahānirdeśa-それぞれが対応する典籍を詳細に解説している．このShendge氏の解説はSUṬ[25]に基づくものであり，同著 p. 336には対応箇所の英訳も掲載している．ただし， このような対応関係はSUṬ独自のものであり，VPṬの著者は単純にnirdeśa-のさらなる詳細という意味でpratinirdeśa-という語を使用していると考えられる．

＜VP Ch. I-4＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

pha dang **bu** dang **ma mo** dang/ / **phyi rol** dang ni **nang** dang ngam/ /

btsun mo kun dang **chos** dang ni/ / **thams cad las** dang **bdag med** dang/ /

試訳

父と**息子**と**母**と，**外部**と**内**[部]あるいは，

すべての女性と**法**と，**一切事業**と**無我**と，

Ph

pha dang **bu** dang **ma** yang rung/ / **phyi rol don** dang **nang** dang yang/ /

btsun mo kun dang **chos** dang ni/ / **thams cad las** dang **bdag med** dang//

試訳

父と**息子**と**母**あるいは，**外部の対象**と**内部**[の対象]もまた，

すべての女性と**法**と，**一切事業**と**無我**と，

Skt復元試作

pitari putre mātṛsu bāhyārthe 'bhyantare 'pi ca /

sarvayoṣitsu dharme [ca] sarvakarmesv anātmani //

試訳

父・息子・母，外部の対象・内部[の対象]，

すべての女性・法，一切事業・無我.

【補記】

a 句は韻律を合わせるには多くの問題があるため，韻律不調のまま示した．b 句の部分は，『Mahāmati 註』から回収できる bāhyārthe 'bhyantare 'pi ca という形であれば韻律が合う．校合テクストには artha-に対応する訳語が含まれていないが，Ph では phyi rol don となっており，artha-に対応する don の語が含まれている．また，d 句についても VPṬ から回収できる sarvakarmesu ca よりも『Mahāmati 註』から回収できる ca を含まない sarvakarmesu だけの方が韻律が合う．したがって，Skt 復元では『Mahāmati 註』から回収できる Skt を優先的に採用した．なお，c 句は句の終わりに一音を補うことによって韻律が合うため ca を補った.

VPṬ I-4対応箇所〔付録Q参照〕

父云々とは．四という直前[の語]に結びつけるものである．まさに世間に知られた**父**等[の四つ]においてという意味である．**外部**云々とは．**外部と内部**という表現によってまさに衆生[界]と非衆生[界]とを説いた．**全ての女性**とは，すべての明妃たちが快楽の基盤であるから，そこ(=衆生界)に住する，という意味である．**法**とは，青や黄等である．**一切事業**とは，まさにそれら青等の染色等の作用を特徴としているものである．**無我**とは，普通の身体のない本尊の身体である.

【訳註】

父云々について．四に結びつけると書いてあるが，VP本文には**父・息子・母**の三つしか書かれていない．なお，直前のVP I-3には四という語が説かれおり，VPṬは四大を当て嵌めている．しかし，**父**云々と四大に強い関連性は見出し難い．あるいは，父・息子・母に何か一つを加えて四つとして，VP本文の別の読み方を求めているとも考えられる．例えば，両親と子供という家族の概念を表すならば，VP本文の父・息子・母の３つでは不

十分といえる．なぜなら，単数のputra-が指すのは息子であるため，娘が含まれていないともいえる．したがって，家族を表す概念として，そこには娘(putrī-)を付け足すべきとも考えられる．VPṬの一文からでは推測の域を出ないが，四という数字は，上記のように家族を表す概念が他にもあるという意図を含んでいる可能性がある．

法・一切事業について．ここに出てくる青や黄という表現は，唯識学派において外界の対象物を表す語として用いられており[26]，VP I-2に続いてここでもVPṬの著者が唯識思想に傾倒していた可能性が指摘できる．すなわち，主尊・ヴァジュラパンジャラの影響は外界の対象物にまで及んでいるということを意味した内容であると考えられる．

＜VP Ch. I-5＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

'bras bu rgyu dang **bya ba zhes/ / bsgrub bya sgrub thabs rdo rje** dang/ /
de bzhin kun gzhi rnam shes dang/ / **chos kyi dbyings** dang **ma byung** dang//

試訳

果と**因**，**作用と呼ばれるもの**，**成就されるべきもの**と**成就をもたらす金剛**，
同様に阿頼耶識と，**法界**と**不出生**と，

Ph

'bras bu rgyu dang **bya ba zhes/ / bsgrub bya bsgrub pa rdo rje bdag/**
'di ltar kun gzhi rnam shes dang/ / **chos kyi dbyings** dang **ma skyes dngos//**

試訳

果と**因**，**作用と呼ばれるもの**，**成就されるべきもの・成就をもたらす金剛**，
同様に阿頼耶識と，**法界**と**不出生**，

Skt復元試作

phale hetau [ca] kāryākhye sādhye sādhanavajriṇi /
tathā hy ālayavijñāne dharmadhātāv anudbhave //

試訳

果・因・作用と呼ばれるもの，成就されるべきもの・成就をもたらす持金剛，
同様に阿頼耶識・法界・不出生．

【補記】

VPṬも『Mahāmati註』も回収できるSktは全く同じである．a句の５音節目に短音が入れば正規形(pathyā)になり，校合テクストとPhのいずれにもrgyuの後にdangがあることから，hetauの後にcaを補った．

VPṬ I-5対応箇所〔付録Q参照〕

果とは，果のヘーヴァジュラである．**因**とは，因のヘーヴァジュラである．**作用と呼ばれるもの**とは，それら２つ(=果と因)のみを限定する修飾語である．まさにそれら２つ(=果と因)は**成就されるべきもの(=成就対象，果の作用)**，**成就をもたらす持金剛(=因の作用)**であると説かれた．あるいは(=別の解釈では)**成就されるべきもの**は大楽である．**成就**はまさ

にそれ(=大楽)の手段である．まさに今，母[27]に対して示しつつ，**成就されるべきもの**の２つの状態である有垢と無垢を自体とするものを示すために **tathā hi** 云々と説いた．**阿頼耶識**は一切の習気の住処を特徴として持つものである(=samala 有垢)．**法界**とは，[阿頼耶識が]阿頼耶ではない状態(=阿頼耶識の転依した状態)に至ったものである(=amala 無垢)．**不出生**とは，直接原因である心の刹那[の連続]以外の原因からは生じないものである．

【訳註】

果・因・作用と呼ばれるものについて．果のヘーヴァジュラ・因のヘーヴァジュラとは，付録Qで示した通り*Muktāvalī* (略号MĀ)に見られる用語である．ここでは作用と呼ばれるものが修飾語として果と因にかかるとしており，果と因が単純な原因と結果の関係にはないことを示している．I-38で示す通り，VPでは方便と方便対象が同一であるとされているため，このような解釈をしたと考えられる．

阿頼耶識・法界・不出生について．阿頼耶識は心の刹那の連続であるため，今存在する阿頼耶識の直接原因がその一刹那前の阿頼耶識にあることを述べていると考えられる．すなわち，一刹那前の心によってのみ阿頼耶識は出生することが説かれている．全体を通して，おそらくは阿頼耶識が有垢で，法界になると無垢になる[28]，ということが主張したいと考えられるが，タントラの註釈としては不相応な説明に思われる．これまでの偈からも唯識思想の影響が散見されることから，唯識思想に傾倒しているVPṬの著者が阿頼耶識という語に反応して唯識に関する説明を加えているだけであり，タントラの内容説明とはあまり関係していない箇所といえる．

＜VP Ch. I-6＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

mkha' yi khams dang rang dbyings dang/ / **bdag med pa** dang **bdag ces** dang/ /
dngos po med dang **dngos med min**/ / **bde ba can** dang **gru gsum** dang//

試訳

虚空界と自らの界，**無我**と，**我と**[呼ばれるもの]と，
非存在と**非非存在**，**極楽**と**三角形**と，

Ph

sems can khams dang **nam mkha'** dang/ / **bdag med bdag gi 'du shes** dang/ /
dngos dang bral yang **dngos med min**/ / **bde ba can** te **gru gsum** dang//

試訳

衆生界と**虚空**[界]と，**無我**と，**我と呼ばれるもの**と，
非存在と**非非存在**，**極楽**である**三角形**と，

Skt復元

sattvadhātau khadhātau cānātmani ātmasaṃjñini /
vibhāveṣv anabhāve[ṣu] sukhāvatyāṃ trikoṇake //

試訳

衆生界，虚空界・無我・我と呼ばれるもの，
非存在・非非存在，極楽・三角形，

【補記】

まずSkt復元について，回収したSktを並べただけではc句が１音節少なくなってしまう．したがって，Skt原典のc句には接続詞など何らかの音節が含まれていた可能性がある．ただし，c句の二語目にcaを補う解決方法では，連声によってc句の５音節目が長音になってしまう．そこで，ここではvibhāveṣu に合わせて，直後のanabhāveも複数形のanabhāveṣuであったと考えることで解決をはかった．

VPṬ I-6対応箇所〔付録Q参照〕

衆生界においてとは，**衆生**[すなわち]報身と呼ばれるもの，それ(=報身)の種子を保持するから基盤である．**虚空**[すなわち]空性の側面によって行者たちを養うから**虚空界**である．所取・能取という形象をとる自性を欠くから**無我**である．両者(=所取・能取)を欠いた本体によって存在しているから**我と呼ばれるものである**．**無我**というこの教示が**非存在**という[意味である]．所取等[の実体]を離れた状態がここにおける非存在である．供養に値するが故に複数形である．**我と呼ばれるもの**というこの教示が**非非存在**という意味である．すなわち所取・能取を離れた姿によって存在しているのだから非存在ではない．快楽[すなわち]認識されるべき特徴を有する身体が護られるから**極楽**である．三角形の大地を本質とすることによって**三角形**がある．

【訳註】

この部分では，grāhya-, grāhaka-, ākāra-という唯識文献で頻繁に用いられる一連の語を註釈に当てている．さらに，「所取・能取という形をとる自性を欠くから**無我**である」という註釈は，心が所取・能取の形象を欠いた状態を示すと考えられ，引き続き唯識思想の影響が垣間見える

＜VP Ch. I-7＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

a skyes dang ni **skyon bral** dang/ / **rdul bral** dang ni **sdig bcom** dang/ /
dba' rlabs med pa'i rang bzhin dang/ / mthar ni **zhi ba'i bde rig** dang//

試訳

aから生じるものと**過失を離れたもの**と，**塵から離れたもの**と**罪過を打ち砕いたもの**と，**波がない**自性と，究極に**内面的な快楽を知るもの**と，

Ph

rdul med pa dang **skyon bral** dang/ / **rdul bral** dang ni **sdig bcom** dang/ /
rang bzhin **rba rlabs med pa'i** dang/ / mtha'i **bde ba bde rig** dang//

試訳

塵のないものと**過失を離れたもの**と，**塵から離れたもの**と**罪過を打ち砕いたもの**と，**波がない**自性と，究極に**正しい快楽を知るもの**と，

Skt復元試作

araje vigatadoṣeṣu viraje hatakalmaṣe /
nistaraṅge samādhāv antaḥsatsukhavedini //

試訳

塵のないもの・諸々の過失を離れたもの・塵から離れたもの・罪過を打ち砕いたもの，
波がないもの・三摩地・内面的な正しい快楽を知るもの，

【補記】
校合テクストでは，a句のarajeに対応する部分がa skyes となっている．そのため，校合テクストの使用したSkt写本では，arajeではなく，a skyesと対応するajeという形だった可能性が高い．しかし，周囲の語から判断すると，ajeよりもarajeの方が適切な形であり，ajeはarajeの誤写であったと考えられる．また，校合テクストとPhの使用したSkt写本では，c句のsamādhauの部分がsvabhāveだった可能性がある．さらに，校合テクストとPhは，d句のantar-に対応するTibがtharになっている．tharは一般的にanta-の訳語であるため，おそらくantar-をanta-と読み間違えたか，あるいは両翻訳者が使用したSkt写本では共通してantar-という形になっていたと考えられる．

VPṬ I-7対応箇所〔付録Q参照〕
その場所に欲等がないから**塵のないもの**である．**諸々の過失を離れたもの**というこのような諸々の言葉は，まさにこれ(=塵のないもの)の詳説と細説とそれ(=細説)の細説らである(=arajaの詳説と細説と細々説が，vigatadoṣa以下の言葉である)．一切の妄分別から離れた状態であるが故に**平穏**である．三摩地とは心一境性のことであって，それ(=三摩地)の本性を持つものであるが故に**三摩地**である．所取の側の快楽を感受する本質を持つものであるが故に**内面的な正しい快楽を知るもの**である．
【訳註】
諸々の過失を離れたものについて．詳説および細説については，I-3の【訳註】で説明した通りである．
三摩地について．ここに出てくる心一境性とは，三摩地の言い換えとして頻繁に用いられる語であり，*Abhidharmakośabhāṣya* (略号AKBh) でも五位七十五法の中の三摩地の説明に用いられている[29].

AKBh (p. 433 *ll*. 1-2.)
na cittāny eva samādhiḥ / yena tu tāny ekāgrāṇi vartante sa dharmaḥ samādhiḥ /
saiva cittaikāgratā /

試訳
諸々の心が三摩地なのではない．それら(=諸々の心)は一境を引き起こす，それによってそれ[心所]の法があり，三摩地がある．それこそが心一境性なのである．

＜VP Ch. I-8, I-9＞〔付録 P 参照〕
校合テクスト
gsang dang **mchog** dang **dgyes pa** la/ / **sangs rgyas kun khyab sems dpa'** ni/ /
mkha' 'gro ma yi rdo rje gur/ / 'di ni **rang byung bcom ldan 'das//**
lha yi bdag po gcig pu nyid/ / thams cad bdag nyid rtag tu bzhugs/ /
'bum phrag lnga bdag kye'i rdo rje / / las ni **dkyil 'khor lnga gsungs pa//**

試訳

秘密と**最上**と**喜び**において，**一切仏からなるもの**であり，**衆生**であり，
自然生にして**世尊**であるかの**ダーキニーヴァジュラパンジャラ**という
すべての者たちの本質に**常にお住まいになっている唯一なる超越尊**は，
五十万頌へーヴァジュラから[抽出して]**五つのマンダラをお説きになった**.

Ph

gsang ba mchog dang **dges pa** dang/ / **thams cad bdag nyid rtag bzhugs** dang/ /
kun dngos sangs rgyas sems dpa'o/ / **'dir** ni **rang 'byung bcom ldan 'das**//
mkha' 'gro ma ni rdo rje gur/ / **lhag pa'i lha nyid gcig pa**'o/ /
dges rdor 'bum lnga'i bdag nyid las/ / **dkyil 'khor rnam pa lngar gsungs** ste//

試訳

秘密と**最上**と**喜び**と，**すべての者たちの本質**に**常にお住まいになっているもの**と
一切仏からなるものと**衆生**がいる．**そこに自然生**にして**世尊**である
ダーキニーヴァジュラパンジャラという**唯一なる超越尊**がいる．
[超越尊は]**五十万頌へーヴァジュラから**[抽出して]**五つのマンダラをお説きになった**.

Skt復元試作

rahasye parame ramye sarvātmani sadā sthitaḥ /
sarvabuddhamayaḥ sattvaḥ ḍākinīvajrapañjaraḥ / /
asau svayambhūr bhagavān eko ʻdhidaivataḥ /
pañcalakṣātmahevajrād uktavān pañcamaṇḍalam / /

試訳

秘密・最上・喜び・すべての者たちの本質に常に住するものであるところの
一切仏からなるものであって衆生であるダーキニーヴァジュラパンジャラという
かの自然生であって世尊にして唯一なる超越尊は，
五十万頌へーヴァジュラから[抽出して]五つのマンダラを説いた.

【補記】

Skt 復元と校合テクスト，Ph それぞれで語順にかなりの相違が見られる．おそらく，Skt 復元が本来の語順であり，校合テクストと Ph は意訳によって語順が入れ替えられたものと考えられる．なお，I-1 の【補記】の脚註で述べたように，「秘密・最上・喜び」はヨーギニータントラの特徴的な語句と考えられ，SS や CS など多くのヨーギニータントラの中に確認できる．

VPṬ I-8 対応箇所〔付録 Q 参照〕

器ではない者たちに隠されるべきであるが故に**秘密**である．卓越しているが故に**最上**である．喜ばしい故に**喜び**である．まさにこれがあらゆるものたちにとっての本質であるが故に**すべて者たちの本質**である．**常に**[すなわち]連続[という意味で]常恒であるが故に，常時ずっと，**住する**まで[文章が]結びつくのである．それが何であるかと[いうために]述べた．**一切仏からなるもの**云々とは，一切仏を自性としているが故にそれ（=一切仏）からなる大

持金剛であるという意味である．そして，これ(=大持金剛)は衆生利益に関して常に活動しているが故に**衆生**である．ナイラートミヤーを始めとする**ダーキニー**たちが外へ行くことを抑止するものであるから[マンダラ構造における]金剛網のようなものであり，[それ故に]**ヴァジュラパンジャラ**である．

VPṬ I-9対応箇所〔付録Q参照〕

住しつつ何を為したのかと説いた．**かの**云々と．**かの**とは，*Ḍākinīvajrapañjara*である．勝義からすれば因が存在しない故に**自然生**である．自在等の六徳[30]と結びついているが故に**世尊**である．法身を本質としているから**唯一**であり，並ぶものがないのである．報[身]と応化身の自性を持つものであるが故に**超越尊**である．[超越尊が]**説いた**まで結びつくのである．**五つのマンダラ**とはマンダラの五つ揃えのものという意味である．

【訳註】

常にについて．あらゆるものを刹那滅として捉える仏教徒にとって，**常**という概念は刹那の連続に他ならない．VPṬで用いられる連続(prabandha-)という語は，個体の連続的存在を意味する相続(saṃtati-)と同じ意味[31]で用いられる語であり，刹那の連続による個体維持を示すことによって，外見上の「常」という状態を表していると考えられる．また，「常時ずっと」と翻訳したsarvakāla-のAccusative形も時間の間断なき継続[32]を表すものと考えられる．

『Mahāmati 註』I-8 対応箇所〔付録 R 参照〕

さらに，それら五つのマンダラを転じるものたちが説示を述べる．

秘密とは，内密であり信頼であり二元性を欠いていることである．そこにおいて存在するものが秘密である．あるいは貪欲などの煩悩を除去させる[すなわち]捨てさせるので内密であり，そこを取り囲むので秘密である．[秘密は]清浄法界智であり，まさにそれこそが吉祥ヘールカであり，彼の居処である．**最上**とは，[語義解釈的には] **para** は清浄な世間の分別であり，それ(=分別)によって判断し（**mā**ti），断じて，決定する，そのような意味である．最上は妙観察智であり，まさにそれこそが蓮華舞自在であり，彼の居処である．**喜び**とは，喜ばしい故に，また一切諸仏の平等性智であるが故に喜びであり，金剛日であり，彼の居処である．**すべての者たちの本質**とは，一切諸仏の本質であり，応化身である．それ(=応化身)の自性であることによって成所作智がある．まさにそれこそがパラマーシュヴァであり，彼の居処である．

それら[の語]は全てにおいて第七格(Locative)の語尾を持つものであるが，†明瞭な間違いであるから† 第一格(Nominative)の語尾を持つものとして理解すべきである．**常に住する**とは，あらゆる時に法身としての本性が恒常であることによって，報身としての誓願が確定していることによって，応化身としての相続が恒常であることによって，不動に住するのである．**一切仏からなるもの**とは，一切諸仏の身体(=法身)と享受(=報身)と依持(=応化身)という本質を持っているから大円鏡智である．まさにそれこそがシャーシュヴァタであり，彼の居処である．**衆生**とは，[その]自性が知られるべきであることによって金剛薩埵である．

『Mahāmati註』I-9 対応箇所〔付録R参照〕

かのとは，常に存在していることによってこれがある．**自然生**とは，勝義の点から因が

存在しない故に自然生である．**世尊**とは，自在等の六つを満たすものが bhaga である．以下に説かれている通りである．

「自在，和合，智慧，名声，吉祥，

端厳かつ熾盛という六つを満たすものが bhaga であると伝えられている」

という文言から，その者には諸々の bhaga があるというのが，世尊である．**唯一**とは，無二である．法身を本質とするが故に．**超越尊**とは，超越者における尊格である．報[身]と応化身を自性として持つが故に．**五十万頌へーヴァジュラから[抽出して]五つのマンダラを説いた**とは，五十万頌から略説し，マンダラの中の主要なものに従ってダーキニーヴァジュラパンジャラと称するタントラが語られた．まさにそれ故に evaṃ mayā 云々という言葉は述べられていない．この(=VP の)広大なタントラ(=HV)に対する敬意からである．

【訳註】

I-8対応箇所に出てくる「†明瞭な間違いであるから†」という一文は，Skt写本の状態が悪いために判読の難しい箇所である．ここでは読み取れる可能性として示したSktから一応の訳語を載せたが，文脈からすると第七格を第一格として読むための何かしらの根拠が入るはずであり，文法用語や註釈文献用語が書かれている可能性も考えられる．

世尊について. ここで引用される自在等の六徳に関する偈は, 様々な文献に確認できる. また，DK I. v. 15 には六徳に関する記述が存在する．なお，この偈は様々な異読が存在しており，全く同じ形を見出すことが困難である．そのような中で,『Mahāmati 註』の示す偈と全く同じ形が，MĀ p. 3 および *Yogaratnamālā* (略号 YRM) p. 103 に確認できる．したがって，この偈の形は，HV 系の相承の中で共有されていたものである可能性が高いと考えられる．また, 徳が 7 つ確認できるため, ここでは端厳と熾盛を 1 つにまとめて考えた.

３－３．VP の５つのマンダラについて

本節では，VPの序文に相当するVP Ch. I-10からI-29を精査する．本節のおおまかな流れを示すと，まずI-10で各マンダラの名称が説かれ，次にI-11からI-15で各マンダラを構成する尊格たちが説かれる．その後のI-16からI-29は，五仏の役割や，持金剛が五仏の姿をとる目的が説かれている．

なお，ここでは五仏が様々な異名で呼ばれるため，本文をそのまま読み進めると五仏との対応関係に混乱をきたす．そこで，本論文２－４で示した五仏の異名を適宜活用しながら読み進めたい．

＜VP Ch. I-10＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

rdo rje can dang phan pa dang/ / de bzhin rdo rje gzi brjid nyid/ /

pa dma gar gyi dbang phyug dang/ / rta bdun rgyal po lnga po'o//

試訳

①**持金剛**と，②利益と，同様に③金剛光輝と．

④蓮華舞自在と，⑤七馬王という五つ[のマンダラ]である．

Ph

rdo rje can dang rtag pa dang/ / de bzhin rdo rje gzi brjid dang/ /
pa dma gar dang dbang phyag dang/ / rta'i rgyal po lnga pa'o//

試訳

①**持金剛**と，②シャーシュヴァタと，同様に③金剛光輝と，
④蓮華舞自在と，⑤馬王という５つ[のマンダラ]である．

【補記】

ここでは，主尊・ダーキニーヴァジュラパンジャラが説いたとされる５つのマンダラの各名称が示されている．これらのマンダラの名称には，各マンダラの主尊である五仏の一般名称あるいは本論文２－４で述べたような五仏の異名がそのまま用いられている．校合テクストとPhはおおよそ合致しているが，２点だけ問題がある．

まず第一点目は，シャーシュヴァタに対応する尊格が，校合テクストではphan paとなっていることである．このphan paはシャーシュヴァタの訳語とは考え難く，このようなシャーシュヴァタの異名があったものと判断せざるを得ない．本論文では，phan paの訳語を「利益」とし，シャーシュヴァタの異名として捉える．ただし，これ以降もPhでシャーシュヴァタとなっている箇所が，校合テクストではすべてphan paとなっている．したがって，phan paはシャーシュヴァタが誤訳されたものである可能性が高い．

第二点目は，パラマーシュヴァに対応する箇所が校合テクストでは七馬王，Phでは馬王となっていることである．ただし，パラマーシュヴァには馬王と七王という異名があり，七馬王も問題なくパラマーシュヴァの異名として捉えることができる．なお，VP Ch. I-15の主尊名では，校合テクストもPhも馬王となっている．

以上のように，校合テクストとPhで若干の名称の相違は確認できるが，内容の差はないといえる．

VPṬ I-10対応箇所〔付録Q参照〕

持金剛云々によってこれ(=５つのマンダラ)が説かれた．理解しやすいものである．

・５つのマンダラにおける五仏の名称

	VPの五仏の一般名称	VP Ch. I-10での名称	VP Ch. I-11から15での名称
①	ヘールカ	持金剛	ヴァジュラダーカ
②	シャーシュヴァタ	校合 利益, Ph シャーシュヴァタ	校合 金剛利益, Ph 金剛シャーシュヴァタ
③	金剛日	金剛光輝	金剛日
④	蓮華舞自在	蓮華舞自在	蓮華舞自在
⑤	パラマーシュヴァ	校合 七馬王, Ph 馬王	馬王

＜**VP Ch. I-11**＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

rdo rje mkha' 'gro'i dkyil 'khor du/ / **dkar mo** rkun ma ro langs ma/ /
gha sma r'i dang pukka s'i/ / ri khrod gdol pa g-yung mo'o//

試訳

①ヴァジュラダーカのマンダラに，②**ガウリー**，
③チャウリー，④ヴェータリー．⑤ガスマリー．⑥プッカシー．
⑦シャバリー．⑧チャンダーリー．⑨ドーンビーがいる．

Ph

rdo rje'i mkha' 'gro'i dkyil 'khor du/ / **gau'u ri'** tsau ri be ta ri'/ /
gha sma ri dang pu k+ka sī/ / sa ri tsa n+ḍa ḍom bi mo//

試訳

①ヴァジュラダーカのマンダラに，②**ガウリー**，
③チャウリー，④ヴェータリー．⑤ガスマリー．⑥プッカシー．
⑦シャバリー．⑧チャンダーリー．⑨ドーンビーがいる．

【補記】

本論文第１章でも述べた通り，このVP所説のヘールカマンダラの眷属は，DK所説のヘーヴァジュラ九尊マンダラと全く同じ構成である．

VPṬ I-11対応箇所〔付録Q参照〕

ガウリー云々によってマンダラを構成する尊格が説かれた．

『Mahāmati 註』の＜ヘールカマンダラ＞〔付録 R 参照〕

・VP と『Mahāmati 註』のヘールカマンダラ比較

	VP Ch. I-11	『Mahāmati註』		
	尊格名	対応箇所	註釈する語	尊格名
①	ヴァジュラダーカ	VP Ch. I-7	antaḥsatsukhavedin-	ヘールカ
②	ガウリ–	VP Ch. I-6	sukhāvatī-	ガウリ–
③	チャウリー		trikoṇa-	チャウリー
④	ヴェーターリー	VP Ch. I-7	araja-	ヴェーターリー
⑤	ガスマリー		vigatadoṣa-	ガスマリー
⑥	プッカシー		viraja-	プッカシー
⑦	シャヴァリー		hatakalmaṣa-	シャヴァリー
⑧	チャンダーリー		nistaraṅga-	チャンダーリー
⑨	ドーンビー		samādhi-	ドーンビー

『Mahāmati 註』MS 2b2-5.
(VP Ch. I-6 対応箇所の途中から)
[以下が]ヘールカマンダラ[における諸尊]である．
極楽とは．楽は大楽からなる智マンダラ等のことである．それ(=**sukha**)を守る(=**avati**)[すなわち]守護する[という語義解釈である]．信[力]という鉤によって引き寄せるという意味である．[したがって]極楽とはガウリーのことである．**三角形**とは．他の場所において三分別の姿を示すが故に，とはある者たち[の見解である]．智マンダラの２つの隅を固定するが故に．１つの隅との結びつきを繰り返すことの保持の故に．あるいはまた，精進[力]によって身体等に身体等を入れるが故にチャウリーである．
(VP Ch. I-7 対応箇所)
塵のないものとは，智[マンダラ]と三昧耶[マンダラ]が諸々の妄分別という塵を鎖で捕縛することによって二元性を欠くが故に塵のないものであり，憶念[力]を自性とするヴェーターリーである．**諸々の過失を離れたもの**とは， [心の]散乱という過失を余すことなく離れたものであり，金剛鈴の音によって憑依するものであるが故に，禅定[力]を本質とするガスマリーである．
塵から離れたものとは，慳貪と無悲の塵から離れた本質を有するものであるが故に布施[波羅蜜]と悲[無量心]と歓喜[地]（＝十地の中の初地）と地界[界]を自性とするプッカシーである．**罪過を打ち砕いたもの**とは．悪しき習慣と無慈という罪過が打ち砕かれていることによって戒[波羅蜜]と慈[無量心]と離垢地(=第二地)と水界を自性とするシャバリーである．**波がないもの**とは，愚癡と不忍辱の波から離れているが故に忍辱波羅蜜と喜[無量心]と発光地(=第三地)と火界を自性とするチャンダーリーである．**三摩地**とは，懈怠や[心の]散乱等を破壊するが故に精進波羅蜜と捨[無量心]と焔慧地(=第四地)と無功用(=風界)を自性とするドーンビーである．**内面的な正しい快楽を知るもの**とは，内面的な(antaḥ)[すなわち]内部において世間と出世間の諸々の快楽が静まり，不動なる力を展開する支配する本質を有するが故に，正しい(sat)[すなわち]素晴らしい快楽が正しい快楽(satsukha)であり，それ(=正しい快楽)を知るために†道を開く，+++習慣†自性がある，というのが正しい快楽を知るヘールカである．
【訳註】
『Mahāmati註』では，ヘールカマンダラを構成する女尊たちの本質が述べられている．これらの本質は，ガウリ–からガスマリーまでが五力，プッカシーからドーンビーまでが六波羅蜜・四無量心・十地・四大の一部に当て嵌まっている．なお，五力と四大に関しては，＜VP Ch. I-2＞で示したナイラートミヤー十五尊マンダラにおける各女尊の本質と同じである．ここではさらに，プッカシー以下の四女尊に対して四無量心と十地の最初の四地を加えた本質を説明している．

・ヘールカマンダラを構成する尊格の本質

ガウリー	信[力]			
チャウリー	精進[力]			
ヴェーターリー	憶念[力]			
ガスマリー	定[力]			
プッカシー	布施波羅蜜	悲無量心	歓喜地	地界
シャヴァリー	戒波羅蜜	慈無量心	離垢地	水界
チャンダーリー	忍辱波羅蜜	喜無量心	発光地	火界
ドーンビー	精進波羅蜜	捨無量心	焔慧地	無功用 (=風界)

＜**VP Ch. I-12**＞〔付録P参照〕

校合テクスト

rdo rje phan pa'i dkyil 'khor du/ / skam pa zhags pa nyi ma dang/ /
dol zlum ma dang lcags kyu 'dzin/ / **me tog ma sogs** mtshams kyi char//

試訳

①金剛利益(=シャーシュヴァタ)のマンダラに,
②サンダンシャー．③パーシニー．④ヴァーグラー，⑤アンクシーがおり,
⑥**プシュパーなど**は隅にいる．

Ph

rdo rje rtag pa'i dkyil 'khor du/ / skam pa mo dang zhag ldan nyid/ /
nya gdol ma dang lcags kyu 'dzin/ / **me tog la sogs** grwa'i char//

試訳

①金剛シャーシュヴァタのマンダラに
②サンダンシャー．③パーシニー．④ヴァーグラー，⑤アンクシーがおり,
⑥**プシュパーなど**は隅にいる．

VPṬ I-12 対応箇所〔付録 Q 参照〕

プシュパーなどとは，プシュパーとドゥーパーとディーパーとガンダーたちである．

【訳註】

プシュパー以下の四女尊は,『Mahāmati 註』と共通している．なお，このシャーシュヴァタマンダラの女尊たちは，STTS の四摂菩薩[33](鉤・索・鎖・鈴)と外の四供養[34](香・華・灯・塗)に酷似している[35]．また，シャーシュヴァタの異名に毘盧遮那があることからも，このマンダラが金剛界マンダラを特に意識していることが分かる．ただし，四摂菩薩の鎖(スポータ)と鈴(ガンタ)に対応する尊格がおらず, 代わりに鋏女(サンダンシャー)と網女(ヴァーグラー)が入っている．なお，後述する蓮華舞自在マンダラには鎖女(スポーター)が含まれている．

『Mahāmati 註』の＜シャーシュヴァタマンダラ＞〔付録 R 参照〕

・VP と『Mahāmati 註』のシャーシュヴァタマンダラ比較

	VP Ch. I-12 尊格名	『Mahāmati註』		
		対応箇所	註釈する語	尊格名
①	校合 金剛利益 Ph 金剛シャーシュヴァタ	VP Ch. I-2	loka-	シャーシュヴァタ
②	サンダンシャー(鋏女)		bhūr, bhuvas, svar	サンダンシャー
③	パーシニー(索女)		antara-	パーシニー
④	ヴァーグラー(網女)		manas-	ヴァーグラー
⑤	アンクシー(鉤女)		vigraha-	アンクシー
⑥	プシュパー(華女)など		vāc-	プシュパー
⑦			eka-	ドゥーパー(焼香女)
⑧			dva-	ディーパー(灯明女)
⑨			kha-, rati-,	ガンダー(塗香女)

『Mahāmati註』 MS 1b7-2a2.

(VP Ch. I-2 対応箇所の再説から)

器世間とは，阿頼耶識の転依によって[意識が変化して認識が生じ]，この内の，**器**が楼閣となり，**世間**は[衆生世間と器世間の内の]片方であり，菩薩の享受する身体を持ち，諸仏の大円鏡智であるところのシャーシュヴァタとなる．**地下・地上・天**とは，地下と地上と天に存在する悪しき者たちの首を引きちぎることからサンダンシャーである．**空界**とは中間の場所において悪しき者の捕縛と捜索をすることからパーシニーである．**心**とは，清浄な世間心の分別の網によって悪しき者の捕縛をすることからヴァーグラーである．**身**とは，悪しき者の身体を突き刺してから引き寄せるからアンクシーである．**語**とは，仏法[36]という菩提の支分[37]を本質として持つもの等を正しい華籠(=経典) [38]によって知らしめるが故にプシュパーである．**一**とは，一切法が無漏なる焼香のみを本質としているが故にドゥーパーである．**二**とは，悲であり油である仏の徳から転じて生じたるものがディーパーである．二元性という暗闇を除去するものである不二という光明を自性とするが故に．**虚空・快楽**とは，全虚空に遍満していて．無上なる法界の喜ばしく素晴らしい香りを本質とするが故にガンダーである．

＜VP Ch. I-13＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

rdo rje nyi ma'i dkyil 'khor du/ / nyi lag ma dang mar me ma/ /

rin chen sgrol ma glog lag ma/ / **l'a sye la sogs** mtshams char ro//

試訳

①金剛日のマンダラに②スールヤハスター．③ディーパー．

④ラトノールカー．⑤タディトカラーがおり，⑥**ラースヤーなど**は隅にいる．

Ph

rdo rje nyi ma'i dkyil 'khor du/ / nyi phyag ma dang mar me ma/ /
rin chen sgron ma glog phyag ma/ / **sgeg mo la sogs** gra'i char//

試訳

①金剛日のマンダラに②スールヤハスター．③ディーパー．
④ラトノールカー．⑤タディトカラーがおり，
⑥**ラースヤーなど**は隅にいる．

VPṬ I-13対応箇所〔付録Q参照〕

ラースヤーなどとは，ラースヤーとギーターとヌリトヤーとハースヤーたちである．

【訳註】

ラースヤー以下の四女尊は，『Mahāmati 註』と共通している．なお，このラースヤー以下の四女尊たちは，内の四供養[39](嬉・慢・歌・舞)に酷似している．ただし，慢女(マーラー)に対応する尊格がおらず，代わりに笑女(ハースヤー)が入っている．

『Mahāmati 註』の＜金剛日マンダラ＞〔付録 R 参照〕

・VP と『Mahāmati 註』の金剛日マンダラ比較

	VP Ch. I-13 尊格名	『Mahāmati註』		
		対応箇所	註釈する語	尊格名
①	金剛日	VP Ch. I-3	ṣaṭ-, pañca-	金剛日
②	スールヤハスター(日手女)		dviṣaṭka-	スールヤハスター
③	ディーパー(灯女)		catur-	ディーパー
④	ラトノールカー(宝炬女)		jagat-	ラトノールカー
⑤	タディトカラー(雷光女)		ekonaviṃśat-	タディトカラー
⑥	ラースヤー(嬉女)など		traidhātuka-m-aśeṣa-	ラースヤー
⑦		VP Ch. I-4	pitṛ-	ハースヤー(笑女)
⑧			putra-	ギーター(歌女)
⑨			mātṛ-	ヌリトヤー(舞女)

『Mahāmati 註』 MS2a2-4.

(VP Ch. I-3 対応箇所)

[以下]金剛日のマンダラにおける[尊格である]．**六と五**とは，慢等の６つの悪(六煩悩＝貪・瞋・癡・慢・疑・見)と５つの障碍(=①存在[の妄分別]②目的[の妄分別]③我の妄分別と．④行と⑤活動)の対治であるが故に，平等性[智]であり[六]慢であり受[蘊]という姿を持つ金剛日である．**十二**とは，[一日を刻む]十二の日輪[時間](=１日)を包摂する日輪によって愚かさという夜を退けるが故にスールヤハスターである．**四**とは，四瑜伽[40]の境地における智慧の光明によって妄分別という暗闇を除くが故にディーパーである．**諸世間**とは，世間の闇を照らすが故にラトノールカーである．**十九**とは，十八界と人である．それら(=十

八界と人)の対治である不二という光明を自性とするが故に．この故にこそ，妄分別の雲を取り除くものであるタディトカラーである．**三界に属するものを余すこと無く**とは，三界に属するもの全てを余すこと無く踊りの手によって示しているラースヤーである．
(VP Ch. I-4 対応箇所)
父とは，煩悩等の覆い(**pi**naddha-)を征服させる(**tā**rayati √tṛ)というのが父(pitā)である．[したがって]勝義諦たる宝冠を遊戯[の姿勢]で保持しているマーラーである．**子**とは，解脱の城(**pu**ra-)へ入る時に無上の法を説示する歌の音によって守る(**trā**yata√trai)，というのが**子たち**(putrā)であり，ギーターである．**母**とは，[手]印という甘露によって悪(**mā**ra-)の大海から抜け出させる[**tāra**yanti √tṛ]が故に．母たち(mātaraḥ)であり，ヌリトヤーである．

＜VP Ch. I-14＞〔付録 P 参照〕
校合テクスト
pa dma chos 'byung lcags sgrog dang/ / 'khyud ma gar gyi dkyil 'khor du/ /
gling bu ma sogs mtshams kyi char/ / bdag nyid cha byad sbyor bas so//
試訳
②パドマー．③ダルモーダヤー．④スポーター
⑤スヴァシュレーシャーが①[蓮華]舞[自在]のマンダラにいる．
⑥**ヴァンシャーなど**は隅にいる．それ自体の姿と結びつくことによって．
Ph
pad ma gar dbang dkyil 'khor du/ / pad ma ma dang chos 'byung ma/ /
lcags sgrogs ma dang sdom ma dang/ / **gling bu** la sogs grwa'i char/ /
rang rang dbyibs su sbyar ba'o//
試訳
①蓮華舞自在のマンダラに②パドマー③ダルモーダヤー
④スポーター⑤スヴァシュレーシャーがおり，
⑥**ヴァンシャーなど**は隅にいる．それぞれの姿を結びつけるものである．

VPṬ I-14対応箇所〔付録Q参照〕
ヴァンシャーなどとは，ヴァンシャーとヴィーナーとマルダラーとムラジャーたちである．
【註記】
ヴァンシャー以下の四女尊の中で，『Mahāmati註』ではマルダラーがムクンダーになっている．ただし，マルダラーもムクンダーも共に太鼓の一種であることには変わりはない．なお，このラースヤー以下の四女尊たちは，SSの楽器女たちを取り入れたものとされている[41]．SSの楽器女にはマルダラーではなくムクンダーが入っており，VPṬよりも『Mahāmati註』の名称に合致する．

『Mahāmati 註』の＜蓮華舞自在マンダラ＞〔付録 R 参照〕

・VP と『Mahāmati 註』の蓮華舞自在マンダラ比較

	VP Ch. I-14 尊格名	『Mahāmati註』		
		対応箇所	註釈する語	尊格名
①	蓮華舞自在	VP Ch. I-4	bāhyārtha-	蓮華舞自在
②	パドマー(蓮華女)		abhyantara-	パドマー
③	ダルモーダヤー(法源女)		sarvayoṣit-, dharma-	ダルモーダヤー
④	スポーター(鎖女)		sarvakarma-	スポーター
⑤	スヴァシュレーシャー(自抱女)		anātman-	スヴァシュレーシャー
⑥	ヴァンシャー(笛女)など	VP Ch. I-5	phala-	ヴァンシャー
⑦			hetu-	ヴィーナー(琵琶女)
⑧			kāryākhya-	ムクンダー(太鼓女) *VPṬではマルダラー
⑨			sādhya-, sādhanavajrin-	ムラジャー(鼓女)

『Mahāmati註』 MS2a4-6.

(VP Ch. I-4対応箇所の続きから)

[以下]蓮華舞自在マンダラにおける[尊格たちである]．**外界の対象**とは，所取等(=外界)の妄分別を一切法に対する妙観察智の対象(**artha**-)として [外へ]運ばせる(**vāhaya**ti √vah caus.)というのが**外界であり対象**であって，世尊・蓮華部自在のことである．そしてまた**内的**という内的とは内なる蓮華であり．大悲によって大欲の蓮華を明示していることから(大悲が大欲の蓮華として示現している)パドマーである．**すべての女性．法**とは，大楽を増大させる法源を保持するが故にダルモーダヤーである．**一切事業**とは，一切諸仏の菩提への愛情と結びつける諸々の事業におけるスポーターである．**無我**とは．無我なる一切法を示すものであり，仏への欲と結びつけることによって自身を抱擁することを明示するが故にスヴァシュレーシャーである．

(VP Ch. I-5 対応箇所)

果とは，空性の果（=消えてしまうもの）のように笛の穴の印によって音を奏でつつあるヴァンシャーである．**因**とは，捨て去るべき貪欲等にとっての天秤であり，[すなわち]因は，音によって作られたものの生と滅を明示しているというヴィーナーである．**所作と呼ばれるもの**とは，太鼓の一面で演奏する姿勢によって菩提たる無我の所作を示しているムクンダーである．**成就されるべきものと成就をもたらす持金剛**とは．望ましい姿勢を構えるものたちによって原因を伴った三身を示すが故にムラジャーである．

＜VP Ch. I-15＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

rta yi rgyal po'i dkyil 'khor du/ / rdo rje sgo lcags lde kyog ma/ /
sgo ma dang ni gos 'dzin ma/ / de bzhin mtshams su **spyan** la sogs//

試訳

①馬王のマンダラに②金剛ターラカー③クンチカーダーリニー
④カパーター⑤パタダーリニー同様に隅に⑥**ローチャナーなど**がいる．

Ph

rta'i rgyal po'i dkyil 'khor du/ / rdo rje sgo lcags lde mig ma/ /
sgo 'dzin ma dang yol ba 'dzin/ / **spyan** sogs de bzhin gra rnam su//

試訳

①馬王のマンダラに②金剛ターラカー③クンチカダーリニー
④カパーター⑤パタダーリニー⑥**ローチャナーなど**は同様に隅にいる．

VPṬ I-15対応箇所〔付録Q参照〕

ローチャナーなどとは，ローチャナー，マーマキー，パーンダラー，ターラーたちである．

【註記】

ローチャナー以下の四女尊は，『Mahāmati註』と共通している．なお，このローチャナー以下の四女尊たちは，GSの四仏母を取り入れたものとされている[42]．

『Mahāmati 註』の＜パラマーシュヴァマンダラ＞〔付録 R 参照〕

・VP と『Mahāmati 註』のパラマーシュヴァマンダラ比較

	VP Ch. I-15 尊格名	『Mahāmati註』		
		対応箇所	註釈する語	尊格名
①	馬王	VP Ch. I-5	ālayavijñāna-	馬王
②	金剛ターラカー(錠女)		dharmadhātu-	金剛ターラカー
③	クンチカダーリニー(鍵持女)		anudbhava-	クンチカダーリニー
④	カパーター(扉女)	VP Ch. I-6	sattvadhātu-	金剛カパーター
⑤	パタダーリニー(幕持女)		khadhātu-	金剛カーンダパター (天幕女)
⑥	ローチャナーなど		anātman-	ローチャナー
⑦			ātmasaṃjñin-	マーマキー
⑧			vibhāva-	パーンダラー
⑨			anabhāva-	ターラー

『Mahāmati 註』 MS2a6-2b2.

(VP Ch. I-5 対応箇所の続きから)

[以下]パラマーシュヴァにおける[諸尊である]

すなわち阿頼耶識と同様にとは．妄分別を伴った変化する身体を示現するが故に阿頼耶識であるのと同様に，成所作[智]と行蘊を本質として持つ者であるが故に，パラマーシュヴァである．**法界**とは，無漏界(煩悩・汚れの無い根源の境地)の性質をもって一切智智を守護するものであるが故に金剛ターラカーである．**不出生**とは．智慧を保持し．[智慧に]覆われた状態であることによって煩悩や妄分別等が入らないものであるが故にクンチカーダーリニーである．

(VP Ch. I-6 対応箇所)

衆生界とは，衆生界が無始無終の状態であり，智慧の生起から分離しないことによって断じた過失等が生じないが故に金剛カパーターである．**虚空界**とは．自分に似た女性を守護することによって虚空界を覆う天幕を持つものであるが故に金剛カーンダパターである．**無我**とは．無我は一切諸仏の心を本質とすることによって大円鏡智を本質とする毘盧遮那であり．その(=毘盧遮那の)法性たる地[大]の平等性を持つものであるが故にローチャナーである．**我と呼ばれるもの**とは．２つのことを取り除くから不二という名の場所がある．すなわち我という名はマーマキーのことである．**非存在**とは．消滅したもの(=非存在)と存在という妄分別を２つを欠いた状態のもので断絶するという法性を有するからパーンダラーである．**非非存在**とは．まさに存在においてであり．種々なる仏陀の化[身]が余すことなき世界において扇動するものであり．法性によってターラーとなる．

【註記】

VP本文でパタダーリニーになっている箇所が，『Mahāmati註』ではカーンダパターになっている．ただし，どちらも幕に関係する女尊であることに変わりはないといえる．

＜VP Ch. I-16＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

rdo rje mkha' 'gro de rnams kun/ / rkang pa g-yon pa brkyang bas gnas/ /

snying gar g-yon bcangs sdigs mdzub ste/ / **kha dog sna tshogs** cher 'bar ba'o//

試訳

全てのヴァジュラダーカたちは展左の姿勢であり，

左[手]の胸の前にある拳で祈克印をなし，**種々の色**で猛烈に燃えている．

Ph

rdo rje mkha' 'gro ma rnams kun/ / g-yon pa'i zhabs rnams brkyang bas bzhugs/ /

snying khar khu tshur g-yon sdig 'dzub/ / **sna tshogs kha dog** cher 'bar ma//

試訳

全てのヴァジュラダーキニーたちは展左の姿勢であり，

左[手]の胸の前にある拳で祈克印をなし，**種々の色**で猛烈に燃えている．

【補記】

校合テクストはヴァジュラダーカであるが，Phではヴァジュラダーキニーになっている．これだけではどちらが正しいとも判断できないが，次に示すVPṬで「彼女たちの（āsām）」という女性形になっていることから，ここではPhのヴァジュラダーキニーが正

しい読みと考えられる．

VPṬ I-16対応箇所〔付録Q参照〕

種々の色をしたものとは，白等の色を具えた者たちである．彼女たちの色彩は具会マンダラにおいて理解されるべきものである．

【訳註】

NYĀによれば，ダーキニーたちの筆頭であるガウリ–は白色である[43]．したがって，「白」とはガウリ–の色を指していると考えられる．

「具会マンダラ」とは，VPの五族それぞれのマンダラが１つに集合している五部マンダラを指している．なお，VPṬには具会マンダラを端的に表現する以下の一文が説かれている．

・VPṬ5a7

maṇḍalaṃ pañceti, saṃhāramaṇḍalaṃ maṇḍalapañcakātmakaṃ.

試訳

５つのマンダラとは，積集されたマンダラであり，

５つからなるマンダラである．

このように，VPの五部マンダラは５つのマンダラが集まったものであり，マンダラの１つずつが独立していることが分かる．

＜VP Ch. I-17＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

shin tu zhe sdang zhe sdang che/ / gau rī la sogs rab tu grags/ /

shin tu gti mug rmongs chen las/ / skam pa ma sogs cher gzung ngo//

試訳

過度の瞋恚に対する大瞋恚(=ヘールカ)はガウリ–を始めとするものがよく知られている．**過度の愚癡**に対する**大愚癡**(=シャーシュヴァタ)によりサンダンシャーを始めとするものがよく理解されている．

Ph

shin tu zhes sdang zhe sdang che/ / gau rī la sogs rab grags pa/ /

shin tu gti mug rmongs chen phyir/ / skam pa la sogs cher 'bar ba'o//

試訳

過度の瞋恚に対する大瞋恚(=ヘールカ)はガウリ–を始めとするものがよく知られている．**過度の愚癡**に対する**大愚癡**(=シャーシュヴァタ)によりサンダンシャ[ー]を始めとするものが猛烈に燃えている．

【補記】

「大愚癡」は，本論文２–４で示した五仏の異名の中のシャーシュヴァタの異名に該当する．また，ガウリ–およびサンダンシャーが続くことから，大瞋恚がヘールカの異名であり，大愚癡がシャーシュヴァタの異名であることは確実である．

VPṬ I-17対応箇所〔付録Q参照〕

過度の愚癡云々とは．衆生たちのずば抜けた(**atiśayitam**)愚かさ(**moha**)であるのが**過度の愚癡**であり，心の迷妄である．それの除去のための**大愚癡**は大いなる勇気である．それ故にそれ(大愚癡=シャーシュヴァタ)を本質とする[女尊]たちであるという意味である．

＜**VP Ch. I-18**＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

shin tu gzi brjid cher gsal ba/ / nyi lag ma sogs rab tu grags/ /

shin tu 'dod chags chags chen las/ / pad sogs chos kyi dkyil 'khor du'o//

試訳

過度の輝きに対する**大光**(=金剛日)はスールヤハスターを始めとするものがよく知られている．**過度の貧欲**に対する**大貧欲**(=蓮華部自在)によりパド[マー]を始めとする法[部]マンダラを[理解するべきである].

Ph

shin tu gzi brjid cher 'bebs pas/ / nyi ma la sogs rab tu grags/ /

shin tu 'dod chags chags chen phyir/ / pad sogs chos kyi dkyil 'khor du'o//

試訳

過度の輝きに対する大下落(=金剛日)によって，スールヤ[ハスター]を始めとするものがよく知られている．**過度の貧欲**に対する**大貧欲**(=蓮華部自在)によりパド[マー]を始めとする法[部]マンダラを[理解すべきである].

【補記】

校合テクストは「大光」になっているが，Phは「大下落」になっている．「大光」は，金剛日の異名に当て嵌まると考えられるが，「大下落」は異名として違和感がある．日輪が地平線に沈んでいく様を異名としたとも考えられるが，どちらかといえばVPṬにも合う「大光」が正しいと考えられる．

「大貧欲」は，本論文２－４の蓮華舞自在の異名に当て嵌まり，法部のマンダラであることが示されている

VPṬ I-18対応箇所〔付録Q参照〕

過度の輝きとは，ずば抜けた(**atiśayitam**)輝き(**tejas**)であり，衆生たちの思い上がりのことである．それ（=思い上がり）を除去するために**大光**があり，それこそが精力的な状態である．**力があること**とは，それ（＝大いなる輝き）によって[すなわち]そのような本質によってという意味である．**過度の貧欲**とは感覚対象への執着である．それの除去のための**大貧欲**は大いなる執着であり，専心することである．したがって，それ(=大貧欲)を本質とする[女尊]たちという意味である．

＜VP Ch. I-19＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

phrag dog chen po sgrib chen las/ / sgo lcags ma sogs myur 'gro bdag/ /
rgyal ba mgon po phan pa ni/ / gti mug thams cad zad par mdzad//

試訳

大慳貪と**大妨害**(=パラマーシュヴァ)からターラカーを始めとする馬[を本質とする女尊たち]がいる．主たる勝者の利益たる愚癡は一切の暗闇を滅尽するものである．

Ph

phrag dog chen po'i sgrib chen phyir/ / sgo lcags la sogs myur 'gror ro/ /
rgyal ba mgon po rtag pa ni/ / gti mug thams cad zang mdzad pa'o//

試訳

大慳貪の**大妨害**(=パラマーシュヴァ)のためにターラカーを始めとする馬[を本質とする女尊たち]がいる．主たる勝者のシャーシュヴァタたる愚癡は一切の暗闇を滅尽するものである．

【補記】

これまでは「過度」が劣ったものであり，それに対する「大」という優れた尊格の本質が示されていた．しかし，パラマーシュヴァのみ「過度」がなく，「大」が２つ説かれている．VPṬでは大慳貪が劣ったものとして扱われているが，Ch. I-21では大慳貪がパラマーシュヴァの本質となっている．したがって，大慳貪も大妨害も共にパラマーシュヴァの本質であると考えられる．

VPṬ I-19対応箇所〔付録Q参照〕

大慳貪は自分の物に対する他者たちの意識活動を妨げる心の働きである．それ(=大慳貪)を大変な努力によって覆い隠す，包み込む，やめさせる，というのが**大妨害**であり，大きな勇気である．したがって，それ(=大妨害)を本質とする[女尊]たちという意味である．

＜VP Ch. I-20＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

rdo rje nyi ma rgyal po che/ / rnam par rtog pa'i rab rib 'phrog/
rta mgrin 'dod pa chen po ni/ / 'dod chags can gyi byang chub ster//

試訳

金剛日たる大王は，妄分別の暗闇を奪うものである．
ハヤグリーヴァ(=蓮華舞自在)たる大貪欲は，持貪欲者の菩提を与えるものである．

Ph

rdo rje nyi ma rgyal chen po/ / rnam par rtog pa'i rab rib 'joms/ /
'dod pa chen po'i gar dbang ni/ / chags ldan rnams kyi byang chub rtsol//

試訳

金剛日たる大王は，妄分別の暗闇を破壊するものである．
大貪欲の[蓮華]舞自在は，持貪欲者たちの菩提[獲得]に努めるものである．

【補記】

金剛日の直後に「大王rgyal po che」という語が続いている．大王は金剛日の異名であるが，文脈から考えればここには「大慢nga rgyal chen」といった金剛日に対応する慢に関する語が入るべきである．したがって，Tibのrgyalは，nga rgyalの短縮形として用いられた可能性もある．

Phで[蓮華]舞自在となっている箇所が，校合テクストではハヤグリーヴァになっている．しかし，本論文２－４で示した通り，ハヤグリーヴァは蓮華舞自在の異名であるため，内容の差はないといえる．

VPṬ I-20対応箇所

なし

＜**VP Ch. I-21**＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

rdo rje mgyogs 'gro phrag dog che/ / **theg pa gzhan** ni rnam bar spangs/ /

rdo rje sems dpa' rgyal po che/ / **mi bskyod ye shes 'byung ba'i gnas//**

試訳

金剛馬(=パラマーシュヴァ)たる大慳貪は，**他の乗**を退けるものである．

金剛薩埵大王（＝ヘールカ）は，**阿閦の智慧の根源**である．

Ph

rang 'byung rdo rje phrag dog che/ / **theg pa gzhan** ni rnam sbas pa'o/ /

rdo rje sems dpa' rgyal chen ni/ / **mi skyod ye shes 'byung gnas te//**

試訳

自然生金剛(=パラマーシュヴァ)の大慳貪は，**他の乗**を退けるものである．

金剛薩埵大王（＝ヘールカ）は，**阿閦の智慧の根源**である．

【補記】

校合テクストで金剛馬となっている箇所が，Phでは自然生金剛になっている．本論文２－４で示した通り，金剛馬はパラマーシュヴァの異名であるが，自然生はヘールカの異名である．しかし，続く文の大慳貪はパラマーシュヴァの本質であるため，ここにヘールカの異名が入ることには問題がある． そのため，Phには五仏の異名の混同があった可能性があるが，ここでは金剛馬と自然生金剛もどちらもパラマーシュヴァの異名と考えられる．

金剛薩埵はヘールカの異名に当たるが，大王は金剛日の異名である．既にVP I-20で金剛日の異名に大王が出てきているため，ここでは金剛薩埵大王というヘールカの異名であると考えた．

VPṬ I-21対応箇所〔付録Q参照〕

他の乗は声聞等の乗である．**金剛薩埵**とは，阿閦である．**阿閦の智慧の根源**とは，煩悩と妄分別によって動揺しない空性智の，そこから他者(=阿閦以外の者)において生じるもの（=根源），それがそのように(=阿閦の智慧の根源)呼ばれるであるという意味である．

＜VP Ch. I-22＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

skye 'gro mi zad mgron gnyer phyir sgrib pa lnga ni 'joms pa po//

試訳

世間を不滅に招くために五障碍の破壊者がいる．

Ph

skye 'gro mi bzad 'gron gnyer phyir sgrib pa lnga ni 'joms pa'o//

試訳

世間を不滅に招くために五障碍の破壊者がいる．

Skt復元

jagad akṣaye nimantrārtham pañcāvaraṇaghātakaḥ //

試訳

世間を不滅に招くために五障碍の破壊者がいる．

VPṬ I-22対応箇所〔付録Q参照〕

世間云々とは．**世間**とは，衆生の集まりである．**不滅**[すなわち]空性智に，**招くために**[すなわち]顔を向けさせるためにである．

五障碍の破壊者とは，５つの[すなわち]①我[の妄分別]，②存在[の妄分別]．③目的の妄分別，④行，⑤活動という５つの智慧のであり，空性智の障碍を破壊する者[すなわち]殺害者(hantṛ-)という意味である．

【訳註】

VPṬの解釈を補って読めば，衆生たちの顔を空性智の方に向けさせるために空性智の五障碍を破壊する者がいる，といった意味の一文になる．問題は，この中の五障碍をどのように解釈するかということにある．VP本文を読む限りでは，障碍は①瞋恚，②愚癡，③慢，④貪欲，⑤慳貪と考えるのが自然である．一方，VPṬに従えば，五障碍は①我[の妄分別]，②存在[の妄分別]，③目的の妄分別，④行，⑤活動という五つの智慧であると読み取れる．ただし，このままでは五障碍が何を指しているのか分からない．なお，VPṬにはVP Ch. XIVに対する註釈文の中でも五障碍に対する註釈が出てくるが全く異なる解釈をしているため参考にならない[44]．そもそも，障碍āvaraṇa-が智慧jñāna-であるという解釈には違和感がある．あるいは，本来は智慧jñānaではなく識vijñāna-であった可能性も考えられる．まず，我の妄分別が存在の妄分別を生み，存在の妄分別が目的の妄分別を生む．その目的の妄分別が行saṃskāra-を生み，行が活動pravṛtti-につながるという５つの識別作用であるならば，十二因縁にも通じる，菩提獲得に対する障碍と解釈することができる．

＜**VP Ch. I-23**＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

de bzhin gshegs pa'i rnam par dag pa'i rdo rje zhes bya ba'i ting nge 'dzin to//

試訳

[以上が]如来の清浄なる金剛と称する三摩地である．

Ph

de bzhin gshegs pa'i rnam par dag pa'i rdo rje zhes bya ba'i ting nge 'dzin to//

試訳

[以上が]如来の清浄なる金剛と称する三摩地である．

VPṬ I-23対応箇所

なし

＜**VP Ch. I-24**＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

zhe sdang gti mug nga rgyal dang/ / 'dod chags **ser sna** skye bo rnams/ /

bsdu phyir rang gi 'khor lo la/ / rdo rje gzugs ni **du ma** 'dzin//

試訳

怒る人．愚かな人．高慢な人・欲する人・**貪る人**という人々を

積集するために，自らの輪において**様々な**金剛の姿をとる．

Ph

zhe sdang gti mug nga rgyal dang/ / skye bo chags ldan **ser sna** dang/ /

bsdu phyir rdo rje can 'khor lo/ / **du ma**'i rnam par rang nyid gyur//

試訳

怒る人・愚かな人・高慢な人・欲する人・**貪る人**という人々を

積集するために，持金剛は自ら**様々な**マンダラの形となる．

【補記】

怒る人はヘールカ，愚かな人はシャーシュヴァタ，高慢な人は金剛日，欲する人は蓮華舞自在，貪る人はパラマーシュヴァに対応している．この一文から，持金剛は対象となる者の性質もしくは煩悩に応じて様々な形をとり，それが５つのマンダラとして示されたものであると考えられる．

VPṬ I-24対応箇所〔付録Q参照〕

貪る人とは，慳貪な人である．**様々**とは，五種である．

＜VP Ch. I-25＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

shin tu gdug pa drag po la/ / zhi ba nye bar mi sbyar te/ /
'di mkhyen rdo rje can chen ni/ / rang gis kye yi rdo rjer 'gyur//

試訳

過度の暴悪な者に寂静は役に立たない．
これを知る大持金剛は自らヘーヴァジュラ(=ヘールカ)となる．

Ph

shin tu gdug cing drag pa la/ / zhi bas phan par mi 'gyur bas/ /
de ltar rdo rje can gzigs te/ / rang nyid dgyes pa'i rdo rjer mdzad//

試訳

過度の危険である暴力は，寂静によって役に立たなくなるので，
そのような持金剛(=ヘールカ)の御姿があり，自らヘーヴァジュラとなる．

VPṬ I-25対応箇所

なし

＜VP Ch. I-26＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

shin tu stong par zhen rnams kyi/ / yod min brtul zhugs 'dzin rnams kyi/ /
sangs rgyas gti mug sbyong don du/ / rdo rje **rdzogs pa'i sangs rgyas** 'gyur//

試訳

過度の空に執着した者たち[すなわち]存在しないものにこだわっている者たちの
愚癡を浄化するために仏(=シャーシュヴァタ)は金剛**仏性**を獲得する．

Ph

shin tu stong par zhen rnams dang/ / med pa'i rtul zhugs 'dzin rnams kyi/ /
don du sangs rgyas gti mug 'jig/ rdo rje can **rdzogs sangs rgyas** gyur//

試訳

過度の空に執着した者たちと存在しないものにこだわっている者たちの
ために仏(=シャーシュヴァタ)は愚癡を破壊する．持金剛は**仏性**を獲得する．

VPṬ I-26対応箇所〔付録Q参照〕

過度の空に執着した者たちとは，一切が存在しないものと考えてしまっている者たちである．**仏性**とは毘盧遮那の本質である．

＜VP Ch. I-27＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

shin tu nga rgyal gdug rnams kyi/ / skye 'gro'i nga rgyal zad par mdzad/ /
rdo rje nyi ma bdag nyid rgyal/ / nga rgyal chen po'i mun pa 'joms//

試訳
過度の慢を持つ悪い者たちの世間の慢を滅ぼすものである．
[持金剛は]自ら金剛日王となり，大慢が暗闇を破壊する．
Ph
shin tu nga rgyal gdug pa rnams/ / skye 'gro'i nga rgyal zad mdzad pa/ /
rdo rje nyi rgyal rang nyid ni/ / nga rgyal chen po'i mun pa 'joms//
試訳
過度の慢を持つ悪い者たちの世間の慢を滅ぼすものである．
[持金剛は]自ら金剛日王となり，大慢が暗闇を破壊する．

VPṬ I-27対応箇所
なし

＜VP Ch. I-28＞〔付録 P 参照〕
校合テクスト
byang chub chags bral las skyes spangs/ / sems can gang zhig bde byed pa/ /
chags pas byang chub rab grub phyir/ / padma gar gyi dbang phyug gyur//
試訳
離貧欲から生じる菩提を退けて衆生を喜ばせるもの，そのような者(=持金剛)は，
貧欲によって正覚を獲得するために蓮華舞自在となる．
Ph
skye bo chags bral byang chub spangs/ / sems can gang zhig bde byed par/ /
chags pas byang chub rab bsgrub phyir/ / pad ma gar dbang phyug tu gyur//
試訳
離貧欲の菩提を退けて衆生を喜ばせるもの，そのような者(=持金剛)は，
貧欲によって正覚を獲得するために蓮華舞自在となる．

VPṬ I-28対応箇所
なし

＜VP Ch. I-29＞〔付録 P 参照〕
校合テクスト
thams cad mkhyen pa'i lam gnas shing/ / gang zhig lam gzhan nas 'gro ba/ /
de rnams byang chub rab sbyin phyir/ / rdo rje mgyogs 'gro rang gtso bo//
試訳
一切智者の道に住しつつ．どこか別の道に行く者がいる．
彼らに正覚を与えるために[持金剛は]金剛馬として自ら主となる．
Ph
kun mkhyen lam la gnas nas ni/ / gang zhig lam ni gzhan 'gro ba/ /
de ni byang chub rab sbyin phyir/ / mnga' bdag rdo rje rang 'byung nyid//

試訳

一切智者の道に住してから，どこか別の道に行く者がいる．

彼は[人々に]正覚を与えるために主(=持金剛)は金剛自然生となる．

【補記】

ここでの「一切智者の道」とは仏教徒のことを指し，「別の道」とは非タントリストを指していると考えられる．すなわち，パラマーシュヴァは，仏教徒でありながらタントラを信奉しない部派や大乗の仏教徒を取り込む役割があると考えられる．

VPṬ I-29対応箇所

なし

以上のように，Ch. I-10から29では主尊・ダーキニーヴァジュラパンジャラが説いた５つのマンダラを構成する五仏と女尊たちが示される．しかし，五仏は様々な異名で呼ばれているため，字句をそのまま追っただけでは混乱を招きやすい文章構造になっている．本論文２–４で示した五仏の異名は，本節において非常に有用であるが，他方で合致していない異名も散見されることが分かる．VPでは，その記述がどの仏を指したものであるのかを確定するには，異名や各仏の本質などを勘案した総合的な判断が必要なことが分かる．

・VP Ch. Iの五仏

五仏とその役割	Ch. I での異名	本質	持金剛が各仏の姿をとる目的
ヘールカ 役割 : 阿閦の智慧の根源(Ch. I-21)	持金剛，大瞋恚，ヴァジュラダーカ，金剛薩埵大王，ヘーヴァジュラ	瞋恚	過度の暴悪な者には寂静が役に立たないから[過度の暴悪な者に対抗するため](Ch. I-25)
シャーシュヴァタ 役割 : 一切の暗闇を滅尽する(Ch. I-19)	利益，大愚癡，仏	愚癡	過度の空に執着した者たちの愚癡を浄化するため(Ch. I-26)
金剛日 役割 : 妄分別の暗闇を奪う(Ch. I-20)	金剛光輝，大光，大王，金剛日王	慢	過度の慢を持つ悪い者たちの世間の慢を滅ぼすため(Ch. I-27)
蓮華舞自在 役割 : 持貧欲者の菩提を与える(Ch. I-20)	大貧欲，大下落，	貧欲	離貧欲から生じる菩提を退け，貧欲によって正覚を獲得するため(Ch. I-28)
パラマーシュヴァ 役割 : 他の乗を退ける(Ch. I-21)	馬王，七馬王，大慳貪，大妨害，金剛馬，自然生金剛	慳貪	一切智者の道に住しつつ，どこか別の道に行く者に正覚を与えるため(Ch. I-29)

３−４．ヨーガの理論

本節では，VP Ch. I-30 から 38 までを扱う．ここからは，これまでのマンダラおよび尊格たちに関する記述とは様変わりし，マンダラへと入るためのヨーガに関する理論と考えられる記述になる．おそらく，ここに出てくる記述は，VP 全体に通じる理論であり，VP がいかに素晴らしいタントラであるのかについて理論を通じて補足する働きがあると考えられる．以下で実際の内容に触れていきたい．

＜VP Ch. I-30＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

dbang po gang dang gang lam nyid/ / de dang de yi ngo bor 'gro/ /
mchog tu phan pa'i **rnal 'byor gyis/ / sangs rgyas kun gyi bdag nyid 'gyur//**

試訳

道となる感覚器官が何であれ，それぞれの本性として通る．
最高の利益のヨーガによって，一切仏の本質となる．

Ph

dbang po gang dang gang lam nyid/ / de de'i rang bzhin phyir na 'gro/ /
phan pa **mchog gi sbyor ba yis/ / sangs rgyas kun gyi rang bzhin byed//**

試訳

道となる感覚器官が何であれ，それぞれの本質にしたがって通る．
最高の利益のヨーガによって，一切仏の自性とする．

Skt復元

yad yad indriyamārgatvaṃ yāyāt tat tat svabhāvataḥ.
paramāhitayogena sarvabuddhamayaṃ vahet.

試訳

感覚器官の道を通過すべきものは何であれ，それぞれを本質の点から
最高に集中したヨーガによって，一切仏からなるものとして運ぶべし．

平行文 CS Ch. XIII-5.

yad yad indriyamārgatvaṃ yāyāt tat tat svabhāvataḥ.
paramāhitayogena sarvaṃ buddhamayaṃ vahet.

試訳

感覚器官の道を通過すべきものは何であれ，それぞれを本質の点から
最高に集中したヨーガによって，あらゆるものを仏からなるものとして運ぶべし．

【補記】

これと同様の偈は様々な文献に説かれており，CSの他にもSPU [Ch. I] p. 235, PK III-36 (p. 36), CMP p. 478, CVP 76 (p. 6), GV p. 19に類似するSktの偈が確認できる[45]．しかし，GVを除いた文献は，c句がparamāhita-ではなく，asamāhita-あるいはsusamāhita-で始まっている．また，GVは，MMからparamāhita-と引用しているが，最後の単語がvahetではなくyataḥになっている．したがって，VPの読みに最も合致するCSを平行文に挙げた．Skt

復元とCSの平行文の相違点は，sarvabuddhamayaṃという単語がsarvaṃ buddhamayaṃの２語に分かれているだけである．なお，校合テクストとPhでは，c句のparamāhita-に対応するTibがphan pa mchogになっている．phan paはhita-に対応するTibであり，āhita-に対応するTibは一般的にmnyam paである．このことから，校合テクストおよびPhの元になったVPのSkt写本はparamahita-という形になっていた可能性もある．ただし，VPṬおよび『Mahāmati註』ではVP本文をparamāhita-で引用しているため，おそらくは校合テクストとPhの誤訳であり，paramāhita-が正しい形であると考えられる．

内容を総合的に判断すると，この偈は「感覚器官たる眼・耳・鼻・舌・身を通過する色・声・香・味・触というあらゆる感覚対象を，ヨーガによってそれぞれの本質という観点から一切仏からなるものとして捉え，体内へと運び入れなさい」とった意味であると考えられる．なぜこのようなことをなすべきであり，それによってどのような結果に到るかが次の偈に続いて説かれている．

VPṬ I-30対応箇所〔付録Q参照〕

反復実践について説いた．**何であれ**云々によって．**何であれ**とは，色・声・香・味・触である． **感覚器官の道を通過すべきもの**とは，見る，あるいは聞く，嗅ぐ，味わう，触る．[この偈は] SS (Ch. V-33, D156b7-157a1)[46] に述べられたものである．**それぞれ**とは，それら全てである．**本質の点から**とは本来の性質によってであり，変化によるものではない，という意味である．**最高に集中したヨーガによって**とは，究極に集中した心である．**一切仏からなるもの**とは，適宜，パンチャダーカを自体とするものとして**運ぶべし**[すなわち]見るべし．

【註記】

一切仏をパンチャダーカと言い換えている．すなわち，感覚対象である色・声・香・味・触は，いずれもパンチャダーカを自体とするものであると捉えるべきとしている．パンチャダーカとは，VPの五仏それぞれがダーカの姿をとったものであり，ヘールカがヴァジュラダーカ，シャーシュヴァタがブッダダーカ，金剛日がラトナダーカ，蓮華舞自在がパドマダーカ，パラマーシュヴァがヴィシュヴァダーカとなる[47]．

＜VP Ch. I-31＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

gang dang gang gis dngos po yis/ / skyes pa rnams kyis yid sbyor la/ /
des na de yi rang bzhin 'gyur/ / sna tshogs gzugs nor ji bzhin no//

試訳

何であれ，人々が心を結びつけたものは，
それ(=結びつけたもの)によって，[人々の心は]それ(=結びつけたもの)の本質となる．
まさに種々なる色形をとる宝石のように．

Ph

gang dang gang gi bsam pa yis/ / mi rnams kyi ni yid sbyar na/ /
des na de'i dngos 'gro ba/ / nor bu sna tshogs gzugs ji bzhin//

試訳

何であれ，人々の心が結びついた思考は，

それ(=結びついた思考)によって，[人々の心は]それ(=結びついた思考)の本性に到る．

まさに宝石が種々なる色形をとるように．

平行文 YS 11-2, APV p. 217, PKṬ p.30.

yena yena hi bhāvena manaḥ saṃyujyate nṛṇām /

tena tanmayatāṃ yāti viśvarūpo maṇir yathā //

試訳

何であれ，人々の心が結びつくものは，

それ(=結びついたもの)によって[人々の心は]それ(=結びついたもの)に一体化する．

まさに宝石が種々なる色形をとるように．

【補記】

この偈の平行文は多くの文献で確認することができる[48]．上記の他にもSVU31-31に類似するSktの偈が確認できるが，d句のyātiとviśvarūpoの間にdevīという語が含まれており，少し形が異なっている．

内容を総合的に判断すると，この偈は「人の心は結びついたものと一体化する」ということを説明している．これは，直前の偈の「あらゆるものを一切仏として捉える」という行為によって，一切仏と一体化できることを示している．なお，例示で出てくる宝石とは，おそらく無色透明である水晶玉のような宝石を指している．水晶玉は周囲の景色が映り込むため，青い海が映れば青になり，赤い夕日が映れば赤になる．そのように人の心も実在するものによって心が活動し，一体化してしまう．すなわち，直前の偈によってあらゆるものを一切仏として捉えたならば，一切仏と一体化できることが説明されていると考えられる．

VPṬ I-31対応箇所〔付録Q参照〕

どのようにそれ(=直前の偈のヨーガ)をするための準備がなされるべきなのかと述べた．**何であれ**云々と．理解しやすいものである．

【訳註】

ここに出てくる「それ」とは，直前の偈で示された「ヨーガ」のことと考えられる．この偈は，ヨーガによってあらゆるものを一切仏として捉えるという直前の偈の内容を実践する準備段階に当たり，いかにして一切仏との一体化が可能であるかの説明文であるといえる．

＜VP Ch. I-32＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

gang dang gang gis 'dul ba yis/ / sems can 'dul bar 'gyur ba ste/ /

de dang de yi rnam pa yis/ / chos kyi bshad pa bya ba'o//

試訳
　何であれ，衆生が導かれる教化によって，
　それぞれの種別に従って法の説示をなすべきである．
Ph
　対応箇所なし
平行文 *Hevajrasekaprakriyā* (略号HSP) p. 29 *ll*. 29-30.
　yena yena vinayena sattvā yānti vineyatām
　tena tena prakāreṇa kuryād dharmasya deśanām.
試訳
　何であれ，衆生たちが導かれるものとなる教化によって，
　それぞれの種別に従って法の説示をなすべきである．

【補記】
　Phは，この偈と次の偈のab句までが抜け落ちている．おそらくは，「yena yena」という出だしで始まる偈が連続するために，書写者が見誤って書き落としたと考えられる．
　内容を総合的に判断すると，この偈は「衆生たちが教化対象となる導き方であればどのような方法でも良いので，相手に沿った法の説示方法をとるべきである」といった意味であると考えられる．考え方は，悉地を得られるならば戒律に背いても問題にならないというタントラ的な結果重視論にも結びつく．しかし，ここではヨーガに導くことを指示していると考えられる．

VPṬ I-32対応箇所〔付録Q参照〕
　衆生のために**何であれ**云々によって説いた．理解しやすいものである．
【訳註】
　相手に沿った法の説示方法をとることは，他でもない衆生のためであることを主張している．いかなる方法でも良いとすれば，それは衆生を取り込むためにとった説示者側のなりふり構わない態度と捉えられて批判されかねない．しかし，あくまでも衆生のためであるとすることで，そのような批判を躱す理由を示していると考えられる．

＜VP Ch. I-33＞〔付録 P 参照〕
校合テクスト
　sems kyi rdo rje las byung ba'i/ / sems can **sna tshogs rang bzhin can**/ /
　sems ni **rang gi rnam rtog** gis/ / skye bo'i dri mas nag por byas//
試訳
　心の金剛から生じた衆生は，**種々なる自性を持つもの**である．
　心は**自らの妄分別**によって人の垢で黒くなる．
Ph
　sems ni **rang bzhin rnam rtog** gis/ / dri mas skye bo sbags par byas//
試訳
　心は**自性の妄分別**という垢によって人に汚される．

【補記】
直前の偈で示した通り，Phはab句が抜け落ちている．
内容を総合的に判断すると，この偈は「我の妄分別に陥っているから心は汚染しており，人は様々な本質を備えている」といった意味であると考えられる．なお，skye bo(人)という語は校合テクストもPhもd句に入っているが， Sktの語順でd句にあっただけで，実際にはdri ma(垢)ではなくc句のsems(心)にかかる語であった可能性が考えられる．そうすれば，「人の心は我の妄分別という垢によって汚染する」といった意味になり，Tibを誠実に直訳するよりも内容がより明瞭となる．この偈は，直前の偈で示された様々な種別がどのようにして生じるものであるのかを説明しており，その原因が心の汚染にあることを主張していると考えられる．

VPṬ I-33対応箇所〔付録Q参照〕
説示のあり方を説示するために説いた．**心金剛**云々と．**種々なる自性を持つ者たち**とは，種々なる種性を持つ者たちである．**我の妄分別**とは，我等（があるという）見方(＝我見)である．
【訳註】
この偈は，なぜ「種別に沿った説示」が必要であるのかを説いた偈であると述べている．そして，その具体的な理由に我見があることを示している．

＜VP Ch. I-34＞〔付録 P 参照〕
校合テクスト
de bas kun tu rab 'bad pas/ / sems kyi rdo rje rnam par sbyang/ /
sems dag pa ni **bde ba** yin/ / nyon mongs dug ni thams cad 'phrog//
試訳
したがって．あらゆる尽力によって心の金剛を浄化すべし．
清浄な心は**快楽**である．煩悩毒はすべてを奪い去る．
Ph
de phyir kun tu rab 'bad pas/ / thugs kyi rdo rje rnam par sbyang/ /
sems dag pa ni **bde ba** yin/ / nyon mongs dug ni thams cad 'joms//
試訳
したがって．あらゆる尽力によって心の金剛を浄化すべし．
清浄な心は**快楽**である．煩悩毒はすべてを破壊する．
【補記】
内容を総合的に判断すると，この偈は「心は本来清浄であるので浄化すれば清浄を取り戻すことが可能であり，心が清浄であるならば煩悩によって揺らがない快楽の状態になる」といった意味であると考えられる．すなわち，直前の偈に説かれた「様々な種別が生じる原因であるところの心の汚染」を浄化すれば，どのような状態に到るかを説明した偈といえる．

VPṬ I-34対応箇所〔付録Q参照〕
快楽とは，成就すべき自性を持つものであり，大楽を自体とするマンダラ輪である．

＜VP Ch. I-35＞〔付録 P 参照〕
校合テクスト
gal te stong pa thabs yin na/ / de tshe sangs rgyas nyid mi 'gyur/ /
'bras bu rgyu las **gzhan min phyir**/ / thabs ni stong pa nyid ma yin//
試訳
もし空を方便とするならば，その時に仏位はない[49].
果は因と**異ならないから**方便は空性ではない．
Ph
gal te stong pa thabs yin na/ / de tshe sangs rgyas nyid mi 'gyur/ /
rgyu las 'bras bu **gzhan med phyir**/ / thabs ni stong pa nyid ma yin//
試訳
もし空を方便とするならば，その時に仏位はない．
因と果が**異ならないから**方便は空性ではない．
【補記】
内容を総合的に判断すると，この偈は「空の思想が仏位に至る方便ではない」という意味であると考えられる．前節のVP Ch. I-21, 26で見られたように，VPは基本的に他の学派に否定的な立場をとっている．なお，後述するI-38に出てくるように，VPでは方便と方便対象が同一であると考えているため，おそらくcd句でいわれる「因」も「果」も共に仏位のことを指している．空そのもの[50]を方便とするだけでは仏位の獲得がないので，仏位の獲得に至る方便は空の思想ではないという内容であると考えられる．ただし，VPは空の思想を真っ向から否定しているわけではなく，次の偈では一定の役割を認めている．

VPṬ I-35対応箇所〔付録Q参照〕
異ならないとは，類似性である．

＜VP Ch. I-36＞〔付録 P 参照〕
校合テクスト
lta ba rnams las log rnams dang/ / bdag tu lta ba tshol rnams kyi/ /
bdag zhen bsam pa bzlog pa'i phyir/ / stong pa rgyal ba rnams kyis gsungs//
試訳
見解のせいで転倒している者たちと我見を追求する者たちの
我に執着する考えを退けるために空が勝者たちによって説かれた．
Ph
lta ba rnams las log rnams dang/ / bdag tu lta ba tshol rnams kyi/ /
bdag tu 'dzin pa bzlog pa'i phyir/ / rgyal ba rnams kyi stong pa bstan//

試訳

見解のせいで転倒している者たちと我見を追求する者たちの

我に執着する考えを退けるために勝者たちの空が示された.

【補記】

内容を総合的に判断すると，この偈は「空性は我見を退けるために勝者によって説かれたものである」という意味であると考えられる．直前の偈で，空の思想は仏位の獲得に至る方便ではないと説かれたが，ここでは一定の立場を認めていることが分かる．おそらく，大乗教徒をタントリストに取り込むためには，空の思想に一定の役割を認めつつ，その先にあるマンダラ輪へと入るヨーガこそが仏位の獲得に不可欠であることを示す必要があったと推測できる.

VPṬ I-36対応箇所

なし

＜VP Ch. I-37＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

de phyir dkyil 'khor 'khor lo zhes/ / thabs ni bde ba'i sdom pa ste/ /

sangs rgyas nga rgyal rnal 'byor gyis/ / sangs rgyas nyid du myur bar 'gyur//

試訳

それ故，マンダラ輪という方便が快楽の威儀であり，

仏の自我を有するヨーガによって仏位を速やかに獲得する.

Ph

de phyir dkyil 'khor 'khor lo zhes/ / bde ba thabs kyi sdom pa ste/ /

sangs rgyas nga rgyal rnal 'byor gyis/ / sangs rgyas nyid yun mi ring 'gyur//

試訳

それ故，マンダラ輪という快楽が方便の威儀であり，

仏の自我を有するヨーガによって仏位を即座に獲得する.

【補記】

内容を総合的に判断すると，この偈は「マンダラ輪にこそ最も優れた快楽があり，自分が仏の自我を有するヨーガによってこそ仏位の速やかな獲得がある」という意味であると考えられる．なお，sdom pa(威儀)は，saṃvara-の訳語であるが，Sktでは最高の快楽を意味するśaṃvara-であった可能性が高い[51]．マンダラの尊格と自分とを同一にするヨーガを方便とすることによってこそ仏位は獲得され，大乗における空の思想よりもヨーガタントラが優れた立場であることを示していると考えられる.

VPṬ I-37対応箇所

なし

＜VP Ch. I-38＞〔付録 P 参照〕

校合テクスト

ston pa sum cu rtsa gnyis mtshan/ / gtso bo dpe byad brgyad cur ldan/ /
de phyir thabs kyis bsgrub bya dang/ / de ni thabs kyi **gzugs can** no//

試訳

師は三十二相・八十種好を有するものである．
それ故，[師は]方便によって成就されるべきものであると同時に，
彼(=師)は方便の**姿をとる者**である．

Ph

ston pa sum bcu rtsa gnyis mtshan/ / mnga' bdag dpe byas brgya bcur ldan/ /
de phyir thabs des bsgrub bya ste/ / thabs ni **ston pa'i gzugs can** no//

試訳

師は三十二相，八十種好を有するものである．
それ故，その方便によって成就すれば，方便は**師の姿をとる者**となる．

【補記】

内容を総合的に判断すると，この偈は「方便(upāya-)と方便対象(upeya-)は同一である」といった意味であると考えられる．方便対象である師の姿は，方便そのものである．したがって，マンダラ輪を方便とするヨーガによらなけらば仏位の獲得もあり得ない．これによって，ヨーガタントラの絶対的優位性が示されるといえる．

VPṬ I-38対応箇所〔付録Q参照〕

師の姿をとる者とは，[三十二]相と[八十]種好で輝いている者である．**師**とは，マンダラを構成する[諸尊]を伴ったものである．

このように，VP Ch. I-30から38には，仏位の獲得はマンダラ輪へと到るタントラのヨーガによってのみ可能であることが説明されている．おそらく，大乗教徒を始めとする非タントリストを取り込むためには，タントラのヨーガがどれだけ優れたものであるかを示す相応の理論が必要であったと推測できる．そこで，VPの導入部分にあたるCh. Iの最後に，５つのマンダラの総括として，VPの全体に通用するヨーガの理論が纏められたと考えられる．

３－５．まとめ

以上のように，VP Ch. Iは，「序文」・「５つのマンダラ」・「ヨーガの理論」というおおまかに分けて３つの内容で構成されている．「序文」では，まずVPの主尊・ダーキニーヴァジュラパンジャラがいかに強力な力を持った尊格であるかを誇示している．そして，そのような強力な力を持つダーキニーヴァジュラパンジャラが５つのマンダラを説くことで，マンダラを構成する諸尊の権威付けがなされている．「５つのマンダラ」では，それぞれのマンダラの構成と，主尊である五仏の役割を示している．人間存在の根本的な活力

にもなる瞋恚・愚癡・慢・貪欲・慳貪という煩悩を五仏に割り当て，各煩悩がさらに強力な五仏の煩悩によって破壊されることが述べられている．人間存在の根本的な活力である煩悩は，活性化することによって打ち克つことが可能であり[52]，鎮めることに苦戦する他の乗よりも優れていることを訴えている．「ヨーガの理論」では，５つのマンダラの五仏と同一となるために必要なヨーガの理論が明かされている．あらゆるものの本質が空であることはヨーガの前提条件として認めているが，それだけでは仏位を獲得することはできない．最終的にはマンダラ輪に入るヨーガによってのみ仏位の獲得が可能であり，ヨーガタントラの絶対的優位性を説いている．

さて，本論文２－３で示したように，VP Ch. Iの章題からは，「あらゆるものの中の最勝なものに衆生を入れる」という章の目的が読み取れる．VP Ch. Iの全体的な内容から考えると，「最勝なもの」とはVPであり，かつVPに説かれたマンダラのことと考えられる．したがって，章題には「VPおよびVPのマンダラの中に衆生を入れる」といった意味が当て嵌まる．このVP Ch. Iは，衆生をVPに取り込むことを最大の目的としており，まさにVP全体の導入的役割を担う極めて重要な章であることが文献の比較によって明らかとなった．

---

[1] この VP 序文の Locative には singular と plural の両方が含まれている．しかし，plural であっても実際に複数あるものとは考え難く，韻律等の文法上の問題によって plural になったいるものと考えられる．したがって，この VP 序文の試訳では，singular と plural は特に訳し分けをしていない．

[2] ただし，VPṬ MS の prakāsini を prakāśini に校訂した上での形である．s と ś の交代は Skt 文献に散見されることであり，prakāsini では意味をなさないため，本論文では『Mahāmati 註』に合わせて prakāśini と校訂した．

[3] タントラ文献には，一般的な Śloka 調からすれば韻律不調であるが，終わりの４音節のみかろうじて韻律を合わせた偈が散見される．なお，音節数が超過している偈はハイパー・メトリカル(Hyper-metrical)，音節数が不足している偈はハイポ・メトリカル(Hypo-metrical)と呼ばれている．

[4] このような短音を２つ合わせて長音に勘案することはリゾリューション(Resolution)と呼ばれている．ただし，リゾリューションは主に偈の冒頭で用いられるため，文の途中をリゾリューションとして読まなければ解決できないこの箇所には依然として問題が残されている．

[5] 六成就とは信成就・聞成就・時成就・主成就・処成就・衆成就を指す．先に述べた通り，VP Ch. II の中で説かれる HV 全儀軌中の第一儀軌と DK の第一儀軌とは名称が一致しており，HV の最初の二儀軌が DK であるとする考え方もある．しかし，本論文でも明らかにしているように VP と DK は内容に齟齬をきたしており，DK の六成就を VP に援用することには無理がある．

[6] 『Mahāmati 註』Skt MS3a2.

ata evaṃ mayetyādivāk yathā noktaṃ. vistaratantrasāpekṣatvād asya.

試訳

まさにそれ故に evaṃ mayā 云々という言葉は述べられていない．この(=VP の)広大なタントラ(=HV)に対する敬意からである．

[7] 『タントラ部概論』36b3-4

gsang ba 'dus pa la sogs pa nas 'di skad la sogs pa yi ge bzhi bcus thog drangs pa ni rnal 'byor gyi rgyud yin la| bde mchog la sogs pa gsang ba mchog gi dges pa la sogs pas thog drangs pa ni rnal 'byor ma'i rgyud yin la| he badzra'i rgyud ni rtsa rgyud du 'di skad la sogs pas thog drangs la| rdo rje gur du| gsang ba mchog gi dgyes pa na| zhes bya ba la sogs pas thog drangs la|

試訳

GS などで「evaṃ」などの 40 字が冒頭に書かれるものがヨーガタントラであり，*Cakrasaṃvaratantra* (略号 CS)などに説かれる「秘密・最勝・喜び(rahasye parame ramye)」などによって始まるものがヨーギニータントラである．ヘーヴァジュラ根本タントラ(=DK=HV?) は「evaṃ」などによって始まる．VP は「秘密・最勝・喜び」云々によって始まる．

このように，後代の著作ではあるが，『タントラ部概論』において HV がヨーガタントラであると受け取れる見解が存在する．ただし，この解釈に従うと DK もヨーガタントラになってしまうため問題がある．なお，「evaṃ」などの 40 字とは，GS p. 4 の「evaṃ mayā śrutam ekasmin samaye bhagavān sarvatathāgatakāyavākcittahṛdayavajrayoṣidbhageṣu vijahāra」を指すと考えられる．また，CS の「秘密・最勝・喜び」は，CS Ch. I-2 に説かれている．

[8] jaḍa-は愚かなもの，反応のないものといった意味であるが，地輪に対応する語であることから動かないものという訳を採用した．

[9] anavakāśa-は抵抗のないものあるいは機会がないものといった意味であるが，『Mahāmati 註』の「遍満している状態で隙間がないので風輪である」という解釈に従って隙間がないものという訳を採用した．

[10] MS 校訂前の prakāsin-は，「開くもの」といった意味であり，Tib の'byed pa とも合う．当然，VP には開くものという意味で prakāsin-と書かれていた可能性がある．しかし，この VPṬ では火 vahni-と対応する語であるため，輝かしいものといった意味の prakāśin-の方が自然であり，さらに『Mahāmati 註』では prakāśin-になっている(『Mahāmati 註』MS1b3)．したがって，prakāsin-は，prakāśin-に校訂した．

[11] MS 通りの ° bhrūṃ ca śukrasambhavavairocana° という流れは，他に類似した例が見られず，精液から生じた毘盧遮那という文章には違和感がある．この ca śukra は，cakra や śubhra の誤り，あるいは śukra という語は bhrūṃ 字にかかる白いという意味の形容詞が文中に入り込んだ可能性もある．ここでは校訂によって śu を取り除いて前後とのコンパウンドにした．この形であれば，種子(bhrūṃ)・三昧耶形([dharma]cakra)・尊容(vairocana)という解釈も可能であり，『Mahāmati 註』とも近い形になる．

[12] この蓮華という語は，後に法源という語が続くことからも女陰を指していると考えられる．ただし，雑色蓮華や尊格の蓮華座といったいくつかの意味を含めて蓮華という語を使用している可能性もある．

[13] ただし，新思想体系の有無が必ずしも先後関係に直結するかどうかは疑問が残る．今後も両註釈書の内容を比較しながら先後関係を探っていきたい．

[14] この真言は，STTS § 1381 の中で梵天・寂黙金剛(Maunavavajra)の真言として説かれている．

[15] なお，北村[2014] p. 75 では，『降三世大儀軌王』の対応箇所を Tib の Skt 音写より oṃ bhura bhuva svaḥ svāhā. と復元している．しかし，この箇所の本来の Skt は oṃ bhūr bhuvaḥ svaḥ svāhā. であることが想定できる．

[16] ただし,『Indrabhūti 註』では, antara-を地上・地下・天と一纏まりに捉えている. (D44a7-44b1, P51a5) sa'i 'og dang sa'i steng dang mtho ris dang bar snang rnams so. したがって, antara-は，空界を指している可能性もある.
[17] 「器」という語は Tib に確認できない．これまでも svabhāvā の直後に尊格名が入るというのが註釈の流れであるため，器は誤入した語である可能性が高い.
[18] この DK のナイラートミヤー十五尊と主尊へーヴァジュラの性質については野口[1999] pp. 66-67.において整理されている.
[19] DK 所説のナイラートミヤー十五尊マンダラの性質が GS を背景として成立していることは既に田中氏によって指摘されている．田中[2010] pp. 350-353.
[20] DK では，ヴァーリダーキニーではなく，ヴァーリヨーギニーになっている．しかし，ダーキニーとヨーギニーはしばしば混同して使用される語であるため，ここでは同一の尊格であると考えた.
[21] DK ではプッカシー（地界）・シャバリー（水界）・チャンダーリー（火界）・ドーンビー（風界）の順序で説かれている．しかし,『Mahāmati 註』では地界・水界・火界・風界の順序に対応してチャンダーリーとドーンビーの順序が前後入れ替わって示されている．したがって『Mahāmati 註』の記述に基づくナイラートミヤー十五尊マンダラが存在するならば，チャンダーリーとドーンビーの位置が入れ替わった通常の十五尊マンダラとは異なる形となっている可能性がある.
[22] STTS § 772 tataḥ **pātālavāsinīnāṃ** sarvamātṛṇām anuprādāt.
[23] この部分を「プドガラと十八界」という意味に読むならば１＋１８＝１９になる．しかし，これがどのような意味を持っているのか現時点では不明である.
[24] 十九という法数は，法数を数字順に並べて実例を挙げているパユットー[2012]の中にも確認できない.
[25] Sferra[2006]では，p. 68 *l*. 13からp. 69. *l*.3までがuddeśa-以下の説明部分に該当する.
[26] 櫻部[1969] p. 150.
[27] ここになぜ「母」という語が突然出てくるのかは疑問である．そもそも VP 本文には，主尊・ダーキニーヴァジュラパンジャラが誰に対して語りかけているのかが描写されていない．仮に主尊の語りかける対象が明妃なのであるならば，この「母」は明妃のことを指す語と考えられるがはっきりとしていない.
[28] この解釈が正しければ，VPṬの著者は無相唯識の立場にある人物の可能性が考えられる．無相唯識とは，有相唯識と異なり阿頼耶識を否定し，究極的には所取・能取の区別がないものと考える思想である．沖[1982] p.191.
[29] 櫻部[1969] p. 282.
[30] 六徳の詳細については，直後の『Mahāmati 註』の中で扱う.
[31] Edgerton[1953] p. 555 saṃtati-の項７行目. saṃtati = prabandha.
[32] 辻[1974] p. 270. 「附録 A. 格の用法 II. 7.」
[33] STTS §178-189.
[34] STTS §165-176.
[35] 田中[2010] p. 351.
[36] pravacana-は，話すことや解説といった意味の他に，聖典や仏法といった意味がある．ここでは文脈から判断して，単純に話すことではなく，bodhyaṅga-とも対応する仏法という意味でとった.
[37] bodhyaṅga-は，三十七菩提分法を指しているとも考えられる．しかし，一般的な三十七菩提分法には pravacana-が含まれていないことから， ここでは単に菩提の主要部分を指している語として捉えた.

[38] ここでは仏の説いたものを伝えるプシュパーの役割が文脈から想起される．したがって，ここに出てくる satpuṣpakaraṇḍaka-は，経典の入った華籠のことを指す語と捉えた．
[39] STTS §152-163.
[40] 四瑜伽とは yoga-, anuyoga-, atiyoga-, mahāyoga-のことを指し，自らの身語心と仏の身語心とを不可分にするヨーガのことであると考えられる．しかし，後に続く「智慧の光明によって妄分別という暗闇を除く」に対応する内容を四瑜伽の中に見い出すことはできない．羽田野[1987]p. 119-139.
[41] 田中[2010] p. 351. *ll*. 27-28.
[42] 田中[2010] p. 351. *ll*. 27-28.
[43] NYĀ p. 88
tatra gaurī sitā savyenāṅkuśadhāriṇī.
試訳
その中で，ガウリ−は白であり，右手で鉤を持っている．
[44] VPṬ (MS8a4) **pañcāvaraṇavarjitam** iti, pañcabhir nivaraṇaiḥ
①kāmacchanda②vyāpāda③styāna④siddha⑤kaukṛtyavicikitsālakṣaṇair ahitaṃ.
「五障碍から離れたもの」とは五つある妨害[すなわち]①欲の喜びと②滅と
③堅固と④到達と⑤悪事に対する疑惑の相によって堆積したものである．
[45] この VP Ch. I-30 および I-31 と同様の偈は，*Tattvasiddhi* (略号 TS) の中にも確認できる (D38b4 および D109b4 対応箇所)．校訂テクストは未刊であるが，人文情報学研究所の主席研究員である苫米地等流氏が 2012 年 12 月に開催したタントラ文献の読書会で該当箇所の Skt を確認させて頂いた．この場を借りて苫米地等流氏に心より感謝を申し上げる．
[46] この SS の Skt 写本は，最近になって，École française d'Extrême-Orient の教授 である Arlo Griffiths 氏によって発見され，英国オックスフォード大学 (University of Oxford) の特別研究員 (Post-Doctoral Research Fellow) である Péter-Dániel Szántó 氏によって同定された．校訂テクストは未刊であるが，2015 年 2 月に大正大学綜合佛教研究所において，大正大学特任准教授である種村隆元氏を代表とする科学研究費助成事業「註釈文献から見た後期インド密教における教理と実践の関係に関する研究」(基盤研究(C)) によって，Péter-Dániel Szántó 氏を招いて開催されたタントラ文献の読書会で該当箇所の Skt を確認させて頂いた．その結果，SS の偈は，本論文の VP Skt 復元に比べて c 句の paramāhita- が asamāhita-になっており，さらに d 句の sarvabuddhamayaṃ が sarvaṃ buddhamayaṃ になっていることが分かった．この場を借りて Péter-Dániel Szántó 氏に心より感謝を申し上げる．
[47] 立川[2014] p. 702. *ll*. 1-18.
[48] 倉西[2013] p. (224) 註 37 によれば，この偈はヒンドゥー教シヴァ派(Śaiva)の比較的古い文献にも類似した形が確認でき，仏教に限らず広く知られた偈であると考えられる．また，前述した通り，この偈は TS の中にも同様の形が見い出せる．
[49] Rhoton[2002] p. 142 (354)には，この ab 句の引用に対する英訳があり，本論文と同じ意味にとっているといえる．
[50] 密教において「空性」は実体視されることがあり，大乗とは異なる，実在の意味として使用されることがあるとされる．立川[2015] p. 569. *ll*. 8-14.
[51] 田中[2006] p. 44 によれば，当時のインド東北部では，sa と śa の音に差異がなくなっていたために saṃvara-が śaṃvara-に変化し，śam(快楽) vara(最高)という意味の合成語として śaṃvara-が使用されるようになったとされている．
[52] このように煩悩に打ち克つために煩悩を活性化する方法は促進の道(Pravṛttimārga)と呼ばれ，反対に煩悩に打ち克つために煩悩を不活性化する方法は止滅の道(Nivṛttimārga)と呼ばれている．立川[1999] p. 24.

＜第４章＞

VP 所説の HV 像から見る HV の原初的形態

第４章 VP 所説の HV 像から見る HV の原初的形態

４－１．はじめに

本章では，VP の記述を精査することによって，HV とはいかなる存在であったのかを探究したい．先にも述べた通り，現在のところ HV の存在を裏付ける明確な証拠は見つかっておらず，具体的な HV 像は VP によってのみ窺い知ることができるに過ぎない．VP には HV の後期密教タントラにおける位置が示されており，さらに HV 五十万頌の内訳と全三十儀軌の各儀軌名が説かれている．このように，VP は HV を知る上で欠かすことのできない極めて貴重な資料といえる．

さて，この VP の示す HV が実在したかどうかについては懐疑的な見方が存在する．HV に関する主な先行研究を改めて概観すると，まず島田[1986]は，VP と DK の比較から両タントラの根源である HV について言及している．そもそも DK が HV の最初の二儀軌であるならば，HV と DK の成立は同時期であり，HV の略タントラとされる VP の成立は DK よりも後になることが大前提となる．また，VP と DK の間に共通する思想が論及されていることは必然である．しかし，VP には DK を特徴付ける第四灌頂や四輪三脈といった新思想体系が説かれておらず，明らかに DK よりも VP の方が成立が早いと考えられる．しかも，マンダラには VP から DK への影響が見られるとしている．したがって，島田氏は HV を作成するための草案を整理したものが VP であり，HV は VP を起源とする架空のタントラであると結論付けている．また，VP 成立の後に HV の草案の一部に基づいて第四灌頂や五相といった VP 以降に興隆した新思想体系を取り入れて作られたものが DK であるとしている．

その後に，島田[1994]では VP に説かれる HV 三十儀軌の各儀軌名の邦訳を提示し，HV 三十儀軌の最初の二儀軌の名称が DK に踏襲された流れを図式化している．また，HV 三十儀軌の各儀軌名は，Shendge[2004]によって VP からの Skt 還元が試みられている．ただし，島田[1994]と Shendge[2004]は，どちらも北京版(P)のみに基づいた成果であり，HV 五十万頌の内訳については検討していない．そこで，本章では校合テクストと Ph を比較させて HV 五十万頌の内訳と三十儀軌の各儀軌名を詳細に検討する．

なお，田中[2010]は，VP に新思想体系が見られることやマンダラ構成の見地から，VP よりも DK の方が先に成立したという見解を示した. この田中氏の見解に従うならば，VP に新思想体系が説かれないことに基づく島田[1986]の HV に関する論理は破綻することになる．しかし，拙稿[2014][2015]でも示したように，VP に新思想体系が見られるとする田中氏の見解には何らかの誤解があったと考えられ，実際は VP には新思想体系が説かれていなかった. また, マンダラ構成についても先後関係を決定付ける根拠とまでは言えない. したがって, 田中[2010]が島田[1986]の研究成果を覆したとは考え難い. そして, 田中[2010]は，あくまでも VP と DK の先後関係に焦点を当てており，HV は VP を起源とする架空のタントラであると結論付ける島田氏の見解については反証を示していない[1].

このように，島田[1994]が HV を架空のタントラと結論付けて以降，島田氏の見解を覆す研究は発表されていない．したがって，HV は VP を起源とする架空のタントラであるという島田氏の説が現在の通説といえる．

しかし，筆者は，HV について VP を起源とする架空のタントラであると結論付ける島

田氏の見解は早計と考える．確かに，五十万頌という膨大な量のタントラが存在していたとはにわかに考えがたい．その膨大な分量についてはHVを権威付けるための架空のものと考えるのが妥当であろう．ところが，VPの記述からHVの内容が時代と共に変遷していた様子を窺えるため，VP成立以前に既に原初的形態のHVは実在していたと考えられる．それならば，VP所説のHV像にHVの原初的形態の一端を求めることができるというのが本章の主旨である．

次節では，VP所説のタントラ分類法に関する記述を精査し，HVの内容が時代と共に変遷していった様子を確認したい．なお，次節で扱うタントラ階梯の分類法とヨーガタントラ・ヨーギニータントラの分類法は，VPの中の一連の偈の中で示される．しかし,両分類法でヨーガタントラという語の意味が若干異なる．そこで，混乱を避けるために両分類法を分けて示す．

４－２．VPに説かれるHVの位置

４－２－１．VPに説かれるタントラ階梯の分類法

VPに説かれるタントラ階梯の分類法は，Abhayākaraguptaが*Āmnāyamañjarī* (略号ĀM)で示す五分類法としてよく知られている[2]．このようなタントラを階梯分けする分類法は様々な種類が存在しており[3]，特にチベット仏教の碩学たるBu stonの四分類法が有名である．しかし，近年ではBu stonの分類した各階梯に根拠のないSkt還元をすることで，Bu stonと全く同じ分類がインドで実際に行われていたと錯覚してしまうことが危険視されている[4]．そこで，HVの位置を確認する前に，VPに説かれるタントラの階梯に関する記述を精査したい．なお，本論文では種村[2010]の研究成果に従い，ヨーゴーッタラタントラは「ヨーガタントラ中の上位のもの」，ヨーガニルッタラタントラは「ヨーガタントラ中の最高のもの」と考え，共にヨーガタントラの中で別格に階梯付けされたタントラとして扱う[5]．

・VPのタントラ階梯分類法〔付録J参照〕

校合テクスト

dman pa rnams la bya ba'i rgyud/ / bya min rnal 'byor de lhag la/ /
sems can mchog la rnal 'byor mchog/ rnal 'byor gong med de lhag la//

試訳

劣った者たちのために①クリヤータントラがある．
非クリヤータントラ[6]たる②ヨーガ［タントラ］はそれよりも優れた者のためにある．
最勝なる衆生のために③ヨーゴーッタラ［タントラ］がある．
④ヨーガニルッタラ［タントラ］はそれよりも優れた者のためにある．

Ph

dman pa rnams kyi bya ba'i rgyud/ / bya min rnal 'byor de lhag la'o/ /
rnal 'byor mchog gi sems can mchog/ / rnal 'byor bla med de lhag la'o//

試訳

劣った者たちにとって①クリヤータントラがある．
非クリヤー[タントラ]たる②ヨーガ[タントラ]はそれよりも優れた者のためにある．
③ヨーゴーッタラ[タントラ]が最勝なる衆生[のためにある]．
④ヨーガニルッタラ[タントラ]はそれよりも優れた者のためにある．

以上のように，VPのタントラ階梯に関する分類法において，校合テクストとPhで内容の差はない．しかし，VPのTib訳に素直に従うならば，ĀMが示すような五分類として読むことは無理がある．もし，b句のbya min rnal 'byorの元になったSkt写本がakriyāyoga-という複合語の形をとっていると考え，非クリヤーとヨーガを並列関係(Dvaṃdva)にとるならば「非クリヤーとヨーガ」という２つの階梯があると一応は捉えられる．

しかし，文脈上，非クリヤーはクリヤーよりも優れたものとして説かれている．クリヤーよりも上位の１階梯に非クリヤーという名称を用いることは不自然であり，他に非クリヤーという用例も見い出せない[7]．したがって，非クリヤータントラとヨーガタントラを隔てるdangなどの接続詞も確認できない以上，ここでは同格限定関係(Karmadhāraya)にとり，クリヤータントラに対する非クリヤータントラとしてヨーガタントラがあると解すべきであり，非クリヤータントラとヨーガタントラをそれぞれ１つの階梯としているようには読めない．

さて，そこでĀMの該当箇所に目を移すと，VPを引用するより以前の記述で既にヨーガタントラの直前にチャルヤータントラを設定し，代表聖典として『大日経』を挙げている．

・ĀM [D109a1-3, P121a2-5]

dam pa'i chos phyi'i ni bya ba'i rgyud la sogs pa'o/ /
de la bya ba'i rgyud ni dam tshig gsum gyi rgyal po dang 'byung po 'dul byed la sogs pa ste/ /
gang du khrus dang smra bcad la sogs pa rnams kyi(P kyis) bya ba phyi rol gyi lugs ma dang bris sku la sogs pa la lha ru dmigs pa'o/ /
spyod pa'i rgyud ni rnam par snang mdzad mngon par byang chub pa la sogs pa'o/ /
gsang ba ni rnal 'byor gyi rgyud la sogs pa ste/ / rnal 'byor gyi rgyud ni de kho na nyid 'dus pa la sogs pa'o/ / rnal 'byor bla ma'i rgyud ni 'dus pa la sogs pa'o/ /
rnal 'byor bla na(P ma) med pa'i rgyud ni rnal 'byor ma'i rgyud do//

試訳

外の最勝なる法がクリヤータントラなどである．
その中の①クリヤータントラは
Trisamayārājatantra. (略号 TR)と *Bhūtaḍāmaratantra* (略号 BḌ)などであり，
沐浴や禁呪などの所作を[なし，]外の像や図像の身体などを尊格として拠り所とする．
チャルヤータントラは *Mahāvairocanābhisambodhi* (略号 MVA=『大日経』)などである．秘密[とされるの]がヨーガタントラなどであり，ヨーガタントラは STTS などである．ヨーゴーッタラタントラは GS などである．
ヨーガニルッタラタントラはヨーギニータントラである．[8]

以上のように，ĀM ではヨーガタントラの他にクリヤータントラとチャルヤータントラの２つの階梯があることを明確に説いている．このように『大日経』を代表聖典とするチ

ャルヤータントラという階梯が存在することを前提とした上で，続く文章の中で VP を以下のように改変して引用している．

・ĀM [D109a3-4, P121a5-6]

gang mkha' 'gro ma rdo rje gur du gsungs pa/ /
skyes pa rnams ni gdul bya'i rgyur/ / rnal 'byor rgyud ni yang dag bshad/ /
bud med rnams ni bsdu ched du/ / rnal 'byor ma rgyud rab tu bshad/ /
dman pa rnams la bya ba'i rgyud/ / de bas lhag la spyod rnal 'byor/ /
sems can mchog la rnal 'byor mchog/ rnal 'byor bla med de lhag la'o//

試訳

VPに説かれている．
男性たちを教化するために，ヨーガタントラが正しく説かれた．
女性たちを摂受するために，ヨーギニータントラがよく説かれた．
劣った者たちのために①クリヤータントラがある．
さらに優れた者のために②チャルヤー[タントラ]と③ヨーガ[タントラ]がある．
最勝なる衆生のために④ヨーゴーッタラ[タントラ]がある．
⑤ヨーガニルッタラ[タントラ]はそれより優れた者のためにある．

このように，ĀMではチャルヤータントラを加えた五分類法を前提とした上でVPを一部改変して引用している．非クリヤーの部分がチャルヤーとなっているVPの異読が存在していた可能性もあるが，おそらくはAbhayākaraguptaの手による故意の改変と考えられる．このような理由から，VP本文とĀMのVP引用とではタントラ階梯の理解に齟齬が生じるのである．

以下では表を用いて，VP本文から読み取れるタントラ階梯とĀMが示すVPのタントラ階梯にどのような相違があるのかを明示したい．

<table>
<tr><th></th><th colspan="4">VP Tibから読み取れるタントラ階梯</th><th colspan="4">ĀMが示すVPのタントラ階梯</th></tr>
<tr><td rowspan="5">劣
↑
↓
優</td><td colspan="4" rowspan="2">①クリヤー</td><td colspan="4">①クリヤー</td></tr>
<tr><td colspan="4">②チャルヤー</td></tr>
<tr><td rowspan="3">非クリヤー
＝ヨーガ</td><td rowspan="2"></td><td>純粋</td><td colspan="2">②ヨーガ</td><td rowspan="3">ヨーガ
（秘密）</td><td rowspan="2"></td><td>純粋</td><td colspan="2">③ヨーガ</td></tr>
<tr><td rowspan="2">別格</td><td rowspan="2">③ヨーゴーッタラ</td><td rowspan="2">別格</td><td>④ヨーゴーッタラ</td></tr>
<tr><td>④ヨーガニルッタラ</td><td>⑤ヨーガニルッタラ</td></tr>
</table>

ところで，ĀMの引用文を見て分かる通り，VPには上記のようなタントラの階梯に関する分類法と別に，タントラをヨーガタントラとヨーギニータントラの２種類に区分する分類法が説かれている．このヨーガタントラとヨーギニータントラの分類は階梯の違いもあるが，そのタントラが説かれた目的に基づいた分類法といえる．まずはVPのヨーガタントラとヨーギニータントラの分類に関する記述を確認したい．

・ヨーガタントラとヨーギニータントラの分類〔付録K参照〕

校合テクスト

skyes bu rnams ni gdul ba'i phyir/ / rnal 'byor rgyud ni yang dag bshad/ /
btsun mo rnams ni bsdu ba'i phyir/ / rnal 'byor ma yi rgyud bshad do//

試訳

男性たちを教化するために，ヨーガ(=ヨーゴーッタラ)タントラが正しく説かれた．
女性たちを摂受するために，ヨーギニー(=ヨーガニルッタラ)タントラが説かれた．

Ph

skyes bu 'dul bar mdzad don du/ / rnal 'byor rgyud rnam rab bshad pa/ /\\
btsun mo rnams ni bsdu ba'i phyir/ / rnal 'byor ma yi rgyud rab bshad/ /\\

試訳

男性を教化するために，ヨーガタントラが正しく説かれた．
女性を攝受するために，ヨーギニータントラが説かれた．

以上のように，このヨーガタントラとヨーギニータントラの記述に関する校合テクストとPhに内容差はない．また，先に挙げたĀMの引用とも内容が合致している．VPによれば，男性を教化するために説かれたものをヨーガタントラとし，女性を摂受[9]するために説かれたものをヨーギニータントラと分類している．このヨーギニータントラは先のĀMでもヨーガニルッタラタントラの言い換えで用いられており，タントラ分類の最上階梯ヨーガニルッタラタントラと等しいことが分かる．また，ヨーガニルッタラタントラは，男尊中心であったヨーゴーッタラタントラ以前に比べると女尊崇拝色が非常に強いとされている[10]．

実際に，ヨーゴーッタラタントラであるGS系マンダラ[11]や*Kṛṣṇayamāritantra* (略号KY)マンダラ[12]では，四仏母やその他の女尊眷属が男尊眷属やアチャラなどの忿怒尊と共にマンダラの一角に位置しているに過ぎない．一方で，ヨーギニータントラでは，VPやSPUなどに説かれるナイラートミヤーマンダラやDK所説のヘーヴァジュラ系マンダラ[13]，またCSマンダラ[14]のように，全てが女尊，あるいは主尊以外が全て女尊で構成されたマンダラが説かれている[15]．なお，VPの五部マンダラでは男尊の五仏が見られるが，これは５つのヨーギニー系マンダラが１つに集合したものであるため各部は完全に独立しており，眷属は全て女尊である．このような女尊中心のマンダラを説いていることがヨーギニータントラの特徴である．

まさにVPの記述通り，ヨーガタントラは男性を教化するために，ヨーギニータントラは女性を摂受するために説かれたという目的がマンダラ構成に現れているのである[16]．なお，上記の分類における，中心的役割が男尊であるヨーガタントラは，先の分類における非クリヤータントラとしてのヨーガタントラとは若干意味が異なる．混乱を避けるために，これ以降にヨーガタントラという場合は，断りが無い限り，中心的役割が男尊である純粋なヨーガタントラとヨーゴーッタラタントラの双方を指している．

したがって，VPは，ヨーガタントラを中心的役割が男尊である純粋なヨーガタントラおよびヨーゴーッタラタントラと，中心的役割が女尊であるヨーギニータントラすなわちヨーガニルッタラタントラとの２つに分類していることが分かる．また，中心的役割が男

尊のヨーガタントラの代表的聖典にはSTTS, GS[17], KY，ヨーギニータントラにはVP, DK, CSが挙げられる[18].

	対象となる階梯	説示された目的	代表的聖典
ヨーガタントラ	純粋なヨーガタントラ，ヨーゴーッタラタントラ	男性の教化	STTS, GS, KY,
ヨーギニータントラ	ヨーガニルッタラタントラ	女性の摂受	VP, DK, CS

以上のように，ヨーガタントラとヨーギニータントラの相違点は明確となった．次節では，VPがHVをヨーガタントラとヨーギニータントラのどちらに位置付けているのかを見ていきたい.

４－２－２．VP のタントラ分類法における HV の位置付け

先にも述べた通り，HVの最初の二儀軌といわれるDKは代表的なヨーギニータントラとして知られている．主尊以外が女尊で占められたヘーヴァジュラ系マンダラを有する特徴からもDKがヨーギニータントラであることは疑いない．また，VPにもヨーギニータントラの特徴である全女尊マンダラが複数説かれており，ヨーギニータントラであると自称する箇所がVP本文に散見される．したがって，DKとVPが共にヨーギニータントラであることは明らかである.

それならば，VPとDKがHVを根源としている以上，HVはヨーギニータントラに位置付けられることが当然と考えられる．はたして，実際にVPはHVをどのように位置付けているのであろうか．以下でVPの記述を確認したい.

・HVの転換〔付録M参照〕

校合テクスト

kye yi rdo rje rnal 'byor rgyud/ / dang por rgyal ba rnams kyis bshad/ /
phyi nas rnal 'byor ma rgyud ni/ / de nyid bud med bzung phyir ro//

試訳

HVはヨーガタントラとして最初に勝者たちによって説かれた.
その同じもの(=HV)が女性を獲得するために,
後にヨーギニータントラとして[説かれた].

Ph

dges pa'i rdo rje rnal 'byor rgyud/ / dang por rgyal ba rnams kyis bshad/ /
phyi nas rnal 'byor ma'i rgyud/ / de nyid mo gzugs bsdu phyir ro//

試訳

HVはヨーガタントラとして最初に勝者たちによって説かれた.
その同じもの(=HV)が女性の御姿を集めるために,

後にヨーギニータントラとして[説かれた].

上記から，HVは当初ヨーガタントラとして存在し，後に女性を摂受するためにヨーギニータントラへと転換を図った様子が読み取れる．このことから，仏教にはある時期から女性を積極的に摂受しようとする潮流が起こり，その流れに乗って女性獲得に必要なタントラの整備を進めていった結果がヨーギニータントラと考えられる．また，マンダラの女尊化は女性獲得に向けたタントラ整備の側面といえる．

実際に，ヨーガタントラとヨーギニータントラでは，ヨーギニータントラの方が興隆期が遅れると考えられている．ヨーギニータントラには，ヨーガタントラに見られない第四灌頂やタントラ的身体論といった新思想体系が説かれている[19]．当然，流派による思想体系の相違は考慮すべきであるが，おそらく，これらの新思想体系はヨーゴーッタラタントラ成立以降に流行し，次々とヨーギニータントラに組み込まれていったと考えられる．そのため，これが両タントラを特徴付ける思想体系の差異になったのである．それならば，新思想体系を含まないVPは，HVが新思想体系を取り入れてヨーギニータントラ的特徴を完全に備える途上の段階に書かれたということが推定できる．また，新思想体系を含むDKの成立はVPよりも後代であることは明らかである．

そこで，VPに説かれるHV全体像にヨーガタントラ的特徴が確認できるのであれば，それはヨーガタントラであったHV原初的形態の名残の可能性が高いといえる．また，ヨーギニータントラ的特徴が全面に出ているのであれば，島田[1994]が述べるようにVPはHVを作成するための草案を整理したものである可能性が高まる．その点を踏まえて，次節ではVPに説かれたHV全体像を精査していきたい．

４－３．HV 五十万頌の内訳について

本節では，VP所説のHV全体像の中でもHV五十万頌の内訳が述べられた箇所を扱う．VP Ch. IIには，HV五十万頌を10の内容に区切り，それぞれに説かれた頌数が述べられている．なお，ここではHV五十万頌の内訳に当たる箇所を＜HV五十万頌の内訳１＞から＜HV五十万頌の内訳４＞までに区分した．これは内容的な区分ではなく，Tib校合テクストとPhの比較を容易にするための便宜上の措置である．HVにどのような内容が説かれていたのかを精査し，本項の最後では表を用いて簡潔にまとめたい．

・＜HV五十万頌の内訳１＞〔付録N参照〕

校合テクスト

de nas rdo rje 'dzin gyi rgyal po mkha' 'gro ma'i rdo rje gur gyi rgyud kyi nang du
'bum phrag lnga bris pa yang dag par bshad par bya'o/ /

試訳

次に，持金剛の王はダーキニーヴァジュラパンジャラタントラ(=VP)の内に
書かれた五十万[頌]を正しく説こう．

Ph

de nas rgyal po rdo rje 'dzin/ / mkha' 'gro ma ni rdo rje gur/ /

'bum lnga dag tu nges bsdus dang/ / mtha' yas rgyud du rab tu phye//

試訳

次に，持金剛の王たるダーキニーヴァジュラパンジャラ(尊)は，

五十万[頌]を積集し，膨大なタントラを区分する．

【補記】

校訂テクストでは散文であるが，Phでは偈の形をとっている．また，校訂テクストではダーキニーヴァジュラパンジャラタントラ (mkha' 'gro ma'i rdo rje gur gyi rgyu) とあり，VPを指していることは間違いないが，PhではダーキニーヴァジュラパンジャラがVPと本タントラの主尊の名称のどちらを指しているのかを判別することは困難である．もしVPの意味にとるならば「次に，持金剛の王は，ダーキニーヴァジュラパンジャラ[タントラ]に五十万[頌]を積集し，膨大なタントラを区分する．」という意味になる．いずれにせよVPの主尊が五十万頌の内訳を述べるという点において内容差はないといえる．ただし，VP Ch. Iの序文が「ダーキニーヴァジュラパンジャラ(尊)は～をした」という文章構造をとっているため，ここでもダーキニーヴァジュラパンジャラを行為者として捉えて試訳に反映させた．

・＜HV五十万頌の内訳２＞〔付録N参照〕

校合テクスト

sangs rgyas kyi ni dkyil 'khor 'bum/ / rdo rje can gyi de bzhin 'bum/ /

'bum gyis rdo rje nyi ma yi/ / 'bum gyis rdo rje chos kyi 'o//

①仏のマンダラに十万［頌］．②持金剛の［マンダラ］に同様に十万［頌］がある．

十万［頌］によって③金剛日の［マンダラ］，

十万［頌］によって④金剛法の［マンダラ］がある．

Ph

sangs rgyas dkyil 'khor 'buṃ phrag cig/ / rdo rje can gyi 'ng de bzhin 'bum/ /

rdo rje nyi ma'i 'bum gyis te/ / rdo rje chos kyi 'ng 'bum gyis so//

①仏のマンダラに十万［頌］，②持金剛の［マンダラ］も同様に十万［頌］．

③金剛日の［マンダラが］十万［頌］，

④金剛法の［マンダラ］も十万［頌］によってある．

【補記】

この部分も校合テクストとPhに内容の差はない．ここに説かれるマンダラをVP Ch. I所説の五部マンダラに当てはめると「仏のマンダラ」＝シャーシュヴァタ(仏部)，「持金剛のマンダラ」＝ヘールカ(金剛部)，「金剛日のマンダラ」＝金剛日(宝部)，「金剛法のマンダラ」＝蓮華舞自在(蓮華部) となる．名称が完全に一致するのは金剛日のみであるが，本論文２－４で示した通り，仏はシャーシュヴァタの異名であり，金剛法は蓮華舞自在の

異名である．また，持金剛はVPの主尊として本文に頻出するヘールカの異名である．１つのマンダラごとに十万頌という膨大な分量が費やされることに疑問は残るが，次の記述も含めて考えるとHVは内容の大部分を五部マンダラの説明に費やしていることが窺える．

・＜HV五十万頌の内訳３＞〔付録N参照〕

校合テクスト

'bum phrag phyed kyis rdo rje ste/ / 'byung po 'dul ba stong phrag lngas/ /
lnga yis las ni rab rgyas pa/ / lnga yis sangs rgyas gar mkhan nyid//

試訳

五万[頌]によって⑤金剛[のマンダラ]があり，
⑥ブータダーマラ[儀軌]が五千[頌]によってある．
五[千頌]によって⑦増益がある．五[千頌]によって⑧仏舞[儀軌]がある．

Ph

'bum phrag phyed kyis rdo rje rta/ / 'byung po 'jigs chen stong phrag lnga/ /
las kyi tshogs ni lnga yis so//

五万[頌]によって⑤金剛馬[のマンダラ]がある．⑥ブータダーマラ[儀軌]が五千[頌]，⑦作法集が五[千頌]によってである．

【補記】

前の偈から引き続いて五部マンダラに当てはめれば，最初の五万頌にはパラマーシュヴァマンダラ(羯磨部)が対応する．しかし，校合テクストでは金剛 (rdo rje) ，Phでは金剛馬 (rdo rje rta) と名称が異なっている．本論文２–４で示した通り，金剛馬はパラマーシュヴァの異名となっているため[20]，ここでは校合テクストよりもPhが正しいと考えた．おそらく，rtaとsteはチベット文字として見ると非常に似ているため，校合テクストの側に誤写があった可能性が高い．以上が五部マンダラとその分量であるが，他のマンダラが各十万頌であるのに対して，この羯磨部に対応するマンダラだけが半分の五万頌である．羯磨部はŚPからSSに展開する過程で後から追加されたために[21]，他の部族に比べると若干立場が弱かったという可能性が考えられる[22]．

ブータダーマラについて．元々はヒンドゥー系の忿怒尊とされており[23]，クリヤータントラでは主尊に位置することもある[24]．VP本文では散見されるが，DKの本文では確認できない尊格である．

校合テクストの仏舞について，Phでは次の<HV五十万頌の内訳４>に諸仏の舞という複数形になって含まれている．順序は異なるが，名称および頌数からも同じ内容を示していると考えられる．どのような内容であったかは定かでないが，名称からすると尊格たちの姿勢(sthita-)やポーズ(ākṣepa-)について説かれていた可能性がある．

校合テクストの増益について，Phでは作法集となっている．したがって，この箇所は増益を含めた敬愛や息災といった一連の密教修法を説く内容であることが想起される．校合テクストとPhは，元になったSktからして異なっていた可能性が高いが，ほぼ同じ内容を指していたと考えられる．

・＜HV五十万頌の内訳４＞〔付録N参照〕

校合テクスト

stong phrag sum cu dag gis ni/ / ku ru ku lle brtag pa'o/ /
lhag ma stong phrag lnga yis ni/ / cho ga'i rim pa rgyud kun gyi'o//
rdo rje mkha' 'gro kye rdo rje yi/ /'bum phrag lnga ni bris pa'o//

試訳

三万［頌］によって⑨クルクッラー儀軌がある．
残りの五千［頌］によって⑩儀則の次第がある．
［以上が］タントラにおける全ての［分量］である．
ヴァジュラダーカたるヘーヴァジュラの五十万［頌］が書かれたのである．

Ph

ku ru ku lle'i khri gsum gyis/ / lnga yis sangs rgyas rnams kyi gar/ /
lhag ma stong phrag lnga yis ni / / rgyud kun cho ga'i rim pa'o//
mkha' 'gro dgyes pa'i rdo rje dang/ / mkha' 'gro mar ni bcas pa rnams/ /
'bum phrag lnga yis nges bsdus pa'o//

試訳

⑨クルクッラー［儀軌］が三万［頌］によって．
五［千頌］によって⑧諸仏の舞［儀軌］がある．
残りの五千［頌］によって⑩タントラ全体の儀則の次第がある．
ダーカたるヘーヴァジュラとダーキニーを教示するものたちは
［以上の］五十万［頌］によって積集するである．

【補記】

クルクッラー儀軌について．クルクッラーは，後述するHV三十儀軌の第九儀軌にも説かれており，関連性を指摘できる．また，クルクッラーは姿の異なる複数の尊格が存在し，それぞれの役割については島田氏による詳細な成果がある[25]．島田氏の研究によれば，クルクッラーはヨーゴーッタラタントラであるMJの広本が出典元とされているが，現行のMJでは確認できないとしている[26]．なお，DK I. xiにはクルクッラー成就法が説かれており，VPとDKの両タントラを通じて登場する尊格である[27]．また，後代には，クルクッラーを中心とするマンダラが説かれるが，それらはナイラートミヤー十五尊あるいはSPUのナイラートミヤー二十三尊マンダラ[28]と全く同じであることが指摘されている[29]．

残りの五千頌について．校合テクストでは「儀則の次第」となっているが，Phでは「タントラ全体の儀則の次第」となっている．このことから，HV自体にはVP以上に詳細なHV三十儀軌・五十万頌の内訳を説いた次第が含まれていた可能性がある．

以上の内容をまとめて作成したものが下記の表である．なお，内容ごとの頌数の合計が五十万頌となることを容易に確認できるよう，表中では頌数に算用数字を用いた．また，校合テクストとPhで内容が相違する箇所は太字で示し，( ) でTibを補った．

・HV五十万頌の内訳

	内容　*校合テクストとPhで異なる場合は( )内にTibを補った	頌数
①	仏のマンダラ<仏部=シャーシュヴァタ>	１００，０００
②	持金剛のマンダラ<金剛部=ヘールカ>	１００，０００
③	金剛日のマンダラ<宝部=金剛日>	１００，０００
④	金剛法のマンダラ<蓮華部=蓮華舞自在>	１００，０００
⑤	校合金剛のマンダラ(rdo rje), Ph金剛馬のマンダラ(rdo rje rta) <羯磨部=パラマーシュヴァ>	５０，０００
⑥	ブータダーマラ儀軌	５，０００
⑦	校合増益 (rab rgyas pa), Ph作法集 (las kyi tshogs)	５，０００
⑧	校合仏舞 (sangs rgyas gar), Ph諸仏の舞(sangs rgyas rnams kyi gar)	５，０００
⑨	クルクッラー儀軌	３０，０００
⑩	校合儀則の次第 (cho ga'i rim pa) Phタントラ全体の儀則次第 (rgyud kun cho ga'i rim pa)	５，０００
	合計	５００，０００

このように，校合テクストとPhでは⑤⑦⑧⑩の名称に若干の相違を確認できるが，内容の差はほとんどない．HV五十万頌の内訳全体を概観すると，HVは①から⑤の５つのマンダラに全分量の９割を費やしていることが分かった．また，５つのマンダラの名称は，DKの五仏の異名ともおおよそ一致していることが確認できた．以上のことから，VPに説かれる五部マンダラは，HVの①から⑤の５つのマンダラを踏襲したものである可能性が高いと考えられる．

ところで，HV五十万頌の五十万は，如何なる根拠に基づいて出てきた数字であるのか．『十八会指帰』によれば，密教タントラの源流ともいえるSTTSは，広本に十八会十万頌の分量があると述べられている．このことから，当時の十万という数は，膨大な分量を表す１つの目安となる単位であったと推定される．おそらく，HV五十万頌の根拠には，五部マンダラの一部につき十万頌で合計五十万頌という考えが大本にあったのではないだろうか．それが実際には，当時単独で人気があったクルクッラーとブータダーマラの儀軌および密教的作法等が含まれていることを主張するために，他の部に比べて成立が遅いので若干立場が弱い羯磨部を半分の五万頌に減らした可能性が考えられる．このように，HV五十万頌という分量の根拠には，五部マンダラが関係していた可能性を推測することができる．

なお，⑨のクルクッラーは三万頌となっており，５つのマンダラを除いた中では突出して分量が多い．また，次節で示すHV三十儀軌の中にもクルクッラーが登場している．これらは，当時いかにクルクッラーが人気の高い尊格であったかを如実に示している．しかし，不思議なことにクルクッラーはVPでもDKでもマンダラには置かれていない．

以上のように，HV五十万頌の内訳からはヨーギニータントラ的特徴は確認できないといえる．次節では，HV三十儀軌の各儀軌名を精査したい．

４－４．HV 三十儀軌の各儀軌名について

本節では，VPに説かれたHV三十儀軌の各儀軌名を精査する．研究史で述べたように，HV三十儀軌の各儀軌名は既に島田氏とShendge氏によって邦訳とSkt還元がそれぞれ試みられている．しかし，両氏の先行研究は北京版(P)にのみ基づいたものである．そこで，複数のTib版本・写本に基づく校合テクストと，異訳とされるPhの使用によって改めて儀軌名を検討し，その上でヨーガタントラとヨーギニータントラを判別する特徴を確認したい．特に登場する尊格名はヨーガタントラ・ヨーギニータントラの特徴を如実に示している可能性が高いため，各尊が他にどのようなタントラで説かれるのかも慎重に検討したい．

なお，本論文では，HV三十儀軌の各儀軌名に当たる箇所を＜HV三十儀軌の各儀軌名１＞から＜HV三十儀軌の各儀軌名９＞までに区分した．これは内容的な区分ではなく，Tib校合テクストとPhの比較を容易にするための便宜上の措置である．HV三十儀軌の各儀軌名を精査し，本項の最後では表を用いて簡潔に示す．

・＜HV三十儀軌の各儀軌名１＞〔付録O参照〕

校合テクスト

rdo rje snying po mngon byang chub/ / brtag pa'i rgyal po dang po nyid/ /
sgyu ma'i brtag pa gnyis pa ste/ / rdo rje gar ni gsum pa'o//

試訳

金剛蔵現等覚儀軌王は第一であり，
幻化儀軌は第二であり，金剛舞[儀軌]は第三である．

Ph

rdo rje snying po mngon byang chub/ / rtag pa'i rgyal po dang po ste/ /
sgyu 'phrul rtag pa gnyis pa'o/ / rdo rje gur ni gsum pa ste//

試訳

金剛蔵現等覚儀軌王は第一であり，
幻化儀軌は第二であり，ヴァジュラパンジャラ[儀軌]は第三であり

【補記】

第一儀軌・第二儀軌について．既に知られているように，VPで述べられるHV第一儀軌，第二儀軌の名称はDKの儀軌名と一致している[30]．なお，第二儀軌は校合テクストではsgyu ma，Phではsgyu 'phrulとなっているが，どちらも幻化(Skt. māyā)のTib訳に当てはまるため問題はない．

第三儀軌について．校合テクストに説かれる金剛舞は，STTS所説の金剛界マンダラに

おいて内の四供養として北東に説かれる金剛舞女(Vajranṛtyā)が想起される．しかし，金剛舞という男尊の尊格名や用例は他の典籍に見い出せない．一方，Phに説かれるヴァジュラパンジャラは，VP Ch. Iの序文に登場するVPの主尊である．したがって，Phのヴァジュラパンジャラの方が正しい読みであると考えられる．なお，金剛舞rdo rje garとヴァジュラパンジャラrdo rje gurの相違は，Tib文字にすると母音uの有無だけである．したがって，校合テクストはuの音が誤写で抜けたまま伝承された可能性が高い．

・＜HV三十儀軌の各儀軌名２＞〔付録O参照〕

校合テクスト

bzhi pa sna tshogs brtag pa ste/ / rdo rje brtag pa lnga pa'o/ /
brtag pa drug pa stobs po che/ / brtag pa bdun pa mi g-yo mgon//

試訳

第四は羯磨儀軌であり，金剛[杵]儀軌は第五である．
第六儀軌はマハーバラである．第七儀軌はアチャラである．

Ph

bzhi pa sna tshogs rtag pa zhes/ / rdo rje brtag pa lnga pa'o/ /
brtag pa drug pa stobs po che/ / brtag pa bdun pa mi g-yo mgon//

試訳

第四は羯磨儀軌といわれる．金剛[杵]儀軌は第五である．
第六儀軌はマハーバラである．第七儀軌はアチャラである．

【補記】

第四儀軌・第五儀軌について．「羯磨」と「金剛」という儀軌名だけを見れば，羯磨杵と金剛杵が想起される．しかし，本論文２－４において，パラマーシュヴァは羯磨金剛という異名を持っていることが分かっている．羯磨部の主尊であるパラマーシュヴァが「羯磨」という語を含む異名を持っていることはごく自然であり，この羯磨儀軌からは北方に位置する四仏であるパラマーシュヴァが想起される．また，前節の＜HV五十万頌の内訳３＞で，Phはパラマーシュヴァの異名である「金剛馬」としている部分が，校合テクストでは「金剛」となっていた．このことから，「金剛」がパラマーシュヴァの異名であった可能性も少なからず残っている．しかし，金剛部があるのに，羯磨部の異名を「金剛」だけにするとは考え難い．したがって，第五儀軌は金剛杵授与といった金剛杵を使用する儀礼と判断し，第四儀軌がパラマーシュヴァに対応すると考えた．

第六儀軌・第七儀軌について．マハーバラとアチャラはいわゆる十忿怒尊に含まれる尊格である．本論文２−５−３で示したように十忿怒尊とは，マンダラの四方・四隅・上下の十方に布置される忿怒形の尊格である[31]．マハーバラやアチャラを含む十忿怒尊はVPにも説かれているが，他のヨーギニータントラには確認できない．したがって，マハーバラとアチャラはヨーガタントラ的要素が強い尊格といえる．なお，十忿怒尊の各尊格の配置場所は説かれる儀軌によって多少異なっているが，マハーバラが西北，アチャラが北東に位置することが一般的といえる[32]．

・＜HV三十儀軌の各儀軌名３＞〔付録O参照〕

校合テクスト

brgyad pa gzungs kyi brtag pa ste/ / mkha' 'gro ku ru ku l+le dgu/ /

bcu pa 'dul ba'i brtag pa ste/ / rnam par snang mdzad bcu gcig pa//

試訳

第八は陀羅尼儀軌であり，ダーキニーたるクルクッラー[儀軌]は第九である．

第十は律儀軌であり，毘盧遮那[儀軌]が第十一である．

Ph

gzungs kyi brtag pa brgyad pa ste/ / dgu pa mkha' 'gro ku ru la/ /

'jig rten brtag pa bcu pa'o/ / rnam par snang mdzad bcu gcig pa//

試訳

陀羅尼儀軌は第八であり，第九はダーキニーたるクル[クッ]ラ[一儀軌]である．

世間儀軌は第十である．毘盧遮那[儀軌]は第十一である．

【補記】

第九儀軌の名称について．島田[1994]は「ダーキニー・クルクッラー女神」と邦訳し，Shendge[2004]はḌākinīkurukullāというSktを想定している．両氏はこの語がクルクッラーという女性形の単語で終わっているため，直前の語もダーカではなくダーキニーであったと判断したものと考えられる．mkha' 'groとなっている理由も，女尊クルクッラーにかかるmkha' ' gro maのmaが音節の関係で不要と判断されて省略されたと考えれば問題ない．そして，ダーキニーとはタントラ的女尊全般を示す普通名詞であり，クルクッラーはダーキニーに含まれる一女尊の固有名詞である．したがって，この箇所は，普通名詞のダーキニーという語が固有名詞のクルクッラーにかかる「ダーキニーたるクルクッラー」という意味であると考えた．なお，Phの音写ではku ru laとなっているが，そのような語あるいはそれに近い適切な語は見当たらない．そこで，ku ru laはクルクッラー(kurukullā)の不完全な音写であると判断した．なお，クルクッラーは，前節のHV三十儀軌の内訳と共通して登場する唯一の五仏以外の尊格である．このことから，HVにおいてクルクッラーがいかに重要な尊格であったのかが分かる．

第十儀軌について．校合テクストの'dul baとPhの'jig rtenと共通するSktを見出すことはできない．この'dul baから島田[1994]は律(教化)と邦訳し，Shendge[2004]はvineyaというSktを想定している．また，Phの'jig rtenからは世間(loka)が想定できる．この箇所は校合テクストとPhで共通するSktが想定できず，元になったSkt写本が既に相違していたと考えられる．どちらが正しいとも判断できないが，後の第二十五儀軌に律と並ぶ三蔵の１つであるアビダルマという儀軌名が出てくる．したがって，HVの権威付けのために律蔵と論蔵もタントラの中に含まれると主張していた可能性があり，ここでは律儀軌であると考えた．

第十一儀軌について．毘盧遮那は，STTSの主尊・大毘盧遮那であったものがGS以降の主尊の交代によって四仏の１つとなったものである．ただし，本論文２－４で示した通り，VPでは大毘盧遮那と毘盧遮那を明確に区別しており，共に仏の異名に用いられてい

る．大毘盧遮那は五部マンダラの主尊・ヘールカの異名であり，ここの儀軌名に出てくる毘盧遮那は東方に位置する仏であるシャーシュヴァタの異名となっている．

・＜HV三十儀軌の各儀軌名４＞〔付録O参照〕

校合テクスト

dngos grub brtag pa bcu gnyis pa/ / sgrol ma'i brtag pa bcu gsum pa/ /
rdo rje phag mo bcu bzhi pa/ / bcu lnga pa ni gzi brjid che//

試訳

悉地儀軌は第十二である．ターラー儀軌は第十三である．
ヴァジュラヴァーラーヒー[儀軌]は第十四である．第十五は大光輝[儀軌]である．

Ph

dngos grub brtag pa bcu gnyis pa/ / sgrol ma'i rtag pa bcu gsum pa/ /
rdo rje phag mo bcu bzhi pa/ / bco lnga pa ni gzi brjid che//

試訳

悉地儀軌は第十二である．ターラー儀軌は第十三である．
ヴァジュラヴァーラヒー[儀軌]は第十四である．第十五は大光輝[儀軌]である．

【補記】

第十三儀軌について．ターラーは，ヨーガタントラのGS, MJにおいて登場する四明妃の一女尊である．GS系マンダラおよびMJマンダラでは北東に位置し，北方に位置する仏の明妃となっている．なお，DK II. iv. 65にも登場している．

第十四儀軌について．ヴァジュラヴァーラーヒーは，ヒンドゥー教の興隆を背景に仏教に取り込まれた非常に強力な女尊とされており[33]，DK系マンダラで主尊の明妃になることがある[34]．また，DKよりも成立年代が下るとされているCS[35]では，マンダラの主尊あるいは主尊の明妃という中心部に位置が確定する．一方，ヨーガタントラのKYおよび *Vajrabhairavatantra* (略号VBh) でも登場しており，南方の仏の明妃として南西に位置している．

第十五儀軌について．大光輝はVPの中で金剛日の異名として説かれており[36]，本論文２–４でも金剛光輝という類似した異名が確認できる．したがって，大光輝は，南方に位置する仏であると考えられる．

・＜HV三十儀軌の各儀軌名５＞〔付録O参照〕

校合テクスト

bdag med brtag pa bcu drug pa/ / gshin rje gshed kyi bcu bdun pa/ /
hūṃ mdzad kyi ni bcu brgyad pa/ / dbyangs can gyi mdzad can ni bcu dgu pa//

試訳

ナイラートミヤー儀軌は第十六である．ヤマーンタカの[儀軌]は第十七である．
フーンカーラ[儀軌]は第十八である．サラスヴァティーの実践[儀軌]は第十九である．

Ph

bdag med brtag pa bcu drug pa/ / bcu bdun pa ni gshin rje gshed/ /

hūṃ mdzad kyi ni bco brgyad pa/ / so sor 'brang ma bcu dgu pa//

試訳

ナイラートミヤー儀軌が第十六である．第十七はヤマーンタカ[儀軌]である．

フーンカーラの[儀軌]は第十八ある．プラティサラー[儀軌]は第十九である．

【補記】

第十六儀軌について．ナイラートミヤーは初期仏教以来の根本教理である無我説を尊格化した女尊とされる[37]．DKではヘーヴァジュラの明妃として中央に位置しており[38]，またVPでも全女尊マンダラの主尊として登場する．

第十八儀軌について．校訂・Phに共通するhūṃ mdzadはVPṬでhūṃkāraと引用されており[39]，三十儀軌の中で唯一Sktが確定できる箇所である．このフーンカーラという尊格は，純粋なヨーガタントラであるSTTSの中でも散見され[40]，降三世やスンバ，ヴァジュラパーターラと同一視される忿怒尊である[41]．フーンカーラ自体が十忿怒尊に含まれている例は確認できないが，GS三十二尊マンダラではスンバ，MJマンダラではヴァジュラパーターラが十忿怒尊として下方を守護していることに関連性が見い出せる[42]．

第十九儀軌について．校合テクストのdbyangs can gyi mdzad canからはサラスヴァティー(Sarasvatī)が想定されるが，Phのso sor 'brang maからはプラティサラー(Pratisarā)が想定される．いずれもヨーガタントラよりも起源の遡るヒンドゥー由来の女尊とされており，DKには登場しない尊格である．また，女尊ではあるが，ヨーギニータントラ系のマンダラにも名前が確認できない．おそらく，Sktからして相違していたと考えられ，どちらの尊格名が正しいかは断定できない．ただし，サラスヴァティーは，ヨーガタントラのKYマンダラおよびVBhマンダラでヴァーラーヒーと共に登場し，西方の仏の明妃として西北に位置している．そのため，現時点では第十四儀軌のヴァーラーヒーと同じマンダラに説かれるという点で，プラティサラーよりもサラスヴァティーの方が適切と考えた．

・＜HV三十儀軌の各儀軌名６＞〔付録O参照〕

校合テクスト

sbyin sreg brtag pa nyi shu pa/ / rab gnas nyi shu rtsa gcig pa/ /

dkyil 'khor chen po'i brtag pa ni/ / nyi shu rtsa ni gnyis su 'dod//

試訳

護摩儀軌は第二十である．プラティシュター[儀軌]は第二十一である．

大マンダラ儀軌は第二十二に求められる．

Ph

sbyin sreg brtag pa nyi shu pa'o/ / rab gnas nyi shu rtsa gcig pa'o/ /

dkyil 'khor chen po'i brtags pa ni/ / nyi shu rtsa ni gnyi su brjod//

試訳
　護摩儀軌は第二十である．プラティシュター[儀軌]は第二十一である．
　大マンダラ儀軌は第二十二に説かれる．

・**＜HV三十儀軌の各儀軌名７＞**〔付録O参照〕
校合テクスト
　gtor ma'i brtag pa nyi shu gsum/ / nyi shu bzhi pa sta gon gnas/ /
　mngon par rtogs pa nyi shu lnga/ / de bzhin phyag rgya nyi shu drug/
試訳
　供物儀軌は第二十三であり，第二十四は加行[儀軌]にあり，
　アビダルマ儀軌は第二十五である．同様に印契[儀軌]は二十六である．
Ph
　gtor ma'i brtag pa nyi shu gsum/ / nyi shu bzhi pa sta gon no/ /
　mngon par rtogs pa nyi shu lnga/ / de bzhin phyag rgya nyi shu drug//
試訳
　供物儀軌は第二十三であり，第二十四は加行[儀軌]である．
　アビダルマ儀軌は第二十五である．同様に印契[儀軌]は第二十六である．

・**＜HV三十儀軌の各儀軌名８＞**〔付録O参照〕
校合テクスト
　byed pa nyi shu rtsa bdun pa/ / glu ni nyi shu rtsa brgyad pa/ /
　gar gyi dbang phyug brtag pa ni/ / sum cur gcig med sum cu pa//
試訳
　所作[儀軌]は第二十七である．歌[儀軌]は第二十八である．
　[蓮華]舞自在儀軌は第二十九と第三十である．
Ph
　byed pa nyi shu bdun pa'o/ / glu ni nyi shu brgyad pa ste/ /
　gar gi dbang phyug brtag pa ni/ / sum bcur gcig gis ma tshang dang//
試訳
　所作[儀軌]は第二十七である．歌[儀軌]は第二十八であり，
　[蓮華]舞自在儀軌は第二十九の区分と，

【補記】
　第二十八儀軌について．校合テクストの中に歌(klu)とナーガ(glu)という両方の読みが存在する．歌儀軌の読みを指示するのはD, N, H, Shであり，ナーガ儀軌の読みを指示するのはP, C, T, Kである．DとHは東西の両系統から影響を受けているので除外して考えれば，歌儀軌の読みを指示するのは西系，ナーガ儀軌の読みを指示するのは東系と綺麗に二分される[43]．おそらく，東西の系統に分かれてから一方の読みが変化したものと考えられ

る．Phも歌を指示しており，第二十儀軌の護摩以降は儀礼的な所作に関する儀軌名が連続しているため，ここでは歌が正しいと考えた．

第二十九儀軌・第三十儀軌について．蓮華舞自在はVPに説かれる五部マンダラの西方に位置する仏である．

・＜HV三十儀軌の各儀軌名９＞〔付録O参照〕

校合テクスト

brtag pa sum cu par ni bshad/ / stong phrag sum cu'i grangs kyis ni/ /
mkha' 'gro mkha' 'gro ma rnams kyi/ / 'bum phrag lnga yi rgya mtsho che//

試訳

[以上の]三十儀軌が説かれた．三万[章]という数によって
ダーカとダーキニーたちの五十万[頌]の大海がある．

Ph

brtag pa gsum cu pa yang bshad/ / stong phrag sum bcu'i grangs kyis ni/ /
mkha' 'gro mkha' 'gro ma rnams kyi/ / rgya mtsho chen po 'bum phrag lnga//

試訳

第三十儀軌にも説かれた．三万[章]という数によって
ダーカとダーキニーたちの五十万[頌]の大海がある．

【補記】

VP本文に出てくる三万という数字に章と補足したのは『タントラ部概論』に基づいている[44]．単純に計算すれば，三十儀軌に三万章あるということは一儀軌あたりの章数は平均千となる．DKは二儀軌二十三章七百五十頌の構成であるため，一儀軌あたりの章数は平均約十一となる．HVはDKに比べると一儀軌あたりの章数が約百倍ある計算になる．また，三万章に五十万頌あるということは，一章あたり平均約十七頌ある計算になる．DKの分量は章ごとに幅があるが，これほど短い章は含まれていない．これらの数字は，DKを基準に考えれば今一つ信憑性に欠けるものであることが分かる．

以上がVPに説かれるHV三十儀軌の各名称である．これらの各儀軌名をまとめたものが下記の表である．なお，校合テクストとPhで相違がある箇所は太字で示し，両方の読みを示した．

・HV三十儀軌の各儀軌名

儀軌番号	儀軌名　*( )内は試訳とTibから想定できるSkt
第一儀軌 =DK第一儀軌名と合致	rdo rje snying po mngon byang chub (金剛蔵現等覚儀軌 Vajragarbhābhisaṃbodhi)
第二儀軌 =DK第二儀軌名と合致	校合 **sgyu ma,** Ph **sgyu 'phrul** (幻化儀軌 Māyā)
第三儀軌	校合 **rdo rje gar (金剛舞儀軌Vajranṛtya),** Ph **rdo rje gur (ヴァジュラパンジャラ儀軌 Vajrapañjara)**
第四儀軌	sna tshogs (羯磨儀軌 Viśva)
第五儀軌	rdo rje (金剛儀軌 Vajra)
第六儀軌	stobs po che (マハーバラ儀軌 Mahābala)
第七儀軌	mi g-yo mgon (アチャラ儀軌 Acalanātha)
第八儀軌	gzungs (陀羅尼儀軌 Dhāraṇī)
第九儀軌	校合 mkha' 'gro ku ru ku l+le, Ph mkha' 'gro ku ru la (ダーキニー・クルクッラー儀軌 Ḍākinīkurukullā)
第十儀軌	校合 **'dul ba (律儀軌 Vinaya),** Ph **'jig rten (世間儀軌 Loka)**
第十一儀軌	rnam par snang mdzad (毘盧遮那儀軌 Vairocana)
第十二儀軌	dngos grub (悉地儀軌 Siddhi)
第十三儀軌	sgrol ma (ターラー儀軌 Tārā)
第十四儀軌	rdo rje phag mo (ヴァジュラヴァーラーヒー儀軌 Vajravārāhī)
第十五儀軌	gzi brjid che (大光輝儀軌 Mahātejas)
第十六儀軌	bdag med [ma] (ナイラートミヤー儀軌 Nairātmyā)
第十七儀軌	gshin rje gshed (ヤマーンタカ儀軌 Yamāntaka)
第十八儀軌	hūṃ mdzad (フーンカーラ儀軌 Hūṃkāra)
第十九儀軌	校合 **dbyangs can gyi mdzad can** **(サラスヴァティーの実践儀軌 Sarasvatīkṛtavat),** Ph **so sor 'brang ma (プラティサラ—儀軌 Pratisarā)**
第二十儀軌	sbyin sreg (護摩儀軌 Homa)
第二十一儀軌	rab gnas (プラティシュター儀軌 pratiṣṭhā)
第二十二儀軌	dkyil 'khor chen po (大マンダラ儀軌 Mahāmaṇḍala)
第二十三儀軌	gtor ma (供物儀軌 Bali)
第二十四儀軌	sta gon (加行儀軌 Adhivāsana)
第二十五儀軌	mngon pa (アビダルマ儀軌 Abhidharma)
第二十六儀軌	phyag rgya (印契儀軌 Mudrā)
第二十七儀軌	byed pa (所作儀軌 Kriyā)
第二十八儀軌	校合(DNHSh)・Ph **glu (歌儀軌 Gitā),** 校合(PCTK) **klu (ナーガ儀軌 Nāga)**
第二十九・第三十儀軌	gar gi dbang phyug ([蓮華]舞自在儀軌 Narteśvara)

以上のように，校合テクストとPhを精査した結果，HV三十儀軌には先行研究で知られていなかったいくつかの名称が確認できた．具体的には第三・第十・第十九・第二十八の４つの儀軌名は，先行研究が想定した名称とは全く異なっていた可能性がある．

ところで，上記の儀軌名に見られる五仏以外の尊格は，HVの儀軌名に取り入れられた当時に人気があった尊格たちと考えられる．この尊格たちは既に強く信仰されていたが故に，HVの権威付けのために儀軌として取り込んだのであろう．しかし，そのほとんどの尊名はヨーギニータントラの中に見い出せず，ヨーガタントラに既に説かれているものであった．確かに，ナイラートミヤーやヴァジュラヴァーラーヒーは，ヨーギニータントラでも主尊の明妃になるなど中心的役割を担う女尊である．また，ヨーガタントラよりも年代の遡るヒンドゥー系の尊名も散見されている．しかし，DK以降に登場するヨーギニータントラ特有の尊格が儀軌名に一尊も見られず，すべての尊格がヨーガタントラに見い出せることは疑問である．その理由については，後ほど様々な角度から考察してみたい．

さて，HV五十万頌の内訳とHV三十儀軌は，共にHV全体の見取り図である．したがって，双方を並べると対応関係ができて当然であるが，実際には以下のようにあまりはっきりとした対応関係を見出すことはできない．

・HV五十万頌とHV三十儀軌の分類 (対応が見いだせる箇所は太字で示した)

HV五十万頌の内訳		分類	HV三十儀軌 *( )内は儀軌番号
①	**仏のマンダラ**	仏部	**毘盧遮那(第十一)**
②	**持金剛のマンダラ**	金剛部	**ヴァジュラパンジャラ(第三)**
③	**金剛日のマンダラ**	宝部	**大光輝(第十五)**
④	**金剛法のマンダラ**	蓮華部	**蓮華舞自在(第二十九・三十)**
⑤	**金剛馬のマンダラ**	羯磨部	**羯磨(第四)**
⑥	ブータダーマラ	忿怒尊	マハーバラ(第六)，アチャラ(第七)， ヤマーンタカ(第十七)，フーンカーラ(第十八)，
⑦	作法集	儀礼に関する作法	金剛(第五)，陀羅尼(第八)，悉地(第十二)， 護摩(第二十)，プラティシュター(第二十一)， 大マンダラ儀軌(第二十二)，供物(第二十三)， 加行(第二十四)，印契(第二十六)， 所作(第二十七)，歌(第二十八)，
⑧	諸仏の舞		対応不明
⑨	**クルクッラー**	女尊	**ダーキニークルクッラー(第九)**， ターラー(第十三)， ヴァジュラヴァーラーヒー(第十四)， ナイラートミヤー(第十六)， サラスヴァティー(第十九)，
⑩	タントラ全体の儀則次第		対応不明
対応不明			金剛蔵現等覚儀軌(第一)，幻化儀軌(第二) 律(第十)，アビダルマ(第二十五)，

以上のように，HV五十万頌の内訳とHV三十儀軌の各儀軌名を分類しても，対応できないものがほとんどである．特に対応が容易と考えられる尊格名ですら，かろうじて五仏とクルクッラーに対応が見い出せる程度といえる．HVの内訳と儀軌名という異なる視点で作成されているということも原因の１つに考えられるが，あまりにも共通点がないように感じる．

ここからは仮説であるが，上記のHV三十儀軌の儀軌名となっている尊格たちのヨーガタントラでの役割を整理すれば五仏・五明妃・四忿怒尊という構成にもなる．この構成はGS根本十三尊マンダラ[45]とほぼ同じ比率である．このことから，HV三十儀軌の儀軌名となっている尊格たちは，ヨーガタントラであったHVの原初的形態に説かれていた尊格たちの可能性がある．そこで，最後にHV三十儀軌の尊格名と典拠および位置を表にしてまとめたい．

HV三十儀軌の尊格名と典拠での位置（*[ ]内は筆者が勘案した位置）

	尊格名	典拠	位置	儀軌番号
五仏	ヴァジュラパンジャラ	－	不明 [中央?]	第三儀軌(Ph)
	毘盧遮那（＝シャーシュヴァタ)	VP	東	第十一儀軌
	大光輝（＝金剛日）	VP	南	第十五儀軌
	蓮華舞自在	VP	西	第二十九・三十儀軌
	羯磨（＝パラマーシュヴァ）	VP	北	第五儀軌(Ph)
五明妃	ナイラートミヤー	VP	中央	第十六儀軌
	クルクッラー	－	不明 [東南?]	第九儀軌
	ヴァジュラヴァーラーヒー	KY	南西	第十四儀軌
	サラスヴァティー	KY	西北	第十九儀軌(校合)
	ターラー	GS	北東	第十三儀軌
四忿怒尊	ヤマーンタカ	GS	外院の東門 [外院の東南?]	第十七儀軌
	フーンカーラ	－	不明 [外院の南西?]	第十八儀軌
	マハーバラ	GS	外院の西北	第六儀軌
	アチャラ	GS	外院の北東	第七儀軌

４－５．まとめ

本章では，VP の記述に基づいて HV がいかなる存在であったのかを検証した．まず VP によれば，HV は当初ヨーガタントラとして説かれたとされている．HV は，代表的なヨーギニータントラである DK の広本とされるが，当初はヨーガタントラとして説かれており，後にヨーギニータントラへと転換したようである．

次に，HVがヨーガタントラとして説かれていたことを踏まえて，HV五十万頌の内訳

と三十儀軌の各儀軌名を校合テクストとPhの相違点も交えて精査した．その結果，従来の研究にはない可能性をいくつか指摘することができた．

まず，VPの記述によれば，HVが分量のほとんどを費やしているのは五部マンダラとされている．VP Ch. Iでは，本タントラで初めて五部マンダラが説かれる重要な箇所にも関わらず，構成する女尊の一部について説明を省略している．VPは女性摂受を目的とするヨーギニータントラとされているにも関わらず，女尊を一部省略する態度には疑問が残る．しかし，VPのHVに関する記述によって，その当時存在していたHVの原初的形態において既に五部マンダラの詳細が説かれていたがために，VPは記述の一部を省略できたと考えることができる．

さらに，HV三十儀軌の各儀軌名に登場する尊格たちは，その全てがヨーガタントラに見出せる尊格であり，ヨーギニータントラ独自の尊格は皆無であることが分かった．もし，島田氏の言う通り，HVを作成するための草案を整理したものがVPであるならば，儀軌名にヨーガタントラ以前から見られる尊格ばかりを用いるであろうか．VPにはナイラートミヤー十五尊マンダラというヨーギニータントラ系の全女尊マンダラが既に説かれており，多くの女尊が登場している．VPがHVの草案に相当するならば，このようなヨーギニータントラ独自の女尊たちがHVの内容の内訳や儀軌名に盛り込まれて然るべきである．したがって，VPが示すHVの全体像は，新しくHVを作成するための草案ではなく，ヨーギニータントラに転換する以前にヨーガタントラとして存在していたHVの原初的形態を示していると考えるのが妥当であろう．

---

[1] 田中氏は，HV となる予定であった偈頌が未完のまま DK に集約されたことが，DK に齟齬が起きている原因と考えているようである．このように，田中氏は VP を DK の起源とはしていないが，HV となる予定のものが何らかの形で存在していたことは想定している．田中[2010] p. 346 *ll*. 5-7.

[2] 静[2006b] p. (22)では ĀM が示す VP のタントラ分類法を邦訳している．

[3] タントラの階梯に関する分類法の歴史的展開について，最近では Kuranishi[2011]で詳細な研究がなされている．

[4] 種村[2010] p. 212. なお，種村氏が危険視しているのはあくまでも根拠のない Skt 還元とその邦訳によって生じる問題であり，Bu ston の四分類法については膨大な知識量に基づいた優れたものとしている．

[5] 種村[2010] pp. 213-214. 種村氏は Sāmānyayogatantra-（「一般のヨーガタントラ」）という用語に注目し，ヨーゴーッタラタントラとヨーガニルッタラタントラがヨーガタントラに含まれる別格のタントラであると述べている．

[6] N, T, K, Sh ではクリヤー(bya ba)となっている．クリヤーが劣ったものであると直前に述べているにも関わらず，それより優れたものとして再度クリヤーが出てくるのでは意味が通じない．強引に読むならばクリヤーヨーガという階梯があるとも読めるが，この用例は他に見い出せないため可能性が低い．なお，この読みはテンパンマ系(T, K)とシェルカル系(N, Sh)という西の系統で共通している．そのため，東西の系統が分かれた後，ある時期に西系で非クリヤーをクリヤーと誤写し，その後にテンパンマ系とシェルカル系に分かれていったことが推測される．

[7] 一般的にタントラ階梯のクリヤーとヨーガの間には，チャルヤーの他にウバヤ(ubhaya-)

という階梯が入ることがある．ウバヤとは，「両方を兼ね備えた」といった意味であり，クリヤーとヨーガの両方の特徴を備えたものであることを示している．この例からも，クリヤーよりも上位の１階梯に非クリヤーがくるとは考え難い．

[8] この ĀM の記述には邦訳が存在している．静[2006b] pp. (21)-(22).

[9] この「摂受」という語は，前文の「教化」の言い換えと考えられる．しかし，教化(vineya-)に比べて摂受(saṃgraha-)という語には，導くことに加えて集めることの意味が含まれている．そのため，女尊をマンダラに集める意図をもって言い換えているとも捉えられる．あるいは，女性は教化できないと考える当時の思想背景を示すものである可能性もある．

[10] 種村[2010] p. 214. *ll*. 13-15.

[11] GS には根本十三尊・ジュニャーナパーダ流の十九尊・聖者流の三十二尊マンダラが知られているが，これらのマンダラを総称する場合に本論文では GS 系マンダラと呼ぶ.

[12] Cf. 田中[2010] p. 316.

[13] DK にはヘーヴァジュラを主尊とする九尊マンダラと十七尊マンダラが知られているが，これらを総称する場合に本論文ではヘーヴァジュラ系マンダラと呼ぶ.

[14] Cf. 田中[2010] p. 359.

[15] Cf. 田中[2010] p. 348.

[16] なお，ヨーガタントラ・ヨーギニータントラの呼称の他にも，中心的役割が男尊のタントラを別名で方便・父タントラ，中心的役割が女尊のタントラを別名で般若・母タントラと呼ぶ場合もある．

[17] 先に述べた通り，GS の中でも Ch. XVIII は単独の典籍が後代に付加されたものと考えられているため，本論文では GS の Ch. XVIII を GSU として別に扱っている．

[18] VP にはヨーギニータントラを代表する６つのタントラが例示されている．現行のテクストと合致するかは不明であるが，同定できる可能性のある典籍名を( )で示した．

・６つのヨーギニータントラ〔付録 L 参照〕

校合テクスト

kye yi rdo rje dkyil 'khor sangs rgyas kun/ /
gsang mdzod rdo rje bdud rtsi 'byung ba dang/ /
'khor lo sdom pa gur dang 'byung gnas ni/ /
rnal 'byor ma rgyud drug tu rab tu grags//

試訳

①一切仏ヘーヴァジュラマンダラ(HV),
②秘密の蔵 (*Guhyakoṣa* (略号 GK)または *Guhyagarbha* (略号 GG)),
③金剛甘露(*Vajrāmṛta* (略号 VAT)), ④*Saṃvarodaya* (略号 SVU),
⑤チャクラサンヴァラ(CS), ⑥[ヴァジュラ]パンジャラの原典(VP)は,
６つのヨーギニータントラとして有名である.

Ph

sangs rgyas thams cad dges pa'i rdo rje dkyil 'khor dang/ /
gsang ba'i mdzod dang rdo rje bdud rtsi las byung dang/ /
'khor lo bde mchog gur dang phun sum mtshogs pa rnams/ /
rnal 'byor ma'i rgyud ni drug par grags pa yin//

試訳

①一切仏(SS), ②ヘーヴァジュラマンダラ(HV)と
③秘密の蔵 (GK または GG), ④金剛甘露から生起したもの(VAT)と
⑤チャクラシャンバラ(CS), ⑥ヴァジュラパンジャラ(VP)という最上のものたちがある．ヨーギニータントラは[以上の]６つが有名である.

以上のように，校合テクストと Ph には多くの相違点があり，いずれの典籍との同定も想像の域を出ない不確かなものである．なお，校合テクスト①について，西のテンパンマ系(T, K)とシェルカル系(N, Sh)には共通してマンダラ(dkyil 'khor)の語が含まれていない．しかし，この部分は９音節からなる偈の一部であるため，マンダラの語を含まないと音節数が不足してしまう．したがって，東西の系統が分かれた後，西系でマンダラの語が脱落し，その後にテンパンマ系とシェルカル系に分かれていったことが推測される．また，Ph の①とした SS は他典籍で *Saṃvara* と呼ばれることが多く，*Sarvabuddha* と呼ばれる用例は見当たらないために名称からの同定は難しい．しかし，校合テクストの④とした *Saṃvarodaya* が Ph からは読み取れないため，１つの可能性として SS を想定した．この６つのヨーギニータントラは，当時のタントラ情勢や成立順序を探る上で極めて重要であるが，現段階では他に手がかりがないために今後の研究課題としたい．

[19] 本論文第２章で概説している．なお，第２章でも述べた通り，GSU は GS と別の典籍が後代に付加されたことが分かっているため，ここでのヨーガタントラには含まれない．

[20] ただし，本論文２−４での金剛馬は，rdo rje rta ではなく，校合テクストでは rdo rje mgyogs，Ph では rdo rje myur 'gro となっている．したがって，原語が aśva-と turaga-で相違していた可能性もあるが，どちらもパラマーシュヴァの異名であることは確実である．

[21] ŚP から SS への展開については，田中[1984]によって，五族から六族へ至る過程が示されている．

[22] 本論文第１章でも示した通り，羯磨部が他の部よりも未熟であったことは，パラマーシュヴァ族の眷属だけが独自のものではなく，ヘールカ族を改変したものであることから窺える．田中[2006] p. 26.

[23] 頼富・下泉[1994] p. 176-177.

[24] 先の ĀM でクリヤータントラの代表聖典として挙げられた BḌ は，ブータダーマラを主尊とするタントラの１つに数えられる．

[25] 島田[1994] p. 374-388.

[26] 島田[1994] p. 382.

[27] 先にも述べた通り，クルクッラーはヨーゴーッタラタントラである MJ の広本が出典元とされているが，現行の MJ では確認できないとしている．島田[1994] p. 382. なお，クルクッラーは持物から愛欲の神カーマを起源とする見解もある．頼富・下泉[1994] p. 206-207.

[28] SPU は DK の記述を一部改変し，DK とは若干異なるナイラートミヤーマンダラを説いている．野口[1987a] p. 346-348.

[29] 島田[1994] p. 380. *ll*. 9-12.

[30] DKの第一儀軌にはVajragarbhābhisaṃbodhi (DK p. 42 *l*. 12.)，　第二儀軌には Mahātantrarājamāyākalpa (DK p. 100 *l*. 12.) という儀軌題名が付されている．

[31] この各方位に守護者を布置する思想は古代インドまで遡ることができる．頼富・下泉[1994] p. 262.

[32] 大西[1994] pp. 42-43.

[33] 起源は古代インド神話に見い出すことが可能であり，ヴィシュヌの化身とも考えられている．頼富・下泉[1994] p. 236-237.

[34] ヘーヴァジュラは臂数によって明妃も変化し，二臂・十六臂ではナイラートミヤー，四臂ではヴァジュラヴァーラーヒー，六臂ではヴァジュラシュリンカラーとなる．田中[2010] p. 347.

[35] CS のマンダラには十三尊や六十二尊など様々な形式が見られるが，ヴァジュラヴァーラーヒーが主尊あるいは主尊の明妃になっている．Lee[2004] no. 12 Saṃvaramaṇḍala. 田中[2010] p. 358.

[36] この大光輝という名称は VP Ch. I-18 に確認でき，他にも VP 全体で散見される．
[37] ナイラートミヤーの真言は"Oṃ a ā i ī u ū ṛ ṝ ḷ ḹ e ai o au aṃ aḥ svāhā."という Skt のヨーギニー音系列を用いている．これは無我説が大乗仏教の空性を経て，密教の二元論的立場から般若たるヨーギニー音を真言として採用したことが考えられる．頼富・下泉[1994] p. 208-209.
[38] ヘーヴァジュラは臂数によって明妃も変化し，二臂・十六臂ではナイラートミヤー，四臂ではヴァジュラヴァーラーヒー，六臂ではヴァジュラシュリンカラーとなる．田中[2010] p. 347.
[39] VPṬ 3a6.

hūṃkāra iti vajrahūṃkārasya mudretyādimudrā 'nantaravaktavyā,
tayā vijayaḥ pareṣām abhibhavanaṃ.

試訳

フーンカーラすなわちヴァジュラフーンカーラの印云々という中の
印は[フーンカーラの]直後に説かれるべきものであり，
それ(=ヴァジュラフーンカーラの印)によって他者たちへの勝利は圧倒的なものとなる．

[40] 例えば，STTS635 にはフーンカーラと VPṬ の示すヴァジュラフーンカーラの両方が見られる．buddhahūṃkāra huṃkāra vajrahuṃkāra .....
[41] 頼富・下泉[1994] p. 271.
[42] 田中[2010] p. 296, 322.
[43] 本論文では，渡邊[2009] p. 330＜チベット大蔵経カンギュル(経部)の系統＞に基づいて Tib 諸版・諸写本を系統分けしている．
[44] 『タントラ部概論』39b2.

de la dang po rtsa ba'i rgyud rgyas pa ni brtag pa na sum cu rtsa gnyis|
le'u na stong phrag sum cu| tshigs su bcad pa 'bum phrag lnga bzhugs te|

試訳

次に，最勝なる根本タントラは三十二儀軌，**三万章**，五十万頌ある．

[45] GS 根本十三尊マンダラとは，GS Ch. I を典拠とするマンダラであり，五仏・四明妃・四忿怒尊で構成されている．田中[2010] p. 277-279.

＜第５章＞

結論

第５章 結論

本研究のまとめとして，まずは VP に関して新たに明らかとなった事柄と注意すべき要点を本論文各章ごとに整理したい．本論文第１章で示した通り，現在 VP には異訳とされる２種類の Tib 訳が知られている．しかし，これまで両 Tib 訳の内容的な相違について触れられることはなく，両者の間にどの程度の差異があるのかは不明であった．そこで，両 Tib 訳の比較に留意しつつ読み進めた結果，著しい内容の差や増広は両者の間に認められないことが分かった．細かい部分での比較研究は今後も引き続き必要となるが，全体として両 Tib 訳はほぼ同じ内容を持った Skt 写本からそれぞれ翻訳されたものと見て間違いないといえる．なお，VP の Ph は他版の異訳が収録されているにも関わらず，VP の前後の写本である DK と SPU の Ph には他版と同じ翻訳者の訳が収録されていた．おそらく，Ph の編集時に既訳の VP が散逸していた等の理由があり，Ph では VP の Skt 写本から新たに翻訳したものを収録せざるを得なかったといった背景があったと考えられる．

本論文第２章では，VP 全１５章の各章題を中心に VP 全体の概要を明らかにした．VP は，多くのタントラと同様に各章が強い独立性を有しており，さらに同じ章の中でも統一性に乏しい雑多な内容を説いていることが分かった．なお，校合テクストと Ph の間で VP の題名の相違が確認されたが，これは書写者や編纂者による誤謬である可能性が高いとの結論に至った．また，VP の五仏は，タントラ本文の中で様々な異名を用いられていることが明らかとなった．そのため，本文の語句をそのまま読み進めているだけでは異名を五仏に対応させて捉えることができず，内容を正しく理解することが必然的に不可能となる．これは，あえて混乱させるように仕向けて説かれた一種の密意語であると考えられる．そこで，各々の仏の本質や名称に見られる特徴などを考慮に入れ，五仏の異名を見極めながら本文を読み進めていく必要があることが分かった．本論文２–４では，五仏の異名を整理した内容を取り上げたが，これらは全体から見ると異名のほんの一部に過ぎない．今後，VP 全体でどのような五仏の異名が説かれているのかを逐一確認していく必要がある．

本論文第３章では，VP 全体の導入的役割を担う重要な章である VP Ch. I の詳細な内容を明らかにした．各註釈書を参照しながら読み進めることによって，主尊・ダーキニーヴァジュラパンジャラの絶対的な存在としての力，５つのマンダラの構成と五仏の役割，ヨーガによる仏位獲得の理論というタントラの真髄ともいえる内容が読み取れた．また，Skt 註釈書や平行文によって VP の Skt を一部回収し，Skt の偈として復元できたことも大きな成果といえる．なお，著者不明である VPṬ では，唯識思想の用語による註釈が散見された．おそらく，VPṬ の著者は，唯識思想に傾倒した人物であると思われる．今後，さらに VPṬ を深く読み進めていくことで，VPṬ の著者がいかなる人物であったのかを明らかにしたい．また，『Mahāmati 註』では，VP の各語にナイラートミヤー十五尊マンダラおよび五部マンダラの尊格たちを当て嵌めていた．さらに，DK における各尊の本質を説明に加えていることから，『Mahāmati 註』は DK からの影響を多分に受けたものであることが明らかとなった．

本論文第４章では，VPの記述に基づいてHVがいかなる存在であったのかを検証した．まず，VPのタントラ分類法は，現在知られている五分類法ではなく，実際にはタントラ四分類法であった可能性を指摘した．そして，VPによれば，HVは当初ヨーガタントラ[1]

として説かれ，後にヨーギニータントラへと転換していたことが分かった．HVが当初ヨーガタントラであったとされていることを踏まえてHV三十儀軌の内訳と五十万頌の各儀軌名を考察してみると，そこに登場する尊格名にヨーギニータントラ独自の尊格が皆無であることが分かった．尊格たちの中にはヨーガタントラ以前から説かれていたヒンドゥー系の尊格も含まれているが，それらも含めて全てヨーガタントラの中に見い出すことができた．もし，島田氏が主張する通り，HVを作成するための草案を整理したものがVPであるならば，HVの内容や儀軌名には，既にVPに説かれている全女尊マンダラの女尊たちが盛り込まれて然るべきである．したがって，VPが示すHVの全体像は，島田氏が述べるような新しくHVを作成するための草案ではなく，VP編纂以前にヨーガタントラとして存在していたHVの原初的形態を示していると考えるのが妥当であろう．以上が本論文の各章において明らかとなった事柄と注意すべき要点である．

それでは，最後に全体のまとめとして，本論文から推測される VP と DK および HV との関係性について言及したい．VP の記述に従うならば，HV はヨーガタントラからヨーギニータントラへと転換したことになるが，そもそもなぜ HV には転換が必要であったのだろうか．ヨーガタントラとヨーギニータントラは，思想やマンダラの構成尊が全く異なっており，わざわざヨーガタントラから転換するよりも，全く新しくヨーギニータントラを作成した方が容易なことは明らかである．おそらく，そこには以下のような事情があったのではないかと推測される[2]．

まず，タントラが次から次へと生み出されていた当時，新しいタントラを世の中に受け入れさせるためには何かしらの権威の後ろ盾が必要であったと考えられる[3]．それまで存在していなかったタントラを突然に仏説として世に出したならば，反発を受けることは必至である．そこで考え出され手段の１つに，膨大な量を有する広本を想定し，それを現存するタントラの後ろ盾とすることが挙げられる[4]．古来から存在していた膨大な量の広本から抽出したタントラとすることで，当時の人の目に触れるのが全く新しいタントラでありながら仏説でもあるという矛盾が解消されるのである．HV の五十万頌という膨大な量は，このように仏説である後ろ盾として生み出された架空のものであろう．

しかし，HV には，さらにヨーガタントラという後ろ盾が必要であったと考えられる．最初にヨーガタントラとして説かれたものを，後に時代の潮流に乗って徐々にヨーギニータントラへと転換させることで，ヨーギニータントラが隆盛する前の段階であっても，既に存在していたヨーガタントラから生じたものという権威付けが可能となる．さらに，尊格や儀礼をヨーガタントラから受け継ぐことで，ヨーガタントラの信奉者たちを引き継ぐことも容易となる．このような例は他に見い出すことができないが，HV がヨーガタントラからヨーギニータントラへと転換したとする VP の記述からはこのような事情が推測できる．

なお，HV の広本については架空のものと考えられるが，HV 自体はヘーヴァジュラタントラという名称ではなかった可能性も含めて実際に何らかの形でヨーガタントラとして存在していた可能性が高い．そうでなければ，VP でも DK でも主立った役割を与えられていない尊格が儀軌名に多く含まれていることは不自然である．

それでは，VP の成立は DK の成立よりも時代が遡るかといえば，そう断言できるわけではない．VP で説かれる HV 三十儀軌の最初の二儀軌と DK は同じ儀軌名であり，第一

儀軌が「金剛蔵現等覚」，第二儀軌が「幻化」という名称であることは既に述べた通りである．しかし，これら２つの儀軌名は，VP で説かれる第三儀軌以降の尊格や所作に関連した儀軌名に比べると異質であるように受け取れる．すなわち，先に最初の二儀軌があって，後で残りの儀軌名を付け足したようにも見える．そうであるならば，DK の成立は VP の成立よりも時代が遡ると考えられる．仮に第一儀軌と第二儀軌までの名称は熟考した上で付与されたが，第三儀軌以降の名称は身近なものから付与されたと考えればそれまでであるが，儀軌名の一致については再考の余地がある．

そもそも，VP と DK は，同じ HV に関係するタントラといわれながら，驚くほど共通点が少ない．下記で，これまでに分かっている VP と DK の共通項，および先後関係に関わる相違点を整理する．

・VP と DK の共通項と先後関係に関わる相違点

<table>
<tr><th colspan="3">共通項</th></tr>
<tr><td colspan="3">・VP で説かれる HV 三十儀軌の最初の二儀軌と DK の二儀軌が同じ名称.
・VP のナイラートミヤー十五尊マンダラは DK にも全く同じ形が説かれている.
・VP のヘールカ族マンダラと DK のヘーヴァジュラ九尊マンダラは同じ眷属で構成されている．(そのマンダラの四仏の位置にガウリーなどの四女尊，上下にケーチャリーとブーチャリーを加えると，上記のナイラートミヤー十五尊の眷属となる)
・HV 五十万頌の内訳および三十儀軌の儀軌名に登場する五仏以外の尊格の中で，ナイラートミヤー・クルクッラー・ヴァジュラヴァーラーヒー・ターラーは，DK にも確認できる.</td></tr>
<tr><th colspan="3">先後関係に関わる相違点</th></tr>
<tr><th>VP</th><th>ヨーガタントラ的特徴</th><th>DK</th></tr>
<tr><td>○説かれる</td><td>十忿怒尊</td><td>×説かれない</td></tr>
<tr><th>VP</th><th>ヨーギニータントラ的特徴</th><th>DK</th></tr>
<tr><td>×説かれない</td><td>第四灌頂</td><td>○説かれる</td></tr>
<tr><td>×説かれない</td><td>タントラ的身体論</td><td>○説かれる</td></tr>
<tr><th colspan="3">その他</th></tr>
<tr><td colspan="3">・五相は VP と DK で全く異なる相を示している.
・両タントラを相互に結びつける引用文や平行文は確認できない.
・HV 五十万頌の内訳および三十儀軌の儀軌名に登場する十忿怒尊以外の尊格の中で，ブータダーマラとサラスヴァティー(Ph プラティサラー)は，DK には確認できない.</td></tr>
</table>

以上のように，VP と DK を比較すると，両タントラは共通してヨーギニータントラの特徴である全女尊で構成されたナイラートミヤー十五尊マンダラを説いている．また，ヘールカ(VP Ch. I-11 ではヴァジュラダーカ)あるいはヘーヴァジュラを中心とする九尊マンダラも共通の眷属で構成されている．しかし，VP には第四灌頂もタントラ的身体論も説かれていないため，DK に比べるとヨーギニータントラ的特徴に乏しい．一方で，VP にはヨーガタントラ的特徴であるはずの十忿怒尊が説かれている．さらに，VP と DK では五

相が全く異なっている．これらの点を踏まえて，仮に VP と DK をヨーガタントラからヨーギニータントラへと転換していく時系列に当て嵌めると,以下のような先後関係になる．

まず，ヨーギニータントラへと転換した HV にはヨーギニータントラ的特徴といえる九尊マンダラおよびナイラートミヤー十五尊マンダラが説かれていたが，内容的にはヨーガタントラ的特徴も持ち合わせていた．この時期の HV の内容を踏襲して VP が成立し，HV の全体像を記述したと考えられる．また，ヨーギニータントラの隆盛につれて従来のヨーガタントラ的要素は排除され，新たに純粋なヨーギニータントラたる HV の最初の二儀軌として作成されたものが DK といえる．DK には女尊中心のマンダラの他にもヨーギニータントラとしての革新的な新思想体系が多く説かれ，大いに隆盛することになる．

ただし，VP と DK の比較結果からは，VP と DK が異なる系統に属するタントラであり，両タントラのどちらか一方がもう一方を踏襲して成立したわけではないと考えることが妥当であろう．すなわち，現在分かっている両タントラの特徴から VP と DK の先後関係を正確に語ることは不可能ということである．

タントラの先後関係は，儀礼や思想の展開の比較によって，ある程度探ることが可能である．ところが，VP は新思想体系を取り入れる前の段階にあるのではなく，おそらく DK と異なる系統に属したタントラなので新思想体系が説かれていないのではないだろうか．VP のように十忿怒尊を説くヨーギニータントラは，他に例を見出すことができない[5]．さらに，VP と DK では五相も異なっている．また，DK と VP は相互に引用している形跡も確認できない．それにも関わらず，マンダラの観点と新思想体系の有無だけで VP と DK の先後関係を決定付けることは尚早な判断といえる．これまで VP は DK 研究の延長で扱われてきており, それこそが VP の正しい評価を妨げてきた最大の障壁といえるであろう．その原因には, 本論文第 1 章で述べたように, DK を所依聖典とするサキャ派に属する'Brogmi などの後代の学僧が，同じヘーヴァジュラ尊の登場する VP を DK の釈タントラや略タントラに位置付けたことにあると考えられる．今後，このような宗派の教理に沿わせた解釈を排除し，VP と DK の関係を再評価する必要がある．

ところで，これだけ内容の異なる VP と DK を結びつけるマンダラと儀軌名はいかにして両タントラに取り入れられたのであろうか．両タントラは，どちらか一方がもう一方を踏襲して成立したものではないことが明確である．それならば，何か共通の典拠からマンダラと儀軌名を借用してきたと考えるのが筋である．この事実は，HV が実際に存在していたことを支持する根拠に成り得る．ただし，タントラからマンダラと儀軌名だけを借用してくるのは不自然であり，しかもマンダラには HV 五十万頌の内訳や三十儀軌の内訳には確認できなかったヨーギニータントラ独自の女尊たちが含まれている．そこに何らかの事情があったことは間違いないが，ここまでが現時点で文献から窺い知ることのできる限界であろう．

以上のように，HV に関しては推測の域を出ないが，現時点では何らかの形の HV が存在することを前提にしなければ説明のつかない問題がいくつも見受けられる．無論，広本 HV すなわち三十儀軌乃至三十二儀軌の組織を持ち，五十万頌という膨大な分量を有する文献ではなく, VP や DK が生み出される母体となった原初形態の HV ということである．本論文では，VP と DK の特徴からそれぞれが異なる系統に属するタントラであると結論付けたが，系統の異なるタントラが同一のマンダラを有していることは非常に興味深く，

系統を分類する上での貴重な資料となることは間違いない．VP の解明は DK およびタントラ全体の解明へと結びつくものである．今後も VP の研究を重ねてその真意を読み解き，延いては HV の真相についても明らかにしたい．

---

[1] 本論文第４章で示したように，ここで言うヨーガタントラは，中心的役割が男尊である純粋なヨーガタントラとヨーゴーッタラタントラを指している．また，ヨーギニータントラは，中心的役割が女尊であるヨーガニルッタラタントラを指している．

[2] タントラの広本については，森[1999] p. 58.でも仏説の後ろ盾に絡めた見解が述べられている．

[3] 本庄[2011] p. 183 によれば，アビダルマを仏説とする部派仏教徒の論理の中には，「仏説の多くは陰没(antar√dhā)している．（それを阿羅漢は願智によって回復させることが出来る）」というものが含まれている．また，藤田[2011] p. 124.では複数の仏説観が想定されている．このように，仏説とは何かを規定し，他者に仏説であると納得させることは大乗以前からの課題であったといえる．

[4] 広本に関する伝説は，「金剛頂経」の十万頌や MJ の一万五千頌など，多くのタントラに見受けられる．また，SS は一万八千頌あるとされるが(田中[2006] p. 18)，続タントラ以降しか現存しておらず，これも根本タントラに広本と同じ役割を持たせたものと考えられる．さらに，チベット仏教ニンマ派のテルマ(gter ma)と呼ばれる埋蔵経典も世の中に仏説を受け入れさせるために編み出された手段の１つといえる．奥山[2005] p. 110-112.

[5] SPU のように，ヨーガタントラおよびヨーギニータントラ両方にわたる複数のタントラを習合・折衷したとされるタントラも存在する (野口[1984])．しかし，VP は，女尊中心のマンダラを有しているが，新思想体系を含んでおらず，内容的にはほぼヨーガタントラであるため SPU の性格とは明らかに異なっている．

＜参考文献一覧＞

・一次文献

AdhŚ: *Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā*(=『理趣経』). Toru Tomabechi, *Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā -sanskrit and Tibetan texts-*, China Tibetology Publishing House・Austrian Academy of Sciences Press, Beijing-Vienna, 2009.(=Tomabechi[2009])

APV: *Advayavivaraṇaprajñopāyaviniścayasiddhi*. *Guhyādi-aṣṭasiddhisaṅgraha*, Higher Tibetan Studies, Sarnath, 1988.

AKBh: *Abhidharmakośabhāṣya*. Dwārikādās Śāstrī, Swāmī, *The Abhidharmakosa & Bhāṣya of Acārya Vasubandhu with Sphutārthā Commentary of Ācārya Yaśomittrā*. (Vol. I, II) Bauddha Bharati, Varanasi, 1981.

ĀM: *Āmnāyamañjarī*. [D no. 1198, P no. 2328].

BḌ: *Bhūtaḍāmaratantra*.[D no. 747 P no. 404].

CMP: *Caryāmelāpakapradīpa*. Christian K. Wedemeyer, (=Wedemeyer[2007]), *Āryadeva's Lamp that Integrates the Practices "Caryāmelāpakapradīpa" The Grandual Path of Vajrayāna Buddhism According to the Esoteric CommunityNoble Tradition*, American Institute of Buddhist Studies, New York, 2007.

CS: *Cakrasaṃvara*. Janardan Shastri Pandey (ed.) *Śrīherukābhidhānam Cakrasaṃvaratantram with the commentary of Bhavabhaṭṭa*, *Rare Buddhist Texts Series* 26, Sarnath, 2002.

CSA: *Cakrasaṃvarābhisamaya.*桜井宗信(=桜井[1998])「*Cakrasaṃvarābhisamaya* の原典研究 –梵文校訂テクスト–」『智山学報』47, pp. (1)-(32), 1998.

CSP: *Cakrasaṃvarapañjikā*. 杉木恒彦(=杉木[2001])「『チャクラサンヴァラタントラ』の成立段階について –およびJayabhadra作*Śrīcakrasaṃvarapañjikā*校訂梵本–」『智山学報』50, pp. (91)-(141), 2001.

CVP: *Cittaviśuddhiprakarana*. H. P. Shāstri, *Discovery of a Work by Āryadeva, Journal of Asiatic Society of Bengal* 67 [2], pp. 175-184, 1898.

DK: *Dvikalpa*(=『大悲智金剛』). Snellgrove, David L.(=Snellgrove[1959b]), *The Hevajra Tantra, A Critical Study*. *Part II Sanskrit and Tibetan Texts,* Oxford University Press, London, 1959.

GG: *Guhyagarbha.* [D no. 832, P no. 455].

GK: *Guhyakoṣa.* [D no. 829, P no. 452].

GS: *Guhyasamājatantra* (=『秘密集会』). Matsunaga Yukei, *The Guhyasamājatantra, A New Critical Edition*, Toho Shuppan, Osaka, 1978.

GSi: *Guhyasiddhi*. *Guhyādi-aṣṭasiddhisaṅgraha*, Higher Tibetan Studies, Sarnath, 1988.

GSU: *Guhyasamāja Uttaratantra* (=GS Ch. XVIII). Matsunaga Yukei, *The Guhyasamājatantra, A New Critical Edition*, Toho Shuppan, Osaka, 1978.

GV: *Guṇavatī. Mahāmāyātantram with Guṇavatī by ratnākaraśānti*. *Rare Buddhist Texts Series 10,* Central Institute of higher Tibetan Studies, Sarnath, 1992.

HPṬ: *Hevajrapiṇḍārthaṭīkā*. [D no. 1180, P no. 2310]

HSP: *Hevajrasekaprakriyā*. Louis Finot. *Manuscrits sanskrits de sādhana's retrouvés en chine*. Journal Asiatique 225, pp. 19-31. Paris, 1934.

HV: *Hevajratantra*. DK の広本とされるが現存せず，真偽不明とされている.

KY: *Kṛṣṇayamāritantra*. S. Rinpoche and V. Dwivedi, *Kṛṣṇayamāritantra* Rare Buddhist Text Srieis 9, Central Institute of Higher Tibetan Studies Sarnath, Varanasi, 1992.

LTṬ: *Laghutantraṭīkā*. Cicuzza Claudio. *The Laghutantraṭīkā by Vajrapāṇi A critical edition of the Sanskrit text*, *Serie Orientale Roma* 86, 2001.

MĀ: *Muktāvalī. Hevajratantram with Muktāvalī Pañjikā of Mahāpaṇḍitācārya Ratnākaraśānti*, Ram Shankar Tripathi＆Thakur Sain Negi, Central institute of higher tibetan studies, Sarnath, 2001.

MJ: *Māyājālatantra*. [D no. 466, P no. 456] (=『瑜伽大教王経』)

MVA: *Mahāvairocanābhisambodhi*. [D no. 494, P no. 126] (=『大日経』)

NYĀ: *Niṣpannayogāvalī*. Yong-hyun Lee , *The Niṣpannayogāvalī by Abhayākaragupta. A New Critical Edition of the Sanskrit Text (Revised Edition)*. Beagun press, Seoul, 2004.

PK: *Pañcakrama.* Mimaki, Katsumi and Tomabechi Toru, *Pañcakrama Sanskrit and Tibetan texts critically edited with verse index and facsimile edition of the Sanskrit manuscripts*, Centre for East Asian Studies for Unesco, Tokyo, 1994.

PKṬ: *Pañcakramaṭippaṇī*. Zhongxin Jiang & Toru Tomabechi, *The Pañcakramaṭippaṇī of Muniśrībhadra -Introduction and Romanized Sanskrit Text-*, European Academic Publishers, Berne, 1996.

PMV: *Pañcatathāgatamudrāvivarana.* 密教聖典研究会(=密教聖典研究会[1988]),「アドヴァヤヴァジュラ著作集 –梵文テキスト・和訳(1)–」『大正大学綜合佛教研究所年報』10, 前田崇氏担当箇所 pp. (46)-(57), 1988.

PSP: *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*. Takayasu Kimura, *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā IV*, Sankibo Busshorin, 1990.

RĀT: *Rahasyānandatilaka* (D no. 1345, P no. 2477).

SA: *Saṃkṣiptābhiṣekavidhi*. 桜井宗信(=桜井[1996])『インド密教儀礼研究 –後期インド密教の灌頂次第–』法蔵館, 1996.

SPU: *Saṃpuṭodbhavatantra*. Tadeusz Skorupski,

[Ch. I] *The Saṃpuṭa-Tantra -Sanskrit and Tibetan Versions of Chapter One-, The Buddhist Forum IV*, SOAS, pp. 191-244, London, 1996.

[Ch. II] *The Saṃpuṭa-Tantra -Sanskrit and Tibetan Versions of Chapter One-, The Buddhist Forum IV*, The Institute of Buddhist Studies, pp. 223-269, Tring, 2001.

SS: *Sarvabuddhasamāyogaḍākinījālasaṃvara*. [D no. 366, P no. 8]

STTS: *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*. 堀内寛仁『梵蔵漢対照 初会金剛頂経の研究 梵文校訂篇』, 密教文化研究所, 1983(上), 1974(下), (=『初会金剛頂経』)

SUṬ: *Sekoddeśaṭīkā*. Francesco Sferra(=Sferra[2006]). *The Sekoddeśaṭīkā by Nāropā (Paramārthasaṃgraha)*(SERIE ORIENTALE ROMA 99), Roma, 2006.

SVU: *Saṃvarodaya*. Tsuda Shinichi (=Tsuda[1974]), *The Saṁvarodaya-tantra Selected Chapters*, The hokuseido press(北星堂書店), Tokyo.

ṢAY: *Ṣaḍaṅgayoga*. Francesco Sferra(=Sferra[2000]), *The Ṣaḍaṅgayoga by Anupamarakṣita, with Raviśrījñāna's Guṇabharaṇīnāmaṣaḍaṅgayogaṭippaṇī*, *Serie Orientale Roma* 85, Roma, 2000.

ŚP: *Śrīparamādya*(=『理趣広経』). 『理趣広経』の翻訳研究会[2013][2014][2015].

ŚPṬ: *Śrīparamādyaṭīkā*. [D no. 2512, P no. 3335].

TS: *Tattvasiddhi*. [D no. 3708, P no. 4531].

TR: *Trisamayarājatantra* [D no. 502, P no. 134].

VAT: *Vajrāmṛtatantra.* [D435, P74].

VĀ: *Vajrāvalī*. Masahide Mori, *Vajrāvalī of Abhayākaragupta, Buddhica Britannica Series Continua*, The Institute of Buddhist Studies, Tring, 2009.

VĀT: *Vajrāralitantra* [D no. 426, P no. 65].

VBh: *Vajrabhairavatantra*. Ngawang Samten, *Śrīvajrabhairavamahāyogatantram, Journal of Rare Buddhist Texts Research Unit 43*, pp. 163-176, Sarnath, 2007.

VP: *Ḍākinīvajrapañjara*. [D no. 419, P no. 11].

VPṬ: *Ḍākinīvajrapañjaraṭippati.* KL 230 = NGMPP C26/3.

YRM: *Yogaratnamālā*. Snellgrove, David L. *The Hevajra Tantra, A Critical Study*. *Part II Sanskrit and Tibetan Texts*. London: Oxford University Press, 1959.

『Indrabhūti 註』: [D no. 1194, P no. 2324].

『Kṛṣṇa 註』: [D no. 1195, P no. 2325].

『Mahāmati 註』: KL 134 = NGMPP C14/11, NAK 5/20 = NGMPP A47/17, NAK 5/23 = NGMPP A47/18. [D no. 1196 P no. 2326.].

『初会金剛頂経』: 不空訳『金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経』大正蔵 no. 865. (=STTS)

『秘密集会』: 施護訳『一切如来金剛三業最上秘密大教王経』大正蔵 no. 885. (=GS)

『大悲智金剛』: 法護訳『仏説大悲智金剛大経王儀軌経』大正蔵 no. 892. (=DK)

『大日経』: 善無畏訳『大毘盧遮那成仏神変加持経』大正蔵 no. 848. (=MVA)

『理趣経』: 不空訳『大楽金剛不空真実三昧耶経』大正蔵 no. 243. (=AdhŚ)

『理趣広経』: 法賢訳『仏説最上根本大楽金剛不空三昧大教王経』大正蔵 no. 244. (=ŚP)

『瑜伽大教王経』: 法賢訳『仏説瑜伽大教王経』大正蔵 no. 890. (=MJ)

『十忿怒儀軌』: 法賢訳『仏説幻化網大瑜伽教十忿怒明王大明観想儀軌経』大正蔵 no. 891.

『十八会指帰』: 不空訳『金剛頂瑜伽経十八会指帰』大正蔵 no. 869.

『プトゥン聴聞録』: Bu ston rin chen grub 著, *bla ma dam pa rnams kyis rjes su bzung ba'i tshul bka' drin rjes su dran par byed pa, The Collected Works of Bu ston*, International Academy of Indian Culture Part 26, D no. 5199, 1965.

『タントラ部概論』: bSod nams rtse mo著, *rgyud sde spyi'i rnam par gzhag pa*. TBRC W00EGS1017151, sa skya bka' 'bum Vol. 3 pp. 7-164.

・二次文献

１．欧文

Baroetto, Giuseppe.
[2004]: *HEVAJRATANRA il risveglio di Vajragarbha*, Ubaldini Editore, Roma.
Beyer, Stephan.
[1978]: *Magic and Ritual in Tibet -The cult of Tārā-*, University of California Press, Berkeley・ Los Angeles・London.
Bhattacharyya, Benoytosh.
[1929]: *Two Vajrayāna Works*, Oriental Institute, Baroda.
[1932]: *An introduction to Buddhist Esoterism*, Humphrey Milford, Oxford University Press, London.
Brauen, Martin.
[1998]: *The Mandala –Sacred Circle in Tibetan Buddhism-*, translated by Martin Willson, Shambhala, Boston.
Chattopadhyaya, Debiprasad (ed.).
[1980]: *Tāranātha's History of Buddhism in India*, (First edition: Simha 1970) translated by Alaka Chattopadhyaya & Lama Chimpa, K. P. Bagchi & Company, Calcutta.
Cicuzza, Claudio.
[2001]: *The Laghutantraṭīkā by Vajrapāṇi A critical edition of the Sanskrit text*, *Serie Orientale Roma* 86, Roma.
Davidson, Ronald M.
[2002]: *Indian Esoteric Buddhism -A Social History of the Tantric Movement-*, Columbia University Press, New York.
Edgerton, Franklin.
[1953]: Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary, Yale University Press, New Haven.
Einoo Shingo(永ノ尾信悟).
[2009]: *From kāmas to siddhis –Tendencies in the Development of Ritual towards Tantrism-, Genesis and Development of Tantrism* (『タントラの形成と展開』), pp. 17-39, 山喜房仏書林, Tokyo.
English, Elizabeth.
[2002]: *Vajrayoginī -Her Visualization, Rituals, and Form-*, Wisdom Publication, Boston.
Farrow, G. W and I. Menon.
[1992]: *The Concealed Essence of the Hevajra Tantra with the Commentary Yogaratnamālā*, Motilal banarsidass publishers private limited, Delhi.
Goshima, Kiyotaka(五島清隆) and Noguchi, Keiya(野口圭也).
[1983]: *A succinct Catalogue of the Sanskrit Manuscript in the possession of the Faculty of Letters*, Kyoto University, Kyoto.
Gray, David B.
[2007]: *The Cakrasamvara Tantra (The Discourse of Śrī Heruka) Śrīherukābhidhāna -A study and Annotated Translation-*, The American Institute of Buddhist Studies at Columbia University, New York.

Isaacson, Harunaga.
[1998]: *Tantric Buddhism in India (from c. A. D. 800 to c. A. D. 1200), Buddhismus in Geshichte und Gegenwart II*, pp. 1-26, Hamburg.
[2002]: *Ratnākaraśānti's Bhramaharanāma Hevajrasādhana*, 『国際仏教学大学院大学研究紀要』5, pp. 151-176, Tokyo.
[2010]: *Observations on the Development of the Ritual of Initiation (abhiṣeka) in the Higher Buddhist Tantric Systems, Hindu and Buddhist Initiations in India and Nepal,* pp. 261-279, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.
[2013]: *Yogācāra and Vajrayāna according to Ratnākaraśānti*, *The foundation for yoga Practitioners,* pp. 1036-1051, Harvard university press, USA.
Kuranishi, Ken'ichi.
[2008]: *Śrīdhara and his works on the Yamāri cycle, The Proceedings of the international Conference on Esoteric Buddhist Studies*, Koyasan University, pp. 179-183.
[2011]: *Notes on the classification of Buddhist Tantras -The View of Jinadatta and Śrīdhara-, Buzan Kyōgaku taikai kiyō* (『豊山教学大会紀要』) 39, pp. 306-316.
[2012]: *On the Manuscript NAK 3/716(NGMPP A48/11) : The Sadāmnāyānusāriṇī, a Commentary on the Saṃvarodayatantra, Journal of Indian and Buddhist Studies* (『印度學佛教學研究』) 60 [3], pp. 1271-1274.
Lee, Yong-hyun.
[2004]: *The Niṣpannayogāvalī by Abhayākaragupta .A New Critical Edition of the Sanskrit Text (Revised Edition)*, Beagun press, Seoul.
Moharana, Surendra Kumar.
[2001]: *Tāntric Buddhism –An obscure Aspect of the Cultural Heritage of India with Special Reference to Orissa-*, Aryan Books International, New Delhi.
Powers, John.
[2007]: *Introduction to Tibetan Buddhism*, Snow Lion Publications, New York.
Rhoton, Jared Douglas.
[2002]: *A Clear Differentiation of the Three Codes -Essential Distinctions among the Individual Liberation, Great Vehicle, and Tantric Systems. The sDom gsum rab dbye and Six Letters. by Sakya Pandita Kunga Gyaltshen-*, State University of New York Press, New York.
Roerich, George. N.
[1949]: *The Blue Annals*, Royal Asiatic Society of Bengal, Calcutta.
Samuel, Geoffrey.
[2008]: *The origins of yoga and tantra -Indic Religions to the Thirteenth Century-*, Cambridge university press, Cambridge.
Sanderson, Alexis.
[1994]: *Vajrayāna: Origin and Function, Buddhism into the Year 2000*, *International Conference Proceedings*, *Dhammakāya Foundation*, pp. 87-102, Bangkok-Los Angeles.
[1995]: *Meaning in Tantric Ritual, Essais sur le rituel III*, pp. 15-95, Peeters, Louvain.
[2009]: *The Śaiva Age -The Rise and Dominance of Śaivism During the Early Medieval Period-. Genesis and Development of Tantrism* (『タントラの形成と展開』), pp. 41-349, 山喜房仏書林, Tokyo.

Sferra, Francesco.
[2000]: *The Ṣaḍaṅgayoga by Anupamarakṣita -with Raviśrījñāna's Guṇabharaṇīnāmaṣaḍaṅgayogaṭippaṇī-*, *Serie Orientale Roma* 85, Roma.
[2006]: *The Sekoddeśaṭīkā by Nāropā (Paramārthasaṃgraha), Serie Orienrtale Roma* 99, Roma.
[2009]: *The Laud of the Chosen Deity, the First Chapter of the Hevajratantrapiṇḍārthaṭīkā by Vajragarbha*, *Genesis and Development of Tantrism* (『タントラの形成と展開』), pp. 435-468, 山喜房仏書林, Tokyo.

Shendge, Malati J.
[2004]: *Ṣaṭsāhasrikā-Hevajra-Ṭīkā A Critical Edition*, Pratibha Prakashan, Delhi.

Snellgrove, David L.
[1959a]: *The Hevajra Tantra, A Critical Study -Part I Introduction and Translation-*, Oxford University Press, London.
[1959b]: *The Hevajra Tantra, A Critical Study -Part II Sanskrit and Tibetan Texts-*, Oxford University Press, London.
[1987]: *Indo-Tibetan Buddhism -Indian Buddhists and their Tibetan successors-*, Serindia Publications, London.

Sobisch, Jan-Ulrich.
[2008]: *Hevajra and Lam 'bras Literature of India and Tibet as seen through the eyes of A-mes-zhabs*, Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.

Sparham, Gareth.
[1999]: *The fulfillment of all hopes, Guru devotion in Tibetan buddhism by Tsongkhapa*, Wisdom Publications, Boston.

Szántó, Péter-Dániel.
[2010]: *The case of The Vajra-Wielding Monk, Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hung* 63 [3], pp. 289-299, Oxford.

Tachikawa, Musashi, Onoda Shunzo, Noguchi Keiya, Tanaka Kimiaki.
[1991]: *The Ngor Mandalas of Tibet, Listing of Mandala Deities bsod nams rgya mtsho*, Bibliotheca Codicum Asiaticorum 4, The Centre for East Asia Cultural Studies.

Tanemura, Ryugen.
[1993]: *The Four nikāyas Mentioned in the Gaṇḍīlakṣaṇa Chapter of the Kriyāsaṃgraha*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* (『印度學佛教學研究』) 41 [2], pp. 1121-1123.
[2001]: *One Aspect of the Consecration Ceremony of Images in Buddhist Tantrism: "The Ten Rites" Prescribed in the Kriyāsaṃgrahapañjikā and Their Background*, Journal of the Japanese Association for South Asian Studies 13, pp. 52-75, Tokyo.
[2004]: *Kuladatta's Kriyāsaṃgrahapañjikā* (Groningen Oriental Studies XIX), Egbert Forsten, Groningen.

Tripāṭhī, Rāṃśaṅkar & Negī, Thakur Sain.
[2001]: *Hevajratantram with Muktāvalī Pañjikā of Mahāpaṇḍitācārya Ratnākaraśānti*, *Bibliotheca Indo-Tibetica Series* 48. Central Institute of Higher Tibetan Studies, Sarnath.

Tsuda, Shinichi.
[1974]: *The Saṁvarodaya-tantra Selected Chapters*, The hokuseido press(北星堂書店), Tokyo.

Wayman, Alex.
[1977]: *Yoga of the Guhyasamājatantra, The arcane lore of forty verses A Buddhist Tantra Commentary*, Motilal Banarsidass, Delhi.
[1995]: *The Buddhist Tantras -Light on Indo-Tibetan esotericism-*, Routledge, London.
Wedemeyer, Christian K.
[2007]: *Āryadeva's Lamp that Integrates the Practices "Caryāmelāpakapradīpa" The Grandual Path of Vajrayāna Buddhism According to the Esoteric CommunityNoble Tradition*, American Institute of Buddhist Studies, New York.
Yoshimizu, Chizuko.
[1987]: *The Theoretical Basis of the bskyed rim as Reflected in the bskyed rim Practice of the Ārya School,* 『日本西蔵學会々報』33, pp. 21- 33.
Zhongxin Jiang & Toru Tomabechi.
[1996]: *The Pañcakramaṭippaṇī of Muniśrībhadra -Introduction and Romanized Sanskrit Text-*, European Academic Publishers, Bern.

２．和文

青木文教.
[2010]: 『西藏全誌』芙蓉書房.
伊久間洋光.
[2013]: 「『如来秘密経』の梵文写本について」『印度学仏教学研究』61 [2], pp. 171-175.
石濱裕美子.
[1999]: 「チベット密教史」『シリーズ密教 2 チベット密教』pp. 29-48, 春秋社.
磯田熙文.
[1975]: 「Hevajra-tantra における samādhi について」『日本仏教学会年報』41, pp. 17-31.
[1976]: 「ṣaḍaṅga-yoga をめぐって」『印度學佛教學研究』25 [1], pp. 448-456.
海野孝憲.
[2002]: 『インド後期唯識思想の研究』山喜房佛書林.
永ノ尾信悟.
[1992]: 「グリフヤスートラ文献にみられる儀礼変容」『東洋文化研究所紀要』118, pp. 43-86.
[1993]: 「ヒンドゥー儀礼の変容 –朝の勤行を例として–」『インド=複合文化の構造』pp. 261-318, 法蔵館.
[2010]: 「儀礼と文化の変遷」『新アジア仏教史 1 仏教出現の背景』pp. 180-215, 佼正出版社.
大塚惠俊.
[2012]: 「『理趣広経』「般若分」初段所説の密教儀礼について」『豊山教学大会紀要』40, pp. (442)-(460).
[2013]: 「『理趣経』広本のチベット訳および漢訳対照の和訳研究を中心とした文献学的研究」『大正大学大学院研究論集』37, pp. 101-102.

大塚伸夫.
[1993]: 「『大日経』の曼荼羅行」『密教学研究』25, pp. 85-123.
[1995]: 「『金剛手灌頂タントラ』における曼荼羅行について」『豊山教学大会紀要』23, pp. 13-53.
[2013]: 『インド初期密教成立過程の研究』春秋社.
大西秀城.
[1994]: 「十忿怒尊について」『密教文化』185, pp. 42-64.
大観慈聖.
[2005]: 「『マハーマーヤー・タントラ』の成立に関する一考察 –仏教タントラとヒンドゥー神話の関係性をめぐって–」『印度学仏教学研究』54 [1], pp. 450-453.
[2014]: 「インド後期仏教密教における『金剛甘露タントラ』の位置と性格 –関連諸文献の分析と三註釈の解釈をめぐって–」『印度学仏教学研究』62 [2], pp. 959-963.
奥山直司.
[1992]「インド後期密教における教理と造形 –devatā とそのイコンをめぐって-」『日本仏教学会年報』57, pp. 223-236.
[1999]: 「インド密教ホーマ儀礼」『シリーズ密教 1 インド密教』pp. 175-193, 春秋社.
[2005]: 「『ヤマーリ・タントラ』と『マハーヴァジュラバイラヴァ・タントラ』呪殺の冥王たち」『インド後期密教(上)』pp. 91-114, 春秋社.
沖和史.
[1982]: 「無相唯識と有相唯識」『講座大乗仏教 8』春秋社.
加納和雄.
[2012]: 「インド後期密教における如来蔵への言及とその解釈: タントラ註釈書を中心として」『密教学研究』44, pp. 125-137.
壁瀬灌雄.
[1962]: 「Hevajra に於ける Maṇḍala 章の展開」『印度学仏教学研究』10 [1], pp. 265-268.
[1963]: 「シャンティ・グプタの呼金剛軌論」『印度学仏教学研究』11 [2], pp. 438-444.
[1964]: 「インドラブティとサラハの思想の比較」『印度学仏教学研究』12 [2], pp. 549-555.
川越英真.
[1983]: 「Rin chen bzaṅ po の翻訳リスト」『印度学仏教学研究』31 [2], pp. 841-844.
川崎一洋.
[1997]: 「『幻化網タントラ』の構造 –曼荼羅を中心として–」『密教文化』198, pp. 98-112.
[2002a]: 「*Catuṣpīṭha-tantra* 所説の曼荼羅について」『印度学仏教学研究』50 [2], pp. 838-840.
[2002b]: 「*Catuṣpīṭha-tantra* 所説の究竟次第 –CatuṣpīṭhaIV-III を中心に–」『印度学仏教学研究』 51 [1], pp. 347-349.
北村太道・タントラ仏教研究会訳.
[2012]: 『『金剛頂経』系密教 原典研究叢刊 1 全訳 金剛頂大秘密瑜伽タントラ』起心書房.
[2014]: 『『金剛頂経』系密教 原典研究叢刊 3 全訳 降三世大儀軌王／同ムディタコーシャ註釈』起心書房.

木村秀明.
[1988]: 「幻化網タントラにおける曼荼羅」『豊山教学大会紀要』16, pp. 127-144.
[1991]: 「幻化網タントラにおける灌頂」『印度学仏教学研究』39 [2], pp. 859-861.
倉西憲一.
[1999]: 「七部成就書における大楽思想について」『佛教文化学会紀要』8, pp. 38-49.
[2000]: 「*Kṛṣṇayamāri tantra* における四瑜伽について–Kumāracandra の理解-」『印度學佛教學研究』49 [1], pp. (137)-(139).
[2013]: 「インド仏教終焉期における大乗仏典受用の一例 –顕密両修の学僧ラトナラクシタの著作を中心として–」『大正大学綜合佛教研究所年報』35, pp. 209-224.
[2015]: 「インド密教学僧の学術活動に関する一考察 –ラトナラクシタ著『パドミニー』所引の文献の傾向と分析に基づいて–」『密教学研究』47, pp. 15-28.
クンチョク・シタル.
[1999]: 「チベットにおける四種タントラの認識」『シリーズ密教 2 チベット密教』pp. 110-120, 春秋社.
桜井宗信.
[1996]: 『インド密教儀礼研究 –後期インド密教の灌頂次第–』法蔵館.
[1998]: 「*Cakrasaṃvarābhisamaya* の原典研究 –梵文校訂テクスト–」『智山学報』47, pp. (1)-(32).
[2004]: 「Atīśa の説く＜観想上の灌頂＞ −Abhisamayavibhaṅga を中心に−」『印度学仏教学研究』53 [1], pp. 328-334.
櫻部建.
[1969]: 『倶舎論の研究　界・根品』法蔵館.
櫻部建・小谷信千代・本庄良文.
[2004]: 『倶舎論の原典研究　智品・定品』大蔵出版.
静春樹.
[1997]:「＜瑜伽女 yoginī＞考」『密教文化』196, pp. 107-138.
[2002]: 「ガナチャクラと無上瑜伽階梯における＜行＞の体系」『密教文化』209, pp. 38-78.
[2004]: 「タントリストが口にするもの 飲食による「即身成仏」について」『京都精華大学紀要』26, pp. 64-84.
[2005a]: 「＜勇者の饗宴＞儀礼と金剛乗の比丘」『密教文化』214, pp. 80-104.
[2005b]: 「インド後期密教修法論の円環構造 –灌頂と聚輪についての一考察–」『印度学仏教学研究』54 [1], pp. 442-445.
[2006a]: 「金剛乗とインド仏教史」『密教文化』216, pp. 134-164.
[2006b]: 「金剛乗とタントラ分類」『密教文化』217, pp. 113-138.
[2007]: 「金剛乗がもった女性観序説」『密教文化』219, pp. 105-136.
[2013]: 「サキャ派祖師たち三人による金剛乗の決択 サキャパンディタ作『タントラ部概論建立とタントラの現観の要綱の科文』和訳(1)」『高野山大学密教文化研究所紀要』26, pp. 181-230.
[2015]: 『ガナチャクラと金剛乗 –後期インド仏教論の再構築を目指して–』起心書房.

島田茂樹.
[1982]: 「ヘーヴァジュラ系儀軌にみる灌頂」『印度学仏教学研究』31 [1], pp. 136-137.
[1983a]: 「Hevajra 系儀軌にみる Aṣṭaśmaśāna」『宗教研究』56 [4], pp. 222-223.
[1983b]: 「Vajrapañjara と Hevajra」『印度學佛教學研究』32 [1], pp. 188-189.
[1984a]: 「『Buddhakapāla-tantra』の一解釈」『印度学仏教学研究』33 [1], pp. 146-147.
[1984b]: 「Aṣṭaśmaśāna の展開 –サンヴァラ系密教へ–」『宗教研究』57 [4], pp. 166-167.
[1984c]: 「ヘーヴァジュラ曼荼羅の構成 –その成立と展開–」『密教図像』3, pp. 72-81.
[1986]: 「広本ヘーヴァジュラの神話」『印度學佛教學研究』35 [1], pp. 54-56.
[1994]: 「＜ヘーヴァジュラ系タントラ＞所説の女尊と曼荼羅」『密教大系』3, pp. 352-393, 法蔵館.
[1999]: 「後期密教のマンダラ 異形の神ヘールカのコスモロジー」『シリーズ密教 1 インド密教』pp. 114-130, 春秋社.
[2006]: 「『ヘーヴァジュラ・タントラ』 聖と性の饗宴」『インド後期密教(下)』pp. 47-90, 春秋社.
ジュゼッペ・トゥッチ著, ロルフ・ギーブル訳.
[1984]: 『マンダラの理論と実践』平河出版社.
杉木恒彦.
[2001]: 「『チャクラサンヴァラタントラ』の成立段階について –およびJayabhadra作 *Śrīcakrasaṃvarapañjikā* 校訂梵本–」『智山学報』50, pp. (91)-(141).
[2006]: 「『チャクラサンヴァラ・タントラ』聖地と身体の宗教性」『インド後期密教(下)』pp. 91-114, 春秋社.
[2007]: 『サンヴァラ系密教の諸相 –行者・聖地・身体・時間・死生-』東信堂.
髙橋尚夫.
[1977]: 「Jñānasiddhi 第 15 章 –和訳–」『豊山教学大会紀要』5, pp. 99-114.
[1980]: 「Prajñopāyaviniścayasiddhi –和訳– (1)」『豊山学報』25, pp. 161-190.
[1981]: 「『略出経』と『Vajrodaya』–供養会について–」『大乗仏教から密教へ 勝又俊教博士古稀記念論集』, pp. 457-472, 春秋社.
[1982]: 「『略出念誦経』と『ヴァジュローダヤ』 –入マンダラについて–」『密教学研究』14, pp. 55-78.
[1988]: 「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現第一瑜伽三摩地品」『密教文化』161, pp. 113-150.
立川武蔵.
[1974]: 『西蔵仏教宗義研究 第一巻 –トゥカン『一切宗義』サキャ派の章–』東洋文庫.
[1986]: 「金剛ターラーの観想法」『論叢仏教美術史』pp. 65-97, 吉川弘文館.
[1987]: 『曼荼羅の神々』ありな書房.
[1990]: 『女神たちのインド』せりか書房.
[1999]: 「インド密教の歴史的背景」『シリーズ密教 1 インド密教』pp. 19-31, 春秋社.
[2014]: 「『完成せるヨーガの環』第 24 章「五ダーカ・マンダラ」和訳」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』pp. 698-706, 佼成出版.
[2015]: 『マンダラ観想と密教思想』春秋社.

立川武蔵・正木晃
[1997]: 『チベット密教の神秘 快楽の空・智慧の海』学習研究社.
田中公明.
[1984]: 「『一切仏集会拏吉尼戒網タントラ』とその曼荼羅について」『密教図像』３, pp. 59-71.
[1987]: 『曼荼羅イコノロジー』平河出版.
[1994a]: 「『一切仏集会拏吉尼戒網タントラ』とその曼荼羅について」『密教大系』3, pp. 394-410. 法蔵館.
[1994b]: 『超密教　時輪タントラ』東方出版.
[1996]: 『インド・チベット曼荼羅の研究』法蔵館.
[1997]: 『性と死の密教』春秋社.
[1998]: 「ネパールのサンスクリット語仏教文献研究—第 41 回学術大会における発表以後同定された断片について—」『印度學佛教學研究』, 46 [2], pp. (148)-(152).
[2006]: 「『サマーヨーガ・タントラ』 般若・母タントラの原形」『インド後期密教(下)』, pp. 13-46. 春秋社.
[2009]: 『チベットの仏たち』方丈堂出版.
[2010]: 『インドにおける曼荼羅の成立と発展』春秋社.
谷貞志.
[1999]: 『刹那滅の研究』春秋社.
種村隆元.
[2002]: 「*Kriyāsaṃgrahapañjikā* の vāstunāga 儀礼 –儀礼マニュアルと実際の儀礼の関係に関する一考察–」『東アジア仏教 その成立と展開 木村清孝博士還暦記念集』pp. 553-575, 春秋社.
[2010]: 「密教の出現と展開」『新アジア仏教史 2 仏教の形成と展開』pp. 210-262, 佼正出版社.
種村隆元・加納和雄・倉西憲一.
[2014]: 「Ratnarakṣita 著 *Padminī* –研究資料概観–」『大正大学綜合佛教研究所年報』36, pp. (163)-(176).
塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文.
[1989]: 『梵語仏典の研究 IV 密教経典篇』平楽寺書店.
辻直四郎.
[1974]: 『サンスクリット文法』岩波全書.
津田真一.
[1972]: 「ḍākinījālasaṃvara の原像」『印度学仏教学研究』20 [1], pp. 60-66.
[1973]: 「四輪三脈の身体観」『インド思想と仏教：中村元博士還暦記念論集』pp. 293-308, 春秋社.
[1976]: 「最勝楽出現タントラ『説真実品』・その梵文テキストと和訳 –タントラ仏教に於ける真理観の一例として–」『佛教學』1, pp. 27-44.
[1981a]:「密教に於ける真理の領域」『勝又俊教博士古稀記念論集』pp. 317-340, 春秋社.
[1981b]:「大乗仏教と密教」『講座大乗仏教 1』pp. 259-316.
[1998]: 『アーラヤ的世界とその神 –仏教思想像の転回–』大蔵出版.

[2008]: 『反密教学』(初版: [1987] リブロポート), 春秋社.
ツルティム・ケサン，小谷信千代共訳
[1991]: 『ツォンカパ著 仏教瑜伽行思想の研究 A study on Buddhist Yogācāra Thought - Tsong kha pa's Philosophy of śamatha-』文栄堂.
徳重弘志.
[2014]: 「『理趣広経』「極喜金剛秘密の供養の広大儀軌」における灌頂」 –和訳および校訂テクスト–, 高野山大学密教文化研究所紀要 27 pp. (121)-(139).
苫米地等流.
[1992a]: 「*Pañcakrama* 研究(1) –"五"次第の構成について–」『印度學佛教學研究』40 [2], pp. 892-895.
[1992b]: 「*Pañcakrama* 研究(2) –Caryāmelāpakapradīpa における引用文献–」『印度学仏教学研究』41 [1], pp. 391-396.
長尾雅人.
[1978]: 『中観と唯識』岩波書店.
名取玄喜.
[2014]: 「『菩提場荘厳陀羅尼経』の２つの蔵訳テクストについて」『佛教文化学会紀要』23, pp. 199-215.
西岡祖秀.
[1983]: 「『プトゥン仏教史』目録部索引 III」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』6, pp. 47-201.
野口圭也.
[1984]: 「*Saṃpuṭodbhavatantra* の基本的性格」『印度学仏教学研究』32 [2], pp. 168-169.
[1985]: 「無上瑜伽密教の灌頂について」『南都佛教』54, pp. 51-67.
[1986a]: 「*Saṃpuṭodbhavatantra* I-i –特に経題を中心として–」『印度学仏教学研究』34 [2], pp. 831-834.
[1986b]: 「*Saṃpuṭodbhavatantra* と『秘密相経』」豊山学報 31, pp. (39)-(63).
[1987a]: 「*Saṃpuṭodbhavatantra* III-iii –特に Nairātmyā-maṇḍala に関して–」『印度学仏教学研究』36 [1], pp. 346-348.
[1987b]: 「Indrabhūti の sahaja 説」『豊山教学大会紀要』15, pp. (25)-(43).
[1987c]: 「*Saṃpuṭodbhavatantra* と *Prajñopāyaviniścayasiddhi*」『大正大学綜合佛教研究所年報』9, pp. 160.
[1987d]: 「*Saṃpuṭodbhavatantra* 所説のヘールカマンダラ」『密教学研究』19, pp. 65-86.
[1987e]: 「“Saṃpuṭodbhavatantra”所説の金剛薩埵マンダラ」『密教図像』5, pp. 1-14.
[1995]: 「“samarasa”の語義解釈」『豊山教学大会紀要』23, pp. (1)-(12).
[1999]: 「後期密教の思想と実践 父タントラ・母タントラ」『シリーズ密教 1 インド密教』pp. 57-80, 春秋社.
[2006]: 「『サンプタ・タントラ』温故知新」『インド後期密教(下)』pp. 145-46. 春秋社.
羽田野伯猷.
[1987]: 『チベット・インド学集成 3 インド編 I』法蔵館.
平岡宏一.
[2001]: 「チベットにおける秘密集会第四灌頂の意味について」『印度学仏教学研究』49 [2], pp. 873-875.
廣澤隆之.
[2005]: 『『唯識三十頌』を読む』大正大学出版会.
パユットー，ポー・オー(Payutto, P. A.)著，野中耕一訳.
[2012]: 『ポー・オー・パユットー仏教辞典（仏法篇）』サンガ.

藤田祥道.
[2011]: 「アビダルマ仏教と大乘仏教 –仏説論を中心に–」『シリーズ大乘仏教 1 大乘仏教の誕生』pp. 114-149, 春秋社.
本庄良文.
[2011]: 「大乘仏説論の一断面 –『大乘荘厳経論』の視点から–」『シリーズ大乘仏教２ 大乘仏教とは何か』pp. 114-149, 春秋社.
前田崇.
[1985]: 『蔵梵漢対照 初会金剛頂経索引』国書刊行会.
松長有慶.
[1998a]: 『松長有慶著作集 1 密教経典成立史論』法蔵館.
[1998b]: 「大乘仏教における密教の形成」『インド密教の形成と展開』pp. 3-30, 法蔵館.
[2000]: 『秘密集会タントラ和訳』法蔵館.
[2001]: 『インド密教の仏たち』春秋社.
[2005]: 『インド後期密教(上)』春秋社.
密教聖典研究会.
[1988]: 「アドヴァヤヴァジュラ著作集 –梵文テキスト・和訳(1)–」『大正大学綜合佛教研究所年報』10, pp. (1)-(57).
[1989]: 「アドヴァヤヴァジュラ著作集 –梵文テキスト・和訳(2)–」『大正大学綜合佛教研究所年報』11, pp. (86)-(200).
[1990]: 「アドヴァヤヴァジュラ著作集 –梵文テキスト・和訳(3)–」『大正大学綜合佛教研究所年報』12, pp. (49)-(83).
[1991]: 「アドヴァヤヴァジュラ著作集 –梵文テキスト・和訳(4)–」『大正大学綜合佛教研究所年報』13, pp. (46)-(90).
[2004]: 『梵漢対照『不空羂索神變眞言経』呪文集成』ノンブル社.
森雅秀.
[1991]: 「十忿怒尊のイメージをめぐる考察」『仏教の受用と変容』3, pp. 293-324, 佼正出版社.
[1993]: 「アバヤーカラグプタの灌頂論」『印度學佛教學研究』41 [2], pp. (238)-(239).
[1994]: 「『完成せるヨーガの環』第１章「文殊金剛マンダラ」訳およびテキスト」『高野山大学密教文化研究所紀要』7, pp. 113-142.
[1997]: 『マンダラの密教儀礼』春秋社.
[2001]: 『インド密教の仏たち』春秋社.
[2006]: 「『ヘーヴァジュラ・タントラ』聖と性の饗宴」『インド後期密教(下)』pp. 47-90, 春秋社.
[2011a]: 『インド密教の儀礼世界』世界思想社.
[2011b]: 『チベットの仏教美術とマンダラ』名古屋大学出版会.
[2014]: 『アジアの灌頂儀礼 –その成立と伝播–』法蔵館.
山口瑞鳳.
[1987]: 『チベット(上)』東京大学出版会.
[2004]: 『チベット(下)改訂版』(初版:[1988]), 東京大学出版会.
吉崎一美.
[1981]: 「Bhūtaḍāmara 尊の諸文献」『印度学仏教学研究』29 [2], pp. 886-893.
芳村修基.
[1951]: 「プトンのチベット佛教史」『仏教学研究』6, pp. 2-52.

頼富本宏.
[1975]: 「無上瑜伽密教の神秘思想 –四歓喜説を中心として–」『日本佛教學會年報』40, pp. 1-14.
[1977]: 「Hevajratantra に見られる mantra について」『印度学仏教学研究』25 [2], pp. 945-951.
[1978]: 「無上瑜伽密教の実践儀礼」『日本佛教學會年報』43, pp. 1-16.
[1990]: 『密教仏の研究』法藏館.
頼富本宏・下泉全暁.
[1994]: 『密教仏像図典 インドと日本のほとけたち』人文書院.
『理趣広経』の翻訳研究会.
[2013]: 「*Śrīparamādya* 校訂テクスト 第１章」『大正大学綜合佛教研究所年報』35, pp. (134)-(166).
[2014]: 「*Śrīparamādya* 校訂テクスト 第２章・第３章」『大正大学綜合佛教研究所年報』36, pp. (141)-(162).
[2015]: 「*Śrīparamādya* 校訂テクスト 第４章・第５章」『大正大学綜合佛教研究所年報』37, pp. (69)-(85).
ロラン・デエ著，今枝由郎訳.
[2005]: 『チベット史 Historie du Tibet』春秋社.
渡辺照宏.
[1965]: 「Virocana と Vairocana –研究序説–」『密教学密教史論文集』pp. 371-390, 高野山大学.
渡辺章悟.
[2009]:『金剛般若経の研究』山喜房仏書林.
拙稿 (横山裕明).
[2011a]: 「*Pradīpoddyotana* 第七章を中心とした Candrakīrti の註釈傾向について」『大正大学大学院研究論集』35, pp. 146-147.
[2011b]: 「iti prāpte について –*Pradīpoddyotana* に見られる特殊な用法–」『豊山教学大会紀要』39, pp. (276)-(288).
[2012]: 「Padmavajra 著 *Guhyasiddhi* について –チベット語訳増広部分の検討を中心として–」『印度学仏教学研究』60 [2], pp. (93)-(96).
[2014a]: 「*Ḍākinīvajrapañjara* について –現存するサンスクリット語註釈を用いた考察–」『大正大学綜合佛教研究所年報』36, p. 533.
[2014b]: 「*Ḍākinīvajrapañjara* 文献の灌頂について –第四灌頂を巡って– 」『佛教文化学会紀要』23, pp. (187)-(197).
[2014c]: 「『理趣広経』「般若分」第二段について –四波羅蜜を中心として–」『豊山教学大会紀要』42, pp. (285)-(296).
[2015a]: 「*Ḍākinīvajrapañjara* の註釈書とその著者たち –'brog mi 翻訳官の *Hevajra* 相承系譜を中心とした考察–」,『大正大学綜合佛教研究所年報』37, pp. 529-530.
[2015b]: 「*Ḍākinīvajrapañjaraṭippati* について –*Dvikalpa* および『Mahāmati 註』との比較を中心として–」,『佛教文化学会紀要』24, pp. (91)-(105).

＜付録＞

Ḍākinīvajrapañjaratantra

[Tr.] Gayadhara/ Shā kya ye shes

[D no. 419, 30a4- 65b7] [P no. 11, 262a6- 301b4] [C no. 10, 284b4- 328b3]

[N no. 371, 352a1- 412b4] [H no. 379, 379a1- 433b1] [T no. 380, 148b7- 201a4]

[K no. 379, 291a4-334b6] [Sh no. 297, 268b1-311b3]

(比較資料 VPṬ・『Mahāmati註』MSSより回収できるSkt, [Ph no. 458, 56b1- 121a6])

付録A　標題部分

[D30a4; P262a6; C284b4; N352a1; H379a1; T148b7; K291a4; Sh268b1]

རྒྱ་གར་སྐད་དུ། ཌཱ་ཀི[1] ནཱི[2] ན་ཛཿ ཀ་ཡ་ཨ་ཡ་ཏ་ཀ་ཏན་ཏ[3] ཀ་ཡ། T149a

བོད་སྐད་དུ། འཕགས་པ་མཁའ[4]འགྲོ་མ་རྡོ་རྗེ་གུར་ཁྱེས་བྱ་བའི་རྒྱུད་ཀྱི་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོའི་བརྡག[5]པ། ཀྱི[6]རྡོ་རྗེ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ།།

[Ph56b1]

རྒྱ་གར་སྐད་དུ། ཌཱ་ཀི་ནཱི་ན་ཛཿ ཀ་ཡ་ཨ་ཡ་ཏ་ཀ་ཏ་ཏ་ཨ་ཡ་ཏ་ཀ་ཏ་ཏ་ཨ་ཡ་ཏ་ཀ་ཏ་ཏ། ཨ་ཡ། ཀ་ལ་ཡ་ནཱ་ཡ།

བོད་སྐད་དུ། འཕགས་པ་མཁའ་འགྲོ་མ་རྡོ་རྗེ་གུར་ཁྱེས་བྱ་བའི་རྒྱུད་ཀྱི་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་དཀྱིལ་འཁོར་བའི་རྡོ་བཀ་ལ།

བཅོམ་ལྡན་འདས་རྡོ་རྗེ་མཁའ་འགྲོ་མ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ།།

---

[1] ཀི་] DPNHTKSh; ཀ་ C　[2] ནཱ་] DPCHTK; ནི་ NSh　[3] ཏ་] NHTSh; ནཱ་ DCK; om. P　[4] མཁའ་] DPCNHTSh; ནམ་ མཁའ་ K　[5] བརྡག་] DPNHTKSh; བརྡགས་ C　[6] ཀྱ་] D; ཀྱི་ PCNHTKSh

付録B　奥書部分

[D65b7; P301b3; C328b2; N412b3; H433a7; T201a3; K334b5; Sh311b2]

འཕགས་ པ་ མཁའ་ འགྲོ་ མ་[1] ཏ་ བའི་ རྡོ་ རྗེ་ གླུ་ རྒྱུད་ ཀྱི་ རྒྱལ་ པོའི་ བརྡག་ པ་ རྫོགས་ སོ། ། [2]

རྒྱ་ གར་ གྱི་ མཁན་ པོ་ ཀ་[3] ཡ་ ཌ་ ར་ དང། ལོ་ ཆུ་[4] བ་ དགེ་ སློང་ ཤཱ་ ཀྱ་ ཡེ་ ཤེས་ ཀྱིས་ བསྒྱུར་ བའོ། ། ॥

H433b

[Ph121a6]

མཁའ་ འགྲོ་ མ་ རྡོ་ རྗེ་ གླུ་ ཞེས་ བྱ་ བ་ རྒྱུད་ ཀྱི་ རྒྱལ་ པོ་ ཆེན་ པོའི་ རྩ་ པ་ རྫོགས་ སོ། ། ॥

---

[1] མ་] DPC; མའི་ NHTKSh　[2] པ་ རྫོགས་ སོ། །] DH; པའོ། རྫོགས་ སྨོ། ། PCN; པའོ། རྫོགས་ སོ། ། TKSh
[3] ཀ་] DCNHTKSh; ཁ་ P　[4] ལོ་ ཆུ་] DPCNHKSh; ཅ་ T

付録C　各章の章題

Ch. I

[D31b1; P263b7; C286b1; N354a6; H381a3; T151a1; K292b6; Sh270a3]

ཐམས་ཅད་ཀྱི་ རྣམ་པ་ མཚོན་ཏུ་ ཞི་ བ་ ས་མས་ ཅན་ འཇུག་ པའི་ ལེའུ་ སྟེ་ དང་ པོའོ། ། ॥

[Ph58b5]

རྣམ་ པ་ ཐམས་ ཅད[1] ཀྱི་ མཚོན་ ཏུ་ ཏྲུ་ ཆे་ བའི་ ས་ཡས་ ཅན་ འཇུག་ པའི་ ལེའུ་ སྟེ་ དང་ པོའོ། ། ॥

Ch. II

[D33b6; P266b3; C289b1; N358a7; H384b5; T154a7; K295b5; Sh273a2]

ཐུན[2] སུ་ ཚོགས་ དང་ རོལ་ མོའི་ སྒྲ་ དང་ གར་ དང་ འདུལ་ བར་ འཇུག་ པ་ དང་ ཆར་ དབབ་ པ་ དང་
N358b1 T154b
མི་ གཡོ་ བའི་ བདག་ ཉིད་ ཆे་ བའི་ ལེའུ་ སྟེ་ གཉིས་ པའོ། ། ॥

[Ph62b5]

ཐུ་ སུ་ ཚོགས་ དང་ རོལ་ མོའི་ སྒྲ། ། གར་ དང་ འཛིགས་ པ་ ཆེན་ པོར་ འཇུག་ པ་ དང་ ཆར་ དབབ་ པ་ དང་། །
མི་ གཡོ་ བའི་ བདག་ ཉིད་ ཆེན་ པོ་ སྟོན་ པའི་ ལེའུ་ སྟེ་ གཉིས་ པའོ། ། ॥

---

[1] ཅད་ 〕 em.; ཅན་ MS　[2] ཐུ་ 〕 DCNHTKSh; ཐུ་ P

Ch. III

[D35a5; P268a4; C291a5; N360b6; H386b7; T156b1; K297a8; Sh274b6]

དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་མཚན་གྱི་ལེའུ་སྟེ་གསུམ་པའོ། ། ॥

[Ph65a4]

དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་མཚན་མཆོག་ཏུ་སྣང་བའི་ལེའུ་སྟེ་གསུམ་པའོ། ། ॥

Ch. IV

[D41b2; P275a5; C299a1; N371b1; H396a5; T165b3; K304b8; Sh282a5]

ཁྲོ་བོ་ཆེན་པོ་འཁོར་ལོའི་སྐྱེད་པོའི[1] སྒྲུགས་ལ་འཇུག་པ་རྣོ་རྩེ[2] ཞེས་བྱ་བའི་ཏིང་ངེ་འཛིན་གྱི[3] ལེའུ་སྟེ་བཞི་པའོ། ། ॥

[Ph76a2]

ཁྲོ་བོ་ཆེན་པོའི་འཁོར་ལོའི་སྐྱེད་པོ་སྒྲུགས་ཀྱི་འཇུག་པ་ཞེས་བྱ་བ་བསྟན་པའི་ལེའུ་སྟེ་བཞི་པའོ། ། ॥

Ch. V

[D43a1; P276b4; C300b4; N373b6; H398a7; T167b4; K306b2; Sh283b7]

ནད་ཐམས་ཅད་རབ་ཏུ་ཞི་བ་དབུགས་དབྱུང་བ་རྣོ་རྩེ[4] ཞེས་བྱ་བའི་ལེའུ་སྟེ་ལྔ་པའོ།། ॥

[Ph78b3]

ནད་རྣམས་ཐམས་ཅད་དབུགས་ཕྱུང་ཞིང། ། རབ་ཏུ་བཏོག་པར་བྱེད་པ་རྣོ་རྩེ་ཞེས་བྱ་བའི་ལེའུ་སྟེ་ལྔ་པའོ། ། ॥

---

[1] སྐྱེད་པོའི་] DC; om. PNHTKSh [2] རྣོ་རྩེ་] DPHTKSh; om. CN [3] ཏིང་ངེ་འཛིན་གྱི་] D; om. PCNHTKSh [4] རྣོ་རྩེ་] D; om. PCNHTKSh

Ch. VI

[D44a7; P278a6; C302b1; N376a6; H400b2; T169b6; K308a5; Sh285b2]

རྡོ་རྗེ་ སེམས་ དཔའི[1] སྨྲིང་ པོ་ སྣང་ བའི་ ལེའུ་ སྟེ་ དྲུག་ པའོ།། །།

[Ph81a5]

རྡོ་རྗེ་ སེམས་ དཔའི་ སྨྲིང་ པོས་ རབ་ ཏུ་ གསལ་ བར་ བྱེད་ པའི་ ལེའུ་ སྟེ་ དྲུག་ པའོ། ། །།

Ch. VII

[D45b6; P279b4; C304a2; N378b1; H402b3; T171b6; K309b5; Sh287a3]

སྤྱན་ ཐམས་ ཅད་ རྣམ་ པར་ དག་ པ[2] བདུད་ རྩི་ ལྟ་ མཆོག་ ཏུ་ ཐུང་ བ་ རྡོ་ རྗེ་ ཞེས་ བྱ་ བའི་ ཏིང་ ངེ་ འཛིན་ ཏེ་ ལེའུ་ བདུན་ པའོ། ། །།

[Ph83a3]

སྤྱན་ ཐམས་ ཅད་ དང་ རྣམ་ པར་ དག་ པ་ རྣམས་ དང་ བདུད་ རྩི་ ལྟའི་ ཕན་ ཡོན་ དང་ བཅས་ པ་ རྡོ་ རྗེ་ ཞེས་ བྱ་ བའི་ ལེའུ་ སྟེ་ བདུན་ པའོ། ། །།

Ch. VIII

[D51a4; P285b6; C310b1; N387b1; H410b4; T179b7; K316a2; Sh293a6]

བཞེངས་ པ་ དང་ ལས་ སྣ་ ཚོགས་ ཀྱི[3] སྒྲོར་ བ་ དང་ སྒྱིན་ སྲེག[4] གི་ ལེའུ་ སྟེ་ བརྒྱད་ པའོ། ། །།

[Ph93b5]

བཞེངས་ པ་ དང་ ལས་ སྣ་ ཚོགས་ ཀྱི་ སྒྲོར་ བ་ དང་ སྒྱིན་ བསྲེག་ གི་ ཚ་ ཀ་ སྟན་ པའི་ ལེའུ་ སྟེ་ བརྒྱད་ པའོ། ། །།

---

[1] དཔའི་ ‖ DCNHTKSh; པའི་ P　[2] པ་ ‖ DH; པར་ PCNTKSh　[3] ཀྱི་ ‖ DCNHTKSh; ཀྱིས་ P　[4] སྲེག་ ‖ DNHTKSh; བསྲེག་ PC

Ch. IX

[D53a2; P287b8; C312b4; N390b5; H413b1; T181b5; K318a5; Sh295b1]

ལས་ སྣ་ ཚོགས་ བསྒྲུབ[1] པའི་ ལེའུ་ སྟེ་ དགུ་ པའོ། ། ॥

[Ph97a5]

ལས་ སྣ་ ཚོགས་ པ་ རབ་ ཏུ་ བསྒྲུབ་ པར་ སྟོན་ པའི་ ལེའུ་ སྟེ་ དགུ་ པའོ། ། ॥

Ch. X

[D53a7; P288a6; C313a2; N391a6; H414a1; T182a4; K318b3; Sh295b7]

རྡོ་ རྗེ་ གྱུ་ མཚན་ རྣམ་ པར་ དག་ པའི་ ལེའུ་ སྟེ་ བཅུ་ པའོ། ། ॥

[Ph97b7]

རྡོ་ རྗེ་ གྱུ་ མཚན་ རྣམ་ པར་ དག་ པའི་ ལེའུ་ སྟེ་ བཅུ་ པའོ། ། ॥

Ch. XI

[D53b3; P288b1; C313a7; N391b4; H414a6; T182b2; K318b8; Sh296a4]

ལས་ ཐམས་ ཅད་ པའི་ ལེའུ་ སྟེ་ བཅུ་ གཅིག[2] པའོ། ། ॥

[Ph98a6]

ལས་ ཐམས་ ཅད་ པའི་ ལེའུ་ སྟེ་ བཅུ་ ཅིག་ པའོ། ། ॥

---

[1] བསྒྲུབ་] DPC; སྒྲུབ་ NHTKSh [2] གཅིག་] DCNHTKSh; ཅིག་ P

Ch. XII

[D54b2; P289b1; C314b1; N393a6; H415b5; T184a1; K320a2; Sh297a6]

རྣལ་འབྱོར་མ་འགྲུང་བ་ཞེས་བྱ་བའི་ལེའུ་སྟེ་བཅུ་གཉིས་པའོ། ། ॥

[Ph100a2]

རྣལ་འབྱོར་མའི་ཕུང་པོ་བཞེངས་པའི་ལེའུ་སྟེ་བཅུ་གཉིས་པའོ། ། ॥

Ch. XIII

[D55a7; P290a7; C315b2; N394b6; H417a2; T185a5; K321a3; Sh298a7]

རྡོ་རྗེ་སྙོམ་པ་ཞེས་བྱ་བའི་ལེའུ་སྟེ་བཅུ་གསུམ་པའོ། ། ॥

[Ph101b4]

རྡོ་རྗེ་སྙོམ་པ་ཞེས་བྱ་བའི་ཏིང་ངེ་འཛིན་ཏེ།། ལེའུ་སྟེ་བཅུ་གསུམ་པའོ། ། ॥

Ch. XIV

[D62a6; P297b6; C324a3; N406a6; H427b7; T195b7; K330a3; Sh307a3]

དངོས་པོ་སྣ་ཚོགས་རྣམ་པར་ཕྱེ[1]བའི་ལེའུ་སྟེ[2]བཅུ་བཞི་པའོ། ། ॥

[Ph114b4]

དངོས་པོ་སྣ་ཚོགས་རྣམ་པར་བརྟག་པའི་ལེའུ་སྟེ་བཅུ་བཞི་པའོ། ། ॥

Ch. XIV

章題なし

---

[1] ཕྱེ་] DPC; དབྱེ་ NHTKSh　[2] སྟེ་] PCNHTKSh; ཎ་ D

付録D　五仏の異名(VP Ch. III)

[D34b7; P267b6; C290b6; N360a4; H386a7; T156a1; K297a1; Sh274a7]

＜ヘーヴァジュラの異名＞

ཀྱེ་ཡི་[1] རྡོ་རྗེ་ རྡོ་ རྗེ་ ས་མས་ དཔལ་ དང་། ། རྣམ་ སྣང་ ཆེན་ པོ་ དང་ ནི་ རང་ ཕྱུང་ དང་། །

རྡོ་ རྗེ་ ཙ་ ཏྲི་[2] སྐྱེ་མ་[3] པའི་ ཁྲོ་ བོ་ དང་། ། དེ་ བཞིན་ དུ་ ཡང་ རྡོ་ རྗེའི་ ཁྲོ་ བོ་ ཉིད་། །
D35a H386b

རྡོ་ རྗེ་ བདུད་ ཐོ་ བདུད་ ཐོ་ ཐབས་[4] ལྷུང་ དང་། ། ཅི་ ནུ ཀ་ དང་ ལྷོ་ རྗེའི་ ལྷོ་ཐས་ ཉིད་ དོ། །

＜シャーシュヴァタの異名＞

རྟག་ པ་ དང་ ནི་ ཀཏི་ ལུག་ རྡོ་ རྗེ་ དང་། ། རྣམ་ པར་ སྣང་ མཛད་[5] དང་ ནི་ ཐམས་ ཅད་ རྒྱུ་། །

ཐུ་ འཕྲལ་ དང་ ནི་ དེ་ ནས་ ཚོ་ མཛད་ དང་། ། རྒྱ་ ཡི་[6]རྡོ་ རྗེར་[7] རབ་ ཏུ་ གྲགས་[8] པ་ དང་། །
Sh274b

ས་ ལྷོ་ང་ དང་ ནི་ ཀཏི་ ལུག་ ཆེན་ པོ་ དང་། །

ཀཱཥི་ རྗེ་[9] ཀཱཥེ་ དང་ ཐོ་ བའི་ དབང་ ཕྱུག་ དང་། །
C291a

དེ་ བཞིན་ ཀཱཥེགས་ པ་[10] ཎཱ ཀ ཀ ཕྱུབ་ པ་ དང་། །

སངས་ རྒྱས་ ཞེས་ བྱར་[11] རབ་ ཏུ་ གྲགས་ པ་ འོ།།

---

[1] ཀྱེ་ ཡི་ ‖ DCNHT; ཀྱེའི་ PKSh [2] ཙ་ ཏྲི་ ‖ DPC; ཙར་ ཏྲི་ NHTKSh [3] སྐྱེ་མ་ ‖ PH; སྐྱེ་མས་ DCNTKSh
[4] ཐབས་ ‖ PCNHSh; ཐབ་ DTK [5] མཛད་ ‖ DPCNHTK; མཛད་ མཛད་ Sh [6] རྒྱ་ ཡི་ ‖ DNHTKSh; རྒྱའི་ PC
[7] རྗེར་ ‖ DPCNH; རྗེ་ TKSh [8] གྲགས་ ‖ DPCHTKSh; གཏགས་ N [9] རྗེ་ ‖ DPCNHSh; རྗེའི་ TK [10] པ་ ‖
PHTKSh; དང་ DCN [11] ཐྱར་ ‖ DPCNH; ཐ་ TKSh

＜金剛日の異名＞

རྡོ་རྗེ་ཉི་མ་དེ་ནས་རིན་ཆེན་བདག། དེ་བཞིན་དུ་ཡང་རིན་ཆེན་རྒྱལ་པོ་ཉིད། །[1]
P268a, N360b
རྡོ་རྗེ་གཟི་བརྗིད་དང་ནི་རྒྱལ་པོ་ཆེ། ། རྡོ་རྗེ་བདུད་རྩིལ་གཤོན་དང་སྣང་བྱེད་དོ། །

＜蓮華舞自在の異名＞

རྡུ་མཁྱེན་དང་ནི་འཇིག་རྟེན་བདག་པོ་དང། ། རྡོ་རྗེ་ཆོས་དང་སྒྲུན་རས་གཟིགས་དང་ནི། །

པ་དྲྭ་གར་དབང་དང་ནི་འདོད་ཆགས་དང། ། འཇིག་རྟེན་མགོན་པོར[2]རབ་ཏུ་གྲགས་པའོ།།

＜パラマーシュヴァの異名＞

དམ་པའི་རྡུ་དང་རྡུ་ཕི་རྒྱལ་པོ་དང། ། བདུན[3]གྱི་རྒྱལ་པོ་དེ་ནས་ལྷུགས་རྒྱལ་དང། །

དམ་ཚིག་རྡོ་རྗེ་དང་ནི་རྡུ་མཆོག་དང། ། དེ་བཞིན་དུ་ཡང་ལས་ཀྱི་རྡོ་རྗེ་ཉིད། །

དོན་ཡོད་དང་ནི་དོན[4]དང། ། རྡོ་རྗེ་མཁྱོགས་འགྲོར་རབ་ཏུ་གྲགས་པའོ། །

---

[1] དེ་བཞིན་དུ་ཡང་རིན་ཆེན་རྒྱལ་པོ་ཉིད། །] DPC; རིན་ཆེན་རྒྱལ་པོ་ཉིད་དེ་བཞིན་དུ་ཡང། ། NHTKSh [2] པོར་] DPCNH; པོ་ TKSh [3] བདུན་] DPNHTKSh; བདུད་ C [4] གྲུབ་རྒྱལ་པོ་] DNHTK; ཡོད་གྲུབ་པ་ PC: གྲུབ་ Sh

10

[Ph64b4]

＜ヘールカの異名＞

རྡོ་རྗེ་ཞེས་བཤད་དགེས་རྡོ་རྗེ། ། རང་འབྱུང་རྣམ་སྣང་ཆེན་པོ་སྟེ། །

རྡོ་རྗེ་ལ་ཞལ་ཕི་ཐུགས་རྗེ་ཁོ། ། དེ་བཞིན་རྡོ་རྗེ་ཁོ་བོ་ཉིད། །

རྡོ་རྗེ་བདུད་ཙི་བདུད་ཙི་འཕྲལ། ། ཅེ་ར་ཀ་ནི་སྨིན་རྗེ་སྟོན་ལ། །

＜シャーシュヴァタの異名＞

རྟག་པ་རྡོ་རྗེ་གཏི་མུག་སྟེ། ། སྙ་ཚོགས་ཐུར་པ་རྣམ་སྣང་མཛད། །

ཚོ་ཡིག་ཐུ་འཕྲལ་ཏ་བ་ཡང། ། རྡོ་རྗེ་གླུར་ནི་རབ་ཏུ་གྲགས། །

ས་ཡི[1]སྨིན་པོ་གཏི་མུག་ཆེ། ། ཐོ་བའི[2]དབང་ཕྱུག་གཤིན་རྗེ་གཤེད། །

དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཤུ་ཀ་ཐུ། ། སངས་རྒྱས་ཞེས་བྱར་མཚན་དུ་གྲགས། །

＜金剛日の異名＞

རྡོ་རྗེ་ཉི་མ་རིན་ཆེན་གཅོ། ། དེ་བཞིན་རིན་ཆེན་རྒྱལ་པོ་ཉིད། །

རྡོ་རྗེ་གཟི་བརྗིད་རྒྱལ་པོ་ཉིད། ། རྡོ་རྗེ་ཉི་མ་སྣང་བྱེད་དེ། །

＜蓮華舞自在の異名＞

རྟ་མཁྲིན་འཛིག་རྟེན་གཅོ་བོ་དང། ། སྒྱུན་རས་གཟིགས་དང་རྡོ་རྗེ་ཆོས། ། 65a

པ་དྷ་གར་དབང་འདོད་ཆགས་དང། ། འཛིག་རྟེན་མགོན་པོ་རབ་ཏུ་གྲགས། །

＜パラマーシュヴァの異名＞

རྟ་མཆོག་དང་ནི་རྟ་རྒྱལ་དང། ། རྟ་བདུན་རྒྱལ་དང་རྟ་རྒྱལ་དཔལ། །

རྡོ་རྗེ་དམ་ཚིག་རྟ་མཆོག་དང། ། དེ་བཞིན་ལས་ཉིད་རྡོ་རྗེ་དང། །

དོན་ཡོད[3]དང་ནི་དོན་ཡོད་གྲུབ། ། རྡོ་རྗེ་ཕྱུར་འགྲོ་རབ་ཏུ་གྲགས།།

---

[1] ས་ཡི་ ‖ em.; ས་ཡའི MS [2] ཐོ་བའི ‖ em.; ཐོས་པའི MS [3] ཡོད ‖ em.; ཡོན MS

付録E　後期密教系灌頂偈 (VP Ch. VII)

[D45a1; P278b7; C303a3; N377a5; H401a7; T170b3; K308b7; Sh286a4]

བྱམ་པའི་དབང་གི་དང་པོ་སྟེ། ། གཉིས་པ་ལ་གི་གསང་བའི་དབང་། །

གསུམ་པ་ཤེས་རབ་ཡེ་ཤེས་ཏེ། ། ཇི་ལྟར་ལུས་གྱི་དེ་བཞིན་གཤེགས། །

དཀྱིལ་འཁོར་དམ་པ་བྱིས་ནས་གྲི། ། དམ་ཚིག་ཁུ་བའི་ཆོ་ག་ཡིས། །
H401b
ཇི་དང་བསམ་གཏན་བསྒྲེད་བྱས་ནས། ། དེ་ཚོ་དབུགས་དབྱུང་སྦྱིན་པར་བྱ།།

[Ph82a4]

དང་པོ་བྱམ་པའི་དབང་སྐྱུར་སྟེ། ། གསང་བའི་དབང་ལས་གཉིས་པའོ། །

གསུམ་པ་ཤེས་རབ་ཡེ་ཤེས་སྟེ། ། ཇི་ལྟར་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་མེན། །

དཀྱིལ་འཁོར་དམ་པ་བྱིས་ནས་གྲི། ། དམ་ཚིག་སེམས་ཀྱི་ཆོ་ག་ཡིས། །

ནང་གི་སྦྱིན་བསྲེག་བྱས་ནས་ནི། ། དེ་ཚོ་དབུགས་ནི་འབྱུང་བར་བྱ།།

付録F　灌頂次第 (VP Ch. XV)

[D64b1; P300a4; C326b6; N409b7; H431a5; T199a3; K332b8; Sh309b7]

ཆུ ཡི་ དབང་ ནི་ དང་ པོ་ སྟེ། ། ཅོད་ པན་ དབང་ ལ་ གཉིས་ པའོ། །

རྡོ་ རྗེ[1] དབང་ གིས་ གསུམ་ པ་ སྟེ། ། རང་ གི་ བདག་ པོ་ བཞི་ པ་ ཉིད། ། N410a

མིང་ གི[2] དབང་ བསྐུར་ ལྔ་ པ་ སྟེ། ། ཏྲི་ པ་ ཕྱོགས་ པའི་ ས་རས་ ཆུས་ ཉིད། ।
K333a

བདུན་ པ་ བླུམ་ པའི[3] དབང་ གིས་ ཏེ། ། གསང་ བའི་ དབང་ གིས[4] བརྒྱད་ པའོ། །

ཤེས་ རབ་ དབང་ ལས་ དགུ་ པ་ སྟེ། ། དེ་ ཉིད་ རྡོ་ རྗེའི་ སྐྱོར་ བ་ ཡིས། ། Sh310a

ཀུན་ གྱི་ དེ་ ཉིད་ བརྟུལ་ ཞུགས་ བརྗོད། ། སྟོན་ པ་ རང་ གིས་ ལུང་ བསྟན་ ཏེ། ། [5]

དེ་ འདིར་ དབང་ གི་ ཚོ་ གཡོ། །

[Ph118b4]

དང་ པོར་ ཆུ ཡི་ དབང་ བསྐུར་ ཏེ། ། གཉིས་ པ་ དགུ་ བརྒྱད་ དབང་ བསྐུར་ ལ། །

གསུམ་ པ་ རྡོ་ རྗེའི་ དབང་ བསྐུར་ ལ། ། རང་ གི་ བདག་ པོར་ བཞི[6] བ་ སྟེ། །

ལྔ་ པར་ མིང་ གི་ དབང་ བསྐུར་ རོ། ། ཏྲི་ པར་ ཕྱོགས་ པའི་ ས་རས་ ཆུས་ ཉིད། །

བདུན་ པར་ བླུམ་ པའི་ དབང་ བསྐུར་ རོ། ། བརྒྱད་ པར་ གསང་ བའི་ དབང་ བསྐུར་ ཏེ། །

དགུ་ པར་ ཤེས་ རབ་ ཡེ་ ཤེས་ དབང་ བསྐུར་ རོ། ། དེ་ ཉིད་ རྡོ་ རྗེའི་ རབ་ སྐྱོར་ བས། །

རྡོ་ རྗེ་ བརྟུལ་ ཤུགས་ ཀུན་ སྤྱིན་ བྱ། ། སྟོན་ པ་ ཉིད་ ནི་ ལུང་ སྟོན་ ཏེ། །

དེ་ དག་ ནི་ དབང་ བསྐུར་ བའི་ ཚོ་ ག་ པོ།།

---

[1] རྗེ་] DC; རྗེའི་ PNHTKSh　[2] གི་] DPCT; གིས་ NHKSh　[3] པའི་] DPNHTKSh; པ་ C　[4] གིས་] DCNHTKSh; གི་ P　[5] ཏེ། །] DPCNHTK; སྟ་ Sh　[6] བཞི་] em.; ཞི་ MS

付録G　五相 (VP Ch. IV)

[D39a2; P272b2; C295b8; N367a4; H392b2; T162a1; K301b8; Sh279a6]

དང་པོ་སྒྲོན་ཀྱི་རྣམ་པ་སྟེ། ། གཉིས་པ་དུ་བ་འདྲ་བ་ཡིན། ། K302a

གསུམ་པ་མེ་ཞྭར་རྣམ་པ་ཡིན། ། བཞི་པ་མར་མེ་ཉེར[1]འབར་བ། །

ལྔ་པ་རྒྱུ་ཏུ་སྣང་བ་སྟེ། ། [2] སྒྲོན་མེད་ནམ་མཁའ་འདྲ་བ་ཉིད། །

དེ་ནི་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་རྒྱུ། ། དངོས་གྲུབ་ཉེ་བར་འགྱུར་བ་ཡིན། །

ཕྱི་ནས་སྒྱུ་མའི་རྣམ་པ་ལྟར། ། མཱ་ལམ་རྣམ་པར་སྣང་ཅིག་འགྱུར།།

[Ph71b5]

དང་པོ་སྒྲོན་ཀྱི་རྣམ་པ་སྟེ། ། གཉིས་པ་དུ་བ་ལྟ་བུའོ། །

གསུམ་པ་ཕྱིན་བུ་མེ་ཞྭར་དངོས། ། བཞི་པ་མར་མེ་གསལ་འབར་བའོ། །

ལྔ་པ་རྒྱུ་ཏུ་སྣང་བ་ནི། ། སྒྲོན་མེད་ནམ་མཁའ་ལྟ་བུའོ། །

ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་རྒྱུད་དེ་ལྟ་བུ། ། དངོས་གྲུབ་དེས་འཇུག་དེ་བ་ཡིན། །

ཕྱི་ནས་སྒྱུ་མའི་རྣམ་པ་ལྟར། ། མཱ་ལམ་རྣམ་པ་སྣང་ཅིག་འགྱུར།།

---

[1] ཉེར་ ‖ DPCT; ཉེ NHKSh　[2] སྟེ། ། ‖ DPCHTK; ཏེ། ། NSh

付録H　十忿怒尊 (VP Ch. XII)

[D53b7; P288b6; C313b5; N392a5; H414b5; T183a2; K319a6; Sh296b2]

ཧཱུྃ་ ནི་ བཅུ་ ཡི་ སྦྱོར་ བ་ ཡིས། ། ཁྲོ་ བོ་ བཅུ་ ནི་ རིམ་[1] པས་ དགོད། །

གཤིན་ རྗེ་ མཐར་ བྱེད་ ཤེས་ རབ་ མཐར། ། པ་ དྨ་ མཐར་ བྱེད་ བགེགས་ D54a མཐར་ བྱེད། །

ཊ་ ཀྐི་ ཁྲོ་ བོ་ དབྱུག་ པ་ སྔོན། ། མི་ གཡོ་ བ་ དང་ སྟོབས་ ཆེན་ དང་། །

གཙུག་ ཏོར་ གདུགས་ ནི་ དཀར་ པོ་ དང་། ། རྡོ་ རྗེ་ ཞབས་ འོག་ གནས་ པ་ ནི།། [2]

[Ph98b6]

ཡི་ གེ་ ཧཱུྃ་ གི་ སྦྱོར་ མཆོག་ གིས། ། ཁྲོ་ བོ་ བཅུ་ རྣམས་ རིམས་ བཞིན་ དགོད། །

གཤིན་ རྗེ་ མཐར་ བྱེད་ དང་ ནི་ ཤེས་ རབ་ མཐར་ བྱེད་ དང་། །

པད་ མ་ འཁྱིན་ བྱེད་ བགེགས་ མཐར་ འཁྱིན་ Ph99a པ་ དང་། །

འདོད་ པའི་ ཁྲོ་ དང་ དེ་ བཞིན་ དབྱིག་ པ་ དང་། ། མི་ གཡོ་ བ་ དང་ སྟོབས་ པོ་ ཆེ་ ཡང་ སྟེ། །

དཀར་ པོ་ གདུད་ པ་ སྐྱོབ་ པའི་ གཙུག་[3] ཏོར་ དང་། ། རྡོ་ རྗེ་ ས་ འོག་ ན་ ནི་ གནས་ པ་ རྣམས། །

---

[1] རིམ་]] PCNHTKSh; རམ་ D　[2] ནི། །]] DPCT; དང་། ། NHKSh　[3] གཙུག་]] em.; བཙུག་ MS

付録I　ナイラートミヤー十五尊マンダラ (VP Ch. XII)

[D54a5; P289a4; C314a4; N392b6; H415a; T183b2; K319b5; Sh297a1]

རྡོ་རྗེ་དཀར་མོ་ཆུ་བདག་མ། ། རྡོ་རྗེ་མཁའ་འགྲོ་བདག་མེད་མ། །

ཞེ་སྡང་རྡོ་རྗེའི་གནས་མནན་ཅིང། ། དགྱིལ་འཁོར་སྟེང་པོར་བསྟོམ་པར[1] བྱ། །

དཀར་མོ་ཆོམ་རྒྱན་རོ་ལངས་མ། ། རྒྱ་སྐ་རྡེ་ནི་ཐོ་ས[N393a]ལངས[2] མ། །

ཕྱ་ཀླ་ས་ལ་ར་ཡི་ཁྲོད་མ། ། གཤོལ[3] པ་གཡུང་མོ་མཚམས་སུ་དགོད། །

སྟེང་དུ་མཁའ་ལྷུང་མ་ཞེས་བཤད། ། འོག་ཏུ་དེ་བཞིན་ས་ལྷུང[H415b]་མ། །

དབུས་སུ་བདག་མེད་མཁའ་འགྲོ་མ། །

[Ph99b2]

རྡོ་རྗེ་གོ་རི་ཆུ་མ་དང། ། རྡོ་རྗེ་མཁའ་འགྲོ་མ་བདག་མེད། །

ཞེ་སྡང་རྡོ་རྗེ་ཞབས་མནན་པ། ། དགྱིལ་འཁོར་སྟེང་པོ་བསྟོམ་པར་བྱ། །

གོ་ཏི་ཅོ་རི་བེ་ཏ་ལི། ། རྒྱ་ས་ཏི་རྣམས་ཐོ་ཡིན་མཚོ། །

ཕྱ་ཀ་ས་ལ་ཤ་བ་ཏི། ། གཏུམ་མོ་ཁོམ་ཏི་མ་རྣམས་མཚམས་སུའོ། །

སྟེང་དུ་མཁའ་ལ་ལྷུང་མ་ཞེས། ། དེ་བཞིན་འོག་ཏུ་ས་ལྷུང་མ། །

དབུས་སུ་བདག་མེད་མཁའ་འགྲོ་མ། །

[1] པར ‖ DCNHTKSh; པ་ P　[2] ལྷུངས་ ‖ DPT; བསྡུངས་ C; ལྷུང NHKSh　[3] གཤོལ ‖ DCNHT; རྡོལ PKSh

付録J　タントラ階梯分類法 (VP Ch. XIII)

[D54b6; P289b5; C314b7; N393b6; H416a3; T184a7; K320a8; Sh297b3]

དམན་པ་རྣམས་ལ་བྱ་བའི་རྒྱུད། ། བྱ་མིན[1] རྣལ་འབྱོར་དེ་ལྟག་ལ། །
ས་མས་ཅན་མཆོག་ལ་རྣལ་འབྱོར་མཆོག། རྣལ་འབྱོར་གོང་མེད་དེ་ལྟག་ལ། །

[Ph100b2]

དམན་པ་རྣམས་ཀྱི་བྱ་བའི་རྒྱུད། ། བྱ་མིན་རྣལ་འབྱོར་དེ་ལྟག་ལའོ། །
རྣལ་འབྱོར་མཆོག་གི་ས་མས་ཅན་མཆོག། ། རྣལ་འབྱོར་བླ་མེད་དེ་ལྟག་ལའོ།།

[1] མིན་] DPCH; བ་ NTKSh

付録K　ヨーガタントラとヨーギニータントラの分類 (VP Ch. XIII)

[D54b5; P289b5; C314b6; N393b5; H416a3; T184a6; K320a7; Sh297b2]

སྐྱེས་ བུ་ རྣམས་ ནི་ གཏུལ[1] བའི་ ཕྱིར། ། རྣལ་ འབྱོར་ རྒྱུད་ ནི་ ཡང་ དག་ བཤད། །
བཅུན་ མོ་ རྣམས་ ནི་ བསྡུ་ བའི་ ཕྱིར། ། རྣལ་ འབྱོར་ མ་ ཡིན[2] རྒྱུད་ བཤད་ དོ། །

[Ph100b2]

སྐྱེས་ བུ་ འདུལ་ བར་ མཛད་ དོན་ དུ། ། རྣལ་ འབྱོར་ རྒྱུད་ རྣམ་ རབ་ བཤད་ པ། །
བཅུན་ མོ་ རྣམས་ ནི་ བསྡུ་ བའི་ ཕྱིར། ། རྣལ་ འབྱོར་ མ་ ཡིན་ རྒྱུད་ རབ་ བཤད། །

---

[1] གཏུལ་ ‖ DC; འདུལ་ PNHTKSh　[2] མ་ ཡིན་ ‖ DPNTKSh; མའི་ CH

付録L　6つのヨーギニータントラ (VP Ch. XIII)

[D54b5; P289b4; C314b5; N393b4; H416a2; T184a5; K320a6; Sh297b1]

ཀྱེ་ཡི་[1] རྡོ་རྗེ་དཀྱིལ་འཁོར[2] སངས་རྒྱས་ཀུན། །

གསང་མཛོད་རྡོ་རྗེ་བདུད་རྩི་འབྱུང་བ་དང། །

འཁོར་ལོ་སྟོམ་པ་གྱུར་དང[3] འབྱུང་གནས་ནི། །

རྣལ་འབྱོར་མ་རྒྱུད་ཏུག་ཏུ[4] རབ་ཏུ་གྲགས། །

[Ph100a7]

སངས་རྒྱས་ཐམས་ཅད་ཅད་དགེས་པའི་རྡོ་རྗེ་དཀྱིལ་འཁོར་དང། །

 གསང་བའི་མཛོད་དང་རྡོ་རྗེ་བདུད་རྩི་ལས་བྱུང་དང། །
100b
འཁོར་ལོ་བདེ་མཆོག་གྱུར་དང་ཕྱན་ས་ཚོམ་མཆོགས་པ་རྣམས། །

རྣལ་འབྱོར་མའི་རྒྱུད་ནི་ཏུག་པར་གྲགས་པ་ཡིན། །

---

[1] ཀྱེ་ཡི་ ‖ DPHTK; ཀྱེའི C; ཀྱེ NSh　[2] དཀྱིལ་འཁོར ‖ DPCH; om. NTKSh　[3] གྱུར་དང ‖ DPC; གྱུར ཀྱི NHTKSh　[4] ཏུག་ཏུ ‖ DPC; ཏུ་ནི NHTKSh

付録M　HVの転換 (Ch. IV)

[D35b3; P268b3; C291b5; N361a7; H387b1; T157a2; K297b8; Sh275a5]

ཀྱེ་ཡི་རྡོ་རྗེ་རྣལ་འབྱོར་རྒྱུད། ། དང་པོར་རྒྱལ་བ་རྣམས་ཀྱིས་བཤད། །
N361b
ཕྱི་ནས་རྣལ་འབྱོར་མ་རྒྱུད་ནི། ། དེ་ཉིད་བྱད་མེད་བཟང[1] ཕྱིར་རོ།།

[Ph65b6]

དགེས་པའི་རྡོ་རྗེ་རྣལ་འབྱོར་རྒྱུད། ། དང་པོར་རྒྱལ་བ་རྣམས་ཀྱིས་བཤད། །
ཕྱི་ནས་རྣལ་འབྱོར་མའི་རྒྱུད། ། དེ་ཉིད་མོ་གཟུགས་བསྡུ་ཕྱིར་རོ།།

[1] བཟང། །] DPCNHSh; གཟང། ། TK

付録N　HV五十万頌の内訳 (VP Ch. II)

[D32b4; P265a5; C288a2; N356b1; H383a1; T152b5; K294a6; Sh271b3]

＜五十万頌の内訳１＞

དེ་ནས་ རྟོ་ རྡེ་ འཛིན་ གྱི་ རྒྱལ་ པོ་ མཁའ་ འགྲོ་ མའི་ རྟོ་ རྡེ་ གླུར་ གྱི་ རྒྱུད་ ཀྱི་ ནང་ དུ་ འབྱུམ་ ཕྲག་ ལྔ་ བྱིས་ པ་ ཡང་ དག་ པར་ བཤད་ པར་ བྱའོ། །

＜五十万頌の内訳２＞

སངས་ རྒྱས་ ཀྱི་ ནི་ དཀྱིལ་ འཁོར་ འབྱུམ། ། རྟོ་ རྡེ་ ཅན་ གྱི་ དེ་ བཞིན་ འབྱུམ། །

འབྱུམ་ གྱིས་ རྟོ་ རྡེ་ ཉི་ མ་ ཡི། ། འབྱུམ་ གྱིས་ རྟོ་ རྡེ་ ཆོས[1] ཀྱིའོ།།

＜五十万頌の内訳３＞

འབྱུམ་ ཕྲག་ ཕྱེད་ ཀྱིས་ རྟོ་ རྡེ་ སྟེ། ། འཕྲུང་ པོ་ འདུལ་ བ་ སྟོང་ ཕྲག་ ལྔས། །

ལྔ་ ཡིས་ ལས་ ནི་ རབ་ རྒྱས་ པ། ། ལྔ་ ཡིས་ སངས་ རྒྱས་ གར་ མཁན་ ཉིད།།

＜五十万頌の内訳４＞

K294b

T153a

སྟོང་ ཕྲག་ སུམ་ ཅུ[2] དག་ གིས་ ནི། ། ཀུ་ རུ་ ཀུ་ ཤེ[3] བརྒྱ[4] པའོ། །

ལྷག་ མ་ སྟོང་ ཕྲག་ ལྔ་ ཡིས་ ནི། ། ཆོ་ གའི་ རིམ་ པ་ རྒྱུད་ ཀུན་ གྱིའོ།།

རྟོ་ རྡེ་ མཁའ་ འགྲོ་ ཀྱི་ རྟོ་ རྡེ་ ཡི། ། [5] འབྱུམ་ ཕྲག་ ལྔ་ ནི་ བྱིས་ པའོ།།

---

[1] ཆོས་ ‖ DPNHTKSh; འགས་ C　[2] ཅུ ‖ DCNHTKSh; བཅུ P　[3] ཤེ ‖ DCNHT; ཤེའ P; ཤེའི K; ཤུ Sh
[4] བརྒྱ ‖ DPCHTKSh; བརྒྱས N　[5] ཀྱི་ རྟོ་ རྡེ་ ཡི། ། ‖ D; ཀྱིའི་ རྟོ་ རྡེའི། ། PCNHTKSh

[Ph60b7]

＜五十万頌の内訳１＞

དེ་ནས་ རྒྱལ་པོ་ རྗེ་ རྡེ་འཛིན། ། མཁའ་འགྲོ་ མ་ནི་ རྗེ་ རྡེ་ གྱར། །

འབྱམ་ ལྷ་ དགེ་ ཏུ་ ངེས་ བསྟུས་ དང་། ། མཐའ་ ཡས་ རྒྱུད་ དུ་ རབ་ ཏུ་ ཕྱེ།།

＜五十万頌の内訳２＞

སངས་ རྒྱས་ དཀྱིལ་ འཁོར་ འདུ་ ཕྲག་ ཅིག། ། རྗེ་ རྡེ་ ཅན་ གྱི་ འང་ དེ་ བཞིན་ འབྱམ། །

Ph61a

རྗེ་ རྡེ་ ཉི་ མའི་ འབྱམ་ གྱིས་ ཏེ། ། རྗེ་ རྡེ་ ཆོས་ ཀྱི་ འང་ འབྱམ་ གྱིས་ སོ།།

＜五十万頌の内訳３＞

འབྱམ་ ཕྲག་ ཕྱེད་ ཀྱིས་ རྗེ་ རྡེ་ རྣ། ། འབྲུང་ པོ་ འཛིགས་ ཆེན་ སྟོང་ ཕྲག་ ལྷ། །

ལས་ ཀྱི་ ཚོགས་ ནི་ ལྷ་ ཡིས་ སོ།།

＜五十万頌の内訳４＞

ཀུ་ ན་ ཀུ་ ལལེའི་ ཁྲི་ གསུམ་ གྱིས། ། ལྷ་ ཡིས་ སངས་ རྒྱས་ རྣམས་ ཀྱི་ གར། །

ལྷག་ མ་ སྟོང་ ཕྲག་ ལྷ་ ཡིས་ ནི། ། རྒྱུད་ ཀུན་ ཆོ་ གའི་ རིམ་ པའོ།།

མཁའ་ འགྲོ་ དགྱེས་ པའི་ རྗེ་ རྡེ་ དང་། ། མཁའ་ འགྲོ་ མར་ ནི་ བཅས་ པ་ རྣམས། །

འབྱམ་ ཕྲག་ ལྷ་ ཡིས་ ངེས་ བསྟུས་ པའོ།།

付録O　HV三十儀軌の各儀軌名 (VP Ch. IV)

[D35a5; P268a5; C291a6; N360b6; H387a1; T156b2; K297b1; Sh274b6]

＜三十儀軌の各名称１＞

རྡོ་རྗེ་སྙིང་པོ་མངོན་བྱང་རྒྱུད། ། བཏགས་པའི་རྒྱལ་པོ་དང་པོ་ཉིད། །
H387a
སྒྲུ་མའི་བཏགས་པ་གཉིས་པ་སྟེ། ། རྡོ་རྗེ་གར་ནི[1] གསུམ་པའོ།།

＜三十儀軌の各名称２＞

བཞི་པ་སྣ་ཚོགས་བཏགས་པ་སྟེ། ། རྡོ་རྗེ་བཏགས་པ་ལྔ་པའོ། །[2]

བཏགས་པ་དྲུག་པ་སྟོན་པས་པོ་ཆེ། ། བཏགས་པ་བདུན[3]པ་མི་གཡོ་མཚོན།།

＜三十儀軌の各名称３＞

བརྒྱད་པ་གཟུངས[4]ཀྱི་བཏགས[5]པ་སྟེ། ། མཁའ་འགྲོ་ཀུ་རུ་ཀུ་ཤྲཱི[6]དགུ། །
N361a
བཅུ་པ་འདུལ་བའི་བཏགས་པ་སྟེ། ། རྣམ་པར་སྣང་མཛད་བཅུ་གཅིག་པ།། [7]

＜三十儀軌の各名称４＞

དངོས་གྲུབ་བཏགས་པ་བཅུ་གཉིས་པ། ། སྒྲོལ་མའི་བཏགས[8]པ་བཅུ་གསུམ་པ། །

རྡོ་རྗེ་ཕག་མོ་བཅུ་བཞི་པ། ། བཅུ[9]ལྔ་པ་ནི་གཟི་བརྗིད་ཆེ།།
Sh275a

＜三十儀軌の各名称５＞

བདག་མེད་བཏགས་པ་བཅུ་དྲུག་པ། ། གཤིན་རྗེ་གཤེད་ཀྱི་བཅུ་བདུན་པ། །
C291b D35b
ཌཱཀ་མཛད་ཀྱི[10]ནི་བཅུ[11]བརྒྱད་པ། ། དབྱངས་ཅན་གྱི[12]ནི་བཅུ་དགུ་པ།།

---

[1] ནི་ ‖ DPCHT; ཀྱི་ NKSh　[2] པའོ། ། ‖ DNHTKSh; པ་ ཡི་ PC　[3] བདུན་ ‖ DPCNTKSh; འདུན་ H
[4] གཟུངས་ ‖ DPCN; གཟུགས་ HTKSh　[5] བཏགས་ ‖ DCNHTKSh; རྟགས་ P　[6] ཤྲཱི་ ‖ DPNHTKSh; ཤྲ C
[7] པ།། ‖ DH; ལ།། PCNTKSh　[8] བཏགས་ ‖ DCNHTKSh; རྟགས་ P　[9] བཅུ ‖ DP; བཅོ CNHTKSh　[10] ཀྱི ‖
DC; ལ PNHTKSh　[11] བཅུ ‖ DP; བཅོ CNHTKSh　[12] ཅན་ ཀྱི ‖ DPNHTKSh; མཛད་ ཅན C

＜三十儀軌の各名称６＞

སྒྲུབ་ སྡེག[1] བརྒྱད་ པ་ ཉི་ ཤུ་ པ། ། རབ་ གནས་ ཀྱི ཤུ་ རྒྱ་ གཅིག་ པ། །

དཀྱིལ་ འཁོར་ ཆེན་ པོའི་ བརྒྱད་ པ་ ནི། ། ཉི་ ཤུ་ རྒྱ་ ནི་ གཉིས་ སུ[2] འདོད།།

＜三十儀軌の各名称７＞

གཏོར་ མའི་ བརྒྱད[3] པ་ ཉི ཤུ་ གསུམ། ། ཉི ཤུ་ བཞི་ པ་ སྟ་ གོན་ གནས། །
P268b

མངོན་ པར་ རྟོགས[4] པ་ ཉི ཤུ་ ལྔ། ། དེ་ བཞིན་ ཕྱག་ རྒྱ་ ཉི ཤུ་ རྩེ།།

＜三十儀軌の各名称８＞

ཕྱིད་ པ་ ཉི ཤུ་ རྒྱ་ བདུན་ པ། ། ཟླ[5] ནི ཉི ཤུ་ རྒྱ་ བརྒྱད་ པ། །

གར་ གྱི་ དབང་ ཕྱུག་ བརྒྱད་ པ་ ནི། ། ས་ལམ་ ཐུར[6] གཅིག་ ཝེད་ ས་ལམ་ ཐུ[7] པ།།

＜三十儀軌の各名称９＞

བརྒྱད་ པ་ ས་ལམ་ ཐུ[8] པར་ ནི་ བཤད། ། སྟོང་ ཕྱག་ ས་ལམ་ ཐུའི[9] གླང་ ཀྱིས་ ནི། །
T157a

མཁའ་ འགྲོ་ མཁའ་ འགྲོ་ མ་ རྣམས་ ཀྱི། ། འབྲུམ་ ཕྱག་ ལྷ་ ཡི་ རྒྱ་ མཚོ་ ཆེ།།

---

[1] སྡེག་ ‖ DNHTKSh; བསྡེག་ PC　[2] ས་ ‖ DPCHT; ན་ NSh; ནི་ K　[3] བརྒྱད་ ‖ DPNHTKSh; རྒྱ་ C　[4] རྟོགས་ ‖ DPNHTKSh; རྟོག་ C　[5] ཟླ ‖ DNHSh; ཟླ PCTK　[6] ཐུར ‖ DCNHTKSh; བཐུར P　[7] ཐུ ‖ DCNHTKSh; བཐུ P　[8] ཐུ ‖ DCNHTKSh; བཐུ P　[9] ཕྱག་ ས་ལམ་ ཐུའི ‖ DCT; ཕྱག་ ས་ལམ་ བཐུའི P; ས་ལམ་ ཐུ ཡི NHSh; ས་ལམ་ བཐུ ཡི K

[Ph65a5]

＜三十儀軌の各名称１＞

རྡོ་རྗེ་སྙིང་པོ་མངོན་བྱང་རྒྱུན། ། རྟག་པའི་རྒྱལ་པོ་དང་པོ་སྟེ། །

ཐུགས་འཕྲལ་རྟག་པ་གཉིས་པའོ། ། རྡོ་རྗེ་གྱུར་ནི་གསུམ་པ་སྟེ།།

＜三十儀軌の各名称２＞

བཞི་པ་ལྷ་ཚོགས་རྟག་པ་ཞེས། ། རྡོ་རྗེ་བརྟག་པ་ལྔ་པའོ། །

བརྟག་པ་རྡུག་པ་སྟོངས་པོ་ཆེ། ། བརྟག་པ་བདུན་པ་མི་གཡོ་མགོན།།

＜三十儀軌の各名称３＞

གཟུངས་ཀྱི་བརྟག་པ་བརྒྱད་པ་སྟེ། ། དགུ་པ་མཁའ་འགྲོ་ཀུ་རུ་ལ། །

འཇིག་རྟེན་བརྟག་པ་བཅུ་པའོ། ། རྣམ་པར་སྣང་མཛད་བཅུ་གཅིག་པ།།

＜三十儀軌の各名称４＞

དངོས་གྲུབ་བརྟག་པ་བཅུ་གཉིས་པ། ། སྒྲོལ་མའི་རྟག་པ་བཅུ་གསུམ་པ། །

རྡོ་རྗེ་ཕག་མོ་བཅུ་བཞི་པ། ། བཅོ་ལྔ་པ་ནི་གཟི་བརྗིད་ཆེ།།

Ph65b

＜三十儀軌の各名称５＞

བདག་མེད་བརྟག་པ་བཅུ་དྲུག་པ། ། བཅུ་བདུན་པ་ནི་གཤིན་རྗེ་གཤེད། །

ཌཱཀ་མཛད་ཀྱི་ནི་བཅོ་བརྒྱད་པ། ། ས་སོར་འབྲང་མ་བཅུ་དགུ་པ།།

＜三十儀軌の各名称６＞

སྒྲོན་ སྲེག་ བརྡུག་ པ་ ཞི་ ཕྲ་ པའོ། ། རབ་ གནས་ ཞི་ ཕྲ་ རྒ་ གཅིག་ པའོ། །

དཀྱིལ་ འཁོར་ ཆེན་ པོའི་ བརྡུགས་ པ་ ནི། ། ཞི་ ཕྲ་ རྒ་ ནི་ གཞི་ སྣ་ བརྟེན།།

＜三十儀軌の各名称７＞

གཏེར་ མའི་ བརྡུག་ པ་ ཞི་ ཕྲ་ གསུམ། ། ཞི་ ཕྲ་ བཞི་ པ་ སྟ་ གོན་ པོ། །

མངོན་ པར་ རྟོགས་ པ་ ཞི་ ཕྲ་ ལྔ། ། དེ་ བཞིན་ ཕྱག་ རྒྱ་ ཞི་ ཕྲ་ རྣམ།།

＜三十儀軌の各名称８＞

ཕྱིད་ པ་ ཞི་ ཕྲ་ བདུན་ པའོ། ། ཐུ་ ནི་ ཞི་ ཕྲ་ བརྒྱད་ པ་ སྟེ། །

གར་ གི་ དབང་ ཕྱུག་ བརྡུག་ པ་ ནི། ། སྒོམ་ བཅུར་ གཅིག་ གིས་ མ་ ཚོར་ དང་།།

＜三十儀軌の各名称９＞

བརྡུག་ པ་ གསུམ་ ཐུ་ པ་ ཡང་ བཤད། ། སྟོང་ ཕྲག་ སྒོམ་ བཅུའི་ གྲངས་ ཀྱིས་ ནི། །

མཁའ་ འགྲོ་ མཁའ་ འགྲོ་ མ་ རྣམས་ ཀྱི། ། རྒྱ་ མཚོ་ ཆེན་ པོ་ འབྱུམ་ ཕྲག་ ལྔ།།

付録P　VP Ch. I

VP I-1

[D30a4; P262a6; C284b5; N352a2; H379a2; T149a2; K291a5; Sh268b2]

ནམ་ མཁའ[1] བེམས[2] བཅས་ དང་ བ་ དང། ། གོ་ སྣབས་ མེད་ དང་ འཕྲིན་ པ་ དང། །

སྣ་ ཚོགས་ ཏོ་ ཇེའི[3] གཞི་ གནས་ ཁང། ། སེམས་ ཅན་ ཁམས་ དང་ ཡིད་ འོང་ དང།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 1b1-2]より回収できるSkt

ākāśeṣu, jaḍe, svacche, anavakāśe, prakāśini,

viśve, vajrālaye, layane, sattvadhātau, manorame.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 1b2-6]より回収できるSkt

ākāśeṣu, jade, svacche, anavakāśe, prakāśini,

viśve, vajrālaye, layane, sattvadhātau, manorame.

[Ph56b2]

མཁའ་ དང་ བེམས་ པོ་ གསལ་ བ་ དང། ། གསལ་ བ་ མེད་ དང་ ར་བ་ དཀྱི་ དང། །

སྣ་ ཚོགས་ ཏོ་ ཇེའི་ གཞི་ གནས་ དང། ། སེམས་ ཅན་ ཁམས་ དང་ ཡིད་ རོལ་ དང།།

---

1 མཁའ་] DCNHTKSh; མཁའི་ P　2 བེམས་] DPCNTKSh; བེམ་ H　3 ཇེའི་] DPNHTKSh; ཇེ་ C

VP I-2

[D30a5; P262a7; C284b6; N352a3; H379a3; T149a2; K291a6; Sh268b3]

ས།མས་ ཅན་ སྣོད་ དང་ འཇིག་ རྟེན་ དང་། ། ས་ དང་ ས་ འོག་ བར་ སྣང་ དང་། །

ཡིད་ དང་ ལུས་ དང་ ངག་ དང་ ནི། ། གཅིག་ དང[1] གཉིས་ དང་ མཁའ་ བདེ་ དང་།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 1b2-4]より回収できるSkt

sattve, bhājane, loke, bhūr, antare,

manasi, ekasminn, dve ca, khe ratau.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 1b6-2a2]より回収できるSkt

sattve ca, bhājane, loke, bhūr bhuvaḥ svaḥ, antare,

manasi, vigrahe, vāci, ekasminn, dve, khe ratau.

[Ph56b3]

འཇིག་ རྟེན་ ས།མས་ ཅན་ དང་ སྣོད་ དང་། ། ས་ འོག་ ས་ ཐེང[2] ས་ ཀླ་ དང་། །

བར་ སྣང་ ཡིད་ དང་ ལུས་ དང་ ངག། གཅིག་ དང་ གཉིས་ དང་ མཁའ་ བདེ་ དང་།།

[1] དང་ 〕 DNHTKSh; ལ་ PC　[2] ཐེང་ 〕 em.; ཐེངས་ MS

VP I-3

[D30a5; P262a8; C284b7; N352a4; H379a4; T149a3; K291a6; Sh268b3]

རྒྱད་ དང་ ལྔ་ དང་ རྒྱད་ གཉིས་ དང། ། སྒྲ་ འགྲོ་ རྣམས་ ནི་ བཞི་ པོ་ དང། ། [1]

གཅིག་ གིས་ ཉི་ ཤུར་ མ་ ཚོར[2] དང། ། ཁམས་ གསུམ་ མ་ ལུས་ པ་ དང་ ནི།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 1b4-5]より回収できるSkt

ṣaṭsu, pañcasu, dviṣaṭkeṣu, caturṣu,

ekonaviṃśatsv api, jagatsu, traidhātuka-m-aśeṣeṣu.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 2a2-4]より回収できるSkt

ṣaṭsu pañcasu, dviṣaṭke ca, caturṣu, jagatsu,

ekonaviṃśatsv api ca, traidhātuka-m-aśeṣeṣu.

[Ph56b4]

རྒྱད་ དང་ ལྔ་ དང་ རྒྱད་ གཉིས་ དང། ། འགྲོ་ བ་ རྣམས་ ནི་ བཞི་ པོ་ དང། །

ཉི་ ཤུར་ གཅིག་ གིས་ མ་ ཚོར[3] དང། ། [4] ཁམས་ གསུམ་ པ་ ནི་ མ་ ལུས་ དང།།

---

[1] སྒྲ་ འགྲོ་ རྣམས་ ནི་ བཞི་ པོ་ དང། །] DC; བཞི་ དང་ སྒྲ་ འགྲོ་ རྣམས་ དང་ ནི། ། PNHTSh; གཞི་ དང་ སྒྲ་ འགྲོ་ རྣམས་ དང་ ནི། ། K [2] མ་ ཚོར] DPHTK; འཚོར་ བ C; མ་ ཚོར་ NSh [3] ཚོར] em.; ཆར MS [4] この句はPh57a2 (VP Ch. I-8部分)に混入している.

VP I-4

[D30a6; P262a8; C284b8; N352a5; H379a5; T149a4; K291a7; Sh268b4]

ཕ་དང་བུ་དང་མ་མོ་དང། ། ཕྱི་རོལ་དང་ནི་ནང་དང་བམ། ། [1]
P262b
བཙུན་མོ་ཀུན་དང་ཆོས་དང་ནི། ། ཐམས་ཅད་ལས་དང་བདག་མེད་དང།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 1b5-6]より回収できるSkt

pitari, bāhyābhyantare,

dharme, sarvakarmasu ca, anātmani.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 2a4-6]より回収できるSkt

pitari, putre, mātṛsu, bāhyārthe, abhyantare ’pi ca,

sarvayoṣitsu dharme, sarvakarmasu, anātmani.

[Ph56b5]

ཕ་དང་བུ་དང་མ་ཡང་རྟེན། ། ཕྱི་རོལ་དོན་དང་ནང་དང་ཡང། །

བཙུན་མོ་ཀུན་དང་ཆོས་དང་ནི། ། ཐམས་ཅད་ལས་དང་བདག་མེད་དང།།

[1] བམ། །] DCT ; ཞམ། ། PNHKSh

VP I-5

[D30a6; P262b1; C284b8; N352a6; H379a5; T149a5; K291a8; Sh268b5]

འབྲས་བུ[1] རྒྱུ་དང་བྱ་བ་ཞེས། །བསྒྲུབ་བྱ་ [C285a] སྒྲུབ་ཐབས་རྡོ་རྗེ་དང། །
དེ་བཞིན་ཀུན་གཞི་རྣམ་ཤེས་དང། ། ཆོས་ཀྱི་དབྱིངས་དང་མ་བྱུང་དང།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 1b6-7]より回収できるSkt

phale, hetau, kāryākhye, sādhye sādhanavajriṇi,

tathā hi, ālayavijñāne, dharmadhātau, anudbhave.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 2a6-7]より回収できるSkt

phale, hetau, kāryākhye, sādhye sādhanavajriṇi,

tathā hi, ālayavijñāne, dharmadhātau, anudbhave.

[Ph56b6]

འབྲས་བུ་རྒྱུ་དང་བྱ་བ་ཞེས། ། བསྒྲུབ་བྱ་བསྒྲུབ་པ་རྡོ་རྗེ་བདག།
འདི་ལྟར་ཀུན་གཞི་རྣམ[2]ཤེས་དང། ། ཆོས་ཀྱི་དབྱིངས་དང་མ་སྐྱེས་དངོས།།

---

[1] བུ་] DPCNHTSh; om. K [2] གཞི་ རྣམ་] em.; བཞི་ རྣམས་ MS

VP I-6

[D30a7; P262b2; C285a1; N352a7; H379a6; T149a5; K291a8; Sh268b6]

ཟག[1]ཡི་ཁམས་དང་ནང་དཀྱིལས་དང། ། བདག་མེད་པ་དང་བདག་ཅེས་དང། ། K291b
དངོས་པོ་མེད་དང་དངོས་མེད་མིན། ། བདེ་བ་ཅན་དང་གྲུ་གསུམ་དང།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 1b7-2a2]より回収できるSkt

sattvadhātau, khadhātau ca, anātmani, ātmasaṃjñini,

vibhāveṣu, anābhāve, sukhāvatyāṃ, trikoṇake.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 2a7-2b3]より回収できるSkt

sattvadhātau, khadhātau, anātmani, ātmasaṃjñini,

vibhāveṣu, anābhāve, sukhāvatyām, trikoṇe.

[Ph56b7]

སེམས་ཅན་ཁམས་དང་ནམ་མཁའ་དང། ། བདག་མེད་བདག་གི་འདུ་ཤེས་དང། །
དངོས་དང་བྲལ་ཡང་དངོས་མེད་མིན། ། བདེ་བ་ཅན་ཏེ་ Ph57a
གྲུ་གསུམ་དང།།

[1] ཟག་ཡི་] DPC; ནམ་མཁའི་ NHTKSh

VP I-7

[D30a7; P262b2; C285a2; N352a7; H379a7; T149a6; K291b1; Sh268b6]

ཞ་ སྒྲེས་ དང་ ནི་ སྒྲོན་ བླ་ དང་། ། རྡུལ་ བླ་ དང་ ནི་ སྟེགས་ བཅོམ་ དང་། །
N352b
དབར[1] རྣམས་ མེད་ པའི་ རང་ བཞིན་ དང་། ། མཐར་ ནི་ ཞི་ བའི་ བདེ་ རིག་ དང་།།
H379b D30b

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2a2-3]より回収できるSkt

araje, vigatadoṣeṣu,

nistaraṅge, samādhau, antaḥsatsukhavedini.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 2b3-5]より回収できるSkt

araje, vigatadoṣeṣu, viraje, hatakalmaṣe,

nistaraṅge, samādhau, antaḥsatsukhavedini.

[Ph57a1]

རྡུལ་ མེད་ པ་ དང་ སྒྲོན་ བླ་ དང་། ། རྡུལ་ བླ་ དང་ ནི་ སྟེགས་ བཅོམ་ དང་། །
རང་ བཞིན་ ཐ་ རྣམས་ མེད་ པ་ དང་། ། མཐའི་ བདེ་ བ་ བདེ་ རིག་ དང་།།

[1] དབར་] DPCNHTSh; དབབ་ K

VP I-8

[D30b1; P262b3; C285a3; N352b1; H379b1; T149a7; K291b2; Sh268b7]

གསང་དང[1] མཆོག་ དང་ དགྱེས་ པ་ ལ། ། སངས་ རྒྱས་ ཀུན་ ཁྱབ་ སེམས་ དཔའ་ ནི། །

མཁའ་ འགྲོ་ མ་ ཡི་ རྡོ་ རྗེ་ གྱུར། ། འདི[2] ནི་ རང་ བྱུང་ བཅོམ་ ལྡན་ འདས།།

T149b

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2a3-5]より回収できるSkt

rahasye, parame, ramye, sarvātmani, sadā, sthitaḥ,

sarvabuddhamayaḥ, sattvaḥ, ḍākinīvajrapañjaraḥ.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 2b5-3a2]より回収できるSkt

rahasye, parame, ramye, sarvātmani, sadā sthitaḥ,

sarvabuddhamayaḥ, sattvaḥ.

[Ph57a2]

གསང་ བ་ མཆོག་ དང་ དགེས་ པ་ དང། །[3] ཐམས་ ཅད་ བདག་ ཉིད་ རྒྱ་ བཞུགས་ དང། །

ཀུན་ དངོས་ སངས་ རྒྱས་ སེམས་ དཔའོ། ། འདིར་ ནི་ རང་ འབྱུང་ བཅོམ་ ལྡན་ འདས།།

---

[1] དང་] DNHTKSh; ང P; ག C　[2] འདི] DPCNHTSh; འདིར K　[3] MSでは，この直後にཉི ཤུར་ གཅིག་ གིས་ མ་ ཚར་ དང། ། という一句がある．この句は，I-3のc句が混入したものと考えられる．

VP I-9

[D30b1; P262b4; C285a3; N352b2; H379b2; T149b1; K291b2; Sh268b8]

ལྷ་ ཡི[1] བདག་ པོ་ གཅིག་ པུ་ ཉིད། ། ཐམས་ ཅད་ བདག་ ཉིད་ རྣག་ ཏུ་ བཞུགས། །

འབྱུམ་ ཕྲག་ ལྔ་ བདག་ ཀྱི་ རྡོ་ རྗེ། ། ལས་ ནི་ དཀྱིལ་ འཁོར་ ལྔར[2] གསུངས་ པ།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2a3-5]より回収できるSkt

asau, svayambhūr, bhagavān, eko, adhidaivataḥ,

uktavān, pañcamaṇḍalam,

『Mahāmati註』対応箇所[MS 2b5-3a2]より回収できるSkt

asau, svayambhūr, bhagavān, eko, adhidaivataḥ,

pañcalakṣātmahevajrād uktavān pañcamaṇḍalam.

[Ph57a3]

མཱཡཱ འགྲོ་ མ་ ནི་ རྡོ་ རྗེ་ གྱུར། ། ལྷག་ པའི་ ལྷ་ ཉིད་ གཅིག་ པའོ། །

དཀྱིལ་ རྡོར་ འབྱུམ་ ལྔའི་ བདག་ ཉིད་ ལས། ། དཀྱིལ་ འཁོར་ རྣམ་ པ་ ལྔར་ གསུངས་ སྟེ།།

---

[1] ལྷ་ ཡི་] DPNHTKSh; ལྷའི་ C [2] ལྔར་] DPC; ལྷ་ NHTKSh

VP I-10

[D30b2; P262b4; C285a4; N352b3; H379b2; T149b1; K291b3; Sh268b8]

ཏོ་རྗེ་ཅན་དང་ཕན་པ་དང། ། དེ་བཞིན་ཏོ་རྗེ[1] གཟིར་བརྡོད་ཀྱིར། ། Sh269a
པ་ཎ་གར་གྱི་དབང་ཕྱུག་དང། ། རྒ་བདུན་རྒྱལ་པོ་ལྟ་པོའོ།། [2]

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2a5]より回収できるSkt

vajriṇaḥ.

『Mahāmati註』

対応箇所なし

[Ph57a4]

ཏོ་རྗེ་ཅན་དང་རྒྱུ་པ་དང། ། དེ་བཞིན་ཏོ་རྗེ་གཟིར་བརྡོད་དང། །
པ་ཎ་གར་དང་དབང་ཕྱུག་དང། ། རྒའི་རྒྱལ་པོ་ལྟ་པའོ།།

[1] ཏོ་རྗེ།] DPCNHTSh; om. K　[2] པོའོ།།] DNTKSh; པའོ།། PCH

VP I-11

[D30b2; P262b5; C285a5; N352b4; H379b3; T149b2; K291b4; Sh269a1]

ཇོ་ཟླ་མཁའ་འགྲོའི་དཀྱིལ་འཁོར་བུ། ། དཀར་མོ་ཀུན་མ་ཇོ་ལའང་མ། །

ཐུ་སྣ་ཐེ་དང་པུ་ཀ་ས། ། རི་ཁྲོད་གཏོལ་བ་གཡུང་མོའོ།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2a5]より回収できるSkt

gaurī.

『Mahāmati註』

対応箇所なし

[Ph57a4]

ཇོ་ཟླའི་མཁའ་འགྲོའི་དཀྱིལ་འཁོར་བུ། ། གཞོན་ནིའ་ཚོ་རི་བེ་ཏ་ནིའ། །

ཐུ་སྣ་རི་དང་པུ་ཀ་ས། ། ས་རི་ཙ་ན་ཏི་མོ།།

VP I-12

[D30b2; P262b5; C285a5; N352b4; H379b4; T149b3; K291b4; Sh269a2]

ཏོ་ཏེ་ ཕན་ པའི་ དཀྱིལ་ འཁོར་ དུ། ། སྐྱེས་ པ་ ཞེས་ པ་ ཉི་ མ་[1] དང་། །

དོལ་[2] ཟླུམ་ མ་[3] དང་ ལྷུན་ ཀྱུ་ འཛིན། ། མེ་ ཏོག་ མ་ སོགས་[4] མཆོས་ ཀྱི་ ཆར།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2a5]より回収できるSkt

puṣpādyāḥ.

『Mahāmati註』

対応箇所なし

[Ph57a5]

ཏོ་ཏེ་ རྒྱ་ པའི་ དཀྱིལ་ འཁོར་ དུ། ། སྐྱེས་ པ་ མོ་ དང་ ཞེས་ ལྷན་ ཉིད། །

ཉ་ གདོལ་ མ་ དང་ ལྷུན་ ཀྱུ་ འཛིན། ། མེ་ ཏོག་ ལ་ སོགས་ གྱིའི་ ཆར།།

---

[1] ཉི་ མ་ ‖ DNHTKSh; མ་ ཉིད་ PC　[2] དོལ་ ‖ DPCTKSh; ཏེ ལ་ N; ཏོ ལ་ H　[3] མ་ ‖ DPCTKSh; om. NH
[4] སོགས་ ‖ DPCNHTSh; ལ་ སོགས་ K

VP I-13

[D30b3; P262b6; C285a6; N352b5; H379b4; T149b3; K291b5; Sh269a2]

རྡོ་རྗེ་ཕྱི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་དུ། ། ཕྱི་ལག་མ་དང་མར་མེ་མ། །[1]

རིན་ཆེན་སྒྲོལ[2] མ་གླུ་ཀ[3] ལག་མ། ། ལུ་ཥི[4] ལ་སོགས་མཆོམས་ཆར་རོ།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2a5]より回収できるSkt

lāsyādyāḥ.

『Mahāmati註』

対応箇所なし

[Ph57a6]

རྡོ་རྗེ་ཕྱི་མའི་དཀྱིལ་འཁོར་དུ། ། ཕྱི་ཕྱག་མ་དང་མར་མེ་མ། །

རིན་ཆེན་སྒྲོན་མ་གླུ་ཀ་ཕྱག་མ། ། ཐུགས་མོ་ལ་སོགས་གྱིས་ཆར།།

---

[1] མ། །] DCH; དང། ། PNTKSh [2] སྒྲོལ་] DH; སྒྲོན་ PCTK; སྒྲོ་ NSh [3] ཀླུ་] DPTK; ཀླ་ CNSh; ཐུ་ H [4] ལ་ ཥ་] CNHTKSh; ལ ཥ D; ལ ཥ P

VP I-14

[D30b3; P262b7; C285a7; N352b6; H379b5; T149b4; K291b6; Sh269a3]

ཡ་ རྒྱ་ ཆོས་ འབྱུང་ ལྷུགས་ སྒྲོག[1] དང་། ། འཚུད་ མ་ གར་ ཀྱི་ དཀྱིལ་ འཁོར་ དུ། །
གྲྭིང་ བུ་ མ་ སོགས་ མཚམས་ ཀྱི་ ཆར། ། བདག་ ཉིད་ ཆ ཏྭད་ སྒྲོར་ བས་ སོ།། [2]

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2a6]より回収できるSkt

vaṃśādyāḥ.

『Mahāmati註』

対応箇所なし

[Ph57a7]

ཡད་ མ་ གར་ དབང་ དཀྱིལ་ འཁོར་ དུ། ། ཡད་ མ་ མ་ དང་ ཆོས་ འབྱུང་ མ། །
ལྷུགས་ སྒྲོགས་ མ་ དང་ སྟོམ་ མ་ དང་། ། གྲྭིང་ བུ་ ལ་ སོགས་ གྱེའ ཆར། ། Ph57b
རང་ རང་ དབྱིགས་ ཤུ་ སྒྲོར་ བའོ།།

[1] ལྷུགས་] DPNHTKSh; ལྷུགས་ C　[2] བས་ སོ།།] DPCNHTK; བ་ སོ།། Sh

VP I-15

[D30b4; P262b7; C285a8; N352b7; H379b6; T149b5; K291b6; Sh269a4]

རྡ་ཡི་རྒྱལ་པོའི་དཀྱིལ་འཁོར་དུ། ། རོ་རྗེ་སྦྲོ་ལྡན་ལྷ་ཀློག་མ། །
སྦྲོ་མ་དང་ནི་གོས་འཛིན་མ། ། དེ་བཞིན་མཆོག་གི་སྒྲོན་ལ་སོགས།།
N353a

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2a6]より回収できるSkt

locanādyāḥ.

『Mahāmati註』

対応箇所なし

[Ph57b1]

རྡའི་རྒྱལ་པོའི་དཀྱིལ་འཁོར་དུ། ། རོ་རྗེ་སྦྲོ་ལྡན་ལྷ་མོག་མ། །
སྦྲོ་འཛིན་མ་དང་ཡོལ་བ་འཛིན། ། སྒྲོན་སོགས་དེ་བཞིན་བྱ་རྣམ་གྱ།།

VP I-16

[D30b4; P262b8; C285a8; N353a1; H379b7; T149b6; K291b7; Sh269a4]

ཏོ་ཏཱི་མཁའ་འགྲོ་དེ་རྣམས་ཀྱིས། ། ཤུར་པ་གཡོན་པ་བརྒྱད་བས་གནས། ། C285b

སྒྲོང་གར[1] གཡོན་བཅངས[2]སྤྲོགས[3] མཛུབ[4] སྟེ། ། ཁ་དོག་སྣ་ཚོགས་ཆར[5] འབར་བའོ།། P263a H380a

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2a6]より回収できるSkt

nānāvarṇāḥ.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 3a2]より回収できるSkt

hṛnmuṣṭitarjanī vāmā nānāvarṇamahojjvalāḥ.

[Ph57b2]

ཏོ་ཏཱི་མཁའ་འགྲོ་མ་རྣམས་ཀྱིས། ། གཡོན་པའི་ཞབས་རྣམས་བརྒྱད་བས་བཞུགས། །

སྒྲོང་ཁར་ཐུ་ཚུར་གཡོན་སྤྲོག་འཛུབ། ། སྣ་ཚོགས་ཁ་དོག་ཆར་འབར་མ།།

---

[1] གར་ ‖ DPCNH; ཁར་ TKSh [2] བཅངས་ ‖ DPCNHTK; བཅས་ Sh [3] སྤྲོགས་ ‖ DPCHT; བསྤྲོགས་ NKSh
[4] མཛུབ་ ‖ DPNHTKSh; འཛུབ་ C [5] ཆ་ ‖ DPC; ཆ NHTKSh

VP I-17

[D30b5; P263a1; C285b1; N353a2; H380a1; T149b6; K291b8; Sh269a5]

ཤིན་ཏུ་ཞེ་སྡང་ཞེ་སྡང་ཆེ། །གཞོ་ནི་ལ་སོགས་རབ་ཏུ་གྲགས། །
ཤིན་ཏུ་གཏི་མུག་རྨོངས་ཆེན་ལས། །སྒྲམ[1]པ་མ[2]སོགས་ཆེར་གཟུང[3]ངོ།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2a6]より回収できるSkt

atimohaḥ, mahāmohaḥ.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 3a2-3]より回収できるSkt

atimohamahāmohād.

[Ph57b3]

ཤིན་ཏུ་ཞེས་སྡང་ཞེ་སྡང་ཆེ། །གཞོ[4]ནི་ལ་སོགས་རབ་གྲགས་པ། །
ཤིན་ཏུ་གཏི་མུག་རྨོངས་ཆེན་ཕྱིར། །སྒྲམ་པ་ལ་སོགས་ཆེར་འབར་བའོ།།

---

[1] སྒྲམ་] DPCHTK; སྒྲམས་ NSh [2] མ་] DCNHTKSh; ལ་ P [3] གཟུང] DPHTK; བཟུང C; གཟུ NSh
[4] གཞོ] em.; ཞོ MS

VP I-18

[D30b5; P263a1; C285b2; N353a3; H380a1; T149b7; K291b8; Sh269a6]

ཤིན་ ཏུ་ གཟི་ བརྗིད་ ཆེར་ གསལ་ བ། ། K292a ཕྱི ལག་ མ[1] སོགས་ རབ་ ཏུ་ གྲགས། །
ཤིན་ ཏུ་ འདོད་ ཆགས་ ཆགས་ ཆེན[2] ལས། ། T150a [3] པད་ སོགས་ ཆོས་ ཀྱི་ དཀྱིལ་ འཁོར་ དུའོ།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2a6-7]より回収できるSkt

atitejas, mahādīptir, balavattā,

atirāgaḥ, mahārāgaḥ.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 3a3-4]より回収できるSkt

atitejamahādīptyā,

atirāgamahārāgād.

[Ph57b3]

ཤིན་ ཏུ་ གཟི་ བརྗིད་ ཆེར་ འབེབས་ པས། ། ཕྱི ཆ་ ལ་ སོགས་ རབ་ ཏུ་ གྲགས། །
ཤིན་ ཏུ་ འདོད་ ཆགས་ ཆགས་ ཆེན་ ཕྱིར། ། པད་ སོགས[4] ཆོས་ ཀྱི་ དཀྱིལ་ འཁོར་ དུའོ།།

---

[1] ལག་ མ་] D; ཆ་ ལས་ P; ལགས་ ཆ C; ཆ་ ལ་ NHTKSh [2] ཆགས་ ཆེན་] DPC; ཆེན་ པོ་ NHTKSh [3] ལས། །] DPCNHKSh; ལ། ། T [4] སོགས་] em.; ཐ་ཆ་ MS

VP I-19

[D30b6; P263a2; C285b3; N353a4; H380a2; T150a1; K292a1; Sh269a6]

ཕྱག[1]དོན་ ཆེན་ པོ[2] སྐྱིབ་ ཆེན་ ལས། །ཐོ་ ལྟུགས་ མ་ སོགས་ ཐུར་ འགྲོ་ བདག།
རྒྱལ་ བ་ མགོན་ པོ་ ཕན་ པ་ ནི། །གཉི་ ཤུག་ ཐམས་ ཅད་ ཟད་ པར་ མཛོད།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2a7-2b1]より回収できるSkt

maherṣyāḥ, mahāvaraṇaṃ.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 3a4]より回収できるSkt

maherṣyāmahāvaraṇād, śāśvataḥ.

[Ph57b4]

ཕྱག་ དོན་ ཆེན་ པོའི་ སྐྱིབ་ ཆེན་ ཕྱིར། །ཐོ་ ལྟུགས་ ལ་ སོགས་ ཐུར་ འགྲོར་ རོ། །
རྒྱལ་ བ་ མགོན་ པོ་ རྣམ་ པ་ ནི། །གཉི་ ཤུག་ ཐམས་ ཅད་ མཛོད་ པའོ།།

---

[1] ཕྱག་] DPCHTK; ཕ་ NSh [2] པོ་] DPCNHSh; པོའི TK

VP I-20

[D30b6; P263a3; C285b3; N353a5; H380a3; T150a2; K292a2; Sh269a7]

ཏོ་ཏཱ་ཡི་ མ་ རྒྱལ་ པོ་ ཆེ། །རྣམ་ པར་ རྟོག་ པའི་ རབ་ རིབ་ འཕྲོག།

རྟ་ མཐིལ་ འདོད་ པ་ ཆེན་ པོ་ ནི། །འདོད་ ཆགས་ ཅན་ གྱི་ བྱང་ ཆུབ་ སྟེར།།

＜比較資料＞

VPṬ

対応箇所なし

『Mahāmati註』対応箇所[MS 3a4]より回収できるSkt

vikalpatimiram.

[Ph57b5]

ཏོ་ཏཱ་ཡི་ མ་ རྒྱལ་ ཆེན་ པོ། །རྣམ་ པར་ རྟོག་ པའི་ རབ་ རིབ་ འཇོམས། །

འདོད་ པ་ ཆེན་ པོའི་ གར་ དབང་ ནི། །ཆགས་ ལྡན་ རྣམས་ ཀྱི་ བྱང་ ཆུབ་ རྫོགས།།

VP I-21

[D30b7; P263a3; C285b4; N353a5; H380a4; T150a2; K292a3; Sh269a8]

ཇི་ཟེ་མཉྱོགས[1] འགྲོ་ཕྱག་དོན་ཆེ། ། ཐེག་པ་གཞན་གྱི་རྣམ་པར་སྤངས། །

ཇི་ཟེ་ཁེམས་དཔའ་རྒྱལ་པོ་ཆེ། ། མི་བསྐྱོད[2] ཡེ་ཤེས་འབྱུང་བའི་གནས།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2b1]より回収できるSkt

anyayānaṃ, vajrasattvaḥ,

akṣobhyajñānasambhavaḥ.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 3a4]より回収できるSkt

anyayānavivarjakaḥ,

akṣobhyajñānasambhavaḥ.

[Ph57b6]

རང་འབྱུང་ཇི་ཟེ་ཕྱག་དོན་ཆེ། ། ཐེག་པ་གཞན་གྱི་རྣམ་སྤྱོད་པའོ། །

ཇི་ཟེ་ཁེམས་དཔའ་རྒྱལ་ཆེན་གྱི། ། མི་སྐྱོད་ཡེ་ཤེས་འབྱུང་གནས་ཏེ།།

---

[1] མཉྱོགས་] DPNHTKSh; འགྱོགས་ C [2] བསྐྱོད] DPNHTKSh; སྐྱོད C

VP I-22

[D30b7; P263a4; C285b5; N353a6; H380a5; T150a3; K292a3; Sh269a8]

ཐུན্[1] འགྲོ་ མི་ བཟད་[2] འགྲོན[3] གཉིར་ ཕྱིར། ། ལྷག་ པ་ ལྔ་ ནི་ འཇོམས[4] པ་ པོ།།
Sh269b D31a

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2b1-2]より回収できるSkt

jagad, akṣaye, nimantraṇārtham, pañcāvaraṇaghātakaḥ.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 3a4-6]より回収できるSkt

jagadakṣayanimantrārtham,

pañcāvaraṇaghātakaḥ.

[Ph57b7]

ཐུན্ འགྲོ་ མི་ བཟད་ འགྲོན་ གཉིར་ ཕྱིར། ། ལྷག་ པ་ ལྔ་ ནི་ འཇོམས་ པའོ།།

---

[1] ཐུན্] DCNHTKSh; ཀྱི་ P [2] བཟད་] DC; ཟད་ PNHTKSh [3] འགྲོན་] NKSh; མགྲོན་ DPCHT
[4] འཇོམས་] DPCHTK; འཇོམ་ NSh

VP I-23

[D31a1; P263a4; C285b5; N353a7; H380a5; T150a3; K292a4; Sh269b1]

དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་རྣམ་པར་དག་པའི་ཡོ་ཕྱེ་ཞེས་བྱ་བའི་ཏིང་འཛིན་ཏོ།།

＜比較資料＞

VPṬ

対応箇所なし

『Mahāmati註』

対応箇所なし

[Ph57b7]

Ph58a

དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་རྣམ་པར་དག་པའི་ཡོ་ཕྱེ་ཞེས་བྱ་བའི་ཏིང་འཛིན་ཏོ།།

VP I-24

[D31a1; P263a5; C285b6; N353a7; H380a5; T150a4; K292a4; Sh269b1]

ཞེ་སྡང་གཏི་མུག་ང་རྒྱལ་དང། ། འདོད་ཆགས་སེར་སྣ་རྣྲེ་བོ་རྣམས། ། N353b
བསྡུ་ཕྱིར་རང་གི་འཚོར་ལོ་ལ། ། རྗོ་རྗེ་གཟུགས་ནི་དུ་མ་འཛིན།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2b2]より回収できるSkt

matsariṇaḥ, anekadhā.

『Mahāmati註』

対応箇所なし

[Ph58a1]

ཞེ་སྡང་གཏི་མུག་ང་རྒྱལ་དང། ། རྣྲེ་བོ་ཆགས་ལྟན་སེར་སྣ་དང། །
བསྡུ་ཕྱིར་རྗོ་རྗེ་ཅན་འཚོར་ལོ། ། དུ་མའི་རྣམ་པར་རང་ཉིད་ཐྱུར།།

50

VP I-25

[D31a1; P263a5; C285b6; N353b1; H380a6; T150a5; K292a5; Sh269b2]

ཤིན་ ཏु་ གདུགས[1] པ་ དྲག་ པོ་ ལ། ། ཞི་ བ་ ཉེ་ བར་ མི་ ས྄ལ་ ཏེ། །

འདི་ མཉམ[2] ཏོ་ ཟེ་ ཅན་ ཆེན་ ནི། ། རང་ གིས་ ཀྱི་ ཡི[3] ཏོ་ ཟེར་ འགྱུར།།

＜比較資料＞

VPṬ

対応箇所なし

『Mahāmati註』

対応箇所なし

[Ph58a2]

ཤིན་ ཏु་ གདུགས་ ཅིང་ དྲག་ པ་ ལ། ། ཞི་ བས་ ཕན་ པར་ མི་ འགྱུར་ བས། །

དེ་ ལྟར་ ཏོ་ ཟེ་ ཅན་ གཟིགས་ ཏེ། ། རང་ ཉིད་ དགྱེས་ པའི་ ཏོ་ ཟེར་ མཛད།།

---

[1] གདུགས་ ‖ DPHTKSh; ས྄ལ་ C; གདུགས་ N [2] མཉམ་ ‖ DCNHTKSh; འཉམ་ P [3] ཀྱི་ ཡི་ ‖ DPCHTK; ཀྱིའི་ NSh

VP I-26

[D31a2; P263a6; C285b7; N353b2; H380a7; T150a5; K292a5; Sh269b2]

ཤིན་ཏु་སྟོང་པར་ཞེན་རྣམས་ཀྱི། ། ཡོངས་མི་བརྟུལ་ཞུགས[1]འཛིན་རྣམས་ཀྱི། །
སངས་རྒྱས་གཏི་མུག་སྤྱོང་དོན་དུ། ། རོ་རྗེ་རྫོགས་པའི་སངས་རྒྱས་འགྱུར།།
H380b

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2b2]より回収できるSkt

atiśūnyaprasaktānām.

saṃbuddhatām.

『Mahāmati註』

対応箇所なし

[Ph58a2]

ཤིན་ཏु་སྟོང་པར་ཞེན་རྣམས་དང། ། མེད་པའི་རྩལ་ཞུགས་འཛིན་རྣམས་ཀྱི། །
དོན་དུ་སངས་རྒྱས་གཏི་མུག་འཇིག། རོ་རྗེ་ཅན་རྫོགས་སངས་རྒྱས་གྱུར།།

[1] ཞུགས་] DCNHTKSh; ཤུགས་ P

VP I-27

[D31a2; P263a7; C285b8; N353b3; H380b1; T150a6; K292a6; Sh269b3]

ཤིན་ཏུ་ང་རྒྱལ་གདུགས[1] རྣམས་ཀྱི། ། སྒྲ་འགྲོའི་ང་རྒྱལ་ཟད་པར་མཛད། །
རྗེ་རྗེ་ཡི་མ་བདག་ཉིད་རྒྱལ། ། ང་རྒྱལ་ཆེན་པོའི་སྒྲུན་པ་འཇོམས།།

＜比較資料＞

VPṬ

対応箇所なし

『Mahāmati註』

対応箇所なし

[Ph58a3]

ཤིན་ཏུ་ང་རྒྱལ་གདུགས་པ་རྣམས། ། སྒྲ་འགྲོའི་ང་རྒྱལ་ཟད་མཛད་པ། །
རྗེ་རྗེ་ཡི་རྒྱལ་རང་ཉིད་ནི། ། ང་རྒྱལ་ཆེན་པོའི་སྒྲུན་པ་འཇོམས།།

[1] གདུགས་] DPHTK; གདུགས་ CNSh

VP I-28

[D31a3; P263a7; C285b8; N353b4; H380b2; T150a7; K292a7; Sh269b4]

བྱང་ཆུབ་ཆགས་བྲལ་ལས་སྒྲོལ་སྦྱངས། ། སེམས་ཅན་གང་ཞིག་བདེ་བྱེད་པ། །
C286a
ཆགས་པས་བྱང་ཆུབ་རབ་གྲུབ་ཕྱིར། ། པ་ཏྲ་གང་གྱི་དབང་ཕྱུག་གྱུར།། [1]

＜比較資料＞

VPṬ

対応箇所なし

『Mahāmati註』

対応箇所なし

[Ph58a4]

སྒྲོ་བོ་ཆགས་བྲལ་བྱང་ཆུབ་སྦྱངས། ། སེམས་ཅན་གང་ཞིག་བདེ་བྱེད་པར། །
ཆགས་པས་བྱང་ཆུབ་རབ་བསྒྲུབ་ཕྱིར། ། པད་མ་གང་དབང་ཕྱུག་ཏུ་གྱུར།།

[1] གྱུར།།] DPCNHKSh; འགྱུར།། T

VP I-29

[D31a3; P263a8; C286a1; N353b4; H380b2; T150b1; K292a7; Sh269b5]

ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ལམ་[1] གནས་ཤིང་། ། གང་ཞིག་ལམ་གཞན་རས་འགྲོ་བ། ། T150b

དེ་རྣམས་བྱང་ཆུབ་རབ་སྦྱིན་ཕྱིར། ། རྗེ་རྗེ་མཁྱོགས[2] འགྲོ་རང་གཙོ་བོ།། P262b

＜比較資料＞

VPṬ

対応箇所なし

『Mahāmati註』

対応箇所なし

[Ph58a5]

ཀུན་མཁྱེན་ལམ་ལ་གནས་རས་ནི། ། གང་ཞིག་ལམ་ནི་གཞན་འགྲོ་བ། །

དེ་ནི་བྱང་ཆུབ་རབ་སྦྱིན་ཕྱིར། ། མངའ་བདག་རྗེ་རྗེ་རང་འགྱུར་ཉིད།།

---

[1] ལམ་ ‖ DPCNHTK; ལས་ Sh [2] མཁྱོགས་ ‖ DPCNHKSh; མཁྱོམས་ T

VP I-30

[D31a4; P263b1; C286a2; N353b5; H380b3; T150b1; K292a8; Sh269b5]

དབང་པོ་ གང་ དང་ གང་ ལམ་ ཉིད། ། དེ་ དང་ དེ་ ཡི་ ངོ་ བོར་ འགྱོ། །

མཆོག་ ཏུ་ ཕན་ པའི་ རྣལ་ འབྱོར་ གྱིས། ། ས་ངམ་ རྒྱས་ ཀུན་ གྱི་ བདག་ ཉིད་ འགྱུར།།
K292b

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2b2-3]より回収できるSkt

yad yad, indriyamārgatvaṃ yāyād, tad tad, svabhāvataḥ,

paramāhitayogena, sarvabuddhamayam, vahet.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 3a6-7]より回収できるSkt

yad yad indriyāmārgatvaṃ, yāyād,

paramāhitayogena, sarvabuddhamayaṃ vahet.

[Ph58a6]

དབང་ པོ་ གང་ དང་ གང་ ལམ་ ཉིད། ། དེ་ དེའི་ རང་ བཞིན་ ཕྱིར་ ན་ འགྱོ། །

ཕན་ པ་ མཆོག་ གི་ སྣོར་ བ་ ཡིས། ། ས་ངམ་ རྒྱས་ ཀུན་ གྱི་ རང་ བཞིན་ ཏྭ་དེ།།

VP I-31

[D31a4; P263b1; C286a3; N353b6; H380b4; T150b2; K292b1; Sh269b6]

གང་ དང་ གང་ གིས་[1] དངོས་ པོ་[2] ཡིས། ། སྒྱུ་[3] པ་ རྣམས་ ཀྱིས་ ཡིད་ སྦྱོར་ ལ། །

དེས་ ན་ དེ་ ཡི་ ངང་ བཞིན་ འགྱུར། ། སྣ་ ཚོགས་ གཟུགས་ ཁོར་ ཇི་ བཞིན་ མོ།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2b3-4]より回収できるSkt

yena yena.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 3a7-3b1]より回収できるSkt

yena yena bhāvena,

tena tanmayatām, viśvarūpam.

[Ph58a7]

གང་ དང་ གང་ གི་ བསམ་ པ་ ཡིས། ། མི་ རྣམས་ ཀྱི་ ནི་ ཡིད་ ལྡན་ ནི། །

དེས་ ན་ དེའི་ དངོས་ འགྲོ་ བ། ། ཁོར་ བུ་ སྣ་ ཚོགས་ གཟུགས་ ཇི་ བཞིན།།

[1] གིས་] PNHTKSh; གི་ DC [2] པོ་] DPCNHTK; པ་ Sh [3] སྒྱུ་] PCNHTKSh; ཟློ་ D

VP I-32

[D31a5; P263b2; C286a4; N353b7; H380b5; T150b3; K292b1; Sh269b7]

གང་ དང་ གང་ གིས་ འདུལ་ བ་ ཡིས། །[1] ས་མས་ ཅན་ འདུལ་ བར་ འགྱུར་ བ་ སྟེ། །

དེ་ དང་ དེ་ ཡི་ རྣམ་ པ་ ཡིས། ། ཆོས་ ཀྱི་ བཤད་ པ་ བྱ་ བའོ།།
N354a

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2b4]より回収できるSkt

yena yena.

『Mahāmati註』

対応箇所なし

[Ph-]

対応箇所なし

[1] ཡིས། ། ‖ C; ཡི། ། DPNHTKSh

VP I-33

[D31a5; P263b3; C286a4; N354a1; H380b5; T150b3; K292b2; Sh269b7]

སེམས་ཀྱི་ རྡོ་རྗེ་ ལས་ བྱུང་བའི། ། སེམས་ ཅན་ སྣ་ ཚོགས་ རང་ བཞིན་ ཅན། །

སེམས་ ནི[1] རང་ གི་ རྣམ་ རྟོག་ གིས། ། སྐྱེ་ བོའི་ དེ་ མས་ ནག་ པོར[2] བྱས།།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2b4]より回収できるSkt

cittavajra, nānāsvabhāvinaḥ,

ātmavikalpena.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 3b1]より回収できるSkt

cittavajrasamudbhūtāḥ,

ātmavikalpena.

[Ph58b1]

Ph58b
སེམས་ ནི་ རང་ བཞིན་ རྣམ་ རྟོག་ གིས། ། དེ་ མས་ སྐྱེ་ བོ་ སྨྲ་གས་ པར་ བྱས།།

[1] ནི་] DPNHTKSh; ཀྱི་ C [2] པོར] PCNHTKSh; པར D

VP I-34

[D31a6; P263b3; C286a5; N354a2; H380b6; T150b4; K292b3; Sh269b8]

དེ་བས་ཀུན་ཏু་རབ་འབད་པས། ། སེམས་ཀྱི་ངོ་རྫེ་རྣམ་པར་སྦྱང་། །

སེམས་དག་པ་ནི་བདེ་བ་ཡིན། ། [1] ཉོན་མོངས་དཀྲུག་ནི་ཐམས་ཅད་འཕྲོག།

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2b4]より回収できるSkt

saukhyam.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 3b1-2]より回収できるSkt

viśodhayed,

citte śuddhe bhave saukhyam.

[Ph58b1]

དེ་ཕྱིར་ཀུན་ཏু་རབ་འབད་པས། ། ཐུགས་ཀྱི་ངོ་རྫེ་རྣམ་པར་སྦྱང་། །

སེམས་དག་པ[2]ནི་བདེ་བ་ཡིན། ། ཉོན་མོངས་དཀྲུག་ནི་ཐམས་ཅད་འཇོམས།།

[1] ཡིན། ། ‖ DPCNHKSh; ཡི། ། T　[2] དག་པ་ ‖ em.; དག་ MS

VP I-35

[D31a6; P263b4; C286a6; N354a2; H380b7; T150b5; K292b3; Sh269b8]

ཀླད་ཏེ་ སྟོང་པ་ ཐབས་ཡིན་ན། །[1] དེ་ ཚོ་ སངས་རྒྱས་ ཉིད་ མི་ འགྱུར། །
Sh270a
འབྲས་ བུ་ རྒྱུ་ ལས་ གཞན[2] མིན་ ཕྱིར། ། ཐབས་ ནི་ སྟོང་ པ་ ཉིད་ ཙ་ ཡིན།།
H381a

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2b4]より回収できるSkt

ananyatvād.

『Mahāmati註』対応箇所[MS 3b2-3]より回収できるSkt

yadi śūnyam upāyam,

phalahetvo ananyatvād.

[Ph58b2]

ཀླད་ཏེ་ སྟོང་ཉིད་ ཐབས་ ཡིན་ ན། ། དེ་ ཚ་ ས་ངས་ རྒྱས་ ཉིད་ ཙ་ འགྱུར། །
རྒྱ་ ལས་ འབྲས་ བུ་ གཞན་ ཙམ་ ཕྱིར། ། ཐབས་ ནི་ ཐ་ ཉིད་ ཙ་ ཡིན།།

[1] ན། །] DCNHTKSh; ནོ། ། P [2] གཞན་] DCNHTKSh; བཞིན་ P

VP I-36

[D31a7; P263b5; C286a6; N354a3; H381a1; T150b6; K292b4; Sh270a1]

ལྟ་བ་[1] རྣམས་ལས་[2] འོག་རྣམས་དང་། ། [3] བདག་ཏུ་ལྟ་བ་ཆོས་[4] རྣམས་ཀྱི། ། [5]

བདག་ཞེན་བསམ་པ་[6] བརྒྱུད་པའི་ཕྱིར། ། སྟོང་པ་[7] རྒྱལ་བ་རྣམས་ཀྱིས་[8] གསུངས།།

＜比較資料＞

VPṬ

対応箇所なし

『Mahāmati註』対応箇所[MS 3b3-4]より回収できるSkt

dṛṣṭibhyo vipannānām,

ātmadṛṣṭigaveṣiṇām,

[Ph58b3]

ལྟ་བ་རྣམས་ལས་འོག་རྣམས་དང་། ། བདག་ཏུ་ལྟ་བ་ཆོས་རྣམས་ཀྱི། །

བདག་ཏུ་འཛིན་པ་བརྒྱུད་པའི་ཕྱིར། ། རྒྱལ་བ་རྣམས་ཀྱི་ སྟོང་པ་བསྟན།།

---

[1] ལྟ་བ་ ‖ PCNHTKSh; ལྟར D [2] ལས་ ‖ H; ལ་ DPCNTKSh [3] དང་། ། ‖ DCH; ཀྱི། ། PNTKSh
[4] ཆོས་ ‖ DCNHTKSh; ཆོས་ P [5] ཀྱི། ། ‖ DPNHTKSh; ཀྱིས། ། C [6] པ་ ‖ DNHTKSh; པས་ PC
[7] པ་ ‖ PNHTKSh; པར DC [8] ཀྱིས་ ‖ PCNHTKSh; བྱས་ D

VP I-37

[D31a7; P263b5; C286a7; N354a4; H381a2; T150b6; K292b5; Sh270a2]

དེ་ཕྱིར་དཀྱིལ་འཁོར་འཁོར་བོ་ཞེས། །ཐབས་ནི་བདེ་བའི་སྡོམ་པ་སྟེ། ། D31b
སངས་རྒྱས་ང་རྒྱལ་རྣལ་འབྱོར་གྱིས། །སངས་རྒྱས་ཉིད་དུ་ཐྱུར་བར་འགྱུར།།

＜比較資料＞

VPṬ

対応箇所なし

『Mahāmati註』対応箇所[MS 3b4-5]より回収できるSkt

kim maṇḍalacakrām upāyena, sukhasaṃvaram,

ihaiva janmani buddhatvalābhāc ca.

[Ph58b3]

དེ་ཕྱིར་དཀྱིལ་འཁོར་འཁོར་བོ་ཞེས། །བདེ་བ་ཐབས་ཀྱི་སྡོམ་པ་སྟེ། །
སངས་རྒྱས་ང་རྒྱལ་རྣལ་འབྱོར་གྱིས། །སངས་རྒྱས་ཉིད་ཡུན་མི་རིང་འགྱུར།།

VP I-38

[D31b1; P263b6; C286a8; N354a5; H381a2; T150b7; K292b5; Sh270a3]

སྟོན་པ་ སྲུས[1] ཅུ ཙ་ གཉིས་ མཚན། ། གཅོ་ པོ་ དཔེ་ བྱད[2] བརྒྱད་ ཅུར[3] ལྡན། །

དེ་ ཕྱིར་ ཐབས་ ཀྱིས་ བསྒྲུབ་ བྱ་ དང་། ། དེ་ ནི་ ཐབས་ ཀྱི་ གཟུགས་ ཅན་ ནོ།།
C286b

＜比較資料＞

VPṬ 対応箇所[MS 2b4-5]より回収できるSkt

śāstrarūpiṇam, śāstā.

『Mahāmati註』対応箇所[MS]より回収できるSkt

śāstā dvātriṃśallaskaṇin,

upāyabhāvanā.

[Ph58b4]

སྟོན་ པ་ སྲུས་ བཅུ ཙ་ གཉིས་ མཚན། ། མདའ་ བདག་ དཔེ་ བྱས་ བརྒྱ་ བཅུར་ ལྡན། །

དེ་ ཕྱིར་ ཐབས་ དེས་ བསྒྲུབ་ བྱ་ སྟེ། ། ཐབས་ ནི་ སྟོན་ པའི་ གཟུགས་ ཅན་ ནོ།།

---

[1] སྲུས་] DCNHTKSh; གསུས་ P　[2] བྱད་] DCNHTSh; ཕྱིད་ P; om. K　[3] ཅུར་] DNHTKSh; བཅུར་ P; ཅུ C

Ḍākinīvajrapañjaraṭippati

[A] (anonymous)

[MS] KL 230 = NGMPP C26/3. 完本 (1b - 8b)

付録Q VPṬ Skt校訂テクスト(VP Ch. I 対応箇所)

I-1 対応箇所 [MS 1b1-]

ākāśeṣv ityādi. **ākāśa**ṃ dharmodayaḥ. **jaḍa** iti, pṛthvī. **svaccha** iti, vāruṇaṃ. **anavakāśa** iti, vāyuḥ. **prakāśinī**ti,[1] vahniḥ. **viśva** iti, dharmodayāntargataviśva-padmaṃ. **vajrālaya** iti, viśvapadmopari viśvavajraṃ. **layana** iti, caturmaṇḍaloparidṛṣṭa-bhrūṃcakrasambhavavairocanasamāpattijanitāmṛtadhārādrutacaturmahābhūtapariṇāmita-
1b2
kūṭāgāraṃ.[2] **sattvadhātāv** iti, tad eva ḍākaḍākinīnām ādhāratvāt sattvadhātuḥ. tathā pañcaratnamayatvān **manorama**ṃ.

etad uktaṃ bhavati. dharmodayāntargatakūṭāgāre sthita iti pareṇa sambandhaḥ.

---

1 prakāśinīti ⟧ em.; prakāsinīti MS; འཕྲིན་པ་ Tib.
2 °bhrūṃcakrasambhava° ⟧ em.; °bhrūṃ ca śukrasambhava° MS.

---

5 Cf. [『Mahāmati註』MS1b3] bhrūṃkāracakrasaṃbhavavairocanaromakūpavinirgatāmṛta-dhārādravitacaturmahābhūtapariṇāmitakūṭāgāraṃ.
[VĀ p. 337 *Il.* 9-10] ... śubhrabhrūṃjāṣṭāracakrabhrūṃjavairocano locanāliṅgitaḥ pariṇamya ...
8 Cf. [『Mahāmati註』 MS1b4] dharmodayāntargataviśvābjavajre.

---

2 D30a4 P262a6 ནམ་མཁའ(P མཁའི) **2** D30a4 P262a6 ནམ་མཁའ(P མཁའི) **2** D30a4 P262a6-7 གཅིག་བཅས་ **2** D30a4 P262a7 དང་བ **3** D30a4 P262a7 གོ་སྒྲས་མེད **3** D30a4 P262a7 འཕྲིན་པ **3** D30a4-5 P262a7 སྣ་ཚོགས **4** D30a5 P262a7 རྡོ་རྗེའི་ གཞི་ གནས **4** D30a5 P262a7 ཁང **6** D30a5 P262a7 ཅིག་ ཁམས **7** D30a5 P262a7 ཡིད་ བོང

I-2対応箇所 [MS 1b2-]

mahāsukhasvabhāvatayā vyāpitvena sattvāsattveṣv api sthita ity āha. **sattve ce**tyādi. **sattva**[1] iti, caleṣu. **bhājana** iti, sthireṣu. **loka** iti, etayor eva viśeṣaṇaṃ. **sattva**n
1b3
nirdiśann āha. **bhūr** ityādi. yathākramaṃ svargamartyapātālastheṣu. **antara** iti,
(L)
eṣv eva bhājanād anyeṣu. **manasī**tyādi. eṣām eva manaḥkāyavākṣu. **ekasminn** iti,
(R)
eṣām eva viśuddhe rūpe mahāsukhasvabhāve grāhakākāre. **dve ce**ti, prajñopāyā-
tmake śūnyatākaruṇābhinnabodhicitte. **khe ratāv** iti, śūnyatāsvabhāve grāhyāṃśe.
1b4

I-3対応箇所 [MS 1b4-]

ṣaṭsv[2] iti, rūpādyāyatanaṣaṭke. **pañcasv** iti, skandhapañcake. **dviṣaṭkeṣv** iti, dvā-
(L)
daśasv āyataneṣu. **caturṣv** iti, mahābhūtacatuṣṭaye. **ekonaviṃśatsv apī**ty, atraiva
(R)
yojyaṃ. pudgalasahiteṣv aṣṭādaśadhātuṣv iti bhāvaḥ. tato bhājanasya nirdeśaḥ,
jagatsv iti. asyaiva pratinirdeśaḥ, **traidhātuka-m-aśeṣeṣv** iti.
1b5

I-4対応箇所 [MS 1b5-]

pitarītyādi. caturṣv ity anantaraṃ yojyaṃ. lokaprasiddheṣv eva pitrādiṣv ity arthaḥ.
(L)

---

1 sattve 〗 em.; sa MS; སེམས་ཅན་ Tib.

2 MSではṭsvの中のsに当たる文字の上側が空いた形になっている．このような形になっている理由として，sの上側を繋げて書くと文字が見え難くなるために敢えて離したことや書写者の単純なミス等が考えられる．

---

15 Cf. [DK I. x. 42cd] śūnyatākaruṇābhinnaṃ bodhicittam iti smṛtaṃ.

---

10 D30a5 P262a7 སེམས་ཅན་ སྟོང་ **11** D30a5 P262a7 སྟོང་ **11** D30a5 P262a7 འཇ�g་ རྟེན་ **12** D30a5 P262a7 ས་ **12** D30a5 P262a7 སྟོང་ **13** D30a5 P262a7 ཡིད་ **13** D30a5 P262a8 གཅིག་ **14** D30a5 P262a8 གཅིས་ **15** D30a5 P262a8 མཁའ་ བདེ་ **18** D30a5 P262a8 རྒྱ་ **18** D30a5 P262a8 ལྟ་ **18** D30a5 P262a8 རྒྱ་ གཅིས་ **19** D30a5 བཞི་ པོ་ P262a8 བཞི་ **19** D30a6 P262a8 གཅིག་ གིས་ ཏེ ཤུར་ མ་ ཚོར་ **21** D30a5 P262a8 སྒྲ་ འགྲོ་ རྣམས་ **21** D30a6 P262a8 ཁམས་ གསུམ་ མ་ ལུས་ པ་ **24** D30a6 P262a8 པ་

bāhyetyādi. **bāhyābhyantara**vyapadeśena sattvāsattvam eva nirdiśati.[1] **sarva-yoṣitsv** (R) iti, sarvavidyānāṃ sukhādhāratvāt tatra sthita iti bhāvaḥ. **dharme ce**ti, nīlapītādike. **sarvakarmasu ce**ti, eṣām (1b6) eva nīlādīnāṃ rañjanādikriyālakṣaṇe. **anāt-manī**ti, prākṛtātmabhāvaśūnyadevatādehe.

I-5関連箇所 [MS 1b6-]

phala iti, phalahevajre. **hetāv** iti, hetuhevajre. **kāryākhya** iti, etayor eva viśeṣaṇaṃ. etāv evāha **sādhye sādhanavajriṇī**ti. athavā **sādhya**ṃ mahāsukhaṃ. **sādhana**ṃ tasyaivopāyaḥ. idānīṃ mātaraṃ[2] nirdiśan **sādhya**syaivāvasthādvayaṃ samalanirmalā- (1b7) tmakaṃ darśayitum āha. **tathā hī**tyādi. **ālayavijñāne** sarvavāsanānilayalakṣaṇe. **dharmadhātāv** iti, anālayarūpatāṃ gate. **anudbhava** iti, upādānacittakṣaṇād anyas-māt kāraṇād utpādarahite.

I-6対応箇所 [MS 1b7-]

sattvadhātāv iti, sattvasya saṃbhogakāyākhyasya tadbījādhāratvād ādhāre. khena śūnyatāṃśena sādhakānāṃ poṣaṇāt **khadhātau ca**. (2a1) grāhyagrāhakākārasvabhāva-

---

1 nirdiśati ⟧ em.; nirdeśati MS.
2 idānīṃ mātaraṃ ⟧ em.; idānīmāṃ taraṃ MS.

---

31 Cf. [MĀ p. 9 *l.* 21] ata eva hevajro ’pi trividhaḥ **hetuhevajraḥ phalahevajra** upāyahevajraśca ...

---

25 D30a6 P262a8 ཕྱི་ རོལ་ **25** D30a6 P262b1 ནང་ **26** D30a6 P262b1 བཅོན་ མོ་ ཀུན་ **26** D30a6 P262b1 ཆོས་ **27** D30a6 P262b1 ཐམས་ ཅད་ ལས་ **28** D30a6 P262b1 བདག་ མེད་ **31** D30a6 P262b1 འབྲས་ བུ་ **31** D30a6 P262b1 འབྲས་ བུ་ **31** D30a6 P262b1 བྱ་ བ་ ཞེས་ **32** D30a6 P262b1 བསྡུས་ བྱ་ སྡུས་ ཐབས་ རྣོ་ རྩེ་ **32** D30a6 P262b1 བསྡུས་ བྱ་ **32** D30a6 P262b1 སྡུས་ ཐབས་ **33** D30a6 P262b1 བསྡུས་ བྱ་ **34** D30a6 P262b1 དེ་ བཞིན་ **34** D30a6 P262b1 ཀུན་ གཞི་ རྣམ་ ཤེས་ **35** D30a7 P262b1 ཆོས་ ཀྱི་ དབྱིངས་ **35** D30a7 P262b1 མ་ བྱུང་ **39** D30a7 P262b2 རང་ དབྱིངས་ **40** D30a7 P262b2 མཁའ་ ཡི་ ཁམས་

vivekād **anātmani**. ubhayaviviktenātmanā sthitatvād **ātmasaṃjñini**. **anātmanī**ty asya nirdeśo vibhāveṣv iti.[1] vigatā grāhyādayo bhāvā asminn iti vibhāve. pūjārhatvād bahuvacanaṃ. **ātmasaṃjñinī**ty asya nirdeśo **'nabhāva**[2] iti grāhyagrāhakavigamarūpeṇa vidyamānatvān nābhāve. sukhasya jñeyalakṣaṇasyāṅgasya rakṣaṇāt
2a2
sukhāvatyāṃ. trikoṇarūpamahīrūpatvena **trikoṇake**.

I-7対応箇所 [MS 2a2-]

rāgādīnān tatrābhāvād **araje**. asyaiva nirdeśapratinirdeśatatpratinirdeśā[3] **vigatadoṣeṣv** ity evamādīni vacanāni. sarvavikalparahitatvān **nistaraṅge.** samādhiś[4] cittaikāgratā, tadātmakatvāt **samādhau**. grāhyāṅśasukhavedanātmakatvād **antaḥsatsukhavedini**.
2a3

I-8対応箇所 [MS 2a3-]

apātrabhūteṣu gopyatvād **rahasye**. utkṛṣṭatvāt **parame**. ramaṇīyatvād **ramye**. sarveṣām ātmā 'yam eveti **sarvātmani**. **sade**ti, prabandhanityatvāt sarvakālaṃ,
(L)
sthita iti sambandhaḥ. ko 'sāv ity āha. **sarvabuddhamaya** ityādi. sarvabuddha-
(R)

1 iti 〗 em.; atīti MS. (Cf. 『Mahāmati註』[MS 2b1] vibhāveṣv iti, ...)
2 'nabhāva 〗 em.; 'nābhāva MS.(ただし，『Mahāmati註』もanābhāvaとなっている．
タントラ本文の韻律上anābhāvaになっていると考えられるが，意味を取るためにanabhāvaに校訂した．)
3 °pratinirdeśatatpratinirdeśā 〗 em.; °pratinideśatatpratinirdeśāḥ MS.
4 samādhiś 〗 em.; samādhi MS

41 D30a7 P262b2 བདག་ མེད་ པ་ **41** D30a7 P262b2 བདག་ ཅེས་ **41** D30a7 P262b2 བདག་ མེད་ པ་ **42** D30a7 P262b2 དངོས་ པོ་ མེད་ **43** D30a7 P262b2 བདག་ ཅེས་ **45** D30a7 P262b2 བདེ་ བ་ ཅན་ **45** D30a7 P262b2 བྱ་ གསུམ་ **48** D30a7 P262b2 ཙམ་ སྒྲོས་ **49** D30a7 P262b2 ཐོག་ བཀལ་ **49** D30a7 P262b3 དབའ་ ཆུགས་ མེད་ པའི་ **51** D30a7-30b1 P262b3 མཐའ་ ནི་ ཞི་ བའི་ བདེ་ རིག་ **54** D30b1 P262b3 གསང་ **54** D30b1 P262b3 མཆོག་ **54** D30b1 P262b3 དགྱེས་ པ་ ལ་ **55** 対応箇所不明 **56** 対応箇所不明 **56** D30b1 P262b3 སངས་ རྒྱས་ ཀུན་ ཁྱབ་

svabhāvatvāt tanmayo mahāvajradhara ity arthaḥ. ayañ ca sattvārthaṃ prati satata-
2a4
pravṛttatvāt **sattvaḥ**. **ḍākinī**nāṃ nairātmyādīnāṃ bahirgamananiṣedhakatvena vajra-
pañjaram iva **vajrapañjaraḥ**.
(L)

60

I-9対応箇所 [MS 2a4-]

sthitvā kiṃ kṛtavān ity āha. **asāv** ityādi. **asāv** iti ḍākinīvajrapañjaraḥ. paramā-
rthato hetvabhāvāt **svayambhūḥ**. aiśvaryādiṣaḍguṇayogād **bhagavān**. dharmakā-
(R)
yarūpatayā, **eko** 'dvitīyaḥ sambhoganirmāṇakāyasvabhāvatvād **adhidaivataḥ**. **uk-**
2a5
65 **tavān** iti sambandhaḥ. **pañcamaṇḍalam** iti, maṇḍalapañcakam iti bhāvaḥ.
(L)

I-10対応箇所 [MS 2a5-]

tad evāha **vajriṇa** ityādinā. sugamaṃ.

70 I-11対応箇所 [MS 2a5-]

gaurītyādinā māṇḍaleyadevatā āha.
(R)

---

59 Cf. [CSP p. (107) *ll.* 2-3] athavā ḍākinīnām utpatanaśīlatvād bahirgamananivartakatvena jālair iva saṃvaraṇam asminn iti kṛtvā ḍākinījālasaṃvaraḥ.

63 Cf. [DK I. v. 15cd] bhagāni ṣaḍvidhāny āhur aiśvaryādiguṇākhilāḥ.

---

58 D30b1 P262b3 སེམས་དཔའ་ **62** D30b1 P262b3 འདི་ **62** D30b1 P262b3 འདི་ **63** D30b1 P262b3 རང་ ཐྲུང་ **63** D30b1 P262b3 བཅོམ་ ལྡན་ འདས་ **64** D30b1 P262b4 གཅིག་ ཏུ་ ཉིད་ **64** D30b1 P262b4 ལྷ་ ཡི་ བདག་ པོ་ **65** D30b2 P262b4 གསུངས་ པ་ **65** D30b2 P262b4 དཀྱིལ་ འཁོར་ ལྔར་ **68** D30b2 P262b4 རྗེ་ ཙན་ **71** D30b2 P262b5 དཀར་ མོ་

I-12対応箇所 [MS 2a5-]

puṣpādyā iti, puṣpādhūpādīpāgandhāḥ[1].

I-13対応箇所 [MS 2a5-]

lāsyādyā iti, lāsyāgītānṛtyāhāsyāḥ.

I-14対応箇所 [MS 2a6-]

vaṃśādyā iti, vaṃśāvīṇāmardalāmurajāḥ.
2a6

I-15 対応箇所 [MS 2a6-]

locanādyā iti, locanāmāmakīpāṇḍarātārāḥ.

I-16対応箇所 [MS 2a6-]

nānāvarṇā iti, śuklādivarṇopetāḥ. āsāñ ca varṇaḥ saṃhāramaṇḍale ’vagantavyaḥ.

I-17対応箇所 [MS 2a6-]

atimohetyādi. sattvānāṃ atiśayito moho **’timohaś** cittavibhramaḥ. tasyāpanayanāya **mahāmoho** mahotsāhaḥ. tasmāt tatsvabhāvā ity arthaḥ.

---

[1] gandhāḥ 〗 em.; gandhā MS.

---

73 D30b3 P262b6 མེ་ ཏོག་ མ་ སོགས་ **76** D30b3 ལྷ་ ས་ཡ་ ལ་ སོགས་ P262b6 ལ་ ས་ཡེ་ ལ་ སོགས་ **79** D30b4 P262b7 གླིང་ བུ་ མ་ སོགས་ **82** D30b4 P262b8 ཐྲྭན་ ལ་ སོགས་ **85** D30b5 P263a1 ཁ་ དོག་ ལྷ་ ཚོགས་ **88** D30b5 P263a1 ཤིན་ ཏུ་ གཏི་ ལྡན་

I-18対応箇所 [MS 2a6-]

atiteja iti, atiśayitaṃ tejo mānaḥ sattvānāṃ. tadapanayanāya[1] **mahādīptir** ojaskatā.
2a7
balavatteti[2], yāvat tayā tena svabhāveneti bhāvaḥ. **atirāgo** viṣayābhiṣvaṅgaḥ. tasyā-panayanāya **mahārāgo** mahān abhiṣvaṅgaṃs tātparyaṃ. tasmāt tadrūpā iti bhā-vaḥ.

I-19対応箇所 [MS 2a7-]

maherṣyā ātmīye vastuni pareṣāṃ pravṛttiniṣedhakaś cetodharmaḥ. tāṃ mahatā yatnenāvṛṇoti, pracchādayati, niṣedhayatīti **mahāvaraṇaṃ** mahotsāhaḥ. tasmāt
2b1
tatsvabhāvā ity arthaḥ.

I-20対応箇所なし

I-21対応箇所 [MS 2b1-]

anyayānaṃ śrāvakādiyānaṃ. **vajrasattva** iti, akṣobhyaḥ. **akṣobhyajñānasamb-hava** iti, kleśavikalpair akṣobhyasya śūnyatājñānasya parasmin sambhavo yasmāt sa tatheti bhāvaḥ.

---

1 tadapanayanāya 〗 em.; tadapanayānāya MS.
2 balavatte 〗 em.; balavartte MS.

---

92 D30b5 P263a1 ཤིན་ ཏུ་ གཟི་ བརྗིད་ **92** D30b5-6 P263a1-2 ཆེར་ གསལ་ བ་ **93** 対応箇所不明 **93** D30b6 P263a2 ཤིན་ ཏུ་ འདོད་ ཆགས་ **94** D30b6 ཆགས་ ཆེན་ པོ་ P263a2 ཆགས་ ཆེན་ ལས་ **98** D30b6 P263a2 ཕན་ དོན་ ཆེན་ པོ་ **99** D30b6 P263a2 སྨྲིས་ ཆེན་ ལས་ **104** D30b7 P263a4 ཕེག་ པ་ གཞན་ **104** D30b7 P263a4 རྟོ་ རྗེ་ ཞེས་པ་ དཔའ་ **105** D30b7 P263a4 མི་ བསྐྱོད་ ཡེ་ ཤེས་ འབྱུང་ བའི་

I-22対応箇所 [MS 2b1-]

jagad ityādi. **jagataḥ** sattvarāśeḥ. **akṣaye** śūnyatājñāne. **nimantraṇārtham** abhimukhī-

karaṇāya. **pañcāvaraṇaghātaka** iti, pañcānām ātmasattvārthavikalpasaṃskāra-
2b2

pravṛttipañcajñānānāṃ śūnyatājñānasyāvaraṇānāṃ ghātako hanteti bhāvaḥ.

I-23対応箇所なし

I-24対応箇所 [MS 2b2-]

matsariṇa iti, īrṣyakān. **anekadhe**ti, pañcadhā.

I-25対応箇所なし

I-26対応箇所 [MS 2b2-]

atiśūnyaprasaktānām iti, sarvan nāstīti[1] cintayatāṃ. **saṃbuddhatām** iti, vairo-

canarūpatāṃ.

I-27対応箇所なし

I-28対応箇所なし

I-29対応箇所なし

---

1 sarvan nāstīti ⟧ em.; sarvanāstīti MS.

---

108 D30b7 P263a4 རྒྱ་(P ཀྱ་) འགྱོ་ **108** D30b7 P263a4 རྒྱ་(P ཀྱ་) འགྱོ་ **108** D30b7 P263a4 མི་ ཟད་ **108** D30b7 P263a4 ལགས་ན(P འགྱོན་) གཅེར་ཕྱིར **109** D31a1 P263a4 སྒྲིབ་ པ་ ལྡ་ ནི་ འཛིན་ལས་ པ་ པོ་ **113** D31a1 P263a5 ས་ ལ་ **113** D31a1 P263a5 ད་ ལ་ འཛིན **117** D31a2 P263a6 ཤིན་ ཏུ་ སྟོང་ པར་ ཞེན་ རྣམས་ ཀྱི **117** D31a2 P263a6 ཐོག་ པའི་ ལངས་ ཏྲུས

I-30対応箇所 [MS 2b2-]

abhyāsam āha. **yad yad** ityādinā[1]. **yad yad** iti rūpaśabdagandharasasparśāḥ.[2] (2b3)
indriyamārgatvaṃ yāyād iti, paśyati, śṛṇoti, jighrati, āsvādayati, spṛśati vā. saṃvara-tantre nigaditam. **tat tad** iti, tān sarvān. (L) **svabhāvataḥ**, prakṛtirūpeṇa na vikāreṇeti bhāvaḥ. **paramāhitayogena**, atyantasamāhitena manasā. (R) **sarvabuddhamayam** iti, yathāyogaṃ pañcaḍākātmakān. **vahet** paśyet.

I-31対応箇所 [MS 2b3-]

katham etat kartum dhāryata ity āha. **yena yene**tyādi. (2b4) sugamaṃ.

I-32対応箇所 [MS 2b4-]

sattvārtham āha **yena yene**tyādinā. subodhaṃ[3].

I-33対応箇所 [MS 2b4-]

deśanāyā ākāraṃ darśayann āha. **cittavajre**tyādi. (L) **nānāsvabhāvina** iti, nānāgo-trakāḥ. **ātmavikalpene**ti, ātmādidṛṣṭyā.

---

1 ityādinā 〗 em.; ītyādinā MS.
2 °gandharasasparśāḥ 〗 em.; °gandharasparśān MS.
3 subodhaṃ 〗 em.; abodhaṃi MS.

---

125 D31a4 P263b1 གང་ དང་ གང་ **125** D31a4 P263b1 གང་ དང་ གང་ **126** D31a4 P263b དབང་ པོ་ ... ལམ་ ཉིད་ **127** D31a4 P263b1 དེ་ དང་ དེ་ **127** D31a4 P263b1 ངོ་ བོར་ **128** D31a4 P263b1 མཚོན་ ཏུ་ ཕན་ པའི་ རྣལ་ འབྱོར་ གྱིས་ **128** D31a4 P263b1 སར་ཆས་ རྒྱས་ ཀུན་ གྱི་ བདག་ ཉིད་ **129** D31a4 P263b1 འགྱུར་ **132** D31a4 P263b1 གང་ དང་ གང་ **135** D31a5 P263b2 གང་ དང་ གང་ གིས་ **138** D31a5 P263b3 སེམས་ ཀྱི་ ངོ་ རྡོ་ **138** D31a5-6 P263b3 སེམས་ ཅན་ སྙུ་ ཚོགས་ རང་ བཞིན་ ཅན་ **139** D31a6 P263b3 རང་ གི་ རྣམ་ རྟོག་ གིས་

I-34対応箇所 [MS 2b4-]

saukhyam iti, sādhyasvabhāvaṃ mahāsukhātmakamaṇḍalacakraṃ.
(R)

I-35対応箇所 [MS 2b4-]

145 **ananyatvād** iti, sādṛśyāt.

I-36対応箇所なし

I-37対応箇所なし

I-38対応箇所 [MS 2b4-]

150 **śāstṛrūpiṇam** iti, lakṣaṇānuvyañjanavirājitaḥ. **śāstā** māṇḍaleyasahitaḥ.
2b5

I-39対応箇所 [MS 2b5-]

iti **prathamaḥ paṭalaḥ**.

---

142 D31a6 P263b4 བདེ་ བ་ ཡིན་ **145** D31a7 P263b4 གཞན(P བཞིན) ཡིན **150** D31b1 P263b7 གཟུགས་ ཅན **153** D31b2 P263b7 ལེའུ ཐེ ད་ ཏོའོ

『Mahāmati註』

[A] Mahāmatideva

[MS 1b] KL 134 = NGMPP C14/11

[MS 2a-7b] NAK 5/20 = NGMPP A47/17

[MS (last folio) NAK 5/23 = NGMPP A47/18

[Tr.] Gayadhara/ lHas btsas (Devasūta)

[D No. 1196, 54a7-94b1] [P No. 2326, 63a1-106b4]

付録R『Mahāmati註』Skt校訂テクスト (VP Ch. I-1からI-9対応箇所)

I-1対応箇所 [MS 1b2-]

ākāśeṣv ityādi. **ākāśeṣv** iti, ākāśasvarūpāṇi padmāni. caturvidyā dharmodayamudrā trikoṇā adhaḥ sūkṣmā upari viśālā sitavarṇā viśvābjavajrodarā. **jaḍa** iti, pṛthivī-maṇḍalaṃ caturasraṃ triśūlavajrāṅkakoṇaṃ[1] pītaṃ lambhavaṃ. **svaccha** iti, vāruṇaṃ śuklaṃ ghaṭāṅkaṃ parimaṇḍalaṃ vambhavañ ca. **anavakāśa** iti, vyāpitvād avakāśāb-hāvād vāyumaṇḍalaṃ dhūmraṃ dhvajāṅkaṃ dhanvābhaṃ yaṃbhavañ ca. **prakāśinī**ti, 1b3 agnimaṇḍalaṃ niruttarajñānadyotīrūpatvāt. tryaśraṃ raktaṃ raṃbhavaṃ jvālāṅkaṃ. **viśva** iti, caturmaṇḍalād adho viśvābjaṃ. **vajrālaya** iti, sarvavajrottamatvena niy-(L) atatvād viśvavajraṃ. **layana** iti, bhrūṃkāracakrasaṃbhavavairocanaromakūpavi nirgatāmṛtadhārādrāvitacaturmahābhūtapariṇāmitakūṭāgāraṃ. **sattvadhātāv** iti, sphu-(R)

---

[1] triśūla°] em.; triśūka° MS; ཏྲི་གཞུས་པས་ Tib.

radbuddhabodhisattvaiḥ pūrṇatvāt tad eva. **manorama** iti, tad eva divyātiriktarat-
(1b4)
nair ghaṭitatvāt. athavā tad ekāntaśubhādiviṣayaiḥ paripūrṇatvāt **manoramaṃ**.
(L)
etenaitad uktaṃ bhavati. dharmodayāntargataviśvābjavajre[1] kūṭāgāraṃ, pañcakūṭāgāro-
daraṃ vā.

＜ナイラートミヤーマンダラ＞

I-1再説 [MS 1b4-]

athavā tantranyāyena kena cit nairātmyācakraṃ kathyate. **ākāśāḥ** sarvabuddhad-
(R)
harmāḥ. teṣāṃ saṃgrahabhūtatvāt nairātmyā[2] . **jaḍa** iti, pṛthivīdhātusvabhāvā
1b5
pukkasī. **svaccha** iti, apdhātusvabhāvā[3] śabarī. **anavakāśa** iti, vāyudhātusvabhāvā
ḍombī. **prakāśinī**ti, tejodhātusvabhāvā caṇḍālī. **viśva** iti, viśvam ālayavijñānaṃ
(L)
dehabhogapratiṣṭhābhaṃ. tatparāvṛttirūpādarśajñānasvabhāvā vajrā. **vajrālaya** iti
(R)
vajrāṇāṃ ālayo vedanāsarvabuddhasamatājñānaṃ. tatsvabhāvābhyantaragaurī. **layana**
iti, līyante sarvavikalpā grāhyādirūpāḥ. tatpratipakṣā pratyavekṣaṇāsvabhāvā vāriḍāk-
1b6
inī. **sattvadhātāv** iti, nānāsattvadhātuvineyatayā kṛtyānuṣṭhānasvabhāvā vajraḍāk-
inī. **manorama** iti, sarvan tathāgatajñānamaṇḍalaṃ mano ramata[4] ākarṣayati śrad-
dhārūpāyatanarūpā manoramā gaurī.

I-2対応箇所 [MS 1b6-]

sattve ceti, tasya praveśād vīryasvabhāvā śabdāyatanarūpā caurī. **bhājana** iti,
bhāṃ janayatīti bandhanena smṛtisvabhāvatayā gandhasvabhāvā bhājanaṃ vetālī[5].
1b7

---

[1] dharmodayā° ⟧ em.; dharmedayā° MS. [2] nairātmyā ⟧ em.; nairātmā MS. [3] apdhātu° ⟧ em.; andhātu° MS. [4] ramata ⟧ em.; ramate MS. [5] vetālī ⟧ em.; vettālī MS.

loka iti, lujyata iti anekārthatvāt lokam toṣaṇaṃ dhyānarasā ghasmarī. **bhūr bhuva** iti, tatra **bhūḥ** pātālavāsinī sparśā. punar nirdeśena[1] **bhuve**ti, nairātmyaiva. svaḥ khecarī dharmāyatane. **antara** iti, na pārśvādāv adhahūrdhvage ity arthaḥ. nairātmyāmaṇḍalaṃ tantranyāyena.

＜シャーシュヴァタマンダラ＞

I-2再説 [MS 1b7-]

bhājane loka iti, ālayavijñānaparāvṛtyā tatra bhājanaṃ kūṭāgāraḥ, **lokaḥ** pakṣabhūtā bodhisattvābhogadehaś ca buddhānām ādarśajñānaṃ śāśvataḥ. **bhūr bhuvaḥ** 2a1 **svar** iti, bhūrbhuvaḥsvarvartānāṃ duṣṭānāṃ gallotpāṭanatvāt saṃdaṃśā. **antara** iti, antarāle duṣṭabandhanānveṣaṇāt pāśinī. **manasī**ti, śuddhalaukikamanovikalpajālena duṣṭānveṣaṇatvād vāgurā. **vigraha** iti, duṣṭaśarīre viddhāt ākarṣaṇād aṅkuśī. **vācī**ti, pravacanabodhyaṅgātmādisatpuṣpakaraṇḍakanivedanāt puṣpā. **ekasminn** iti, sarvadharmānāsravadhūpaikarūpatvāt dhūpā. **dva** iti, karuṇāsnehabuddhaguṇā- 2a2 varty udgatā dīpā. dvayatimiranirāvaraṇād advayālokasvabhāvatvāt. **khe ratāv** iti, sakalākāśaprasarpiniruttaradharmadhātugandhaprītiyaśorūpatvād gandhā.

＜金剛日マンダラ＞

I-3対応箇所 [MS 2a2-]

vajrasūryamaṇḍale. **ṣaṭsu pañcasv** iti, mānādiṣaḍḍoṣapañcanivaraṇapratipakṣatvāt samatāmānavedanārūpo vajrasūryaḥ. **dviṣaṭke ce**ti dvādaśasūryasaṃgrāhakasūryeṇa

[1] nirdeśena 〗 em.; nideśena MS.

mohanaktaṃ nivāraṇāt sūryahastā. **caturṣv** iti caturyogabhūmijñānālokatvena vikalpa-
2a3
timirāpahatatvād[1] dīpā. **jagatsv** iti jagattamaḥ prakāśatvād ratnolkā. **ekonav-**
(L)
iṃśatsv api ceti, aṣṭādaśadhātavaḥ pudgalaś ca. eṣāṃ pratipakṣatvāt advayāloka-
svabhāvatvāt. ata eva vikalpanīradāpahā taḍitkarā. **traidhātuka-m-aśeṣeṣv** iti,
(R)
āśeṣaṃ traidhātukaṃ[2] sarvaṃ lāsyahastena sūcayantī lāsyā.
2a4

I-4対応箇所 [MS 2a4-]

pitarīti, kleśādipinaddhaṃ tārayatīti, pitā. paramārtharatnasrajaṃ līlayā dhārayantī
mālā. **putra** iti mokṣapurapraveśe niruttaradharmadeśanāgītadhvaninā trāyata iti
(L)
putrā gītā. **mātṛsv** iti, mudrāmṛtena mārārṇavāt tārayantīti, mātaraḥ nṛtyā.
(R)

＜蓮華舞自在マンダラ＞

padmanarteśvaramaṇḍale. **bāhyārtha** iti, vāhayati grāhyādivikalpān sarvadharma-
pratyavekṣaṇārtheneti bāhyo ’rtho bhagavān padmanarteśvaraḥ. **abhyantare ’pi**
2a5
ceti, abhyantaram antaḥkamalaṃ mahākaruṇayā mahārāgapadmasūcakatvāt padmā.
(L)
sarvayoṣitsu dharma iti, mahāsukhavivardhanadharmodayadhāraṇād dharmodayā.
sarvakarmasv iti, sarvabuddhānāṃ bodhisnehabandhanakarmaṇi sphoṭā. **anāt-**
(R)
manīti, anātmasarvadharmasūcanāt buddharāgānubandhenātmāśleṣasūcanāt svāśleṣā.
2a6

I-5対応箇所 [MS 2a6-]

phala iti, vaṃśasuṣiramudrayā śūnyātāphalam iva vādayantī vaṃśā. **hetāv** iti,
heyānāṃ rāgādīnāṃ tuleti hetuḥ dhvaninā kṛtakotpādavināśaṃ sūcayantīti vīṇā.
kāryākhya iti, mukundasyaikamukhavādanābhinayena bodhinairātmyakāryaṃ sū-

[1] apahatatvād 〗 em.; apahatvād MS. [2] traidhātukaṃ 〗 em.; tridhātukaṃ MS.

cayantī mukundā. **sādhye sādhanavajriṇī**ti, iṣṭāṅgikordhvakaiḥ sahetukakāya-trayasūcanāt murajā.

＜パラマーシュヴァマンダラ＞

paramāśvamaṇḍale. 2a7 **tathā hy ālayavijñāna** iti, ālayavijñānam iva savikalpakanir-māṇākāyasaṃdarśanāt kṛtyānuṣṭhānasaṃskāraskandarūpatvāt[1] paramāśvaḥ. **dharmadhātāv** iti-m-anāsravadhātutayā sarvajñajñānarakṣaṇatvād vajratālakā[2]. **anudbhava** iti, jñānaṃ pragṛhya khaṭṭanatayā kleśavikalpādīnām apraveśāt, kuñcikādhāriṇī.

I-6対応箇所 [2a7-]

sattvadhātāv iti, sattvadhātor anavarāgrasthitatvāt, jñānotpatter amocanena 2b1 pari-hāṇidoṣādīnāṃ asambhavāt, vajrakapāṭā. **khadhātāv** iti, svābhayoṣitprarakṣaṇena khadhātuprasarpikāṇḍapaṭadhāraṇād vajrakāṇḍapaṭā. **anātmanī**ti, anātmā sarva-buddhānāṃ cittātmyayā[3] ādarśajñānātmā vairocanaḥ taddharmatayā pṛthivīsamatayā locanā. **ātmasaṃjñinī**ti, dvayaniṣkarṣaṇāt advayasaṃjñāsyā 'stīti ātmasaṃjñinī māmakī. **vibhāveṣv** iti, vigatabhāvavikalpānāṃ dvayaśūnyatāpariccheda 2b2 dharmatayā pāṇḍarā. **anabhāva**[4] iti, bhāva eva nānābuddhanirmāṇānāṃ aśeṣalokadhātusv īraṇā, dharmatayā tārā.

---

[1] °saṃskāra° ⟧ em.; °saskāra° MS. [2] vajratālakā ⟧ em.; vajratālā MS. [3] cittātmyayā ⟧ em.; cittanātmyā MS, སེམས་ཅན་ ཐྱི་ བདག་ ཉིད་ ཀྱིས་ Tib. [4] anabhāva ⟧ em.; anābhāva MS.

＜ヘールカマンダラ＞

herukamaṇḍale. **sukhāvatyām** iti, sukhaṃ mahāsukhamayaṃ jñānamaṇḍalādyaṃ. tad avati rakṣati. śraddhayā aṅkuśenākarṣaṇatīty arthaḥ. sukhāvatī gaurī. **trikoṇa** iti, anyatra trivikalparūpadarśanād ity eke. jñānamaṇḍalasya koṇadvayaniyamanād. ekakoṇanibandhanābhyāsasya dhāraṇāc ca. athavā vīryeṇa kāyādiṣu kāyādipraveśāc caurī.
2b3

I-7対応箇所 [MS 2b3-]

araja iti, jñānasamayaṃ vikalparajasāṃ sphoṭabandhena dvayaśūnyatvāt arajaḥ smṛtisvabhāvā vettālī. **vigatadoṣeṣv** iti, vigatāśeṣavikṣepadoṣatvāt vajraghaṇṭā-dhvaninaveśād dhyānasvarūpā ghasmarī. **viraja** iti, vigatamātsaryākāruṇyarajorūpatvād dānakaruṇāpramuditāpṛthivīdhātusvabhāvā pukkasī. **hatakalmaṣa** iti, hatadauḥśīlyāmaitrya-kalmaṣatayā śīlamaitrīvimalābdhātusvabhāvā śavarī. **nistaraṅga** iti, nirgatamohākṣānti-taraṅgatvāt kṣāntipāramitāmuditāprabhākarībhūmitejodhātusvabhāvā caṇḍālī. **samādhāv** iti, kauśīdyavikṣepādiśūnyatvāt, vīryapāramitopekṣārciṣmatībhūmyanabhisaṃskāra-svabhāvā ḍombī[1]. **antaḥsatsukhavedinī**ti, antarmadhye laukikalokottarebhyaḥ sukhebhyaḥ praśāntācalavaśavartirūpatvāt satśobhanaṃ sukhaṃ satsukhaṃ, tadvettuṃ[2] †hātvā +++śīlaṃ† svabhāvo ’syeti satsukhavedīherukaḥ[3].
(R) (L) (R) (L) (R) (L)
2b4 2b5

I-8対応箇所 [MS 2b5-]

punar amī pañcacakravartino nirdeśena kathyante. **rahasya** iti, raho viśvāso dvaya-
(R)

---

[1] ḍombī 〗 em.; samādhiḍombī MS [2] tadvettuṃ 〗 em.; tadvetuṃ MS [3] sat-sukhavedīherukaḥ 〗 em.; satsukhadevīherukaḥ MS; བདེ་བ་མཚོན་རིག་པདྷ་པདྷ Tib.

śūnyatā. tatra bhavaṃ rahasyam. rāgādikleśān vā laḍayati tyājayatīti rahaḥ tatra
2b6
sīdatīti rahasyaṃ. suviśuddhadharmadhātujñānaṃ, tad eva śrīherukam tadbhavanañ ca. **parama** iti paraḥ śuddhalaukiko vikalpas tena māti paricchinnati viniścinotīti yāvat. paramaḥ pratyavekṣaṇājñānaṃ, tad eva padmanarteśvaram tadbhavanañ ca. **ramya** iti, ramaṇīyatvāt sarvabuddhasamatāvabodhāc ca ramyaṃ vajrasūryam tadbhavanañ ca. **sarvātmanī**ti, sarvabuddhānām ātmā nirmāṇakāyaḥ. tadsvabhāvatayā
2b7
kṛtyānuṣṭhānajñānaṃ. tad eva paramāśvam tadbhavanañ ca. sarve amī saptamā-ntāḥ †svacchātyayena† prathamāntā bodhavyaḥ. **sadā sthita** iti, sarvasminn eva kāle dharmakāyena prakṛtinityatayā saṃbhogakāyenāśaṃsananityatayā nirmāṇakāyena pravāhanityatayā sthito acalitaḥ. **sarvabuddhamaya** iti, sarvabuddhānāṃ deha-bhogapratiṣṭhārūpatvād ādarśajñānaṃ. tad eva śāśvataṃ tadbhavanañ ca. **sattva**
3a1
iti, vajrasattvo jñeyasvabhāvatayā.

I-9対応箇所 [MS 3a1-]

asāv ity ayaṃ nityavartamānatayā. **svayambhūr** iti, paramārthato hetvabhāvāt svayambhūḥ.

bhagavān iti, aiśvaryādayaḥ ṣaṭ samagrā bhagā. yathoktaṃ.

> aiśvaryasya samagrasya jñānasya yaśasaḥ śriyaḥ /
> rūpasyātha prayatnasya ṣaṇṇāṃ bhaga iti smṛtir //

iti vacanāt bhagā asya santīti bhagavān.

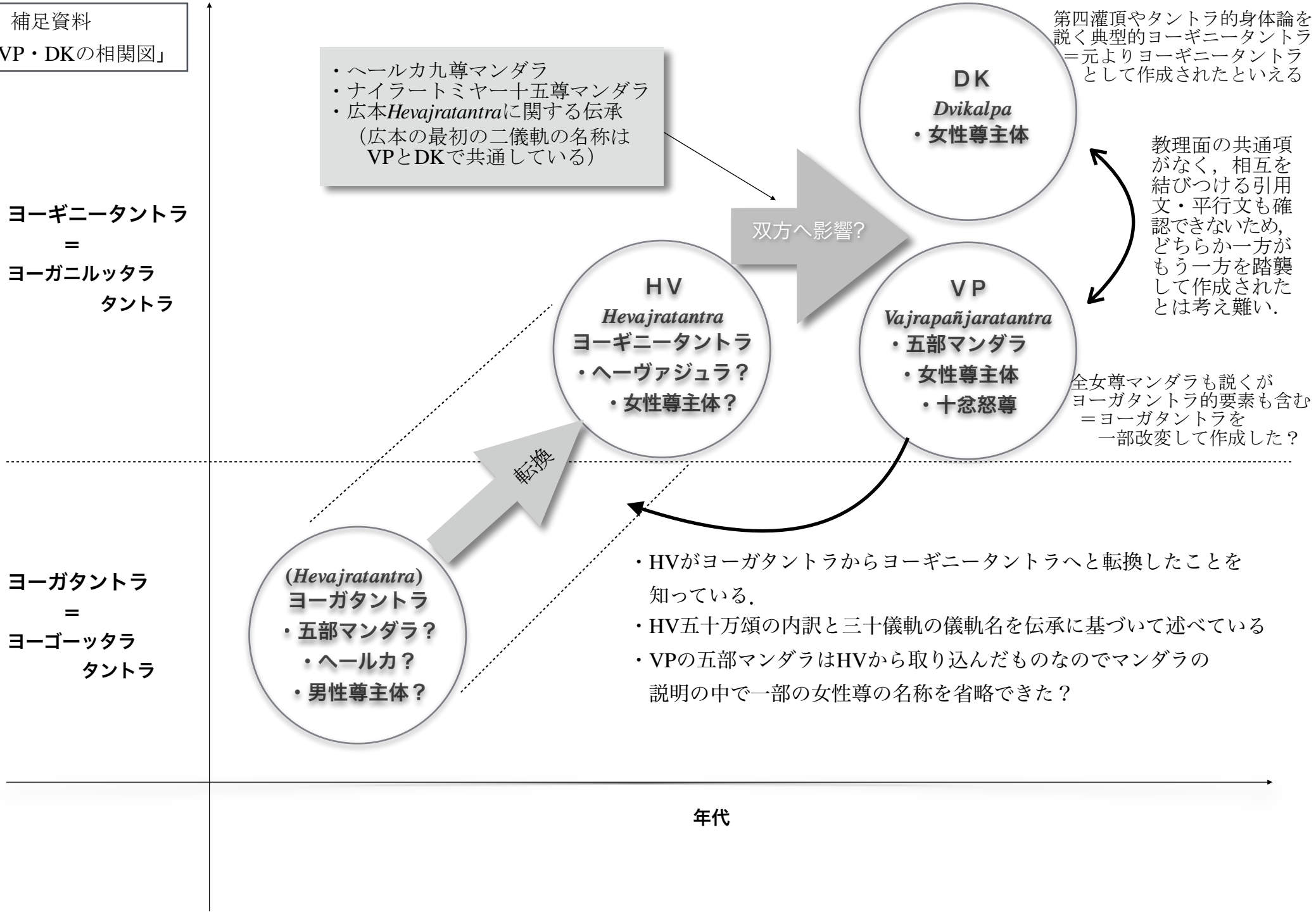
eko ’dvitīyo[1] dharmakāyarūpeṇa.

adhidaivata iti, adhike daivataḥ sambhoganirmāṇakāyasvabhāvatvāt.
3a2

pañcalakṣātmahevajrād uktavān pañcamaṇḍalam iti, pañcalakṣāt saṃkṣipya yathāmaṇḍalapradhānaṃ ḍākinīvajrapañjarākhyaṃ tantaraṃ kathitaṃ.

ata eva evaṃ mayetyādivāk yathā noktaṃ. vistaratantrasāpekṣatvād asya.

[1] ’dvitīyo 〗 em.; advitīyo MS.

＜補足資料＞

補足資料
「HV・VP・DKの相関図」